財団法人八尾市文化財調査研究会報告62

Ⅰ　跡部遺跡（第25次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第26次調査）
Ⅲ　跡部遺跡（第27次調査）
Ⅳ　亀井遺跡（第６次調査）
Ⅴ　小阪合遺跡（第36次調査）
Ⅵ　心合寺山古墳（第２次調査）
Ⅶ　志紀遺跡（第４次調査）
Ⅷ　田井中遺跡（第16次調査）
Ⅸ　竹渕遺跡（第８次調査）
Ⅹ　竹渕遺跡（第９次調査）
Ⅺ　中田遺跡（第39次調査）
Ⅻ　中田遺跡（第40次調査）
ⅩⅢ　中田遺跡（第41次調査）
ⅩⅣ　八尾寺内町遺跡（第２次調査）
ⅩⅤ　山賀遺跡（第７次調査）

１９９９年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人　八尾市文化財調査研究会報告62　正誤表

ページ	行	誤	正
55	9	Ⅲ型式	Ⅱ型式
60	第2図	府道大阪湾八尾線	府道大阪港八尾線
69	35・36・38	吉田野々	吉田野乃
87	36	本書★第9次調査	本書X第9次調査
93	8	吉田野々	吉田野乃
	10・16	米田俊幸	米田敏幸
	16	(94-478) の調査)	(94-478) の調査」
101	16	(NT996-33)	(NT96-33)
133	12	にあったと思われるとみられる。	削除

財団法人八尾市文化財調査研究会報告62

Ⅰ　跡部遺跡（第25次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第26次調査）
Ⅲ　跡部遺跡（第27次調査）
Ⅳ　亀井遺跡（第６次調査）
Ⅴ　小阪合遺跡（第36次調査）
Ⅵ　心合寺山古墳（第２次調査）
Ⅶ　志紀遺跡（第４次調査）
Ⅷ　田井中遺跡（第16次調査）
Ⅸ　竹渕遺跡（第８次調査）
Ⅹ　竹渕遺跡（第９次調査）
Ⅺ　中田遺跡（第39次調査）
Ⅻ　中田遺跡（第40次調査）
ⅩⅢ　中田遺跡（第41次調査）
ⅩⅣ　八尾寺内町遺跡（第２次調査）
ⅩⅤ　山賀遺跡（第７次調査）

１９９９年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中央部にあたります。豊かな自然環境に恵まれ、古くは旧石器時代から現代に至るまで先人たちが残した貴重な文化財が数多く存在している地域です。

しかしながら近年では各種土木工事が盛んに行われるようになり、歴史上かつてないほど大規模に開発が行われ、地中深く眠っていた文化財が破壊の危機にさらされることが多くなりました。我々は貴重な文化財を守り、また、やむをえず破壊される文化財に対しては発掘調査を行い、記録を保存するという形で後世に伝承すべく努力している次第であります。

この度、平成９年度に実施しました15件の発掘調査の整理が終了しましたのでこれらをまとめ、報告書として刊行することとなりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより埋蔵文化財の保護・普及のために広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、これらの調査が関係諸機関及び地元の皆様の多大なるご理解・ご協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。文化財は一度破壊されてしまうと二度と元のかたちに戻すことはできません。今後とも文化財保護に一層のご理解・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成11年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　　木山丈司

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査の報告書を収録したものである。
1．内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成11年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告の文責は以下の通りである。全体の構成・編集は森本が行った。
　Ⅰ・Ⅲ・Ⅶ・Ⅻ：坪田真一　　Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・ⅩⅢ：高萩千秋　　Ⅵ・Ⅸ・Ⅹ：成海佳子
　Ⅷ・ⅩⅤ：古川晴久　　Ⅺ：森本めぐみ　　ⅩⅣ：岡田清一
1．本書掲載の地図は大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（平成８年７月）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成８年10月１日改訂）を使用した。
1．本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1．本書で用いた方位は座標北及び磁北である。
1．遺構は下記の略号で示した。
　竪穴住居－ＳＩ　掘立柱建物－ＳＢ　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ
　小穴・柱穴－ＳＰ　落ち込み－ＳＯ　土器集積－ＳＷ　自然河川－ＮＲ
1．各調査に際しては写真・実測図等の記録とともにカラースライドを多数作成している。広く活用されることを希望する。

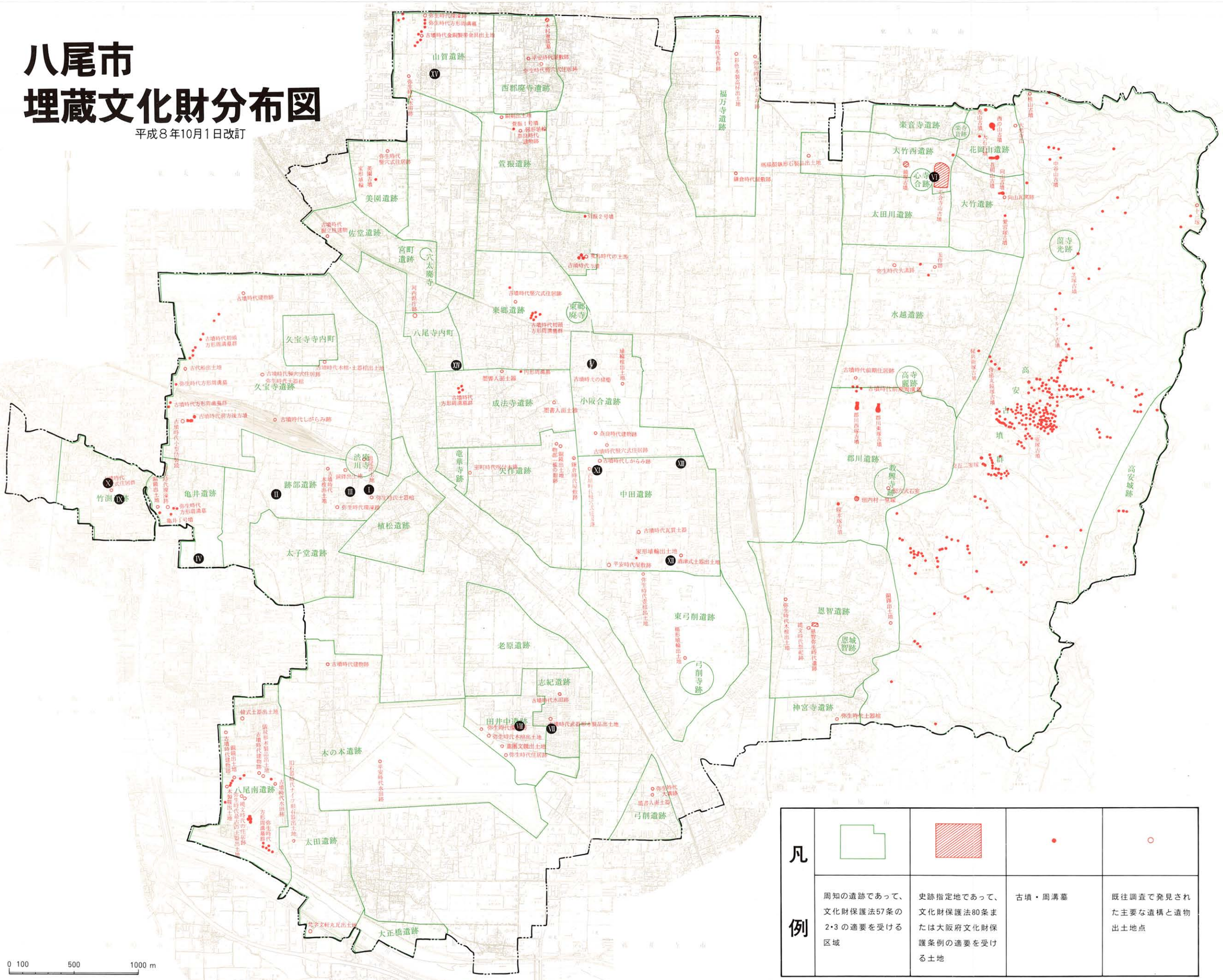
目　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　跡部遺跡　第25次調査（ＡＴ97－25）…… 1
Ⅱ　跡部遺跡　第26次調査（ＡＴ97－26）…… 15
Ⅲ　跡部遺跡　第27次調査（ＡＴ97－27）…… 23
Ⅳ　亀井遺跡　第６次調査（ＫＭ97－６）…… 51
Ⅴ　小阪合遺跡　第36次調査（ＫＳ97－36）…… 59
Ⅵ　心合寺山古墳　第２次調査（ＳＯ97－２）…… 67
Ⅶ　志紀遺跡　第４次調査（ＳＩＫ97－４）…… 75
Ⅷ　田井中遺跡　第16次調査（ＴＮ97－16）…… 81
Ⅸ　竹渕遺跡　第８次調査（ＴＫ97－８）…… 87
Ⅹ　竹渕遺跡　第９次調査（ＴＫ97－９）…… 95
Ⅺ　中田遺跡　第39次調査（ＮＴ97－39）…… 97
Ⅻ　中田遺跡　第40次調査（ＮＴ97－40）…… 105
ⅩⅢ　中田遺跡　第41次調査（ＮＴ97－41）…… 113
ⅩⅣ　八尾寺内町遺跡　第２次調査（ＹＣ97－２）…… 117

XV　山　賀　遺　跡　第7次調査（ＹＭＧ97－７）…… 131
報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成８年10月１日改訂



凡例				
	周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適要を受ける区域	史跡指定地であって、文化財保護法80条または大阪府文化財保護条例の適要を受ける土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

Ⅰ　跡部遺跡第25次調査（ＡＴ97－25）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市春日町２・３丁目地内で実施した公共下水道工事（平成８年度　第115工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1．本書で報告する跡部遺跡第25次調査（ＡＴ97－25）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋667－３号　平成９年１月31日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成９年４月８日から11月10日（実働20日）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約116㎡を測る。調査においては朝田　要・垣内洋平・八田雅美・山内千恵子が参加した。
1．内業整理には上記の他、岩本順子・澤村妙子・田島和恵・都築聡子の参加を得た。
1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

本　文　目　次

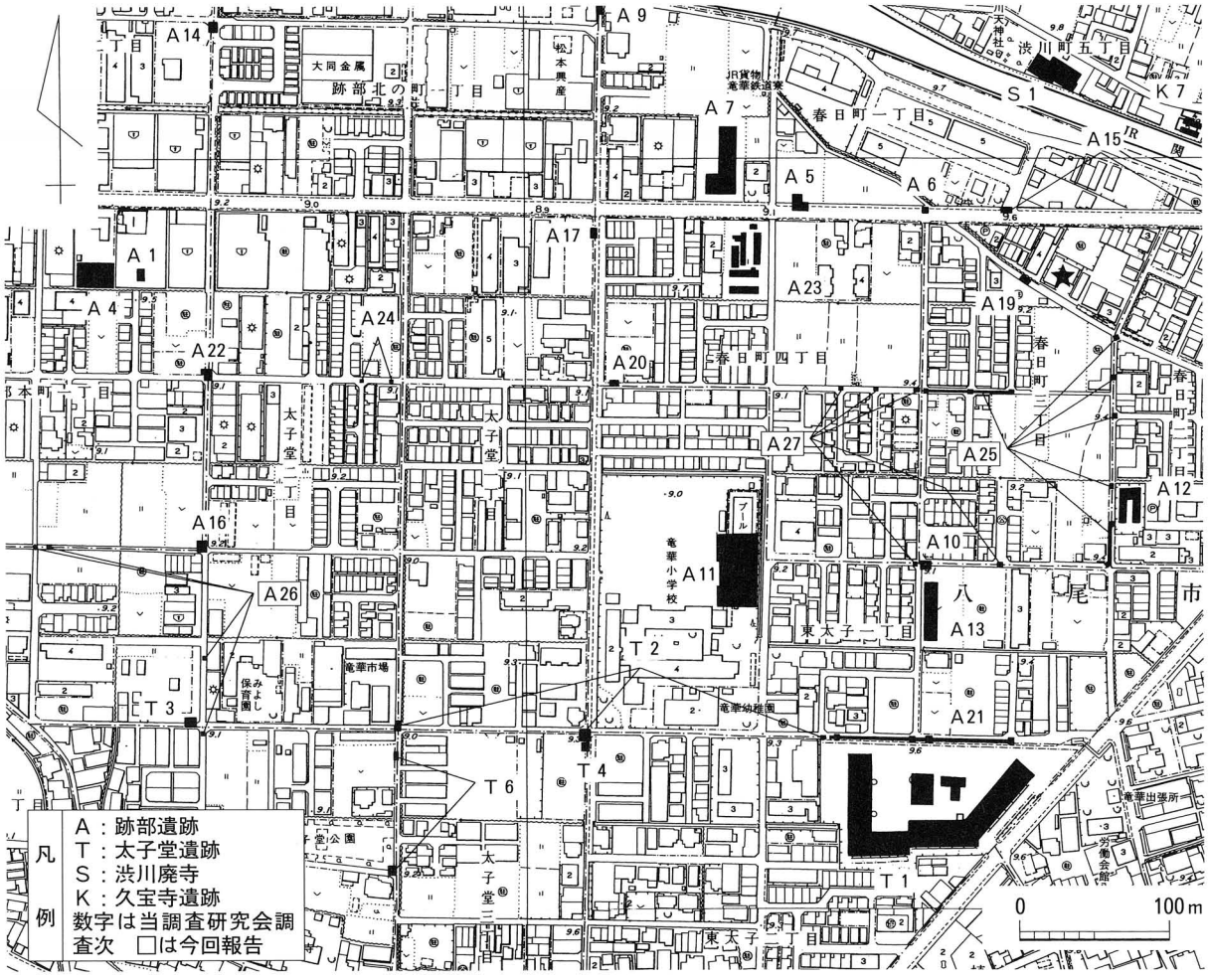
1．はじめに……1
2．調査概要……2
　1）調査方法……2
　2）調査成果……3
3．まとめ……9

Ⅰ　跡部遺跡第25次調査（ＡＴ97－25）

１．はじめに

跡部遺跡は八尾市の西部に位置し、現在の行政区画では、跡部北の町１・２、春日町１～４、太子堂１・２、東太子１、跡部本町１～４、跡部南の町１・２、安中町３丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の自然堤防上に立地しており、同地形上では北で久宝寺遺跡、東で植松遺跡、南で太子堂遺跡、西で亀井遺跡と接している。

当遺跡では、昭和53年に春日町１丁目で行われた旧国鉄職員寮建設の際に、弥生時代前期の土器や鎌倉時代の瓦が出土したと伝えられ、その後昭和56年以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されている。平成元年度の当調査研究会第５次調査（Ａ５）[註1]においては、埋納された銅鐸が検出され注目された。今回の調査地の東に隣接する平成５年度第12次調査地（Ａ12）[註2]では、弥生時代前期・後期の集落遺構と多量の土器、中期では土器棺、古墳時代では墳丘の可能性がある盛土層と後期の集落遺構が検出され、弥生時代以降連綿と続く集落域であったことが確認されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代前期から近世にわたる複合遺跡であると認識されている。



第１図　調査地位置図（Ｓ＝1/5000）

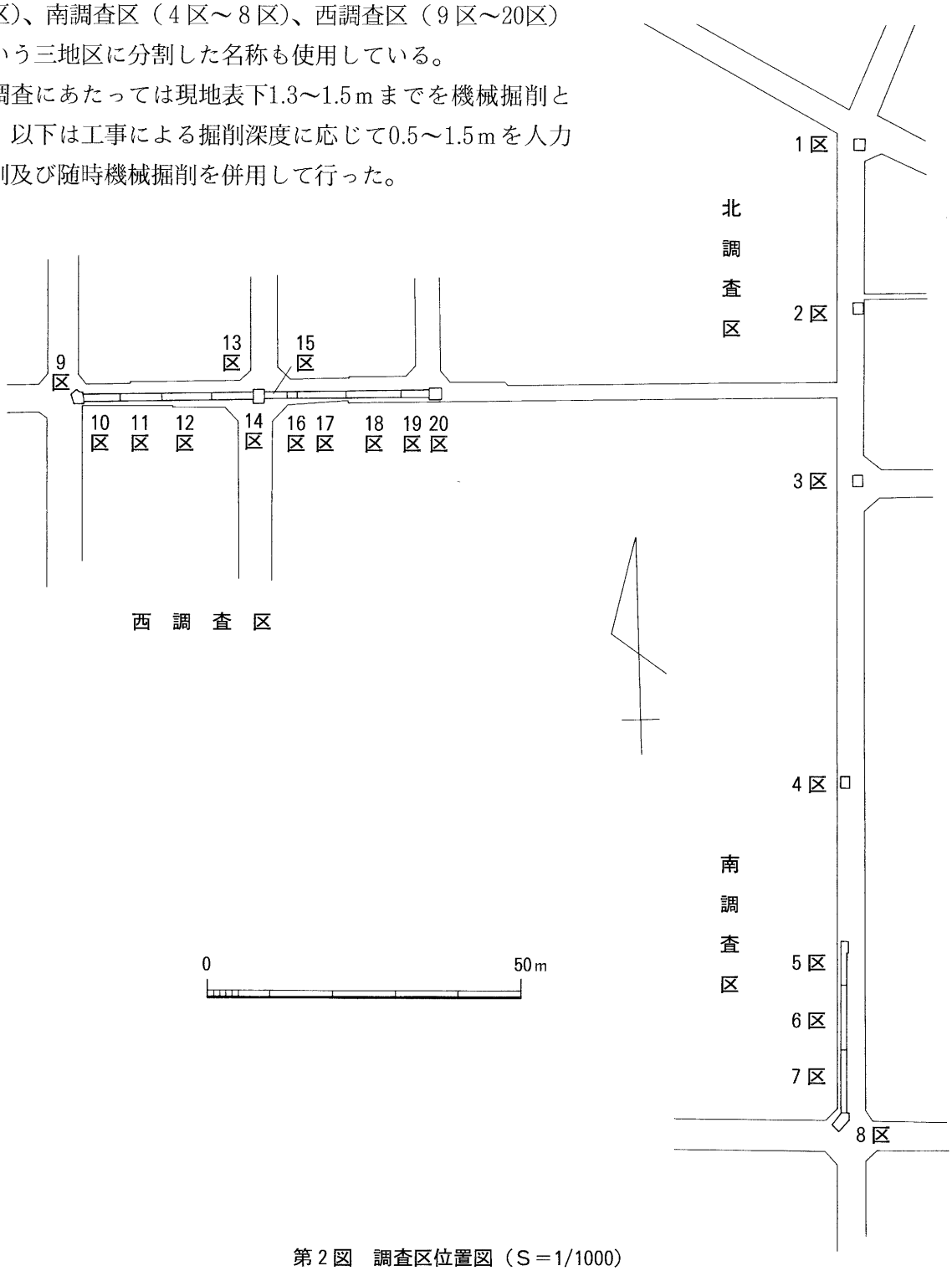
2．調査概要

1）調査方法

今回の調査は公共下水道工事（8－115工区）に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第25次調査である。調査区は人孔部分9箇所（約2ｍ四方)、及び管路部分（幅約1ｍ・延長約80ｍ）で、工事の進捗状況に合わせて順次調査を実施した。

地区名は一日の調査部分毎に1区～20区とした。なお本報告中では便宜上、北調査区（1区～3区)、南調査区（4区～8区)、西調査区（9区～20区）という三地区に分割した名称も使用している。

調査にあたっては現地表下1.3～1.5ｍまでを機械掘削とし、以下は工事による掘削深度に応じて0.5～1.5ｍを人力掘削及び随時機械掘削を併用して行った。



第2図　調査区位置図（S＝1/1000）

2）調査成果

〈1区〉

第2層下面で、南北方向に伸びる直線的な肩から、西に下がる堆積状況がみられ、これを溝とした（ＳＤ1）。規模は長さ1.0m以上、幅0.6m以上、深さ0.4m以上を測る。埋土（Ａ）は上から暗灰色微砂混じり粘質シルト、暗灰黄色細砂混じりシルト、明褐色細砂混じりシルト（固く締まる）である。中世頃の土器が出土しており、周辺の調査成果からみてもこの頃の遺構と考えられる。なおベースとなる層も、第6層を切り込んで西に下がる堆積状況で、ＳＤ1の下層部、あるいは旧流路とも捉えられる。この第6層からは、飛鳥～奈良時代に比定される有軸綾杉文叩きを施す平瓦（1）の小片が出土している。叩きは凸面に施され、凹面は布目、側面はヘラケズリである。色調は淡橙色で、焼成はやや不良。

〈2区〉

標高約8.2m以下の第5層は南に下がる堆積状況であり、層全体が落ち込み等の遺構とも考えられる。上層からは5世紀末～6世紀頃、下部からは5世紀末頃の須恵器・土師器が多く出土しており、2～6を図化した。須恵器高杯（3）は杯部内面に自然釉がたまる。須恵器甕（4）は焼成が不良である。5は製塩土器で、丸底Ⅰ式[註3]に分類されるものであろう。調整はナデである。6は外面に平行タタキを施すもので、韓式系土器の鉢と考えられる。

〈3区〉

Ｂ層は、層厚約0.8mにわたって粘質シルト～細砂が複雑な堆積を呈するもので、河川流路とした（ＮＲ1）。流路方向は不明である。川床は標高約7.6mを測り、最下部にはマンガンが沈殿している。遺物は時期不明の土器片が出土している。時期は層位的にみて中世以降である。ベースとなる第6層からは弥生時代～布留式期頃の土器片が出土している。

〈4区〉

調査区のほとんどが撹乱にあたり、西壁下位で断面が確認しえたのみで、遺物も出土していない。第12次調査地の西側に位置しており、その成果からみて第3層が中世頃の包含層にあたると考えられる。

〈5区〉

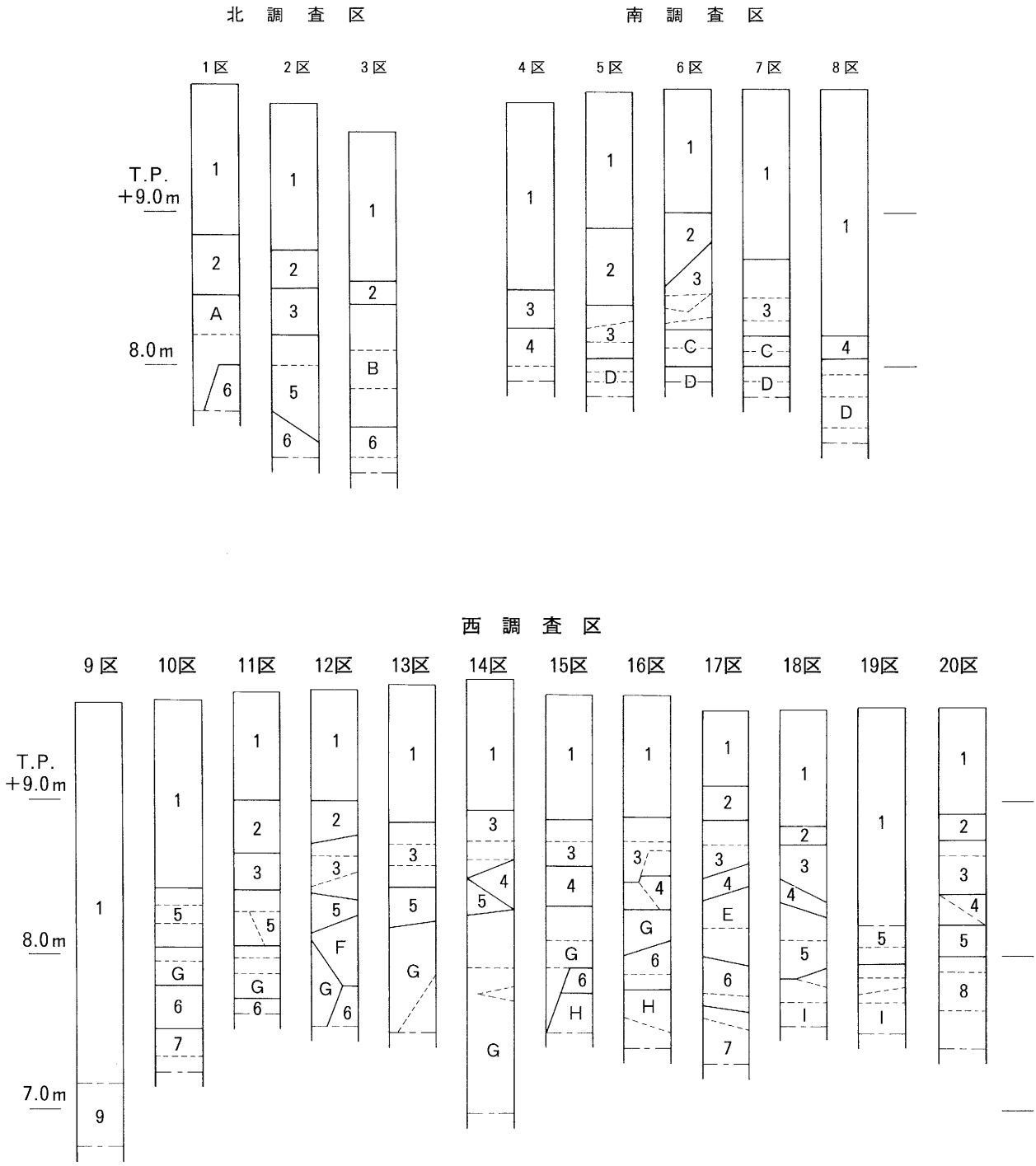
第3層下面で土坑1基（ＳＫ1）を検出した。規模は南北2.5m以上、東西0.6m以上、深さ0.2m以上を測る。断面皿状を呈し、埋土は淡黄灰色微砂混じり粘質シルトで、遺構面を覆う第3層に類似する土層である。遺物は土師器・須恵器片が出土しているが時期は不明である。

〈6区〉

第3層からは時期不明の土師器片が出土している。第3層下面で東西方向の溝1条（ＳＤ2）を検出した。規模は検出長約0.5m、幅約0.9m、深さ約0.1m以上を測る。断面皿状を呈し、埋土は淡灰黄色微砂混じりシルトである。時期不明の土師器片が出土している。ベースとなるＣ層以下は砂を基調とする水成層の状況で、Ｃ層は7区ＳＤ3にあたると考えられる。底部のＤ層も細砂層で、上面はマンガンにより固く締まる。

〈7区〉

第3層からは鎌倉時代頃に比定される瓦器椀片が出土しているが図化しえなかった。Ｃ層はシルト混じり微砂・細砂層で、以下は水成層の状況で、西から東に下がる堆積状況がみられる。下



第1層	盛土・攪乱	
第2層	旧耕土	
第3層	黄灰色系細砂混じりシルト	中世～近世
第4層	褐灰色系細砂混じりシルト	平安時代
第5層	褐灰色系微砂混じり粘質シルト	古墳時代中期～奈良時代
第6層	暗灰色～灰色系シルト	古墳時代前期布留式期
第7層	灰青色系シルト～粘土	沼沢地
第8層	暗灰青色系微砂混じり粘質シルト	（弥生時代中期～後期？）
第9層	暗褐色微砂混じり粘質シルト	弥生時代前期～中期

A：SD1
B：NR1
C：SD3
D：NR2
E：SD5
F：SD4
G：NR3
H：SK5
I：NR4

第3図　基本層序（S＝1/40）

位のＤ層上面では南北方向に伸びる平面弧状の肩が検出され、これを溝（ＳＤ３）とした。掘削はしていないが、規模は長さ3.8ｍ以上、幅0.6ｍ以上、深さ13㎝以上を測るものである。埋土は上層が灰褐色シルトブロック混じり微砂、下層が褐色微砂混じりシルトで、Ｃ層も埋土上部と捉えられる。遺物は平安時代頃に比定される土師器甕（７）や古墳時代の須恵器が出土している。Ｄ層のシルト～微砂層以下は５区以南にみられる水成層の続きで、ＳＤ３と同様に南北方向の流路が窺われ、これを河川（ＮＲ２）とした。平安時代頃には埋没している。

〈８区〉

調査区のほとんどが南西側の既設マンホール工事による撹乱を受けており、北西部で断面を確認した。第４層上面からの、深さ約0.7ｍを測る遺構状の掘形を断面で確認したが、平面形状や掘り込み面等は不明であり、遺物も出土しておらず、時期は判断しえなかった。７区以北の状況からみて平安時代以降の遺構であろう。Ｄ層以下はＮＲ２にあたり、上部が微砂～細砂、下部が粘質シルトである。

〈９区〉

西に位置する既設マンホール工事に伴う薬剤注入により、調査区内の土層がセメント化していたため、最下部の土層を確認しえたのみである。標高約7.2ｍ以下の第９層からは弥生時代中期頃の土器が出土しているが、図化しえたものは８のみである。８は鉢あるいは台付鉢で、調整は外面ハケ後雑なヘラミガキ、内面荒いハケである。西に隣接する第27次調査地１区（本書Ⅲ）においても、同様の弥生時代前期～中期の包含層が確認されており、標高約6.6ｍでは弥生時代前期新段階の土坑が検出されている。

〈10区〉

第７層上面で土坑１基（ＳＫ２）を検出した。北は調査区外に至り、検出部分の平面形は半円形を呈する。規模は1.1×0.6ｍ、深さ約20㎝を測る。断面逆台形で、埋土は暗灰色細砂混じりシルト質粘土である。布留式期の土器が出土しているが、図化しえるものはなかった。遺構面を覆う第６層が布留式期の包含層で、土器が少量出土している。これより上層から遺物は出土していない。Ｇ層は微砂混じり粘質シルト層で、後述のＮＲ３上部にあたるのかもしれない。第７層は微砂～粘土の互層状を呈し、布留式期以前は沼沢地であったと考えられる。

〈11区〉

Ｇ層の微砂混じりシルト～粘質シルト層はＮＲ３上部と考えられ、ここからは布留式期から奈良時代頃の土器が出土しており、須恵器壺類の底部（９）を図化した。第６層は布留式期新相の包含層でやや汚れている。完形に近い高杯１個体（10）が出土しているが、やや摩滅しており流れ込みかもしれない。10は口径14.5㎝・器高12.9㎝を測る。

〈12区〉

Ｆ層以下は水成層の状況である。Ｆ層のシルト～微砂層は、北西－南東方向の肩から南西に下がる堆積を呈し、これを溝とした（ＳＤ４）。東は13区にも続いており、検出長約4.6ｍ、幅1.2ｍ以上、深さ0.5ｍ以上を測る。底部から布留式期新相の土器が少量出土しているが、下層からの遺物と捉えられ、層位的には古墳時代後期頃の遺構であろう。図化しえたものは高杯脚部（11）のみである。表面の摩滅が著しい。Ｇ層の微砂～粘質シルトの互層は、ＳＤ４と同一方向の肩から北に下がる堆積状況で、河川（ＮＲ３）とした。ラミナが顕著にみられる。ＳＤ４の旧流路に

あたるのかもしれない。

〈13区〉

第3層からは時期不明の土師器・須恵器・瓦が出土している。G層上面で土坑1基（ＳＫ3）を検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈し、規模は0.9×0.6m、深さ約25cmを測る。断面逆台形で、埋土は淡灰褐色微砂混じりシルト質粘土である。遺物は6世紀頃の土師器・須恵器が少量出土している。G層の微砂～シルト層は南から北に下がる堆積で、ＮＲ3にあたる。ラミナが顕著にみられる。布留式期の土器が出土している。

〈14区〉

第5層からは6世紀頃に比定される須恵器杯が出土しているが図化しえなかった。東部G層上面で土坑1基（ＳＫ4）を検出した。東は15区に続き、平面形は東西に長い楕円形を呈するが、南東部は調査区外に至る。規模は0.8×0.5m、深さ約30cmを測る。断面逆台形に近く、埋土は上層が褐灰色微砂ブロック混じり粘質シルト、下層が淡灰色微砂混じり粘質シルトである。遺物は時期不明の土師器片が出土している。層位的にみて13区ＳＫ3と同様、古墳時代後期頃の遺構であろう。G層以下は微砂～シルトの互層状を呈し、ＮＲ3にあたる。層厚は1.3m以上を測り、水平なラミナが認められる。

〈15区〉

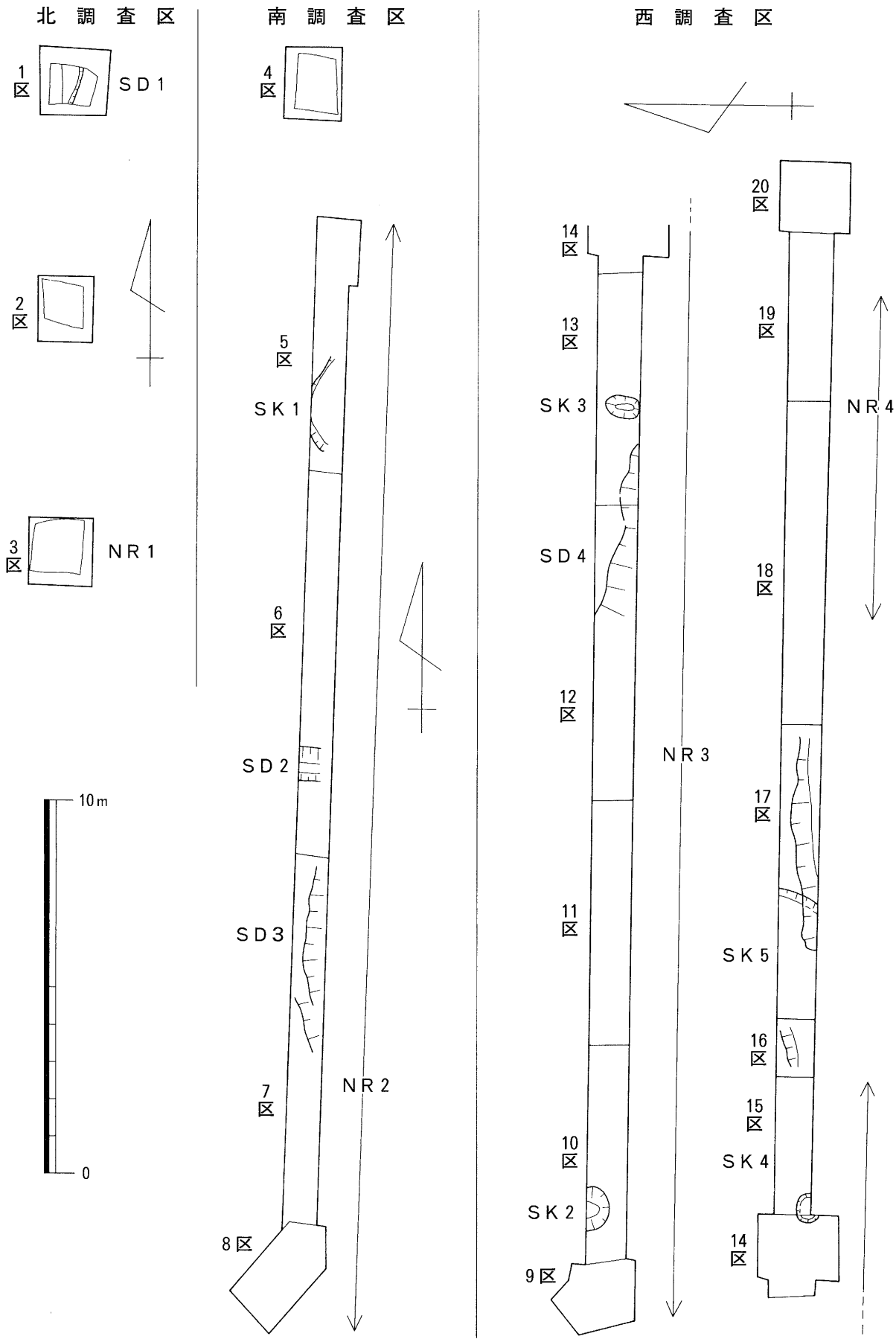
第4層からは土師器・瓦・須恵器が出土している。G層は西部からみられるＮＲ3で、当区南東部を肩とし、西・北に下がる状況が確認できる。当区では上層が粘質シルト・下層が微砂～粘質シルトの互層状を呈し、ラミナがみられ植物遺体を多く含んでいる。この上面が古墳時代後期頃の遺構面にあたる。ＮＲ3のベースとなる第6層は布留式期の包含層で、土器が少量出土しており、甕（12）を図化した。東部でみられたH層は後述のＳＫ5埋土と捉えられる。

〈16区〉

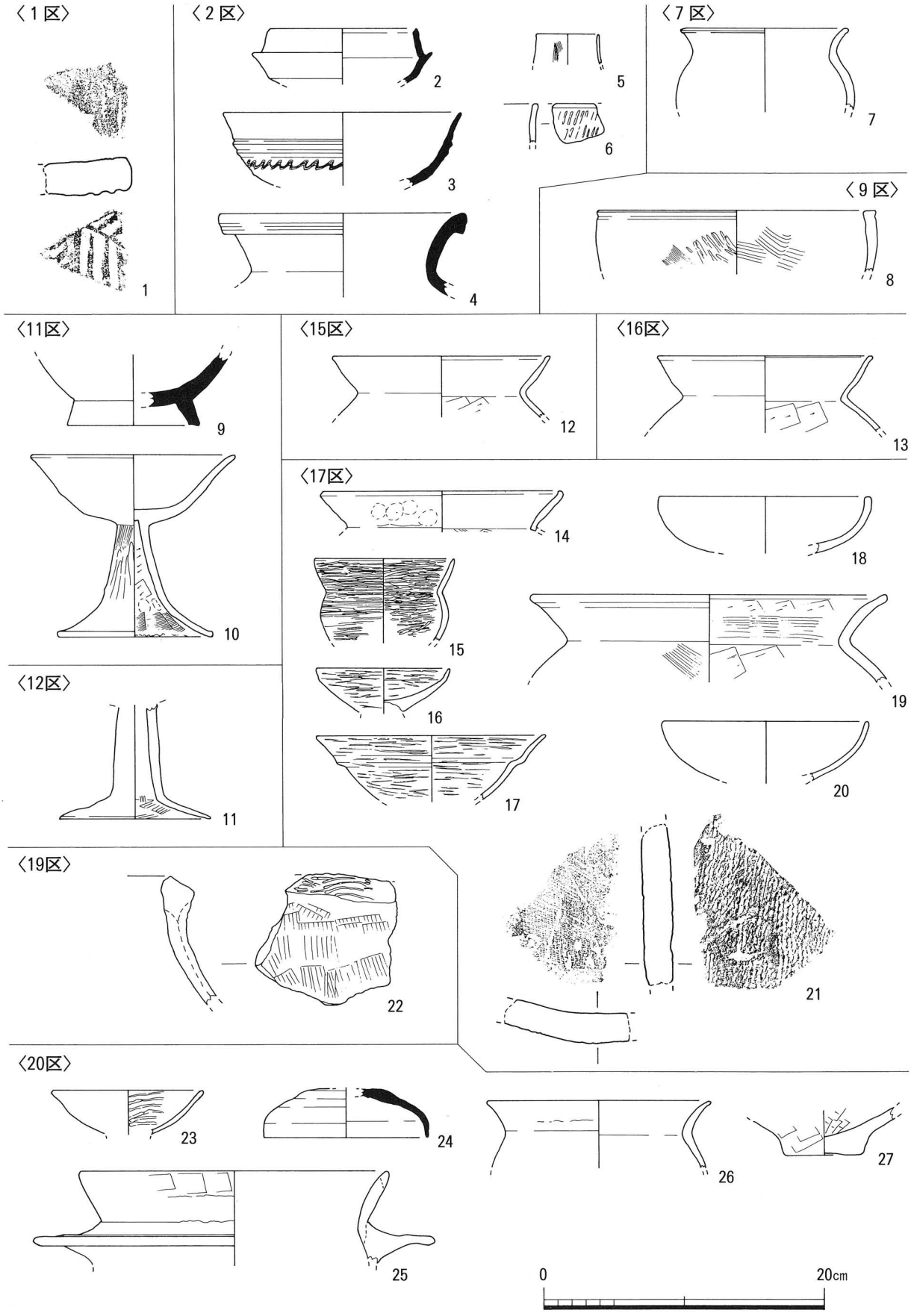
第4層からは須恵器甕・土師器・黒色土器片が出土しており、平安時代頃の包含層であろう。東部で17区に続く土坑1基を検出した（ＳＫ5）。なお西部は15区に続いていたと思われる。平面形は不明であるが、17区での東肩はやや弧状を呈しており、規模は東西4.9m以上、南北は不明で、深さは約0.6mを測る。断面逆台形で、埋土は上層が暗灰色シルト混じり粘質シルト、下層が灰黒色粘質シルトで、底部付近には炭が多量に含まれている。遺物は庄内式期新相～布留式期古相の土器が出土しており、甕（13・14）・小型丸底壺（15）・小型器台（16）・鉢（17）を図化した。このうち13が16区、他が17区の出土である。G層の微砂混じり粘質シルト層は、西から続くＮＲ3の上層部と捉えられるが明確ではない。

〈17区〉

第4層からは須恵器・土師器・瓦器・瓦片が出土しており、土師器高杯（20）・平瓦（21）を図化した。高杯（20）は古墳時代のものであろう。標高約8.4mを測る第4層下面で東西方向の溝（ＳＤ5）を検出した。やや蛇行する北肩から南に下がる堆積を確認したが、南は調査区外に至り幅は不明である。規模は検出長約5.5m・幅0.7m以上・深さ10cm以上を測る。埋土（E層）は上層が黄灰褐色微砂混じりシルト、下層が褐灰黄色微砂混じりシルトで、マンガンを含んでいる。遺物は5～6世紀から奈良時代頃の土師器が出土しており、古墳時代に比定される高杯（18）・甕（19）を図化した。



第4図　平面図（S＝1/150）


〈1区〉
1
〈2区〉
2
3
4
5
6
〈7区〉
7
〈9区〉
8
〈11区〉
9
10
〈12区〉
11
〈15区〉
12
〈16区〉
13
〈17区〉
14
15
16
17
18
19
20
〈19区〉
22
21
〈20区〉
23
24
25
26
27
0
20cm

第5図　出土遺物（S＝1/4）

〈18区〉

第３層から土師器・須恵器片が出土したのみで、遺構は検出されなかった。標高約7.9ｍのⅠ層は、粘質シルトを基調とし、以下は水成層の状況である。遺物は出土していない。

〈19区〉

18区と同様に標高約7.9ｍのⅠ層以下は水成層の状況である。堆積状況から北東－南西方向の流路が想定でき、河川（ＮＲ４）とした。西部のＮＲ３との関係は不明である。なお断面は図化しえなかった部分であるが、旧耕土下の標高8.5ｍ前後に堆積する灰褐色系シルト層（20区第４層に相当）から、古墳時代～奈良時代頃の土師器竈（22）が出土している。調整は外面ハケ、内面ナデで、口縁端部には同心円タタキを施す。いわゆる生駒西麓産の胎土のものである。

〈20区〉

第３層からは６世紀頃の土器の他、瓦器椀（23）が出土しており、中世頃の包含層であろう。第４層からは古墳時代中期～奈良時代頃の土器が出土しており、土師器羽釜（25）・甕（26）・須恵器杯蓋（24）を図化した。第４層は北東から南に下がるブロック混じりの土層であり、奈良時代頃の遺構かもしれない。第５層からは６世紀末頃の土器が出土しており、固く締まる第８層上面が当時の生活面であった可能性がある。第８層下位からは弥生時代中期～後期の土器が少量出土しているが、当該期の包含層であるかどうかは明確ではない。図化しえたものは後期に比定される壷底部（27）のみである。

３．まとめ

今回の調査では弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ１箱であり密とはいえない。

弥生時代の遺構は検出されなかったが、西調査区９区では西部で確認されている前期～中期の包含層相当層が確認できた。20区では標高約7.6ｍ以下で中期～後期の土器が出土しているが、包含層として捉えられるものかは不明である。

古墳時代前期では西調査区で布留式期の遺構が、また北調査区３区では包含層が検出された。遺構面は西調査区中央が高く、西にゆくほど下がる傾向が指摘できる。

古墳時代中期～後期では、標高8.0～8.2ｍで遺構・包含層が検出された。西調査区では埋没河川（ＮＲ３・４）の上面が生活面となっている。北調査区２区は全体が大規模な遺構である可能性がある。

奈良時代では西調査区東部で土器が出土しており、前代から続く集落の存在が考えられる。

平安時代頃では、北・南調査区で南北方向の流路が想定され、その上面では中世頃の溝等の遺構が検出されている。

なお、今回の調査地の北約250ｍには渋川天神社が所在し、その南側は、白鳳時代創建とされる渋川廃寺の推定地となっており、★地点（第１図）からの八葉単弁蓮華文軒丸瓦をはじめ、付近からは瓦の他礎石が出土している。今回１点のみではあるが、１区ＳＤ１下層より有軸綾杉文叩きを施す平瓦（１）が出土した。北約180ｍ地点における渋川廃寺第１次調査[註5]（SKT89－１）においても同形式の平瓦が出土しており、寺域の確定において重要な資料といえよう。この平瓦は河内地域、すなわち大県郡・安宿郡・若江郡・志紀郡などの飛鳥・白鳳時代の寺院に多く採用[註4]

されている。同様の瓦は、八尾市域では東郷廃寺でも出土しており[註6]、これらの寺院との関連も注目される。

註

註1　安井良三・成海佳子　1991「跡部遺跡発掘調査報告書」『㈶八尾市文化財調査研究会報告31』㈶八尾市文化財調査研究会

註2　坪田真一　1994「２．跡部遺跡第12次調査（AT93－12）」『平成５年度　㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

註3　広瀬和雄　1978「岬町遺跡群発掘調査概要－小島東遺跡・淡輪遺跡－」大阪府教育委員会

註4　山本　昭　1986「河内国渋川寺について」『帝塚山考古学　№.６』帝塚山考古学研究所

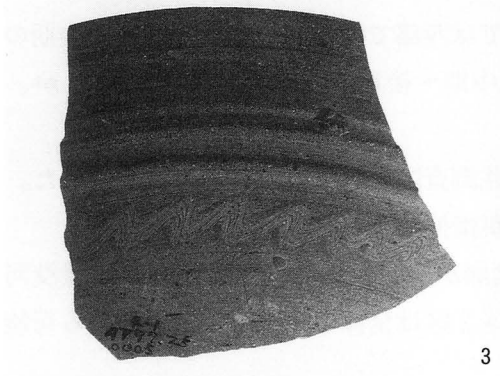
註5　青木勘時　1990「渋川廃寺第１次発掘調査概要（現地説明会資料）」㈶八尾市文化財調査研究会

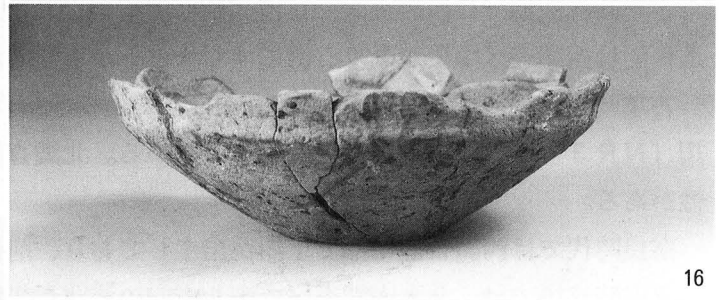
註6　澍　斎　1995「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要７』八尾市教育委員会文化財課

図版一

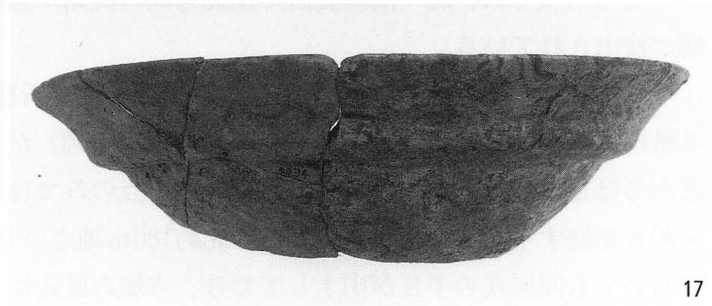
1

10

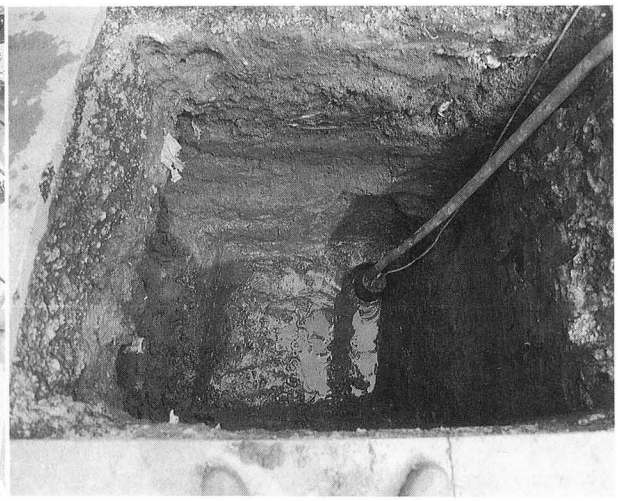

3


16

6

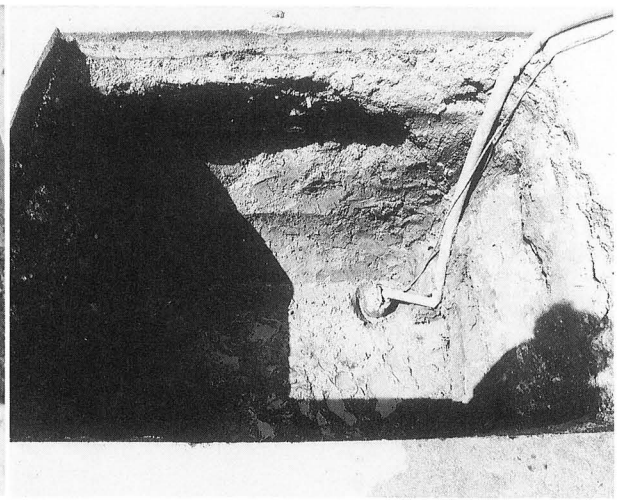

17

1区　第2層下面（北から）

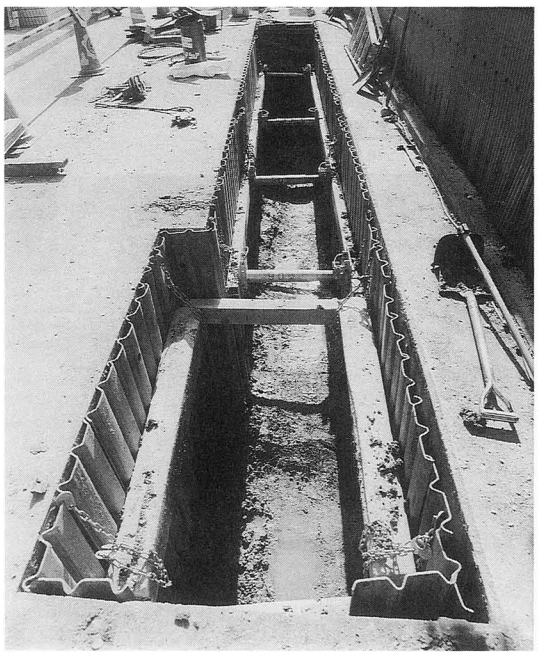


2区　第6層上面（西から）

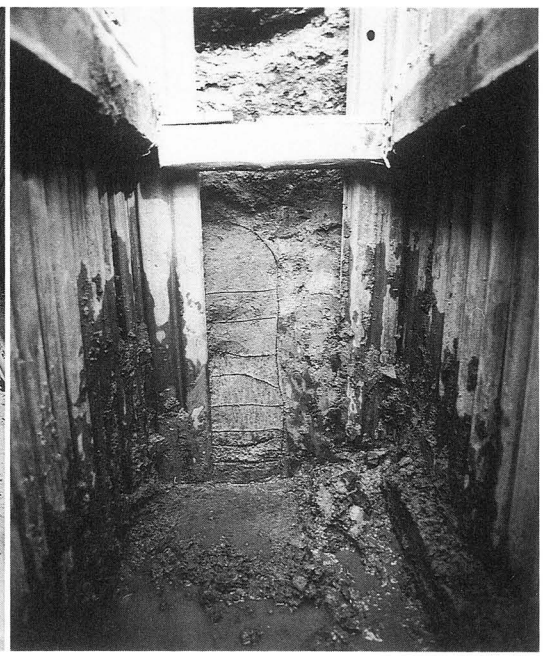
3区　第6層上面（北から）



4区　最終面（東から）

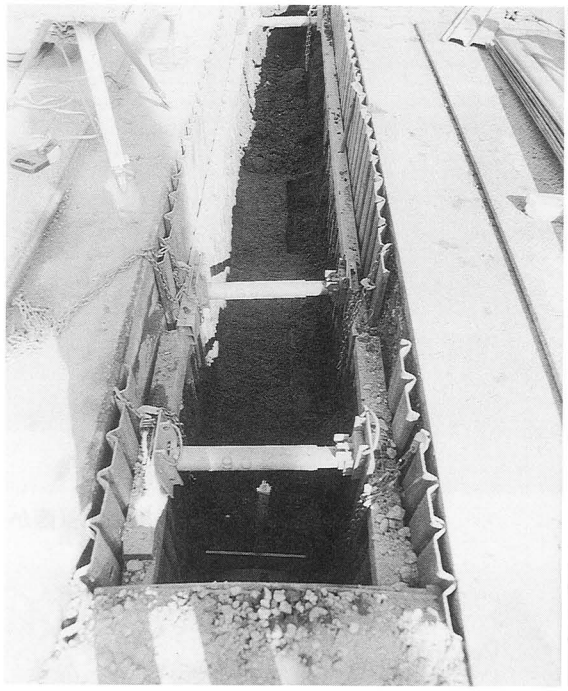


5区　第3層下面（北から）

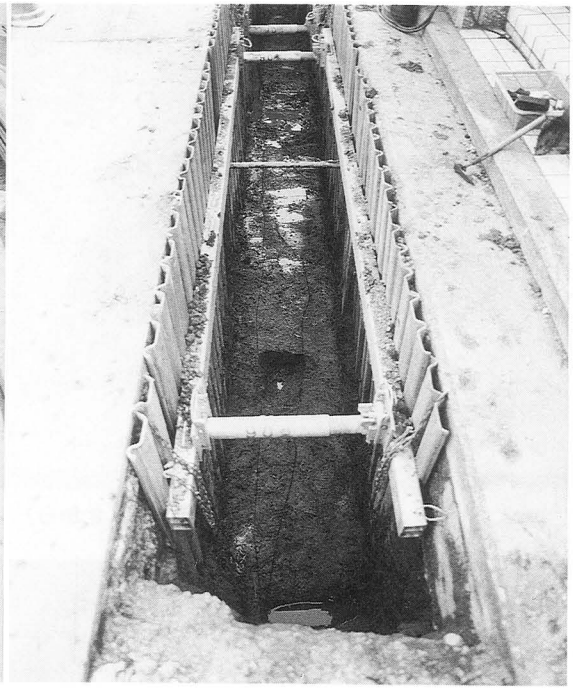


5区　北壁

図版三



6区　第3層下面（南から）

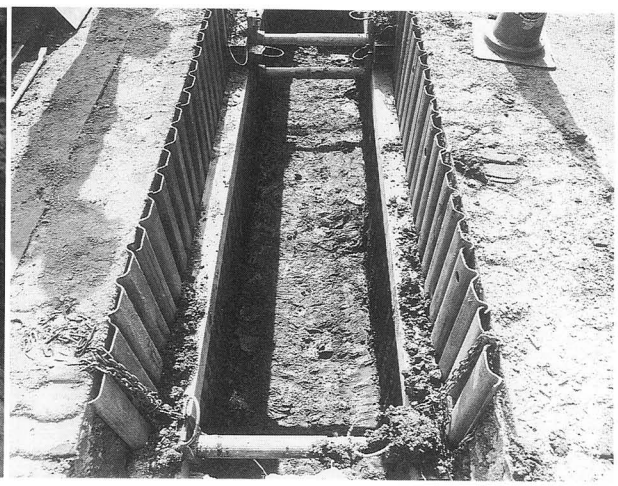


7区　NR2上面（北から）

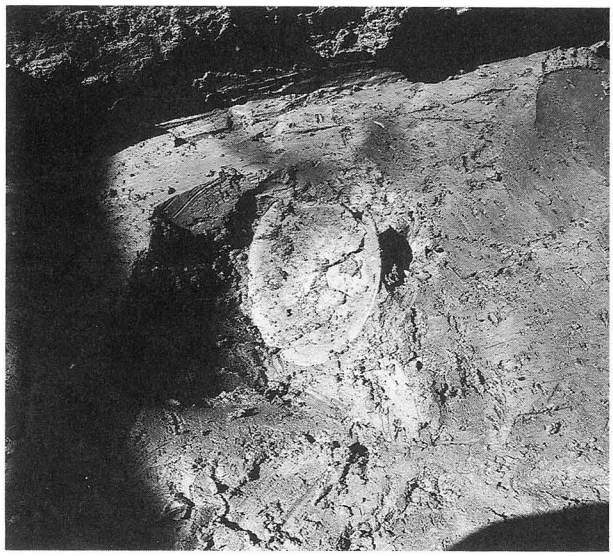
9区　最終面（南から）

10区　第7層上面（西から）

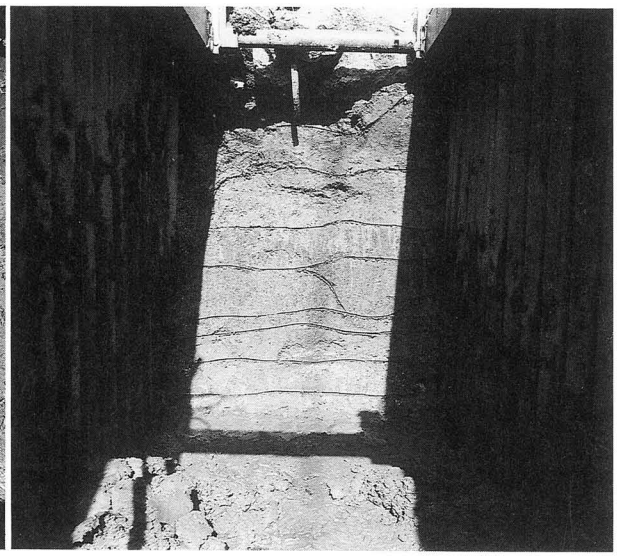
10区　SK2（東南から）



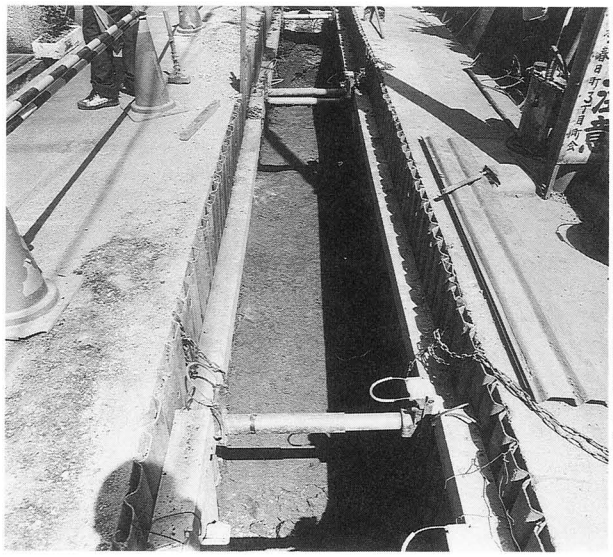
11区　第6層上面（東から）



11区　第6層内土器（10）出土状況（南から）



11区　東壁



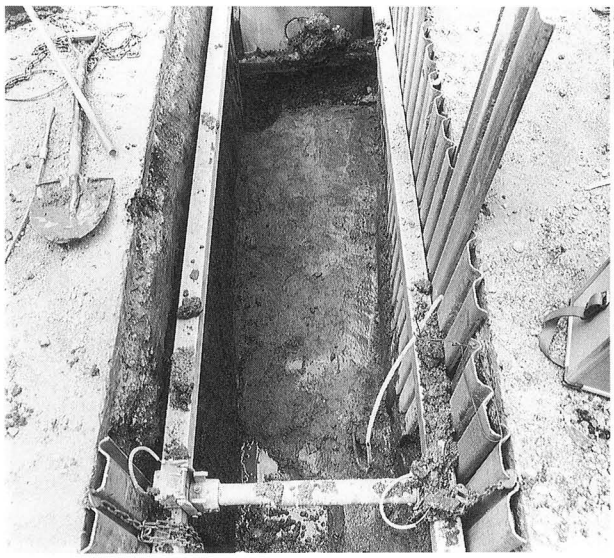
12区　NR 3 上面（西から）

13区　NR 3 上面（西から）

13区　SD 4（北から）

14区　NR 3 上面（西から）

図版五

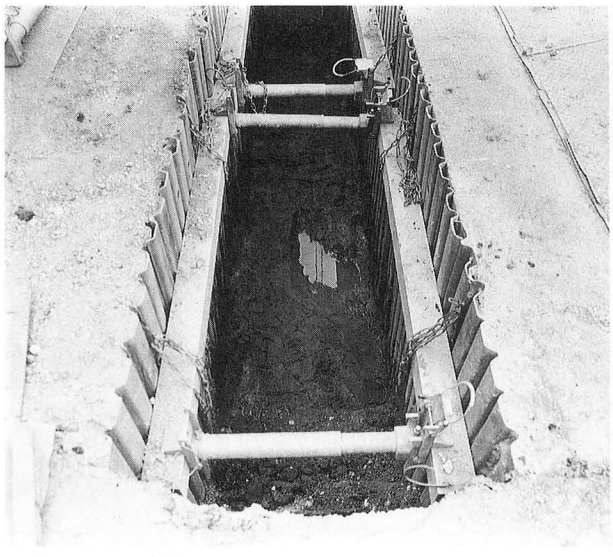


15区　NR 3 上面（東から）

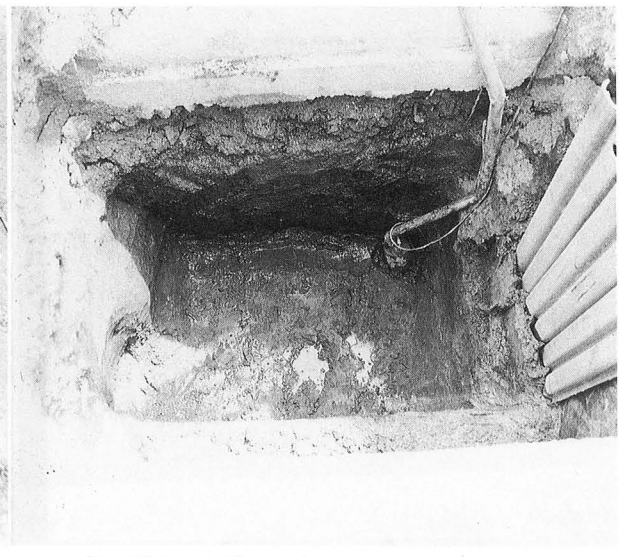
16区　SK 5 （西から）

17区　SK 5 （西から）

18区　NR 4 上面（東から）



19区　NR 4 上面



20区　第 8 層上面（北から）

Ⅱ　跡部遺跡第26次調査（ＡＴ97－26）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市太子堂１・２丁目地内で実施した公共下水道（８－112工区）工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する跡部遺跡第26次調査（ＡＴ97－26）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋725－３号　平成９年３月10日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成９年４月21日から８月１日（実働４日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約16㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレース－高萩が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……15
2．調査概要……15
　1）調査の方法と経過……15
　2）基本層序……17
　3）検出遺構と出土遺物……17
3．まとめ……19

Ⅱ　跡部遺跡第26次調査（ＡＴ97－26）

１．はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に位置し、現在の行政区画では跡部本町１～４丁目、跡部南の町１・２丁目、跡部北の町１・２丁目、春日町１～４丁目、太子堂１・２丁目、東太子１丁目、安中町３丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に立地しており、同一沖積地には東に植松遺跡、西に亀井遺跡、南に太子堂遺跡、北に久宝寺遺跡が接している。

当遺跡では、八尾市教育委員会が昭和53年に春日町１丁目内の旧国鉄職員寮建設工事の際に、弥生時代前期の土器、鎌倉時代の瓦が出土したと記録されている。その後昭和56年以降、市教委・当調査研究会により数十次の発掘調査および遺構確認調査が行われている。現在までの調査成果では、弥生時代前期から近世にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。特筆としては、平成元年度に当調査研究会が実施した公共下水道工事に伴う第５次調査（ＡＴ89－５）から銅鐸を埋納した土壙が検出され注目された。

今回の調査地は遺跡範囲の西部にあたり、調査地の西側には亀井遺跡、南側には太子堂遺跡が隣接している。

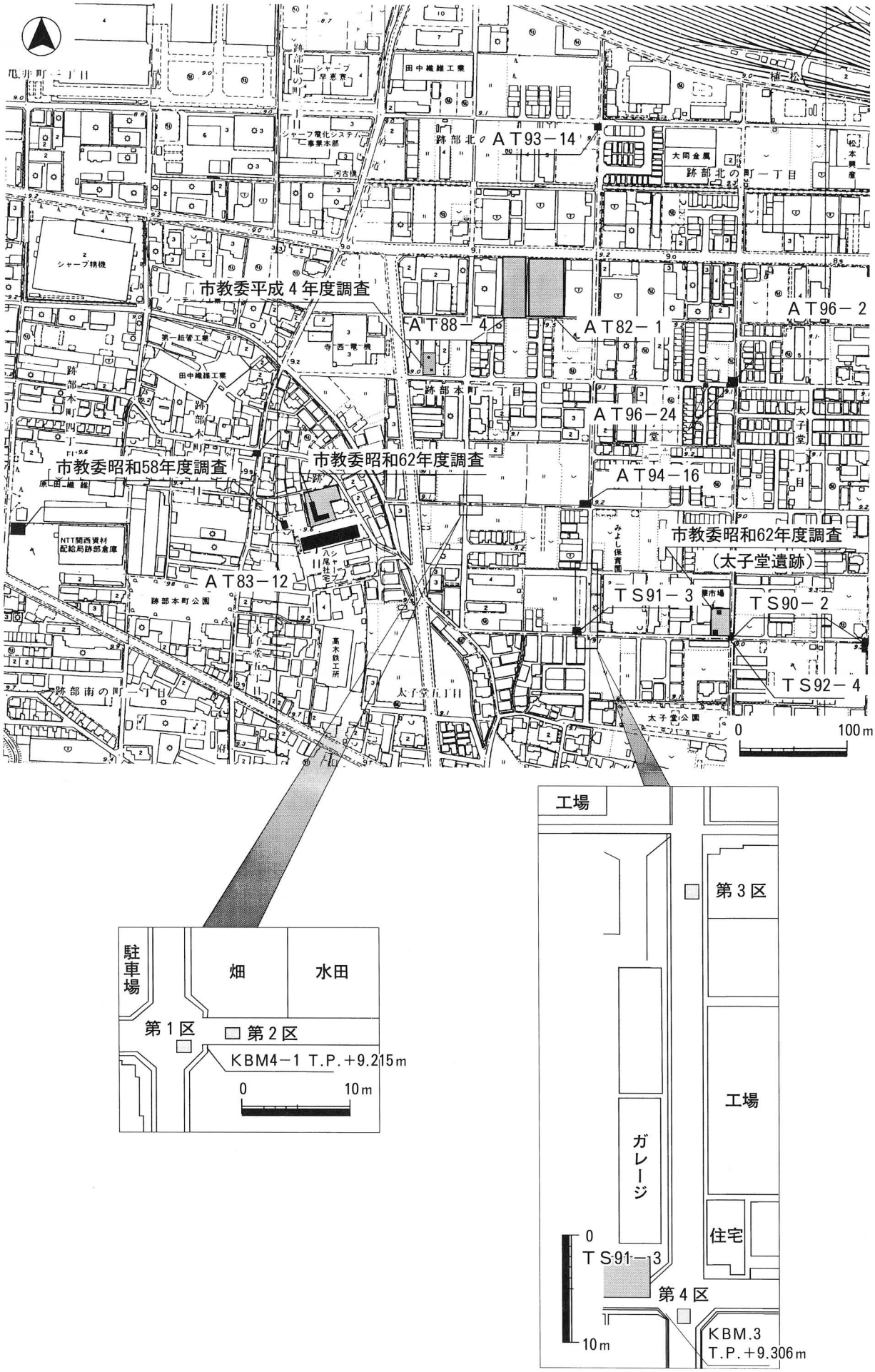
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道（８－112工区）工事に伴う人孔（マンホール設置）部分の調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第26次調査（ＡＴ97－26）にあたる。人孔（一辺約２×２ｍ）は４ヶ所で、総面積約16㎡を測る。今回対象となる人孔はNo.３、No.４、No.15、No.18である（第１図）。これらの調査区はそれぞれ離れた位置にあり、調査も工事工程および道路規制等の都合上、各人孔部分の調査時期が異なった。調査期間は、平成９年４月21日から８月１日の長期間に及んだ。このうち実働は４日間である。その内訳は、まず最初にNo.４（第１区）を４月21日（月）、次にNo.18（第４区）を５月15日（木）、続いてNo.15（第３区）を６月26日（木）、最後にNo.３（第２区）を８月１日（金）に調査を実施した。なお、No.18の人孔については周知の遺跡範囲では太子堂遺跡の北端にあたっているが、下水工区の申請地が跡部遺跡の所在地であったため跡部遺跡として取り扱っており、調査報告も跡部遺跡とした。

調査は人孔部分を現地表（標高9.2～9.4ｍ）下1.6～1.7ｍまで立ち会いのもとで機械掘削を実施し、遺構・遺物の検出及び地層の堆積状況等の記録保存の作成を行った。次いで工事掘削深度（現地表下2.7ｍ）までの地層状況を確認した。なお、掘削にあたっては隣接住宅等の安全面を考慮に入れ、壁面崩壊防止策として現地表下1.5ｍ前後より下部の掘削については簡易矢板を打設した。

周辺の調査では現地表下1.5～2.0ｍの土層で古墳時代前期～中世に相当する包含層及び遺構面を検出しており、当地にもその存在が予想されていたため、機械と人力を併用して徐々に掘削を行った。その結果、第１区・第２区で奈良時代以前の河川跡、第３区で奈良時代の遺物を含む土層、第４区で平安時代後期の包含層が認められた。



第１図　周辺図（Ｓ＝１/5000）及び調査区位置図（Ｓ＝１/500）

2）基本層序

各調査区が点在するため、基本層となる層はごく一部で共通するのみである。

第１層　盛土及び撹乱（層厚30～160㎝）。道路下は、アスファルト・バラス・盛り土が堆積している。また、公共（水道・排水管・ガス管など）施設の埋設工事で撹乱・削平されている。各調査区に共通して言える。

第２層　旧耕土（層厚20㎝前後）。第１区と第４区の一部に残存しているのがみられる。他の調査区では削平されており、存在しなかった。

第３層　灰茶褐色シルト（層厚20㎝前後）第１区・第２区。暗灰青色微砂（層厚30㎝前後）第３区。緑灰色シルト（層厚20～25㎝）第４区。旧耕土の床土と思われる。

第４層　淡茶褐色粘質土（層厚20～40㎝）第１区・第２区。褐色の斑点がみられる。暗灰青色細砂混じりシルト（層厚10㎝前後）第３区。洪水層。明褐色シルト（層厚30～40㎝）第４区。須恵器片を含むが中世以降と思われる土層。

第５層　灰白色細砂～砂礫（層厚130㎝以上）第１区・第２区。奈良時代以前に埋没した河川跡と思われる。青褐色細砂混じりシルト（層厚30～40㎝）第３区。明褐色粘質シルト（層厚10～30㎝）第４区。奈良時代ごろの土師器片を含む。

第６層　淡茶褐色シルト（層厚20㎝前後）第３区。淡青灰色微砂～細砂（層厚60㎝前後）第４区。

第７層　明褐色シルト（層厚100㎝前後）。酸化鉄を含む。灰色シルト質粘土（層厚50㎝以上）第４区。植物遺体含む。

第８層　乳灰茶色細砂（層厚30㎝前後）第３区。河川跡。

第９層　灰色微砂（層厚50㎝前後）第３区。植物遺体を含む。河川跡。

第10層　灰色粗砂（層厚20㎝前後）第３区。河川跡。２～４㎝の小石を含む。

第11層　暗灰色粘土（層厚30㎝以上）第３区。多量の植物遺体含む。

第Ａ層　淡茶褐色粘質土と灰白色細砂のブロック。第１区の北東の一部でみられる。

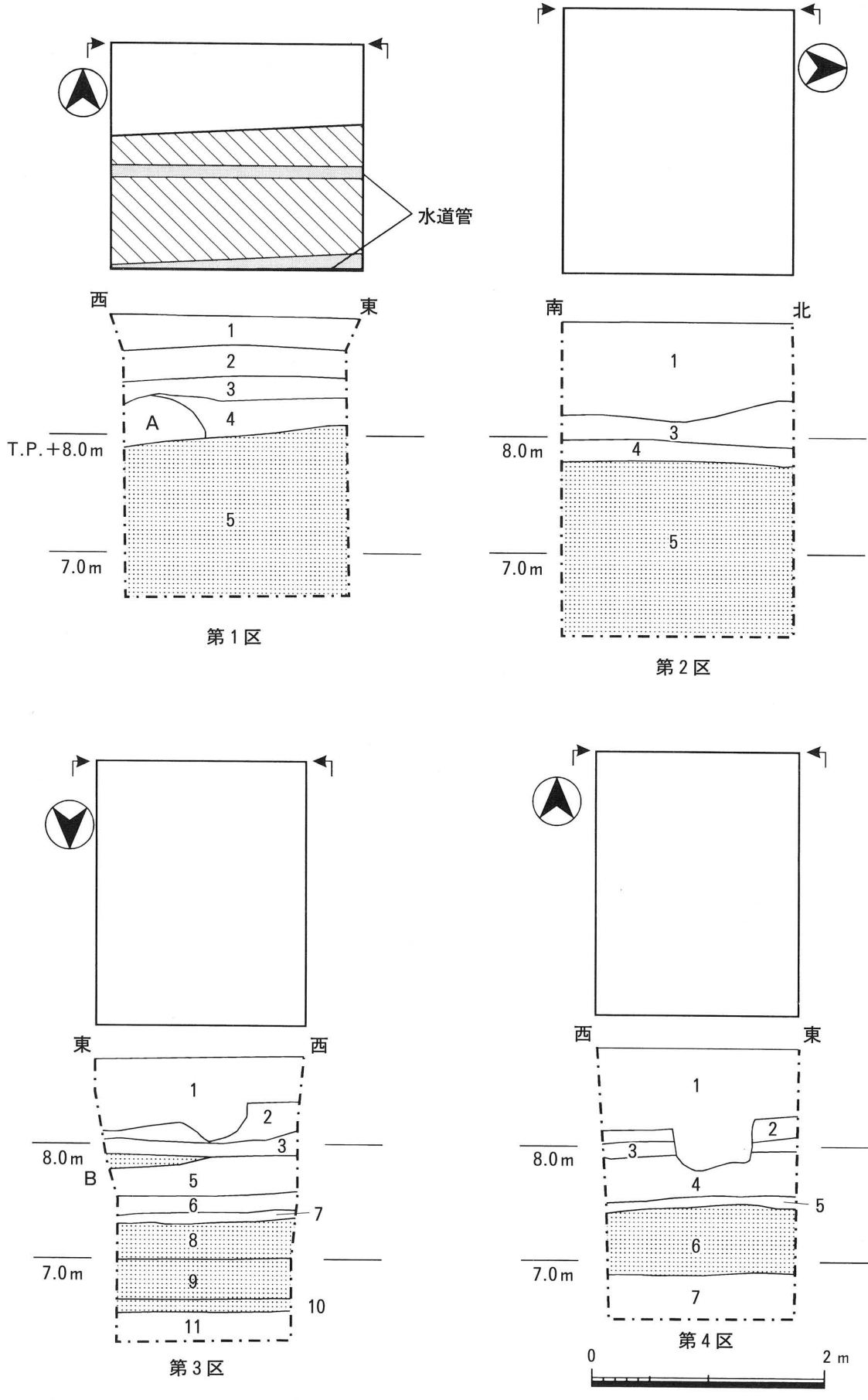
第Ｂ層　青灰色細砂。第３区の南東部の一部にみられる層である。

3）検出遺構と出土遺物

調査の結果、第１区・第２区では現地表下約1.5ｍ（標高約7.7ｍ）以下で奈良時代以前の河川跡と思われる砂層を検出した。第３区では現地表下約1.3～1.5ｍ（標高約7.9～8.1ｍ）の第６層で平安時代後期ごろの遺物を含む土層、下層（第８層～第10層）で時期を特定することはできないが河川跡と思われる砂層の堆積が認められた。第４区では現地表下約0.9～1.3ｍ（標高約8.0～8.4ｍ）で中世ごろの土層（第４層）、現地表下約1.4～1.9ｍ（標高約7.4～7.9ｍ）以下で奈良時代と思われる土層（第６層）を確認した。また、これらの調査区から出土した遺物はごく少量であり、確定的な時期決定はできなかった。当報告では周辺の既往調査の層位状況と当調査区から出土した遺物を照合して時期決定した。

第１区

当調査研究会第16次調査（ＡＴ94－16）の調査区から西へ約110ｍに位置する調査区である。現地表下約0.9～2.0ｍ（標高約7.0～8.3ｍ）までは埋設工事等の掘削で埋め戻した盛り土である。調査区西側で水道管埋設工事と排水管埋設工事の隙間でかろうじて残存する部分が見られた程度



第2図　調査区平断面図（S＝1/50）

である。現地表下約1.2ｍ（標高約7.8ｍ）から工事掘削深度約2.7ｍ（標高約6.3ｍ）まで砂層（層厚約1.5ｍ）が堆積していた。その砂層は上層が細かな砂粒、下層が２～４㎝ぐらいの小石を多く含んだ砂層である。その下層付近から奈良時代ごろのものと思われる須恵器の杯身片底部１点が出土した。

第２区

第１区より東へ約６ｍに位置する調査区である。現地表下約0.3～1.5ｍ（標高約7.5～8.7ｍ）まで第１区と同様、現在の埋設工事で埋め戻しされた盛り土で、調査区南部３分の２は現地表下約1.5ｍ（標高約7.5ｍ前後）まで水道管埋設工事で削平されていた。調査区北部で旧耕土から残存する部分がかろうじて残っていた。この土層観察では第１区と同様、砂層（第５層）が厚く堆積していた。工事掘削深度である現地表下約2.7ｍ（標高約6.6ｍ）以下まで続いている。調査区内では層厚1.5ｍ以上の堆積を確認できた。遺物はこの砂層内より第１区と同時期と考えられる須恵器片１点が出土している。

第３区

当調査研究会第16次調査（ＡＴ94－16）より南へ約70ｍに位置する調査区である。現地表下約0.5～1.7ｍ（標高約7.1～8.4ｍ）までは現在の埋設工事で埋め戻しされた盛り土である。現地表下約0.9～1.2ｍ（標高約7.4～7.6ｍ）の第５層で平安時代後期の遺物を含む層があり、その下部で精査を行ったが遺構はなかった。その下層（第８層～第10層）では河川跡と思われる砂層の堆積がみられた。第９層には植物遺体が含まれていた。

第４区

当調査研究会太子堂遺跡第３次調査（ＴＳ91－３）より南東へ約６ｍに位置する調査区である。現地表下約0.9～1.6ｍまで各調査区と同様、現在の埋設工事で埋め戻しされた盛り土である。大部分は現地表下約1.6ｍ（標高約7.5ｍ前後）まで削平されていた。かろうじて南西部の一部で旧耕土から残存する土層があった。この土層観察では第４層内より須恵器の小片１点、第６層内より奈良時代ごろの土師器の杯片１点がそれぞれ出土した。その下層（第７層）では植物遺体を含む層で、工事掘削深度である現地表下約2.3ｍまで続いている。基底面からは勢いよく湧き水が吹き出しており、その下は砂層の堆積であることが推測できる。

３．まとめ

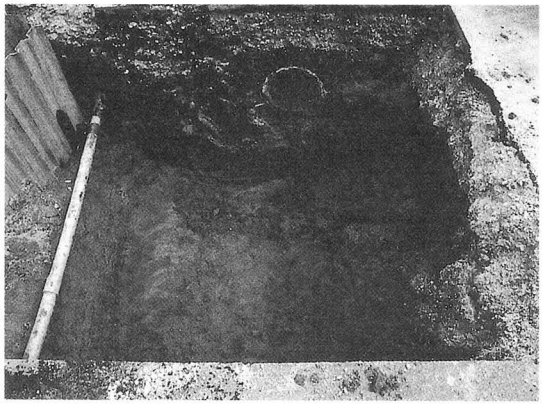
今回の調査は公共下水道（８－112工区）工事に伴う人孔部分の小面積な調査区であった。また、それぞれの調査区が広範囲に散らばったものであった。

調査の結果、第１区・第２区で奈良時代以前に埋没したと思われる河川跡が確認された。この河川は工事掘削深度である現地表下2.3～2.7ｍまでしか掘削できなかったが、河川の基底部まではまだまだ深いものと思われる。また、河川の規模であるが開削工事を行った施工業者の工事掘削の様子によると第２区の調査区より西へ約30ｍ以上、第１区の調査区より東へ約40ｍ前後で砂層が途切れているとのことである。このことから判断すると東西幅約80ｍ以上を越える大きな河川跡であることが推測できる。さらに第３区の下層で同時期の河川跡の堆積と思われる砂層がみられることから、同一の河川跡であれば南東から北西方向に流路をもつものと考えられる。

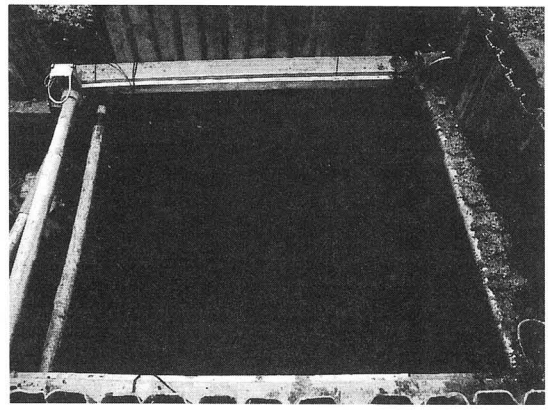
また第３区では遺構は確認できなかったが、平安時代の遺物包含層を検出することができた。

第４区では北西へ６ｍの所で当調査研究会が、下水道工事に伴う太子堂遺跡第３次調査を実施しており、現地表下約2.3～2.6ｍ（T.P.＋6.3～6.6ｍ）で古墳時代中期、現地表下約1.5ｍで奈良時代の遺構および遺物を検出している。第４区では古墳時代中期の層位まで掘削できなかったが、上層で検出している奈良時代と思われる土層が認められた。

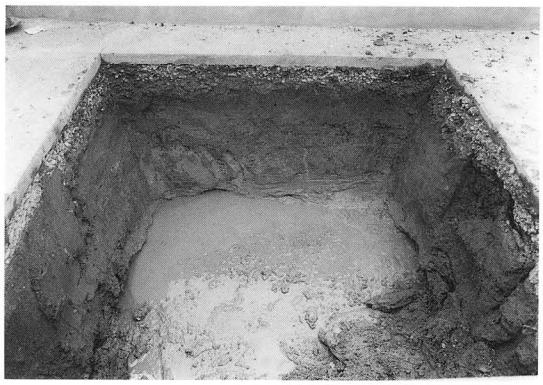
参考文献
・高木真光　1983.8「第６章　跡部遺跡（春日町１丁目51番地）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』八尾市教育委員会
・西村公助　1983「11．跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』㈶八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸　1984「第６章　跡部遺跡発掘調査概要報告」『昭和58年度事業概要報告』㈶八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1988「19．跡部遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』㈶八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1989「19　跡部遺跡（第４次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』㈶八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1991『跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－』㈶八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1992「Ⅻ　跡部遺跡第６次調査（ＡＴ91－06）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』㈶八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1994「１．跡部遺跡第11次調査（ＡＴ93－11）」『平成５年度　㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』㈶八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1995「１．跡部遺跡第16次調査（ＡＴ94－16）」『平成６年度　㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』㈶八尾市文化財調査研究会



第1区上層（南から）



第1区下層（南から）

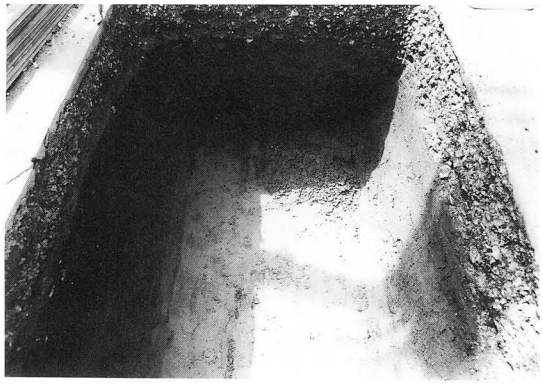


第2区上層（南から）

第2区下層（東から）

第3区上層（北から）

第3区下層（北から）



第4区上層（北から）

第4区下層（北から）

Ⅲ　跡部遺跡第27次調査（ＡＴ97－27）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市春日町３・４丁目地内で実施した公共下水道工事（８－113工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1．本書で報告する跡部遺跡第27次調査（ＡＴ97－27）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋56号　平成９年４月21日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成９年５月28日から11月10日（実働７日）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約20㎡を測る。調査においては朝田　要・八田雅美・山内千恵子が参加した。
1．内業整理には上記の他、岩本順子・澤村妙子・田島和恵・都築聡子の参加を得た。
1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。
1．出土した石庖丁の石材鑑定等については、大阪府八尾市立曙川小学校教諭　奥田尚氏に御教示を得た。

本　文　目　次

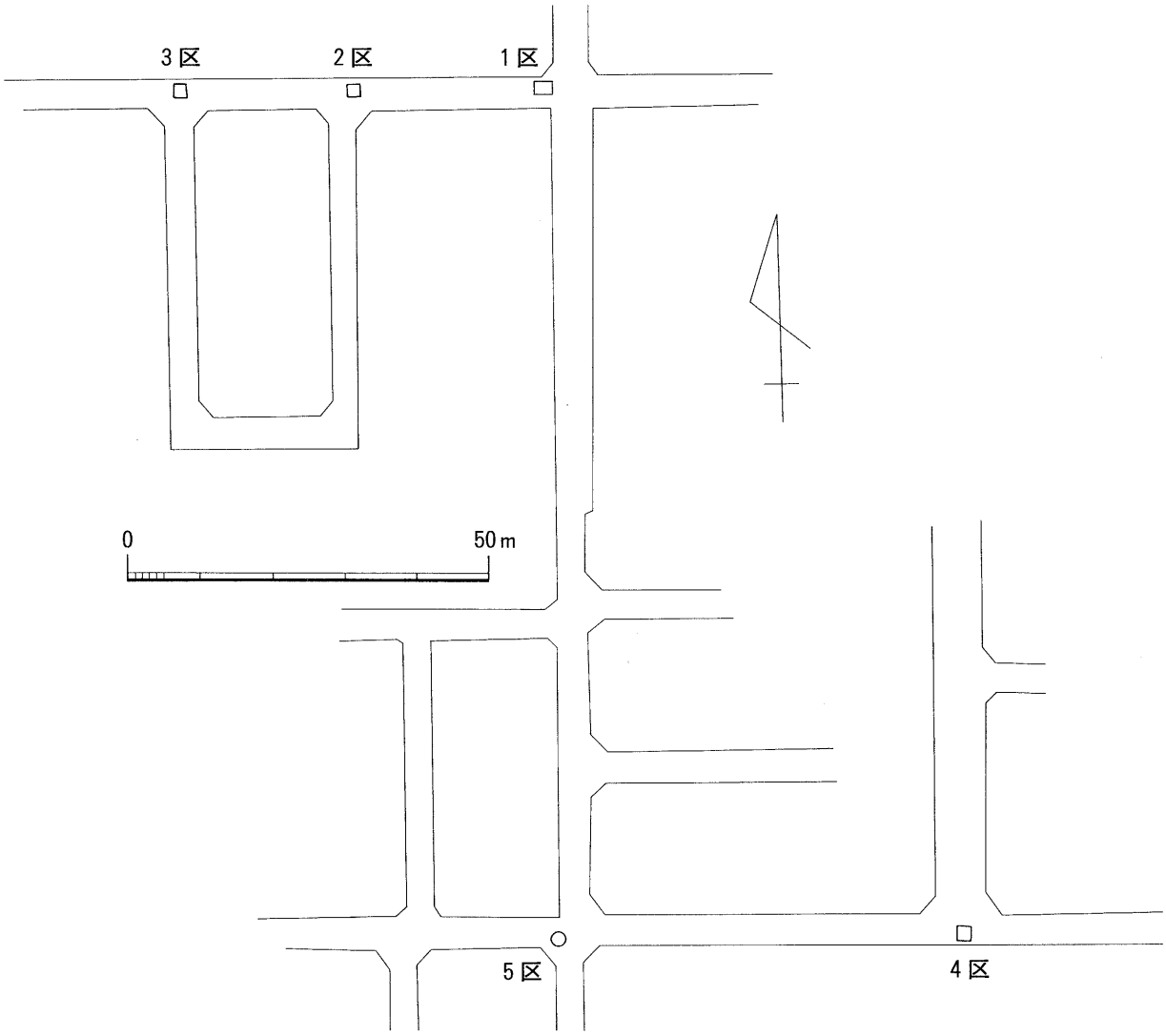
1．はじめに……23
2．調査概要……24
　1）調査方法……24
　2）調査成果……25
3．まとめ……40

Ⅲ　跡部遺跡第27次調査（ＡＴ97－27）

１．はじめに

跡部遺跡は八尾市の西部に位置し、現在の行政区画では跡部北の町１・２、春日町１～４、太子堂１・２、東太子１、跡部本町１～４、跡部南の町１・２、安中町３丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の自然堤防上に立地している。

今回の調査地周辺での既往の発掘調査成果をみると、東部の第12次調査（Ａ12）[註1]では弥生時代前期から古墳時代の集落遺構が確認され、膨大な量の遺物が検出されている。南部の第13次調査（Ａ13）[註2]では弥生時代中期後半の環濠と思われる３条の溝が検出され、またその北側の第10次調査（Ａ10）[註3]では弥生時代後期の溝から銅鏃が１点出土している。北西部の第23次調査（Ａ23）[註4]では弥生時代後期末から古墳時代前期布留式期の集落が連綿と続いており、第５次調査（Ａ５）[註5]では埋納された銅鐸が検出されている。（調査地は本書『Ⅰ　第25次調査』－第１図（P-1）を参照）



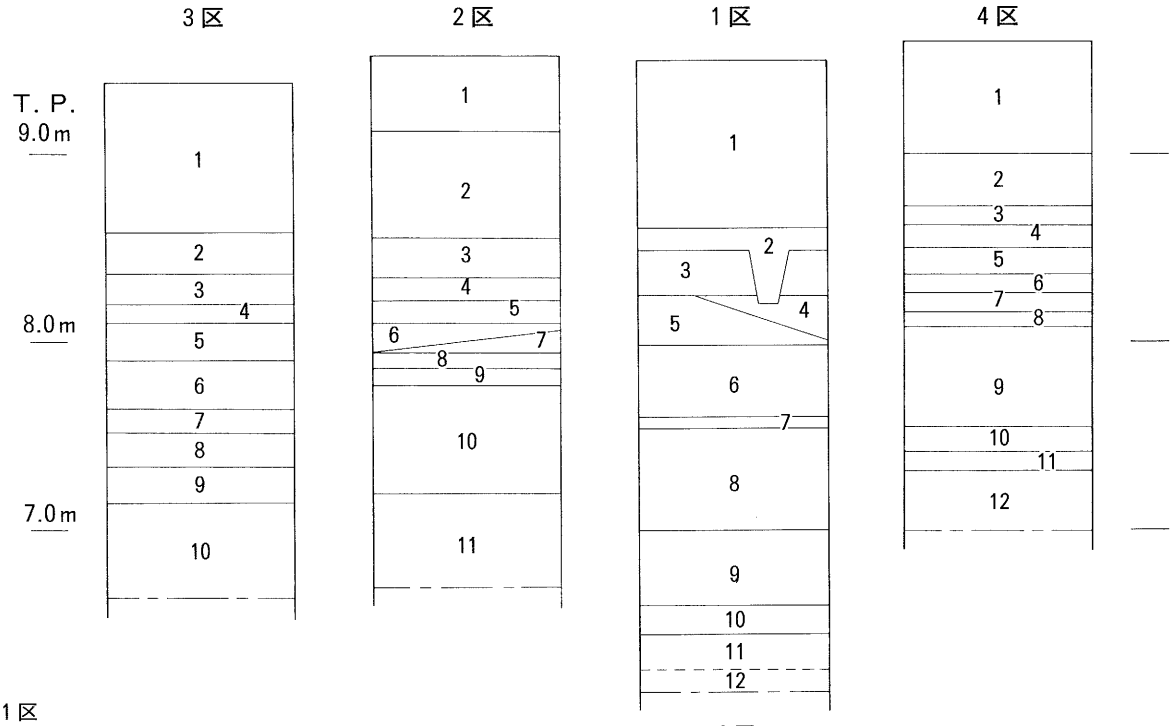
第１図　調査区位置図（Ｓ＝１/1000）

2．調査概要

1）調査方法

今回の調査は公共下水道工事に伴う人孔部分５箇所（１区～５区）の調査であり、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第27次調査である。なお調査途中で５区については設計変更となり、その工法から断面・平面の調査が不可能と判断されたため、掘削土からの遺物採集を実施するにとどまった。

１区～４区の調査にあたっては、現地表下1.2～1.5ｍまでを機械掘削とし、以下は工事による掘削深度に応じて1.4～2.0ｍを人力掘削及び随時機械掘削を併用して調査を実施した。



1区
1．盛土
2．旧耕土：灰青色細砂混じり粘質シルト
3．灰黄褐色細砂混じりシルト
4．明褐灰色微砂混じりシルト（固く締まる）
5．淡灰褐色粘質シルト～シルト
6．灰黄色シルト混じり微砂
7．灰色粘質シルト
8．灰黒色細砂混じり粘質シルト（炭含む。青灰色シルトを斑状に含む。）
9．暗灰色細砂混じり粘質シルト（炭含む。青灰色シルトを斑状に含む。）
10．暗灰青色シルト混じり粘質シルト
11．灰青色シルト混じり粘質シルト（汚れている）
12．青灰色シルト

2区
1．盛土
2．旧耕土：暗灰色細砂混じり粘質シルト
3．灰色粘質シルト混じり細砂
4．黄灰褐色微砂混じり粘土
5．黄褐灰色細砂混じりシルト
6．褐灰色シルトブロック混じりシルト質粘土
7．灰黄褐色粘土ブロック混じりシルト
8．灰黄色シルト
9．灰色シルト～細砂
10．淡灰色細砂～粗砂と淡褐色シルトの互層
11．淡灰褐色シルト（植物遺体を含む）

3区
1．盛土・旧耕土
2．暗灰褐色微砂混じり粘質シルト
3．淡灰褐色砂混じりシルト
4．淡灰黄色粘土質シルト
5．明褐灰色微砂混じり粘土質シルト
6．灰褐色細砂混じりシルト
7．灰褐色シルト
8．黄灰色微砂
9．灰褐色粘土（植物遺体を含む）
10．暗褐灰色粘土

4区
1．盛土
2．旧耕土：暗灰色微砂混じりシルト
3．灰青色粗砂混じりシルト
4．淡灰褐色粘質シルトブロック混じり微砂～細砂
5．褐灰色粗砂混じりシルト
6．淡褐灰色細砂混じりシルト
7．灰黄色細砂混じり粘質シルト
8．淡灰黄色微砂混じり粘質シルト
9．灰色微砂～シルト
10．灰色粘土質シルト
11．暗褐色微砂混じり粘質シルト
12．暗褐色細砂多混じり粘質シルト

第２図　基本層序（Ｓ＝１/40）

2）調査成果

〈1区〉

a．基本層序と出土遺物

第1層は盛土、第2層は旧耕土である。第3層からは奈良時代頃に比定される土師器・須恵器や、時期不明の瓦が出土している。

標高約7.5～8.0mに堆積する第6・7層は微砂～粘質シルトの水成層であり、東の第25次調査地におけるＮＲ3にあたる。

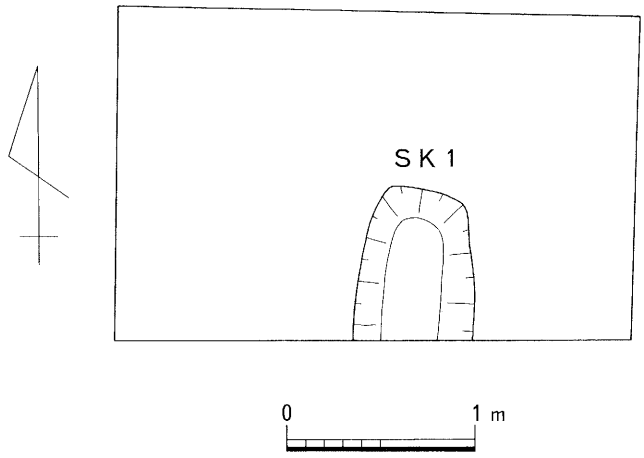
以下の約1.0mは黒灰色～暗灰色を呈し、粘土を基調とする第8・9層が弥生時代の包含層で、前期を中心として中期までの土器・石器が出土している（第8層：23～29、60・61、第9層：30～53、62～66、第10層上面：54～59、67・68）。出土遺物からみると、第8層は中期の包含層と捉えることもできるが、第8・9層には前期～中期の遺物が混在しており、中期頃に撹拌された層かもしれない。遺物については後述する。

第10層上面が弥生時代前期の遺構面で、土坑1基（ＳＫ1）を検出した。面的に精査しえたのは第11層上面までであるが、第11層はやや汚れた層であり、層相からみて第12層の青灰色シルトがベース層と考えられ、この上面にも遺構が存在する可能性がある。

b．検出遺構と出土遺物

ＳＫ1

検出部分の平面形は長辺0.9m・短辺0.7mの長方形に近く、南は調査区外に続いている。断面形状は逆台形で、深さ約0.5mを測る。埋土は青灰色シルト・暗褐色粘質シルトの互層状を呈し、間層として炭層や焼土層が介在している。



第3図　1区平面図（S＝1/40）

出土遺物には多量の弥生時代前期新段階の土器の他、サヌカイト石核・剥片が各1点ある。また直径数cm程度の焼土塊が多く含まれ、これらは壁土の可能性がある。土器は完形近くに復元しえるものが多く含まれ、土坑内に隙間なく詰まったような出土状況で、小範囲にもかかわらずその破片量はコンテナ3箱に及んでおり、かなり大きな破片もみられる。器種では壷・甕・鉢があり、壷の占める割合が高い。完形近くに復元しえるものには壷5点、甕1点がある。甕はこの1点以外は小片数点のみであった。

なお同一個体の破片にもかかわらず、明確に色調の異なる破片が接合される状況がみられ（顕著な例では黄灰色と黒色）、これは二次焼成を受けたものと受けていないものと考えられる。このことと炭層や焼土層・焼土塊の存在とを考え合わせると、当土坑の性格として住居火災後の廃棄坑という可能性も推察されよう。

出土遺物には広口壷（1～16）・太頸広口壷（17・18）・甕（19）・鉢（20）・石器（21・22）がある。以下、器種別に特徴を述べる。土器の法量等は表1にまとめた。

【広口壷】（1～16）

ア）形態・法量

いずれもいわゆるａ形態とされる壷の範疇におさまるものと思われ、ｂ形態の壷は出土していない。形態によりＡ～Ｃの３類に分類できる。**形態Ａ**は張りが強く扁平な胴部を呈するもので、Ａ→Ｂ→Ｃと体部最大径の位置が上り、より丈高になるものである。分類の基準には下記の指数を設定し用いた。なお完形品以外についても、推定により分類できるものは含めた。

指数１＝（器高÷体部最大径）×100……扁平率

指数２＝（体部最大径の高さ÷器高）×100…器高に占める体部最大径の位置

各形態と指数との関係は次のようになる。

Ａ：体部最大径≧器高（指数１が100以下、指数２が37以下）…１～５

Ｂ：体部最大径＜器高（　〃　105前後、　〃　40前後）…６・７

Ｃ：体部最大径＜器高（　〃　120以上、　〃　42以上）…８～12

法量は、容量では**特大・大・中・小**の４種類に分類でき、形態別では以下のようになる。

	Ａ	Ｂ	Ｃ
特大	約25ℓ以上（４・５）	－	－
大	約14ℓ　（１～３）	－	約13ℓ（９・10）
中	－	7～10ℓ（６・７）	約７ℓ（　８　）
小	－	－	約３ℓ（11・12）

特大としたものは**形態Ａ**にのみみられる。５は残存部分で約24ℓの容量を測り、全容量は30ℓ近いものと思われる。頸部の太さからみて４もこのクラスのものであろう。

イ）装飾・技法

装飾には貼付突帯文・沈線文・削出突帯文がある。**形態Ａ・Ｂ**ではいずれも頸部と肩部の両方に施され、**形態Ｃ**の８・９・10は頸部のみで、小型の11・12は無文である。貼付突帯文は**形態Ａ**の１・２及び破片の13にみられ、２は頸部に貼り付け突帯文、肩部に沈線文で、両文様が混在するのはこの１点のみである。２の貼付突帯文は１本の粘土帯を分割している。１の突帯貼り付け部には目印の沈線が認められる。貼付突帯文には圧痕が施され、２は布目圧痕である。**形態Ｂ・Ｃ**は沈線文のみである。削出突帯文は頸部の破片の14にのみみられ、低く幅広の削出突帯文上に沈線を施す。

２の肩部沈線文は７条であるが、上・下端の沈線外側をヘラミガキにより低めることで段を成している。この手法が認められるのは他に７があり、頸部・肩部ともに上端の沈線外側に施されている。

８の頸部の沈線文は他のものに比して下位に施されており、また頸部の立ち上がりが短かく、体部から「く」の字に屈曲して開く口縁部に至るという点でも他とは異なる。

10は他の壷に比して口縁部が短く、また胴部の張りも弱いと思われ新しい様相といえる。

１は口縁部に２個の紐穴を有する。

ウ）調整・その他

調整はいずれもハケ・板ナデ・ナデ等の後ヘラミガキを施すもので、ヘラミガキには粗・密の差が認められる。沈線文が多条である３・５・９は外面の調整が雑になっており、ヘラミガキが

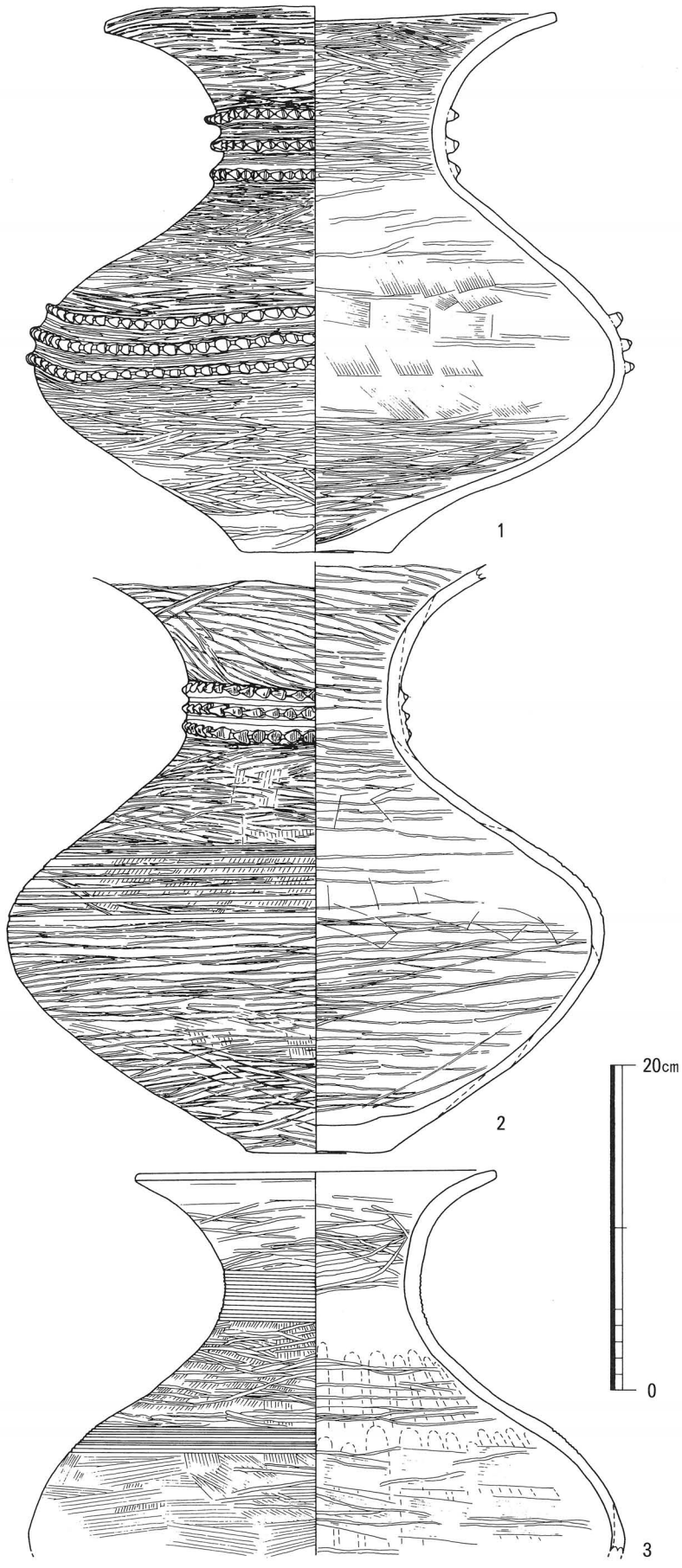
粗で先行するハケ・板ナデが明瞭に残っている。これは太頸広口壷（17）にも共通している。内面のヘラミガキは主に体部上半が雑で、施されないものもある（5・9）が、6のみこの部分が密になっている。ヘラミガキは横方向が主体であるが、肩部外面には斜方向（5・6）、頸部内面には縦方向（5・9）もみられる。1・2・6の底部～体部下位外面には分割ヘラミガキが施される。9・10の口縁部外面、5の胴部外面にはヘラミガキが施されていない。

器壁の厚さをみると、**形態A**の1・2がやや薄手であるといえ、法量では小さい7・12がやや厚手となっている。

胎土では、角閃石を多く含み茶褐色系の色調を呈する生駒西麓産と考えられるものは2・4・5・9・16である。11・13・15もその可能性がある。他の色調は灰色～灰黄色系が主で、1が黄灰色を呈する。1には前述したように黒色を呈する破片が多く含まれ、二次焼成に起因するものと考えられる。

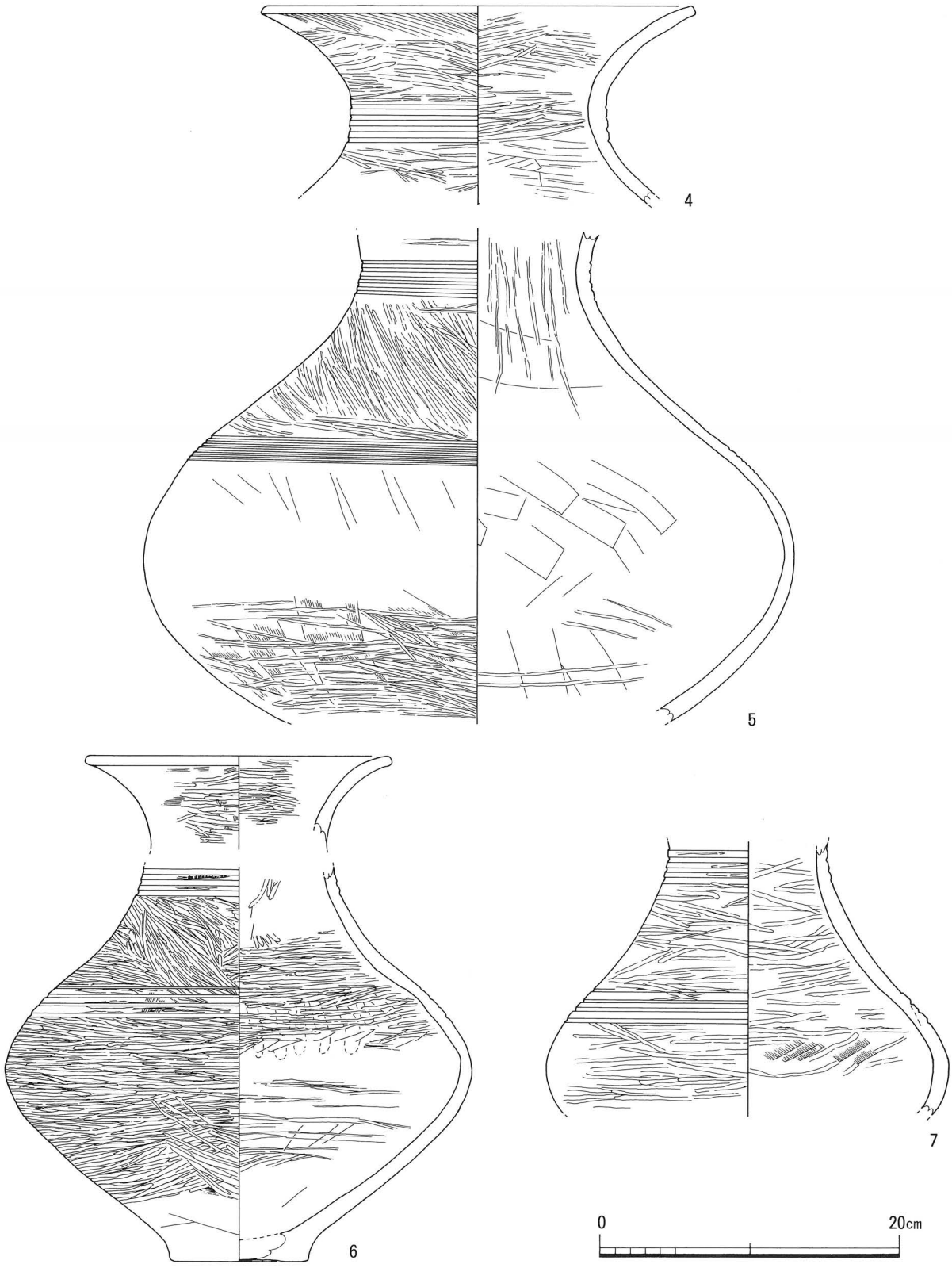
9の底部外面には中世の平瓦にみられる離れ砂状の砂が認められる。

8・9の底部外面及び10

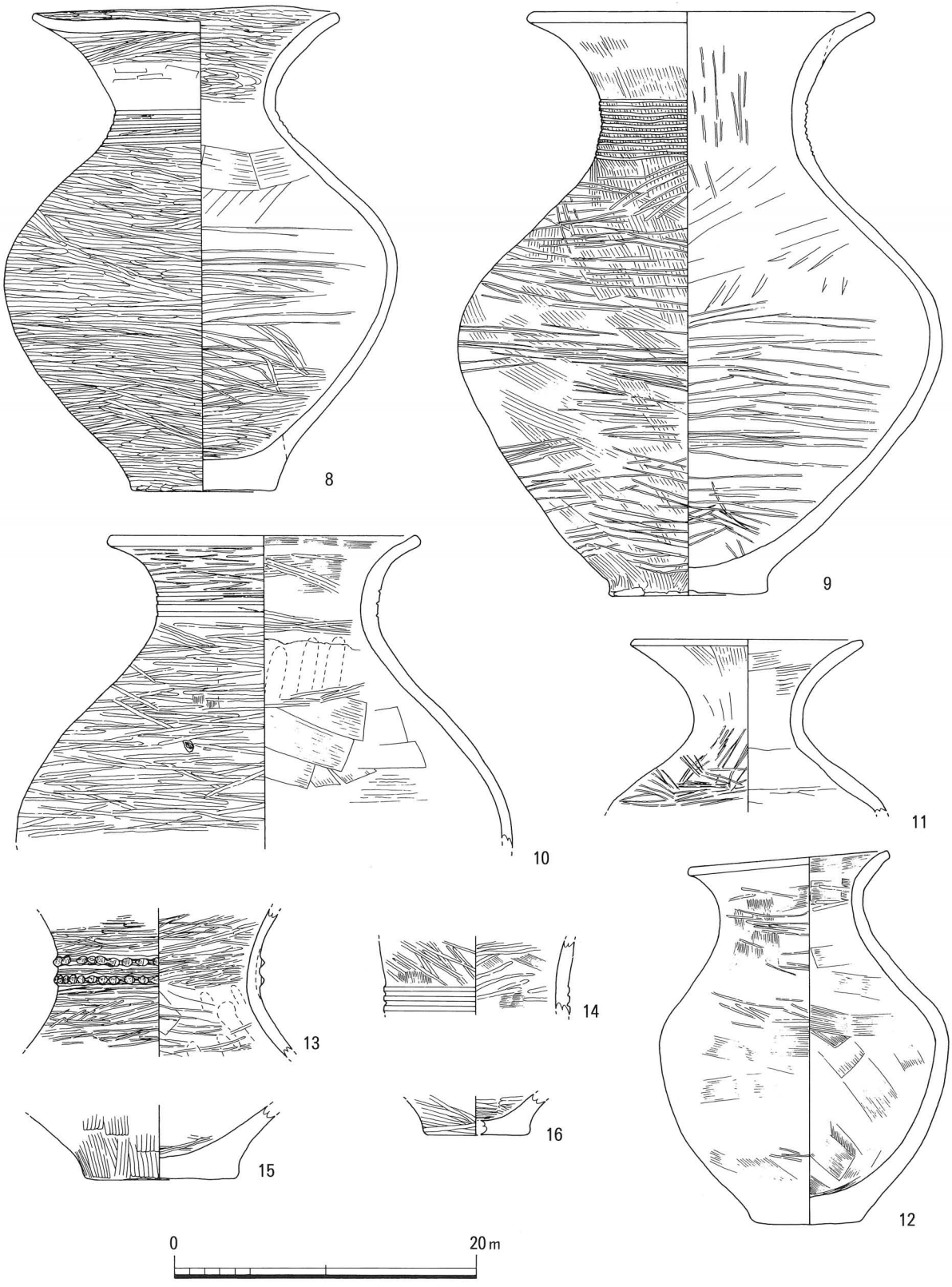


第4図　1区ＳＫ1出土遺物①（Ｓ＝1／4）

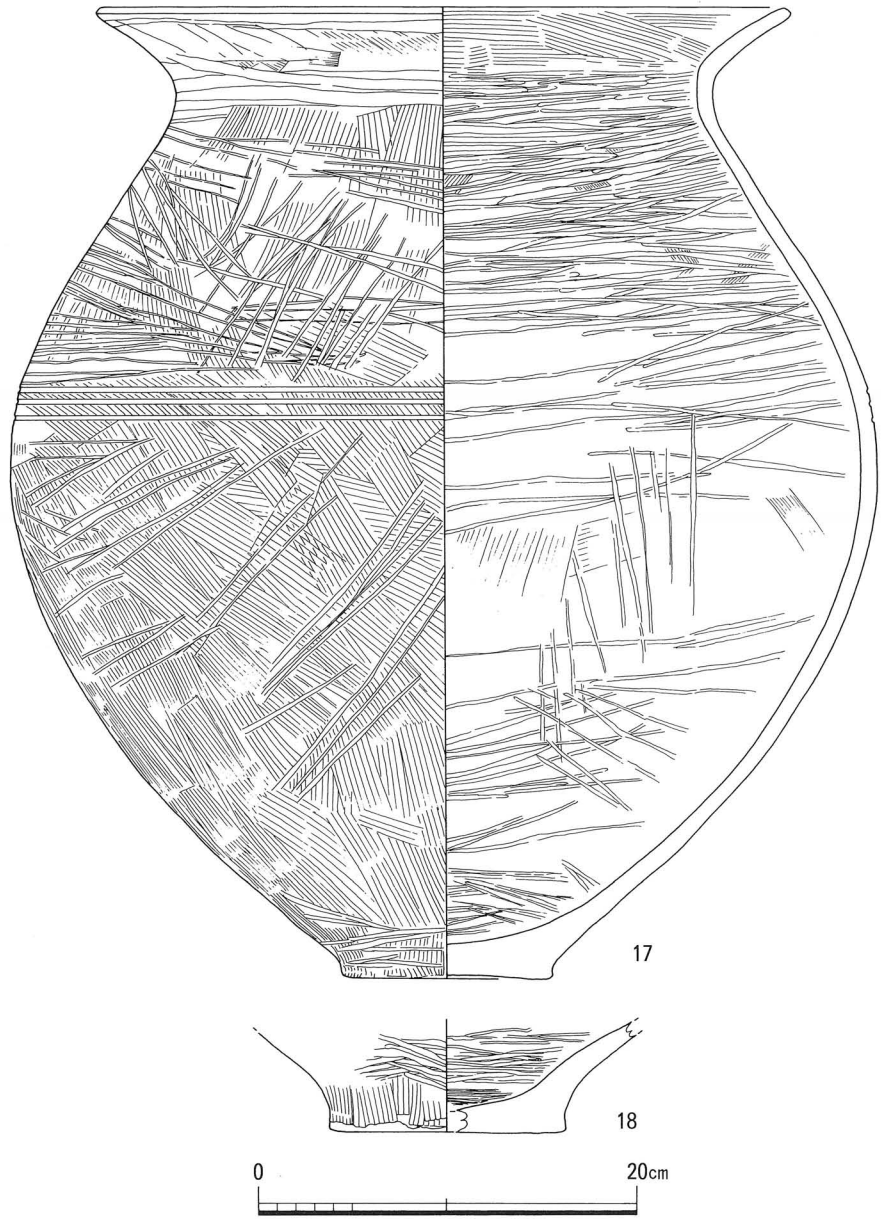
の肩部外面には籾痕が遺存している。9には6粒が認められ、そのうち5粒は連続しており稲穂の状態であったと思われる。6の底部には内外面ともに焦げが認められる。1・12の外面胴部以下は、表面の剥離が著しい。



第5図　1区ＳＫ1出土遺物②（Ｓ＝1/4）



第６図　１区ＳＫ１出土遺物③（Ｓ＝１／４）



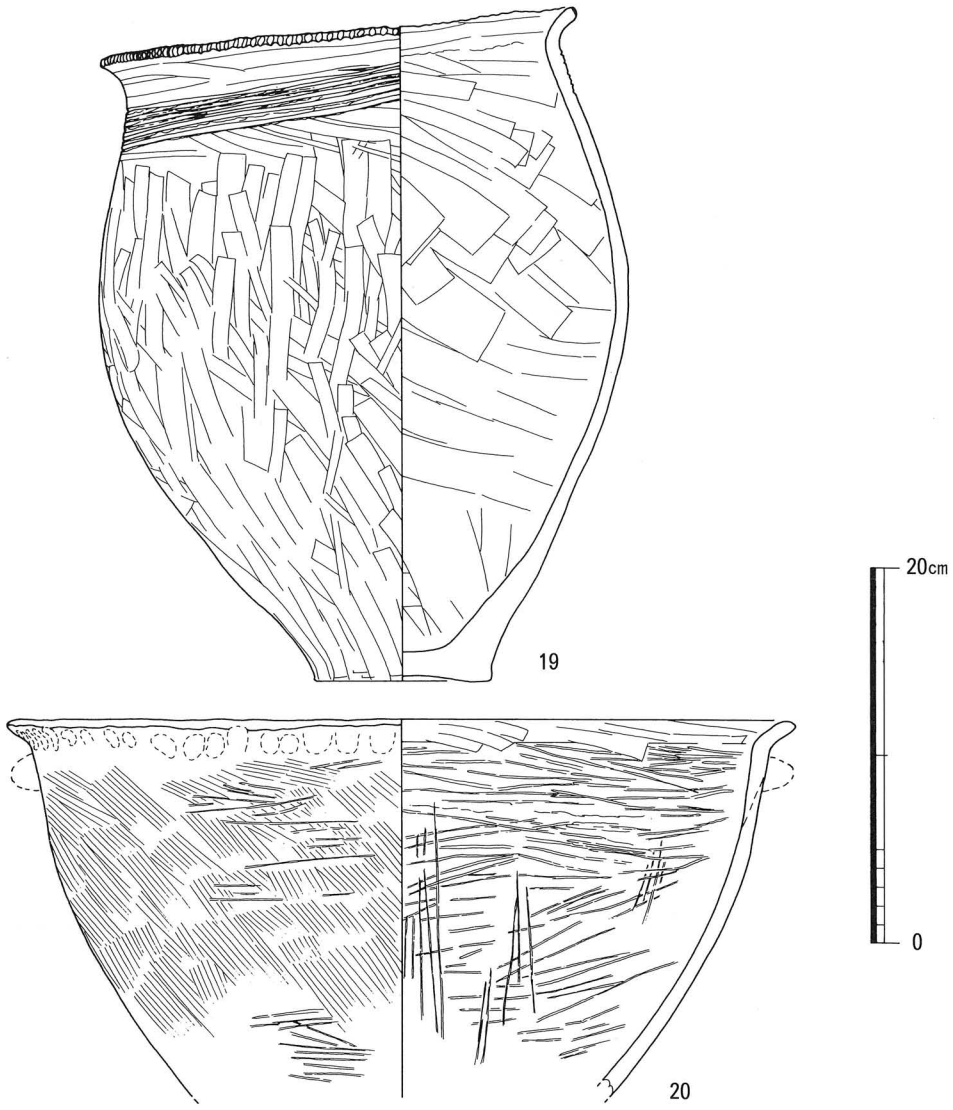
第７図　１区ＳＫ１出土遺物④（Ｓ＝１/４）

【太頸広口壷】（17・18）

17は肩部に３条の沈線文を施す。調整はハケ後ヘラミガキである。ヘラミガキは内面の頸部～体部上位が密に施されるが他は粗であり、また口縁部には施されず、口縁部～頸部外面はハケ後ナデである。大型ではあるが器壁の厚さは広口壷とあまり変わらないといえる。色調は灰色系を呈し、胎土は生駒西麓以外であろう。

底部の外面が焦げ、内面には炭化物が付着しており、また外面に籾痕１個が認められる。１と同様、二次焼成を受けたと思われる破片がある。外面に淡赤色を呈する部分がみられ、赤色顔料が塗布されている可能性がある。

18は底径の大きさから太頸広口壷としたが明確ではない。調整は17に類似しているが、ヘラミ



第８図　１区ＳＫ１出土遺物⑤（Ｓ＝１／４）

ガキが底部外面最下位に及んでおらず、また17よりも密に施されている。胎土は生駒西麓産と考えられる。

【甕】（19）

体部最大径が口径をしのぐ形態のものである。口縁端部に刻み目、口縁部直下外面に５条の沈線文を施す。調整は内外面ともに板ナデで、底体部外面は縦方向、内面は底部縦方向、体部斜方向、そして口縁部は内外面横方向に施される。底部はやや上げ底状を呈する。歪みが大きく傾いている。容量は広口壷の**大**に近似している。胎土は生駒西麓以外と思われ、17に類似する。

【鉢】（20）

口縁部直下外面に瘤状突起の剥離痕が認められる。調整は体部内面横方向ヘラミガキの後、縦方向に粗なヘラミガキ、外面左上りハケの後、粗に横方向ヘラミガキを施す。口縁部は外面にユビオサエによる凹凸を明瞭に残し、内面は横方向の板ナデである。胎土は甕（19）に類似する。

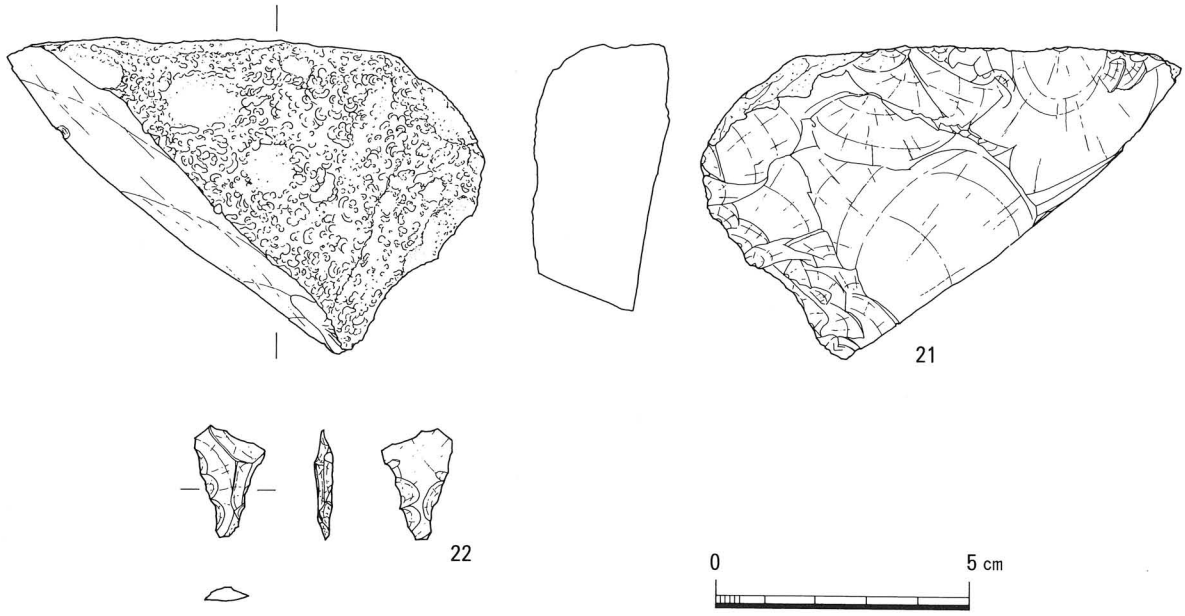
これらの出土土器の編年的位置付けについてであるが、寺沢・森井氏による河内地域の土器編年による『Ⅰ－3様式』・『Ⅰ－4様式』のものが含まれ、その過渡期にあたるものと捉えられる。[註6] その理由としては、『Ⅰ－4様式』に存在するとされるいわゆるb形態の壷が認められず、a形態のみであることが挙げられる。今回**形態C**とした9は、丈高で沈線文も多条であり、また調整も粗雑で新しい要素を備えているといえ、b形態につながってゆく壷かもしれない。

表1　ＳＫ1出土土器一覧表

遺物番号	器種形態	法量（）は推定値 口径(cm)	器高(cm)	体部径(cm)	底径(cm)	容量(ℓ) ※1		指数1	指数2	文様（条数）※2 頸部	肩部	胎土	備考	残存
1	広口壷 A	27.5	33.2	36.0	9.1	13.620 12.247	大	92.2	34.6	貼（3）	貼（3）		焼けた破片 歪みあり	ほぼ完形
2	広口壷 A		(36.2)	36.3	8.9	(14.672) 13.348	大	(99.9)	(37.3)	貼（3） 布目圧痕	沈（7）	生　駒	黒斑	3／4
3	広口壷 A	22.1		36.3		(約14.0) (約13.0) 残存部 8.781	大			沈（13）	沈（9）			1／2
4	広口壷 A	28.8					特大			沈（4）	不明	生　駒		1／4
5	広口壷 A			43.2		(25以上) 残存部24.285	特大			沈（5）	沈（6）	生　駒	焼けた破片	体部3／4
6	広口壷 B	20.4	(33.0)	31.2	9.3	(9.515) (8.809)	中	(105.8)	(39.4)	沈（3以上）	沈（4）		底部内外面焦げつく	1／2
7	広口壷 B			26.9		残存部 4.373	中			沈（4）	沈（4）			1／5
8	広口壷 C	20.3	31.7	25.9	9.5	7.344 6.597	中	124.3	44.2	沈（5）	無し		底部外面に籾痕1個 黒斑	ほぼ完形
9	広口壷 C	22.8	38.8	32.0	10.4	12.858 11.827	大	121.4	42.5	沈（10）	無し	生　駒	底部外面に籾痕6個 〃　離れ砂状	9/10
10	広口壷 C	20.4		32.8		残存部 7.424	大			沈（3）	無し			2／3
11	広口壷 C	15.3					小			無し	無し	生駒？		1／3
12	広口壷 C	13.4	24.3	19.1	7.4	2.960 2.792	小	127.2	49.4	無し	無し		黒斑 歪みあり	4／5
13	広口壷									貼（2）		生駒？		1／4
14	広口壷									削（3以上）				極小
15	広口壷				10.3							生駒？	黒斑	底部のみ
16	広口壷				7.2							生　駒		1／4
17	太頸広口壷	36.7	51.4	47.8	11.2	47.467 44.980		112.3	51.6	無し	沈（3）		外面赤色顔料？ 底部外面に籾痕1個 底部外面焦げ、内面に炭化物	1／2
18	太頸広口壷				12.5							生　駒		1／2
19	甕	25.5	35.8	28.2	9.4	13.127 12.552				沈（5）			口縁部刻み目 歪み大きい	ほぼ完形
20	鉢	42.0		39.2		(約17.1) (約15.6) 残存部16.103							瘤状突起の剥離痕	1／3

※1　上段は全容量、下段は口縁部を除いた頸部以下の容量。容量の計算には実測図を用い、土器内部を高さ1㎝の円柱の集合体と仮定する方法をとった。断面の内側を高さ1㎝毎に分割し、中間の0.5㎝部での半径を円の半径としている。

※2　貼：貼付突帯文　　沈：沈線文　　削：削出突帯文



第９図　１区ＳＫ１出土遺物⑥（Ｓ＝２／３）

【石器】（21・22）

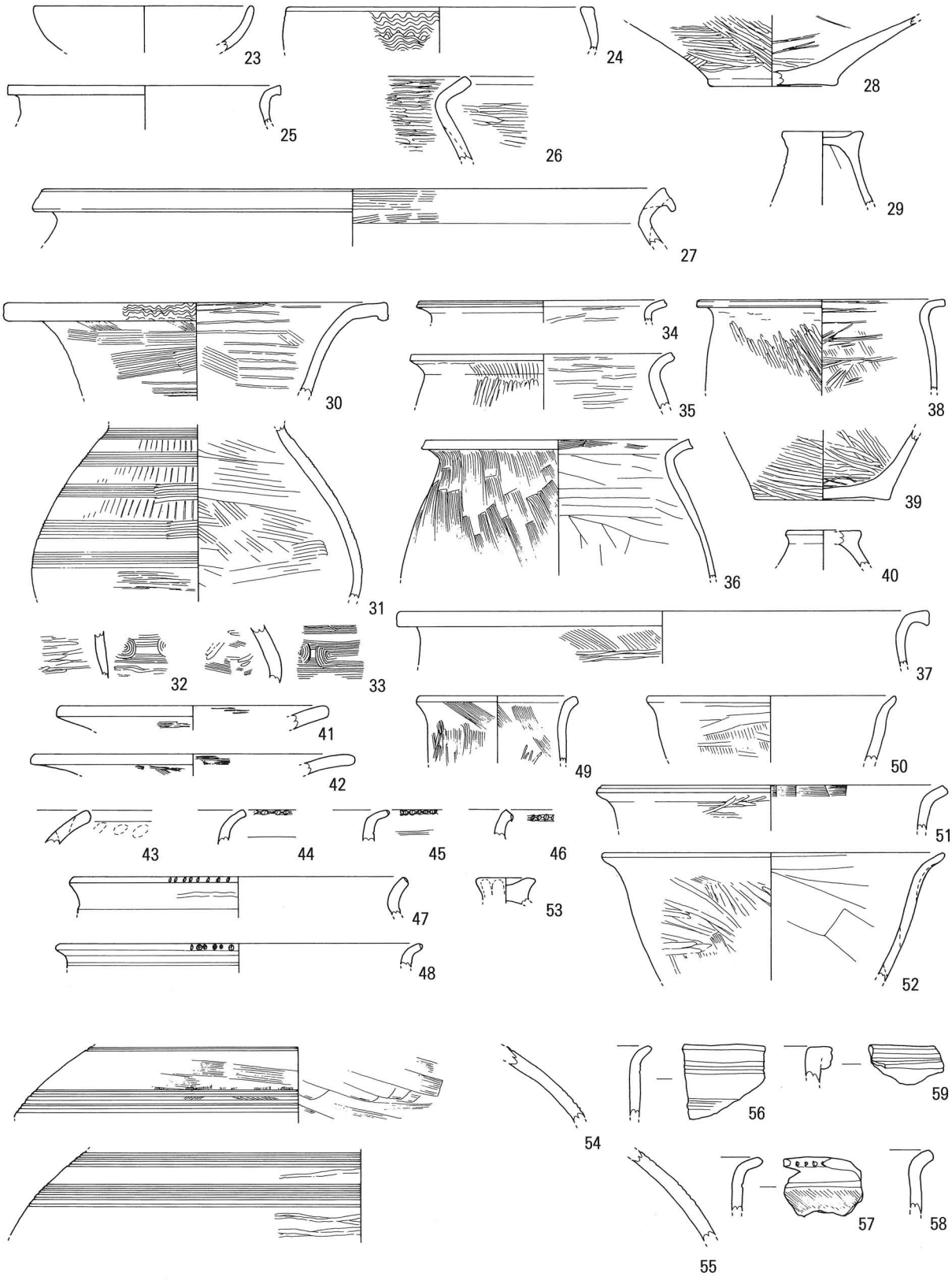
21は石核である。原石の角部分にあたるもので自然面を大きく残す。右面には多方向からの加撃による複数の剥離が認められる。22は石錐の断片の可能性があるが明確ではない。両側辺から調整剥離が施されているが、両面には主要剥離面が残る。先端は欠損している。共にサヌカイト製である。

ｃ．包含層出土遺物（23～68）

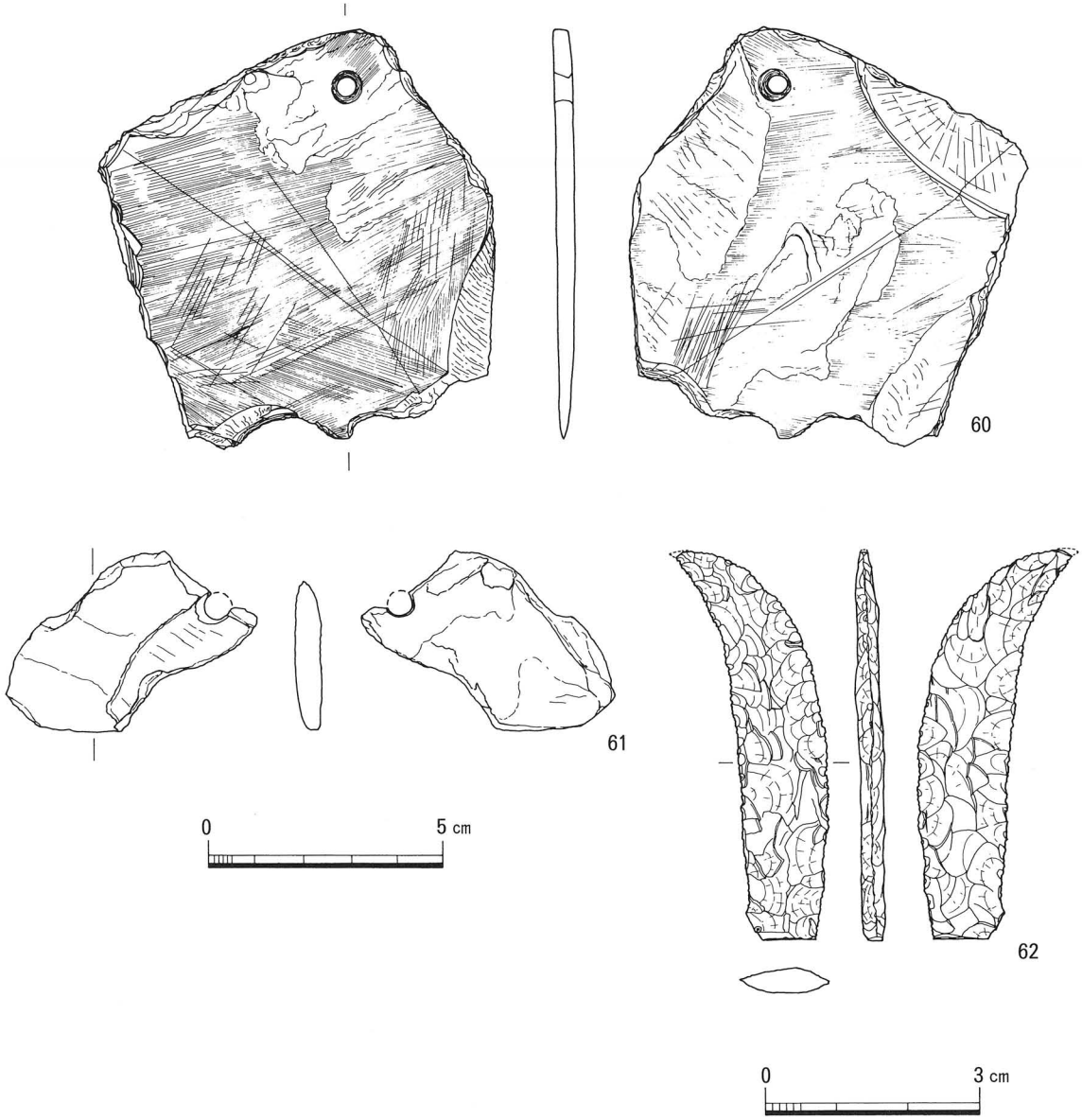
・第８層（23～29、60・61）

弥生時代前期～中期の土器・石器が出土している。23は高杯と考えられるが明確ではない。外面に黒斑がある。24は鉢あるいは高杯で、外面に波状文を施す。甕（25～27）は、内外面ヘラミガキを施す河内形甕（26）が生駒西麓の胎土である。25の頸部外面には指頭圧痕が明瞭に残っている。27は形態的に『河内Ⅲ－２様式』に比定される。壷（28）は生駒西麓の胎土で、底部外面は分割ヘラミガキである。蓋（29）は外面の全面が煤けている。

大型石庖丁（60）は中央部分のみの破片のため全体の形状は不明である。刃部は断面図部分がわずかに遺存しているようであるが不明確で、また背部は長さ約1.2㎝にわたって遺存しているのみである。紐孔は１個が残存しており、穿孔は両面からで、直径は4.5㎜を測る。体部両面には主に横方向の細かい研磨痕が観察できる。破損した縁辺には素材の特徴である片理面が階段状に生じており、また表・裏面には線状を成す節理が認められる。石材は泥質片岩で、産地は和歌山県の紀ノ川流域に求められる。残存長8.3㎝・最大幅8.7㎝・最大厚約0.4㎝を測る。石庖丁（61）は、全体の1/3程度の破片であろう。形態は直線刃半月形に分類できる。紐孔は１個が確認でき、穿孔は両面からで、直径は約5.0㎜を測る。刃部は摩滅のため断面は丸くなっている。表面に研磨痕はみられない。石材は玄武岩質凝灰岩質片岩で、60と同様に産地は紀ノ川流域に求められる。残存長5.3㎝・残存幅3.8㎝・厚さ約0.6㎝を測る。



第10図　１区包含層出土遺物①（Ｓ＝１／４）

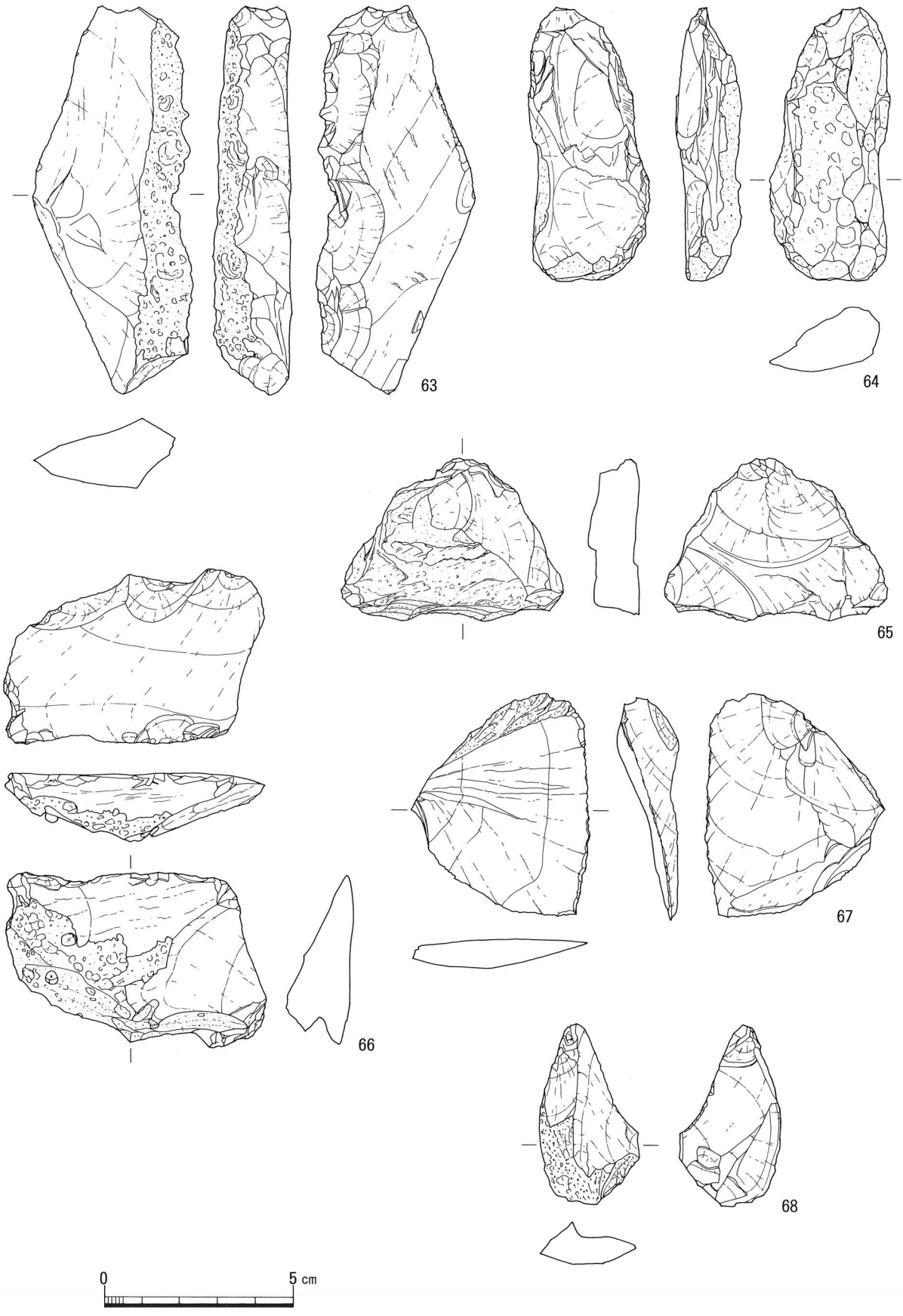


第11図　１区包含層出土遺物②（60・61：Ｓ＝２/３、62：Ｓ＝１/１）

・第９層（30～53、62～66）

弥生時代前期～中期の土器・石器が出土している。土器では30～40が中期、41～53が前期におおむね比定されよう。壷（30）は口縁部外端面に櫛描波状文、頸部外面に櫛描直線文を施す。内面はハケ後ヘラミガキである。壷（31）の外面は縦方向ヘラミガキ後櫛描直線文を巡らせる。壷（32・33）・甕（34・35・37～39）は生駒西麓の胎土と思われる。甕（36）は外面ハケ調整で、色調は淡灰褐色、焼成は良好堅緻であり搬入品かもしれない。39は底部下面にもヘラミガキを施している。蓋（40）は外面が煤けている。

41～43は広口壷、44～48は甕の口縁部である。甕はいずれも口縁端部に刻み目を施し、46を除いて口縁部下位に沈線を巡らせる。46の口縁部は端部が尖り、外下方に肥厚させた部分に刻み目を施すもので、他とは趣が異なる。49は小型の甕であろう。50～52は鉢である。51は口縁部内面



第12図　1区包含層出土遺物③（S＝2／3）

にヨコハケを施す。

62はサヌカイト製の石小刀で、非常に類例の少ないものである。法量は長さ5.45cm・幅1.30cm・厚さ0.35cm・重さ3.33ｇを測る。断面形状はレンズ状を呈し、幅厚比（幅÷厚さ）は3.7で、極めて薄形に分類される。[註7] 両面とも両側辺から丁寧な調整剥離が施され、左面には中心に稜が生じている。刃部は非常に微細な鋸歯状（凸部数８～10個／１cm）を呈している。先端部がわずかに欠損し、基部は凹面を呈する自然面のままである。丁寧な作りからみて弥生時代前期のものであろう。形態的には久宝寺遺跡出土のものに類似している。[註8] 63～66はサヌカイトの剥片で、いずれも一部に自然面や主要剥離面を残すものの二次加工が認められる。このうち64・66は一辺に刃を形成しており、刃器として使用していた可能性がある。64は使用により刃が潰れているようである。

・第10層上面（54～59、67・68）

弥生時代前期の広口壷（54・55）・太頸広口壷（56）・甕（57・58）がある。中期の鉢（59）は口縁端部を外側に折り曲げ、外端面に凹線を巡らせるものである。混入の可能性がある。

67・68はサヌカイトの剥片で、第９層出土のものと同様、自然面や主要剥離面を残すものの、二次加工が認められる。特に薄い剥片の67には微小な調整剥離が施され、刃器としての使用が窺える。

〈２区〉

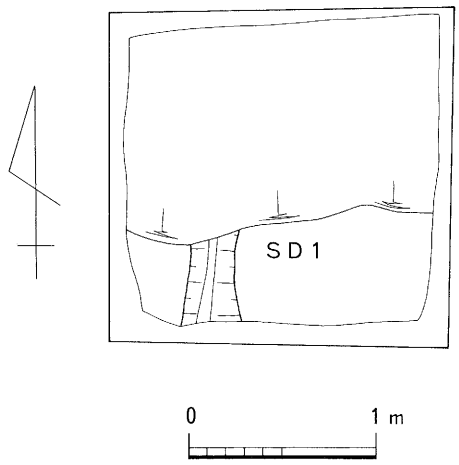
ａ．基本層序と出土遺物

第１層は盛土、第２層は旧耕土である。第４層からは須恵器片、第５層からは時期不明の土師器片・サヌカイト剥片が出土している。第５層上面で溝１条（ＳＤ１）を検出した。標高約8.0ｍの第８層以下は水成層の様相を呈している。第11層の植物遺体を多く含むシルト層上層から上面にかけては、弥生時代前期～古墳時代前期布留式期の土器・石器が混在して多く含まれている。土器はやや摩滅したものが多い。

ｂ．検出遺構と出土遺物

ＳＤ１

調査区南半、第５層上面で検出した南北方向の溝である。検出長約0.5ｍ・幅約25cmで、南壁では幅約60cmを測る。断面皿状を呈し、深さ約20cmを測り、埋土は褐灰色微砂混じりシルト質粘土である。弥生土器・須恵器片が出土しているが図化しえるものはなかった。層位的にみて古墳時代以降の溝であろう。



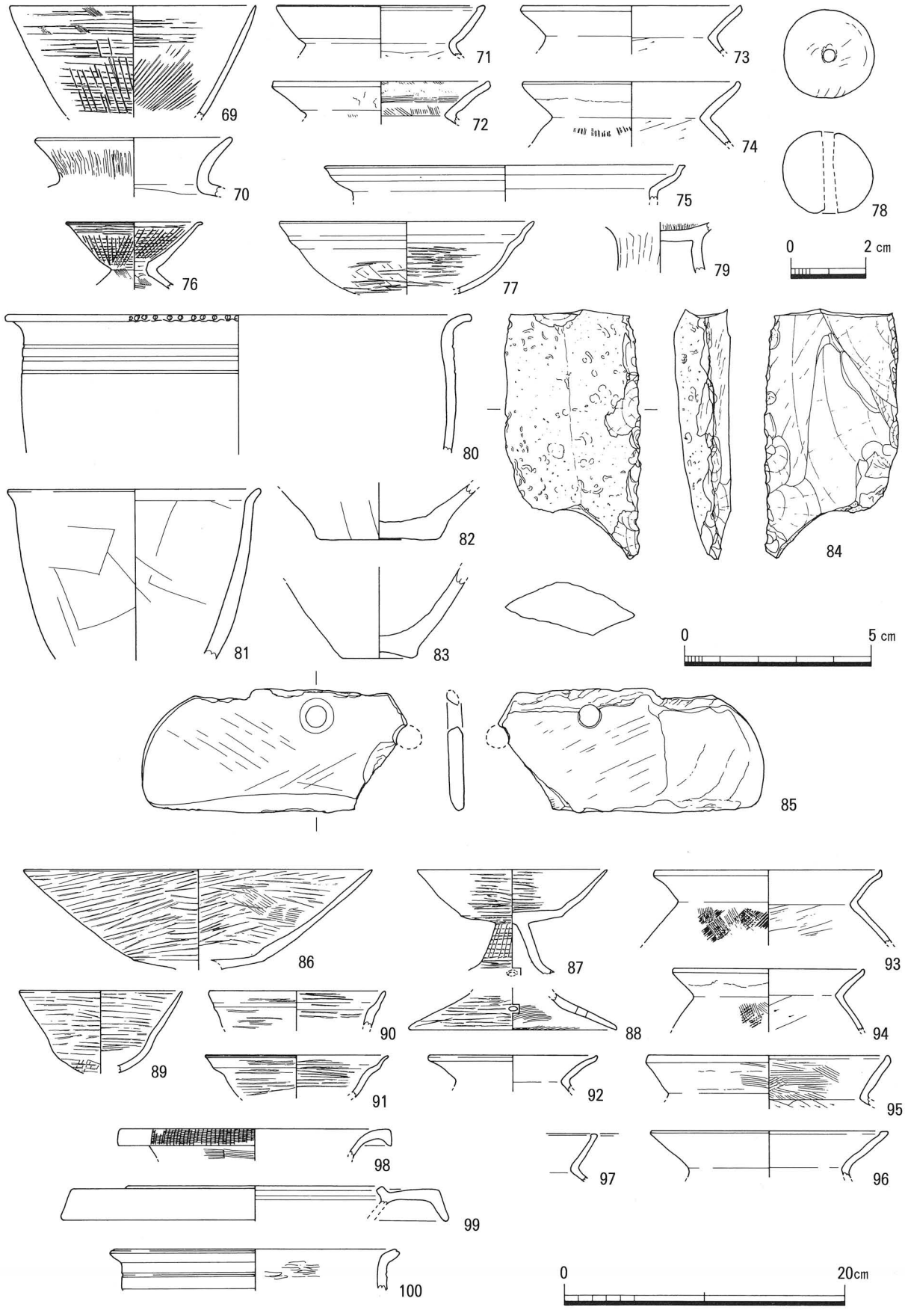
第13図　２区　平面図（Ｓ＝１/40）

ｃ．包含層出土遺物

・第11層上層～上面（69～85）

古墳時代前期の壷（69・70）・甕（71～75）・鼓型器台（76）・鉢（77）・土玉（78）、弥生時代中期の高杯（79）、前期の甕（80）・鉢（81）・底部（82・83）・石器（84・85）を図化した。古墳時代前期の土器は庄内式期新相～布留式期古相に比定される。

甕（75）は焼成良好で非常に硬質である。鼓型器台（76）は山陰地方からの搬入品であろう。



第14図　2・3区出土遺物（78・84・85：S＝2/3、他はS＝1/4）

特異な遺物として土玉（78）がある。直径約2.4cmの球形を呈し、貫通する穴を有する。土製装身具に分類されているもので、河内地域では亀井遺跡・山賀遺跡等に類例がある。高杯（79）と共に生駒西麓産の胎土である。底部（82・83）は１区～２区間の下水管付設工事の際に出土したもので、詳しい出土地点・層位等は不明である。82は壷、83は不明である。[註9]

84は左面に自然面を大きく残すサヌカイト剥片で、断面形状は菱形を呈する。長側辺に調整剥離が施され刃を形成しており、刃器として使用していたと考えられる。上部は欠損し、基部は自然面のままである。形状からみて石槍等の製作を意図していたものかもしれない。石庖丁（85）は全体の1/2程度の破片であろう。背部が欠損しているが、側部の形状からみて形態は直線刃半月形と思われる。紐孔は２個が確認でき、直径は約5.5mmを測る。穿孔は片面が剥離しているため明確ではないが、両面からと思われる。刃部は端部が欠損しているが片刃の可能性がある。表面には明瞭な研磨痕は認められない。石材は61と同様玄武岩質凝灰岩質片岩で、産地も紀ノ川流域に求められる。残存長7.1cm・残存幅3.3cm・厚さ約0.5cmを測る。

〈３区〉

ａ．基本層序と出土遺物

第１層は盛土で、旧耕土はみられなかった。第４層からは古墳時代以降の須恵器・土師器片、第５層からは時期不明の須恵器・土師器片が出土している。標高約7.9ｍ以下の第６～９層は微砂～粘土の互層状で、水成層の様相を呈している。第10層には弥生時代～古墳時代前期布留式期の土器が多く含まれており、土器はあまり摩滅していない。当地の北西約100ｍでは標高約7.1ｍで弥生時代後期・庄内式期・布留式期の遺構が検出されているが、第10層が布留式期の包含層として捉えられるかどうかは明確にはしえなかった。

ｂ．包含層出土遺物

・第10層（86～100）

古墳時代前期の高杯（86～88）・小型丸底壷（89）・鉢（90・91）・甕（92～97）、弥生時代中期の壷（98）・高杯（99）、前期の甕（100）を図化した。古墳時代前期の土器は庄内式期新相～布留式期古相に比定される。

高杯（86）は杯部のみ約2/3が残存しており、口縁部外面には黒斑を有する。壷（98）は口縁端部に簾状文、頸部に櫛描直線文を施すもので、生駒西麓の胎土である。

〈４区〉

ａ．基本層序と出土遺物

第１層は盛土、第２層は旧耕土である。第５層からは時期不明の須恵器・土師器片が出土している。第６・７層は固く締まっており整地層の可能性があるが、上面で遺構はみられなかった。標高約8.1ｍ以下の層厚約0.6ｍを測る第９層は微砂～シルトの互層状を呈する水成層である。時期不明の土師器片が出土している。この下位に続く第10～12層にも植物遺体が含まれ、水成層の下部とも捉えられる。弥生時代後期の土器、サヌカイト剥片が出土している。図化しえる遺物はなかった。

〈５区〉

前述のように、掘削土中からの遺物採集を実施した。標高7.5ｍ付近の暗灰色粘土層から、弥生時代前期～中期頃の土器片数点を検出したが、明確な層位等は不明で、図化しえる遺物はなかった。

3．まとめ

今回の調査では弥生時代前期から中世頃の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ５箱を数える。

弥生時代前期では、１区で土坑１基（ＳＫ１）を検出した。火災後の廃棄坑の可能性があり、多量の土器片が隙間なく密に出土しており、完形近くに復元しえる土器も多く含まれている。遺構が調査区外に続き完掘しえなかったことは惜しまれるが、土器は前期の新段階に比定されるもので、当該期の土器研究における良好な一括資料として評価されよう。

遺構面上部の弥生時代前期～中期の遺物包含層は非常に厚く、当地は集落の中心と捉えることができよう。南西約150ｍの第12次調査においても同様の状況が確認されており、同じ集落域に含まれるのかどうか、また南部第13次調査で検出されている中期末の環濠との関係についても周辺の調査成果を待ちたい。

古墳時代前期では遺構は検出されなかった。しかし北西部の３区では、南部第13次調査で検出している河川から続くと思われる河川堆積層の下層から、遺存状況の良好な土器が出土しており、北西部第23次調査で確認されている当該期の集落域が拡がっているものと捉えられる。

註

註１　坪田真一　1994「２．跡部遺跡第12次調査」『平成５年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

註２　坪田真一　1994「３．跡部遺跡第13次調査」『平成５年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

註３　西村公助　1997「Ⅰ　跡部遺跡（第10次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会

註４　原田昌則　1997「２．跡部遺跡第23次調査」『平成８年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

註５　安井良三・成海佳子　1991『跡部遺跡発掘調査報告書』㈶八尾市文化財調査研究会

註６　寺沢　薫・森井貞雄　1989「２－１河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

註７　森本　晋　1985「５．石小刀」『弥生文化の研究５　道具と技術Ⅰ』雄山閣出版

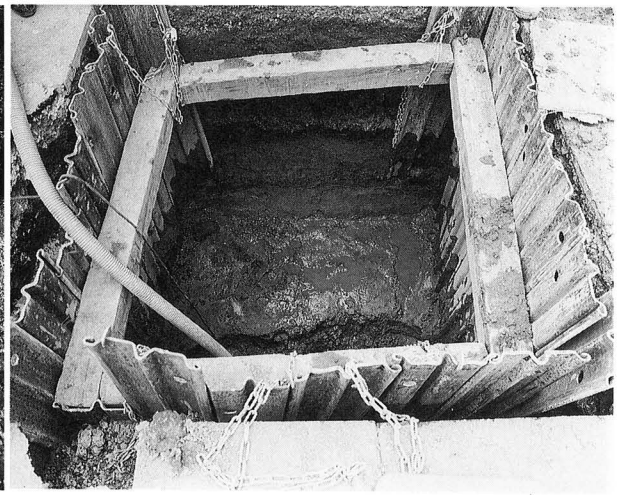
註８　佐伯公子・他　1993「第Ⅳ章　第３節　石器」『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

註９　角南聡一郎・吉田和彦　1996「弥生～古墳時代の土製装身具・覚書」『みずほ　第19号』大和弥生文化の会

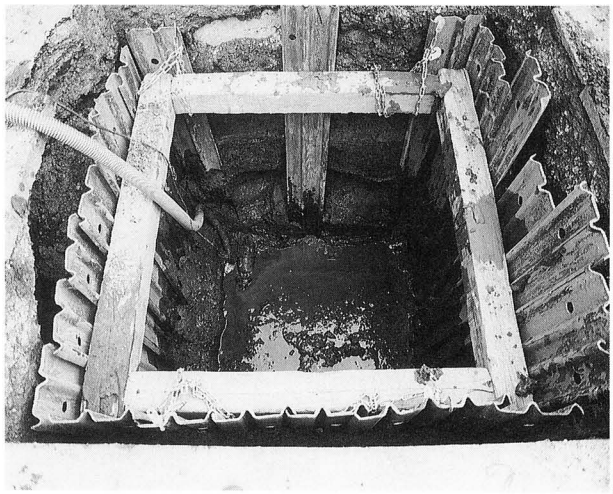
1区　第10層上面（北から）

2区　第5層上面（北から）

2区　第11層上面土器出土状況（東から）



3区　第6層上面（南から）



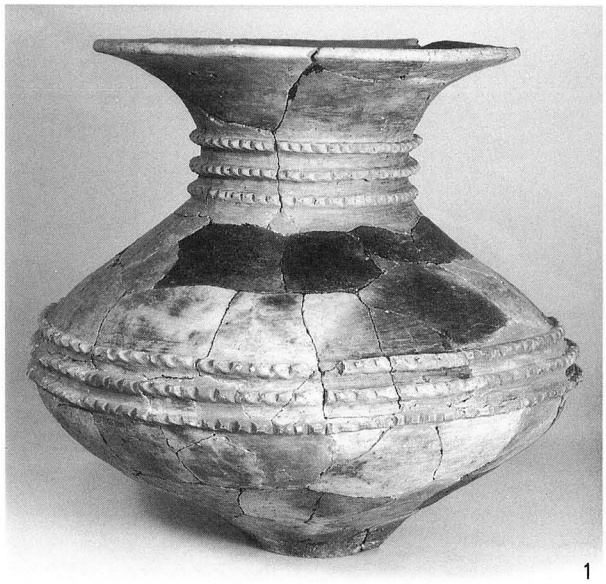
4区　最終面（北から）

5区　掘削風景（北から）

図版二

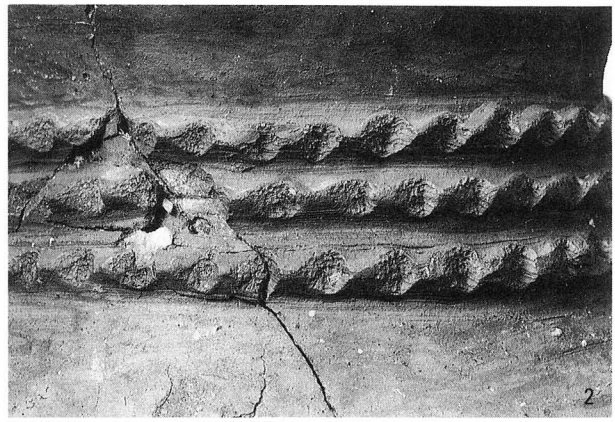
1区　ＳＫ１（西から）

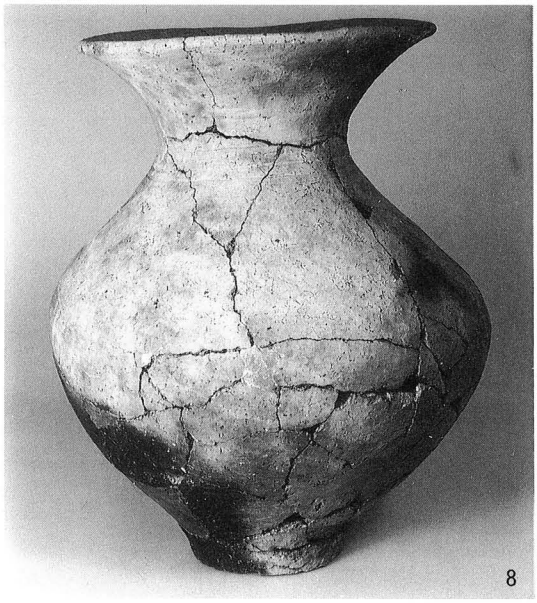
1区　ＳＫ１（北から）


1

3

2

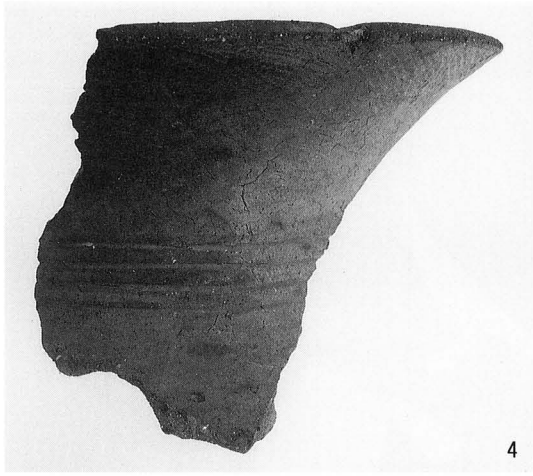

2


8

9

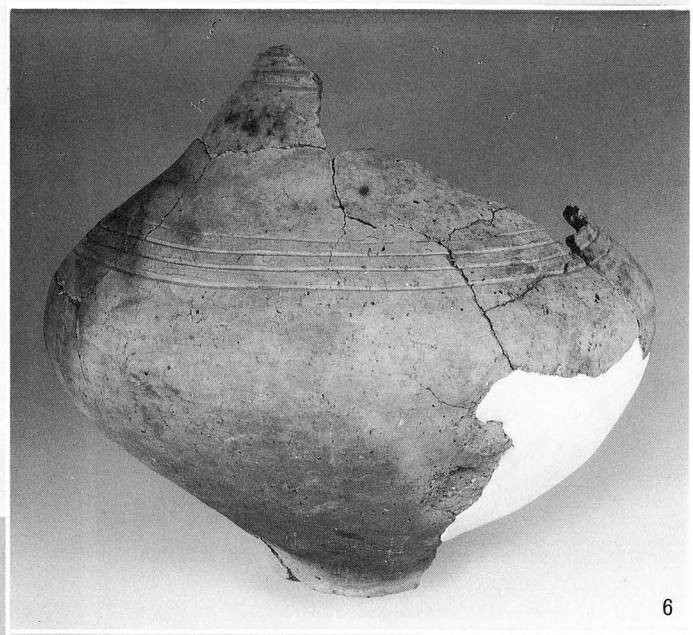
1区　SK1

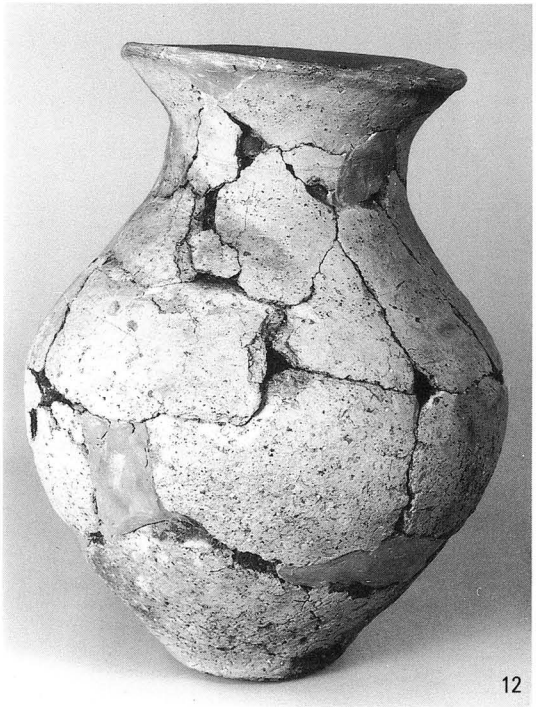
図版四


4

5

7

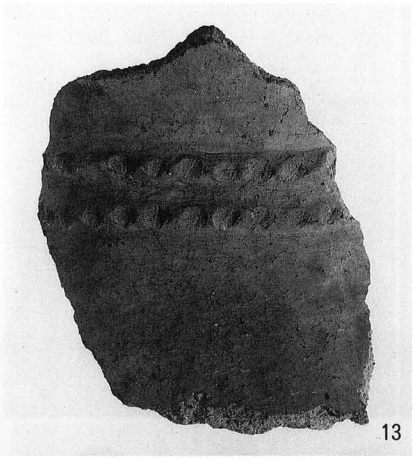

6

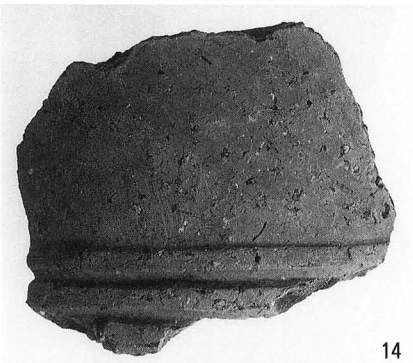

12

10

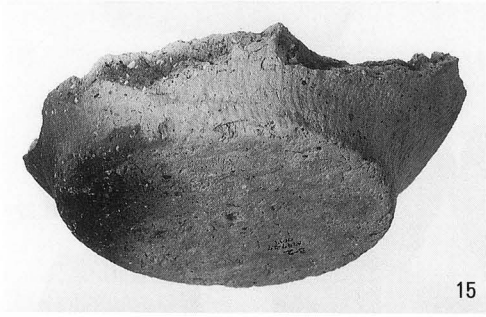
1区　SK1

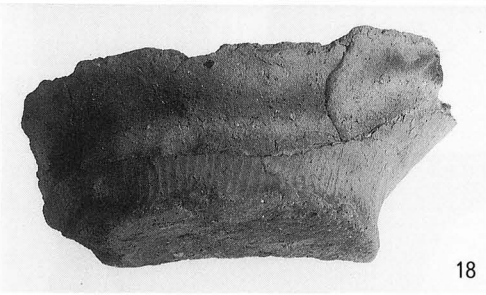
図版五

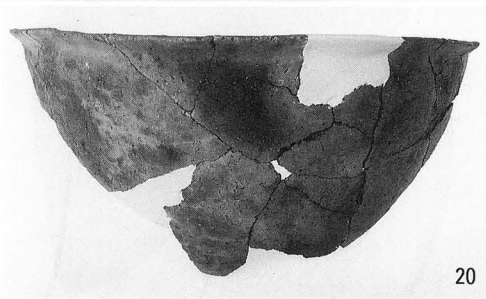

13


14

17


15

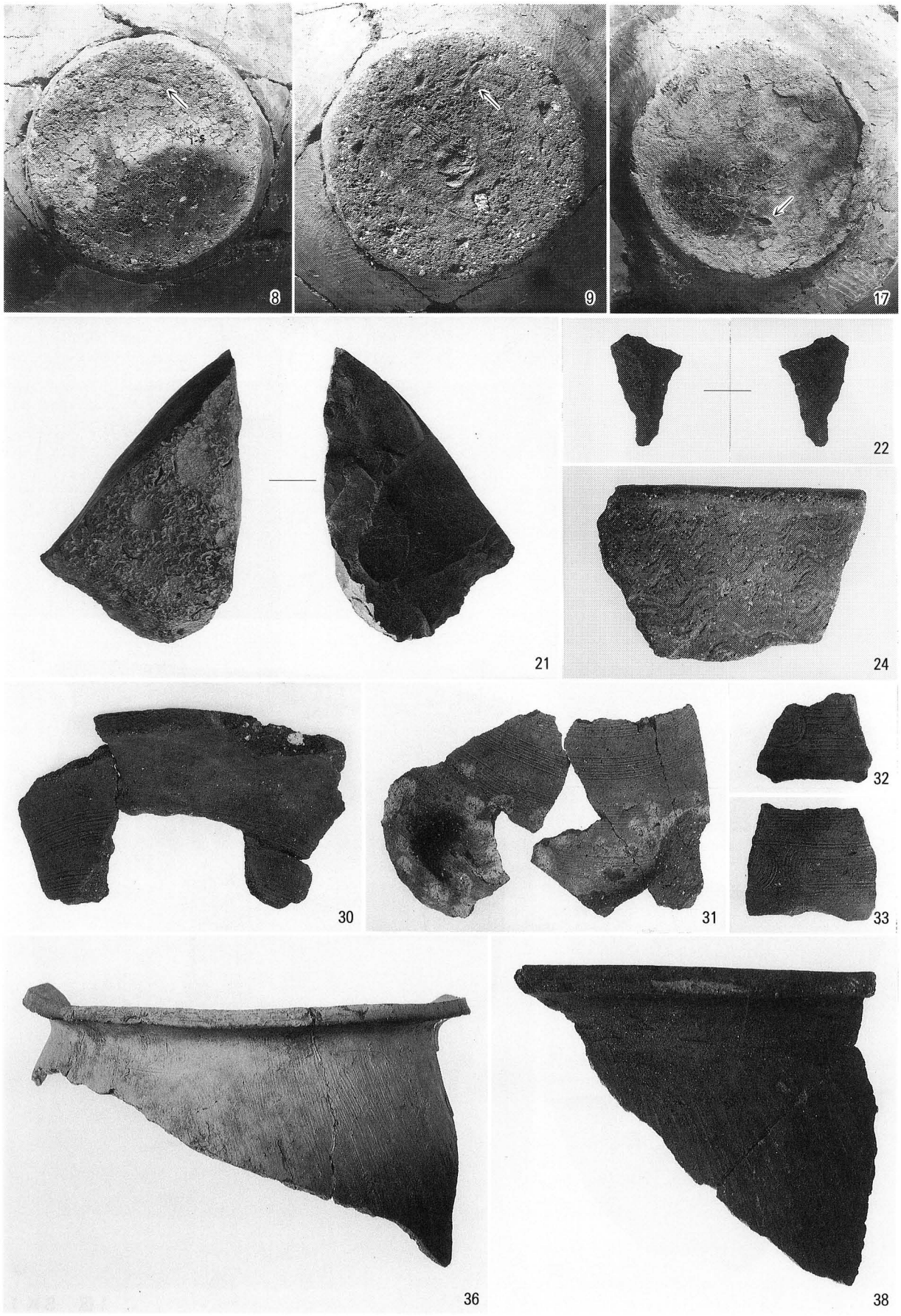

18


20

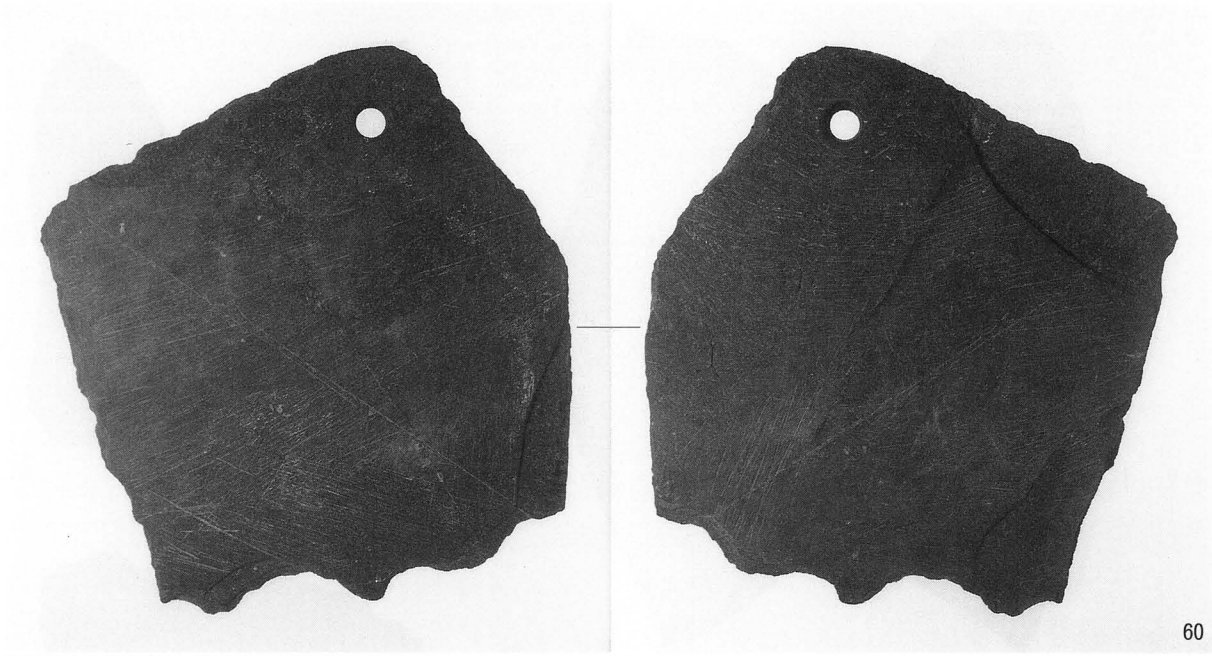
19

1区　SK1

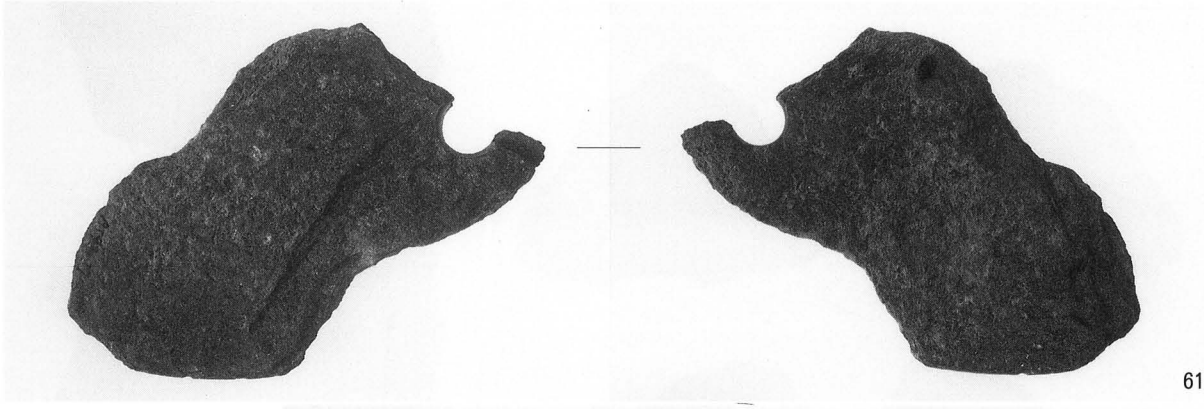
図版六



1区　ＳＫ１（8・9・17・21・22)、第8層（24)、第9層（30～33・36・38)



60

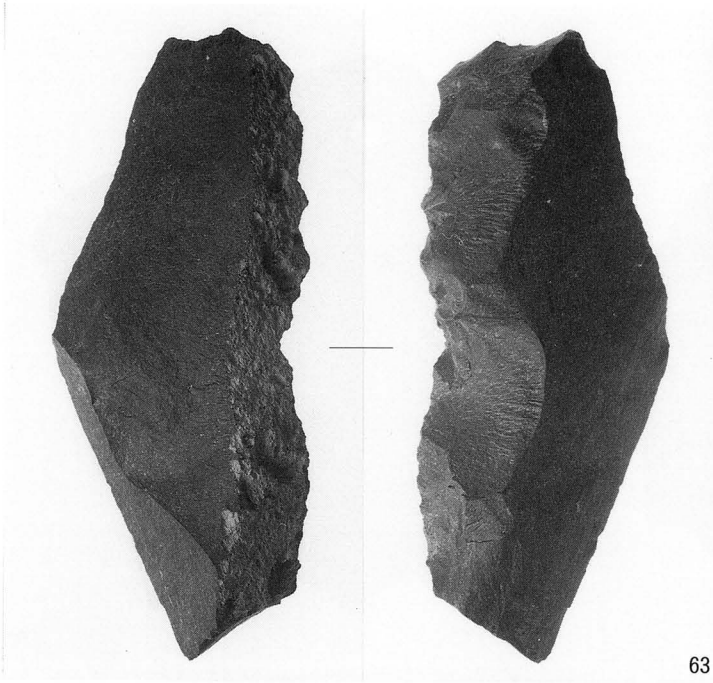


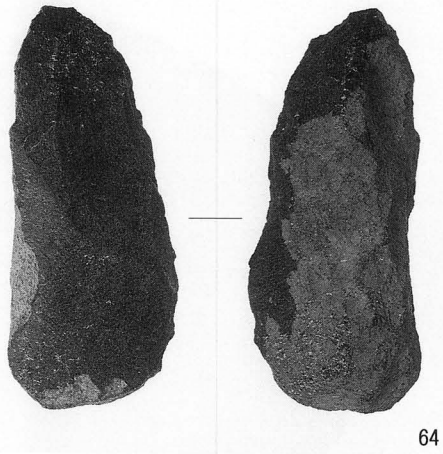
61

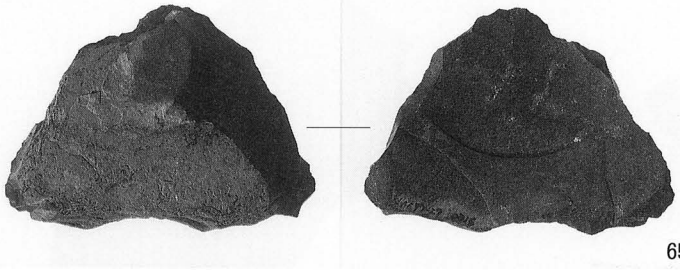
62

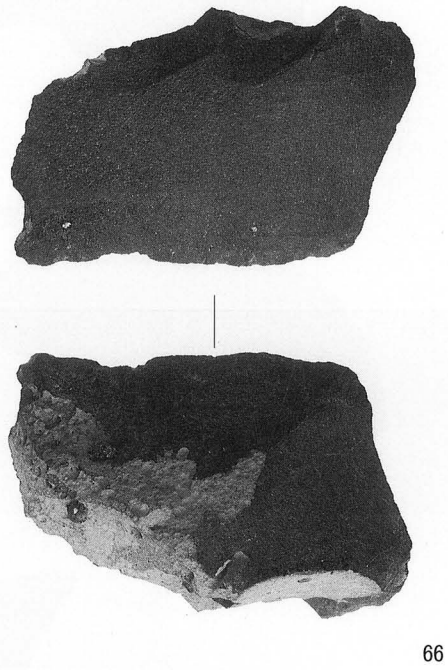
1区　第8層（60・61）、第9層（62）

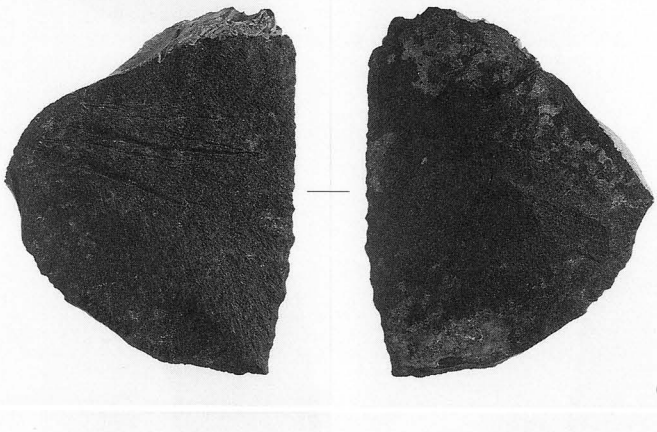
図版八

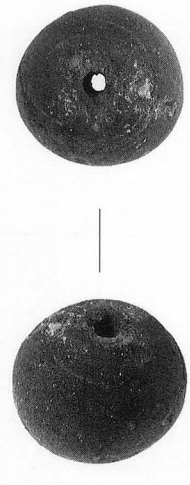

63

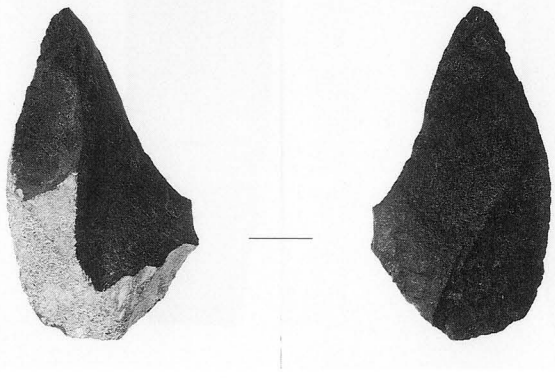

64


65


66


67

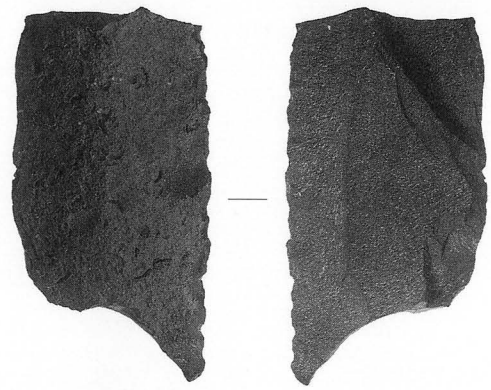

78


68

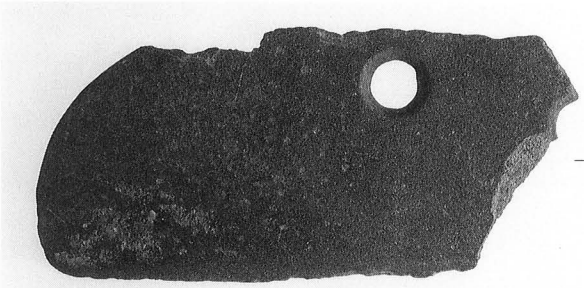
1区　第9層（63～66）、第10層（67・68）、2区　第11層（78）

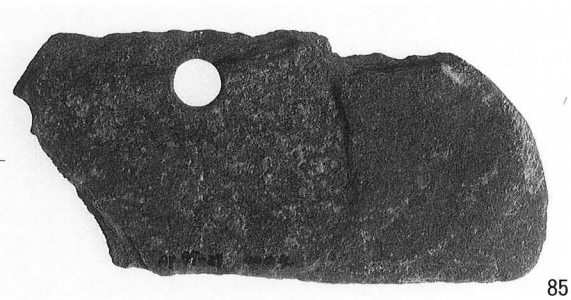
図版九

76



84

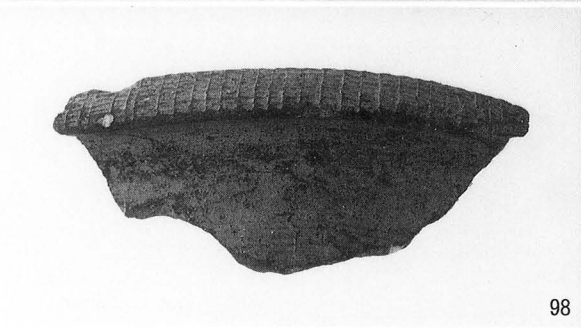




85

80

87



98

99

2区　第11層（76・80・84・85）、3区　第10層（87・98・99）

Ⅳ　亀井遺跡第６次調査（ＫＭ97－６）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市南亀井町４丁目44－１，44－４，45－１で実施した配送センター工事に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する亀井遺跡第６次調査（ＫＭ97－６）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋442－２号　平成９年10月７日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が(株)カントラから委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成９年10月22日から10月30日（実働７日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約174㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中谷嘉多・市森千恵子が参加した。
1．本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレース－高萩が行った。
1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

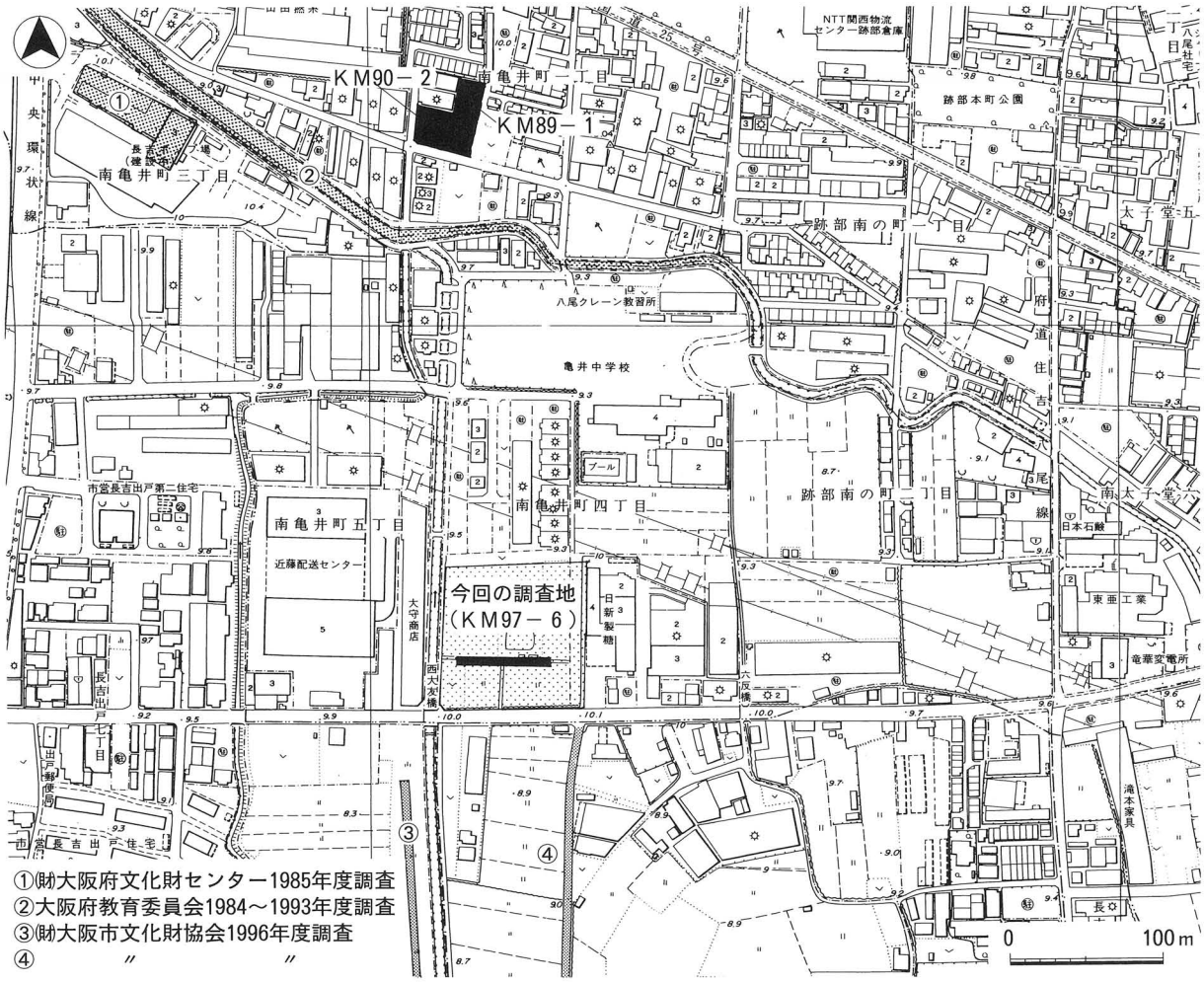
1．はじめに……51
2．調査概要……52
　1）調査の方法と経過……52
　2）基本層序……53
　3）検出遺構と出土遺物……53
3．まとめ……55

Ⅳ　亀井遺跡第６次調査（ＫＭ97－６）

１．はじめに

亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町・南亀井町一帯に所在しており、周辺には北東部に跡部遺跡・北西部に竹渕遺跡、北部に久宝寺遺跡・南部に大阪市長原遺跡などがある。今回の調査地周辺では、これまでに大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター（現在、財団法人大阪府文化財調査研究センター）・八尾市教育委員会・当調査研究会による発掘調査がそれぞれの機関で行われており、その結果、縄文時代～近世に至る遺構・遺物が検出されている。特に弥生時代中期の集落遺構が広範囲に存在することが確認されている。

今回の発掘調査は当遺跡範囲の南部付近に位置し、道路を挟んで南側は大阪市域にあたる。調査は当調査研究会が当遺跡内で実施する第６次調査である（第１図)。調査地の近隣では、当調査区より西部へ約300～500ｍの付近で(財)大阪文化財センターが昭和54～61年度にかけて近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査[註1]を断続的に行い、弥生時代～近世の遺構・遺物が多数検出されている。北部へ約200～400ｍ付近で大阪府教育委員会が昭和53年度から断続的に行われている平野川河川改修工事に伴う発掘調査[註2]で弥生時代中期の遺構・遺物を検出している。さらに道路を挟んで南部へ約100～200ｍの付近の大阪市域である長吉出戸７丁目・長吉六反１丁目で(財)



第１図　調査地周辺図及び位置図（Ｓ＝１/5000）

大阪市文化財協会が平成８年度に長吉東部地区区画整理事業に伴う発掘調査[註3]を行い、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての遺構・遺物が検出されている。

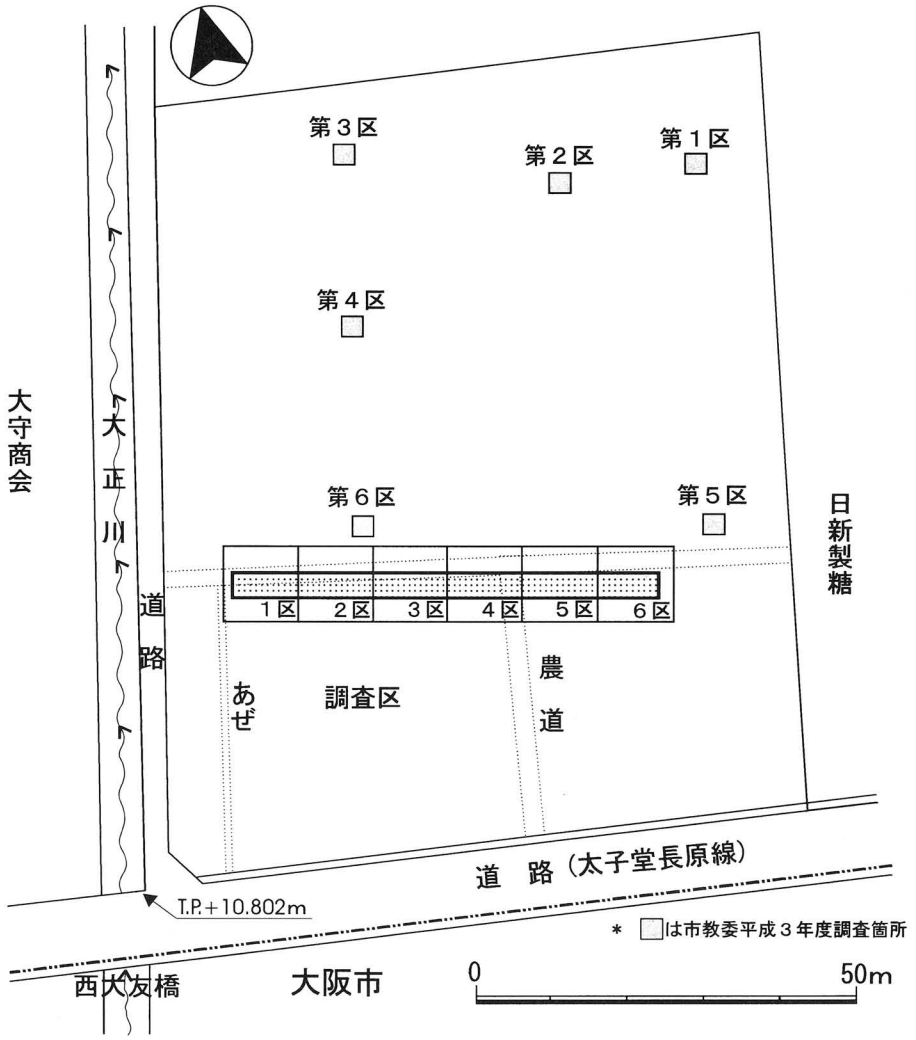
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は配送センター建設工事に伴うもので、基礎工事によって破壊される部分に幅３ｍ、長さ約58ｍを測る東西方向のトレンチを設定し、現地表下約1.6ｍまでを機械掘削、以下0.2ｍ前後を人力掘削として調査を進めた。

掘削の方法は市教委の遺構確認調査結果をもとに、現地表（T.P.＋9.1ｍ）下1.6ｍ前後の土層を機械により排除した後、以下0.2ｍ前後の土層について人力掘削および精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

地区割りについては、調査区西部に任意の基準点を設定し、南北軸を磁北方向より東に22度振り調査区区画に合わせた。区画は調査区範囲を包括できる南北10ｍ、東西60ｍに10ｍ角の方眼を作成した。区名は基準点より東の南北軸から東へ１区～６区を付称した。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝１/100）

２）基本層序

第１層　現耕土・盛土（層厚60～70cm）。上面は調査前まで水田耕作をしていた。耕土は数年前に土盛りしており、上部20cm前後はマサ土、下部は工事掘削などの残土である。現地表面は標高（T.P.＋）9.1ｍ前後を測る。

第２層　旧耕土（層厚０～15cm）。昭和の中ごろまでの耕作土としていた層である。

第３層　淡灰茶色粘質シルト（層厚０～20cm）。耕作土の床土である。

第４層　淡灰茶色粘質土（層厚20～40cm）。平安時代末～鎌倉時代に整地された土層と思われる。

第５層　淡灰茶色粘土（層厚10～20cm）。平安時代末以前の土層で、耕作土層が考えられる。

第６層　乳灰色粘土（層厚30cm）。褐色の斑点が多数みられる。

第７層　褐灰色シルト（層厚20cm）。

第８層　暗褐灰色粘質シルト（層厚10～30cm）。奈良時代ごろの遺物を少量含む層である。

第９層　暗灰茶色シルト（層厚20cm前後）。

第10層　乳灰茶色微砂（層厚20cm前後）。

第11層　茶灰色～青灰色シルト（層厚30cm以上）。上面で標高7.5～7.7ｍを測る。奈良時代ごろのベース面である。

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約1.6ｍ（標高7.7ｍ）の第８層上面で平安時代の溝１条（ＳＤ－１）、現地表下約1.6～1.8ｍ（標高7.5～7.7ｍ）の第11層上面で落込み遺構４ヶ所（ＳＯ－１～ＳＯ－６）を検出した。遺物は遺構及び包含層内からコンテナにして約１箱分が出土した。以下、検出した遺構について記す。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査区の北東部（５区）で検出した南北方向に伸びる溝である。ＳＯ－４を切り、南北ともに調査区外に伸びる。検出長約3.0ｍ、幅約0.4～0.5ｍ、深さ約0.1ｍを測る。堆積土は灰褐色粘質シルトで、断面皿状形を呈する。遺物は出土しなかった。この溝は奈良時代の遺構を切っており、それ以後の時期のものと考えられる。

ＳＯ－１

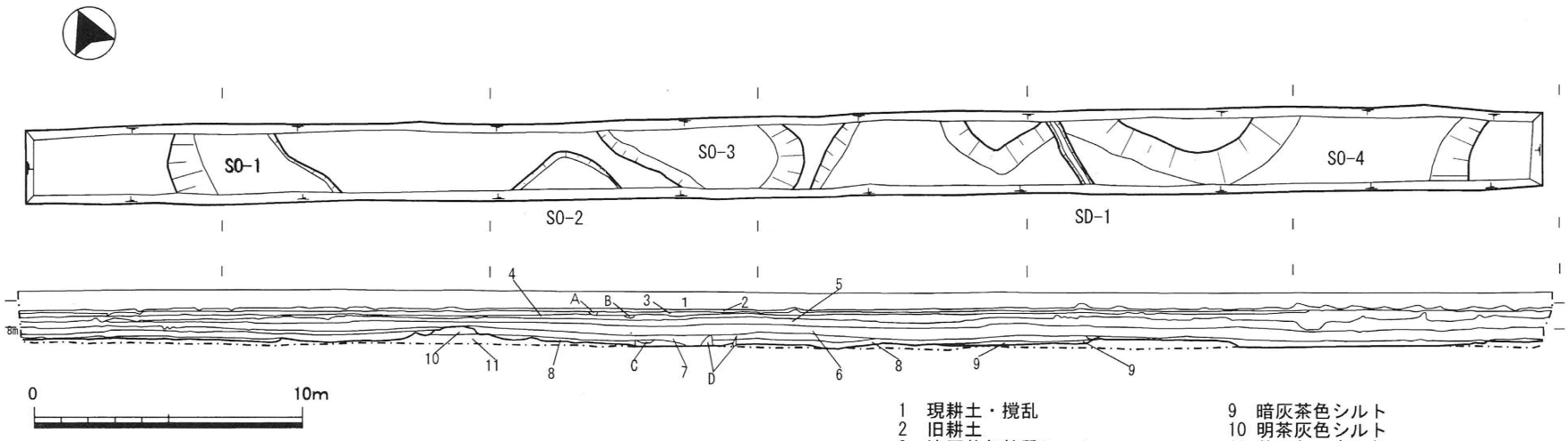
調査区の西部（１・２区）で検出した落込み遺構で、南北は調査区外に至る。検出部では東西幅約5.0ｍ、南北幅3.0ｍ、深さ約0.3ｍを測る。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は中村編年のＶ－１段階[註4]に比定される須恵器杯身の小片を出土している。

ＳＯ－２

調査区の西部（３区）で検出した南部の調査区外に至る。検出部では東西幅約4.0ｍ、南北幅約1.7ｍ、深さ約0.2ｍを測る。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＯ－３

調査区の西部（３区）で検出したが、南部は調査区外に至る。検出部では東西幅約7.0ｍ、南北幅3.0ｍ、深さ約0.3ｍを測る。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。



1　現耕土・撹乱
2　旧耕土
3　淡灰茶色粘質シルト
4　淡灰茶色粘質土
5　淡灰茶色粘土
6　乳灰色粘土
7　褐灰色シルト
8　暗褐灰色粘質シルト
9　暗灰茶色シルト
10　明茶灰色シルト
11　茶灰色～青灰色シルト
A　淡褐灰色砂質土
B　淡灰茶細砂痕シルト
C　茶灰色シルト
D　淡茶灰色細砂

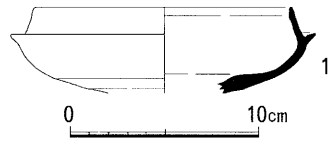
第３図　平断面図（Ｓ＝１／ 250）

ＳＯ－４

調査区の西部（６区）で検出したが南部は調査区外に至る。検出部では東西幅約25.0ｍ、南北幅3.0ｍ、深さ約0.2ｍを測る。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

３）遺構に伴わない出土遺物

調査区で検出された層序の第４層・第５層・第８層で土器を主とする遺物を出土している。第４層・第５層は平安時代～鎌倉時代の土師器・瓦器などの磨耗した小片である。器種などの判別が若干わかる程度であった。第８層は古墳時代後期～奈良時代にかけての土師器・須恵器などの小片である。器種では土師器の皿、須恵器の杯身など小片である。唯一、図化できたものは中村編年[註5]でいうⅢ型式に属する須恵器の杯身（１）である。色調は青灰色で口径13.6㎝、受部径16.2㎝、器高4.6㎝を測る。時期は６世紀前半ごろと思われる。



第４図　第８層出土遺物実測図（Ｓ＝１/４）

３．まとめ

今回の調査区は、調査地の中央付近で東西に長いトレンチの調査であった。調査の結果、奈良時代から平安時代前期の生産域に関連する遺構・遺物を検出することができた。

調査地では、平成３年度市教委の遺構確認調査（試掘孔６箇所[註6]）で調査地全域に水田相当層が存在することが確認されている。そのなかの調査地南西部に位置する第６区と呼称する箇所から須恵器の瓶子がほぼ完形で出土しており、当初集落域と生産域を境とするものと考えられていた。今回の調査区はその南部にあたり、市教委の想定された集落域の可能性が考えられたが、結果、集落域ではなく、生産域の範疇に入るものであった。

このことから、遺構確認調査で出土したほぼ完形の瓶子は豊作や地鎮などの祭祀的な遺構を検出したものと考えられる。この時期（７～13世紀）は条里制による大規模な開発が行われており、大きな水田区画がなされている。当地もその条里区画の範疇に入り、丹比郡条里の北部にあたる。

調査区より南部へ約100ｍの大阪市域で実施された区画整理事業に伴う発掘調査では古墳時代後期～飛鳥時代の建物跡などの集落遺構を検出しており、大阪市域側に集落域が想定される。

上層では削平を受けたかは不明であるが、今回の調査では平安時代末～鎌倉時代に整地したと思われる土層を確認しており、それ以後も生産域としての土地利用が現在まで続いていたものと思われる。大阪中央環状線開通以降、当地周辺は産業地域化しており、（丹比郡）条里区画された田園風景が消滅しつつある状況下にある。

註

註1　中西靖人・宮崎泰史・西村尋文他　1984『亀井』－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－㈶大阪文化財センター

註2　中西靖人・国乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭他　1985『亀井遺跡』－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　㈶大阪文化財センター

註3　清水和明　1998『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅰ』1995年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書　㈶大阪市文化財協会

註4　中村　浩　1980『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告書第29輯　㈶大阪文化財センター

註5　註4と同じ

註6　滝　斎　1992.3「17．亀井遺跡（91－255）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告25　平成3年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

参考文献

・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文他　1984『亀井』－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－㈶大阪文化財センター

・中西靖人・国乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭他　1985『亀井遺跡』－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　㈶大阪文化財センター

・1986『亀井』（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－㈶大阪文化財センター

・1987『亀井』（その3）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－㈶大阪文化財センター

・小野久隆他　1988『亀井北』（その1）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－㈶大阪文化財センター

・奥　和之・山上　弘他　1987『亀井北』（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－㈶大阪文化財センター

・赤木克視・竹原伸次・大楽康宏他　1988『亀井北』（その3）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－㈶大阪文化財センター

・近江俊一　1989.4『亀井遺跡』－南亀井町4丁目41－1の調査－㈶八尾市文化財調査研究会報告19　㈶八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋　1989「20　亀井遺跡（第1次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告25　㈶八尾市文化財調査研究会

・成海佳子　1990「10．亀井遺跡（KM89－2）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告28　㈶八尾市文化財調査研究会

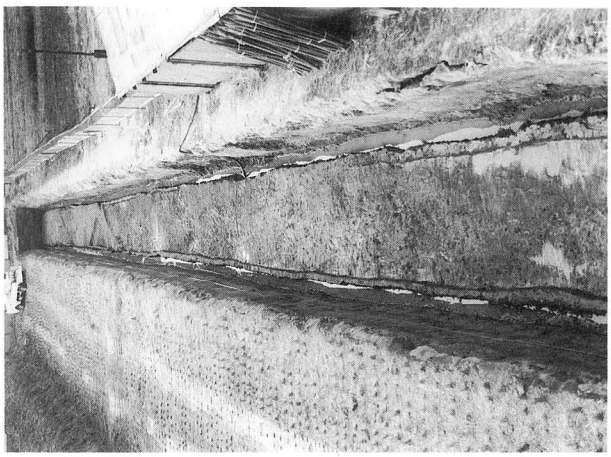
・岡田清一　1990.3「10．亀井遺跡（89－284）の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20　平成元年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

・岡田清一　1990.3「6．亀井遺跡（88－586）の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20　平成元年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

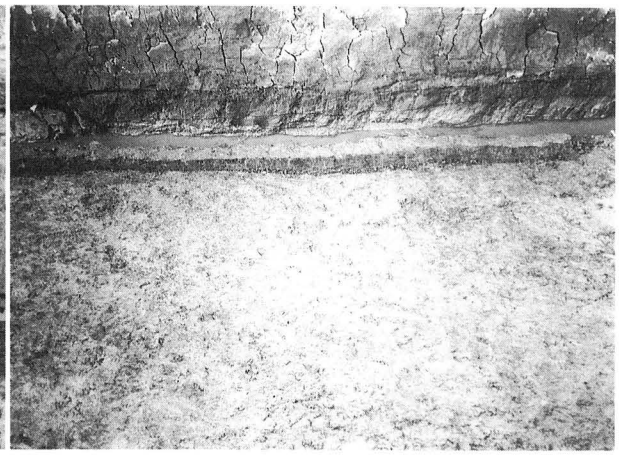
・成海佳子　1991「11．亀井遺跡第3次調査（KM90－3）」『平成2年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』

・滝　斎　1992.3「17．亀井遺跡（91－255）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告25　平成3年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

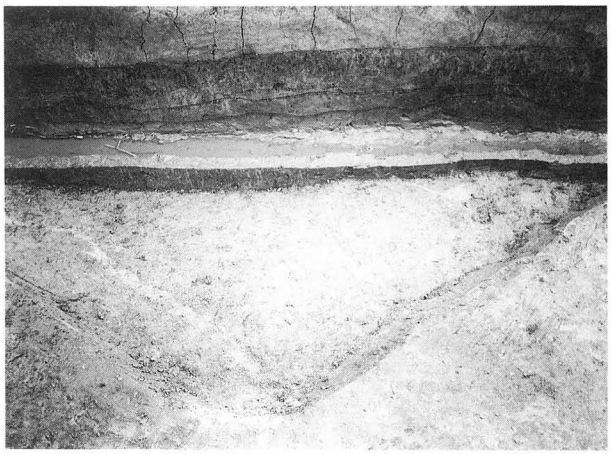
・古川晴久　1996「8．亀井遺跡第4次調査（KM96－4）」『平成8年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』㈶八尾市文化財調査研究会



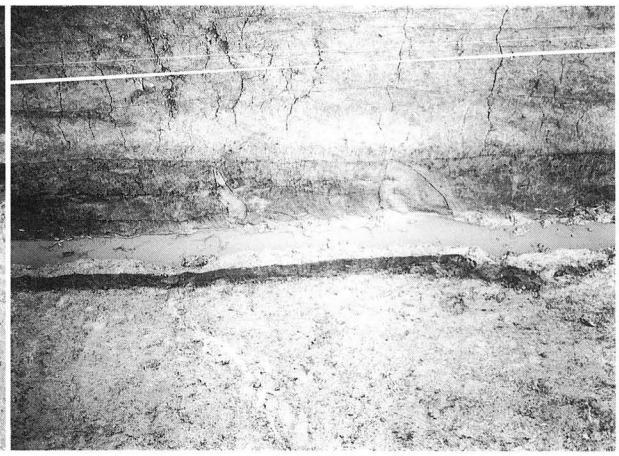
調査区全景（東から）



ＳＯ－１（南から）

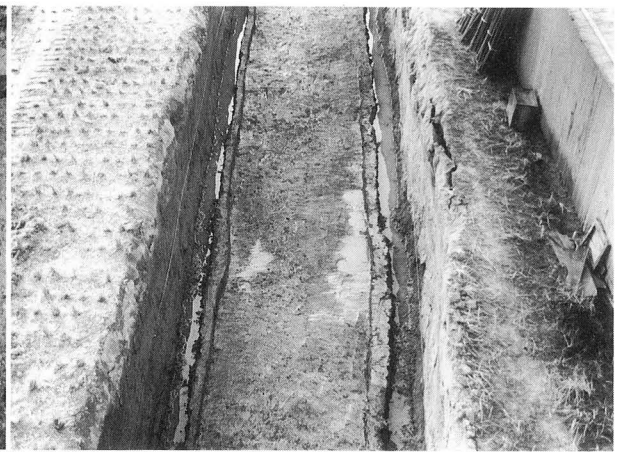


ＳＯ－２（北から）



ＳＯ－３（北から）

ＳＯ－４（南から）



ＳＯ－４（東から）

Ⅴ　小阪合跡第36次調査（ＫＳ97－36）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市若草町地内で実施した公共下水道（９－122工区）工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する小阪合遺跡第36次調査（ＫＳ97－36）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋653－２号　平成10年２月２日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成10年２月９日（実働１日）に、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約12㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレース－高萩が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

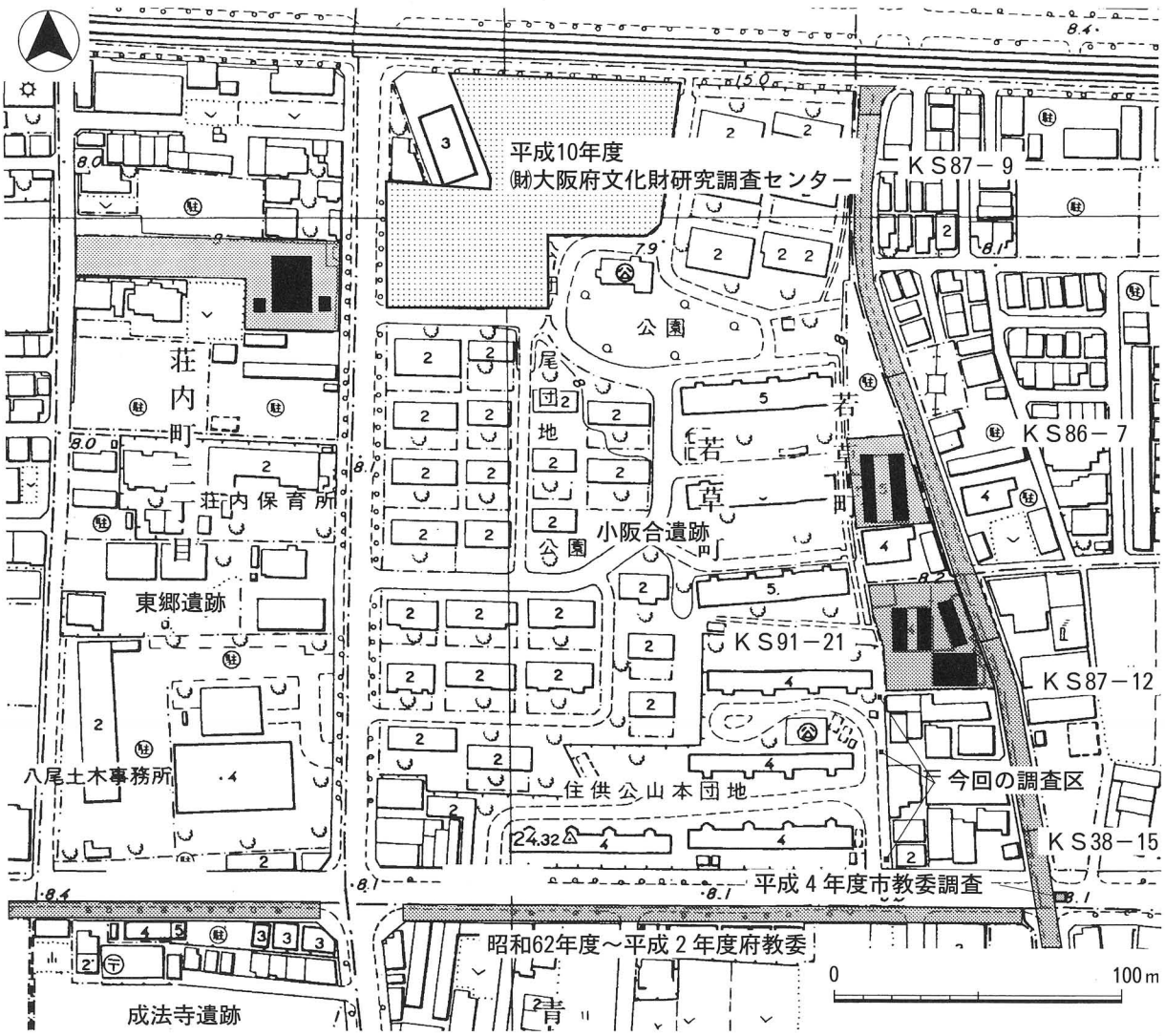
1．はじめに……59
2．調査概要……60
　1）調査の方法と経過……60
　2）基本層序……61
　3）検出遺構と出土遺物……61
3．まとめ……63

Ⅴ　小阪合遺跡第36次調査（ＫＳ97－36）

１．はじめに

小阪合遺跡は八尾市の中心部に位置し、現在の行政区画では若草町、小阪合町１・２丁目、南小阪合町２・４丁目、青山町１～５丁目、山本町南７・８丁目がその範囲にあたる。地理的には、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川によって形成された沖積地上で、現標高（T.P.＋）は８～９ｍに位置しており、当遺跡範囲の中央を縦断するように楠根川が北西流している。当遺跡の周辺では西に成法寺遺跡、南に中田遺跡・東弓削遺跡、北西に東郷遺跡、南西に矢作遺跡がある。

当遺跡の発見の契機は、昭和30年の大阪府営住宅建設工事中に古墳時代の遺物が多量に出土したことによる。しかしその後、八尾市教育委員会によって、遺構確認調査や掘削工事等の立会調査が行われたが[註1]、明確な遺構は確認されなかった。昭和56年から当地域の区画整理事業が施工されることとなり、昭和57年以降南小阪合地区土地区画整理事業の関連工事に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人八尾市文化財調査研究会（以下、「当調査研究会」）



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/2500）

により実施された。これらの調査成果から、当遺跡が弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが判明した。特に古墳時代前期（庄内期～布留期）に比定される遺構及び遺物が遺跡全域で確認された。また出土遺物には他地域から持ち込まれた土器が多く含まれており、この時期、他地域との交流が盛んに行われていたことが明らかになった。さらに当遺跡の北東部付近で弥生時代前期～中期の集落遺構の存在が確認されている。

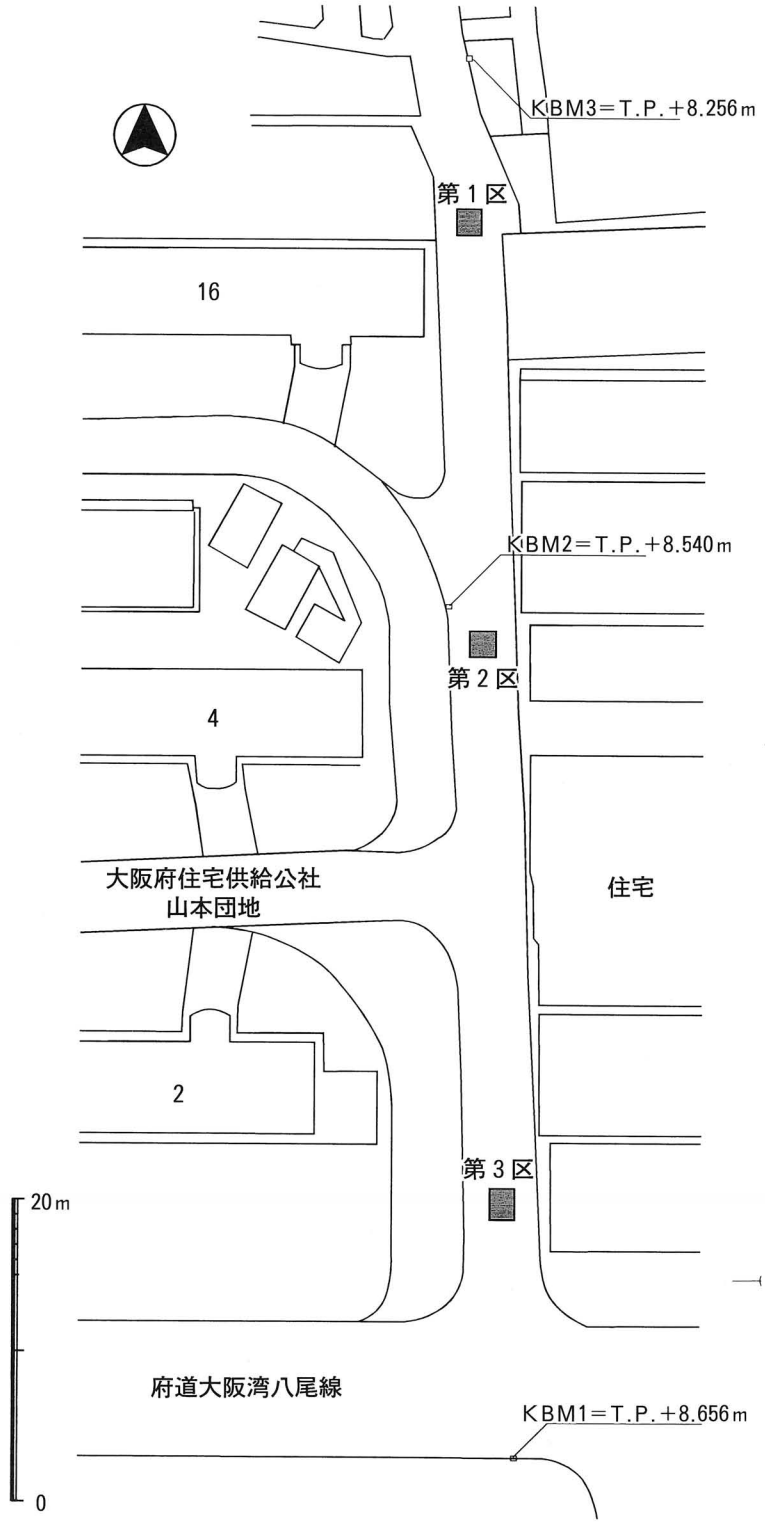
今回の調査地周辺では、当調査研究会が行った第１次[註1]・第２次[註2]・第５次[註3]・第８次[註4]・第11次[註5]・第12次[註6]・第15次[註7]・第21次[註8]・第22次[註9]、昭和58年度に大阪府教育委員会が行った小阪合ポンプ場建設工事に伴う調査、平成４年度に市教育委員会が行った遺構確認調査[註10]、昭和62年～平成３年度に継続的に行われている府道拡張工事に伴う調査がある。これらの調査成果では弥生時代後期末～古墳時代前期の集落遺構、奈良時代～鎌倉時代の建物跡・井戸等を検出している。[註11]

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（９－122工区）に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第36次調査にあたる。

調査区は、南北方向に人孔３箇所（北からNo.31→第１区・No.21→第２区・No.11→第３区）である。面積は１箇所約４㎡で計12㎡を測る（第２図）。調査では、それぞれの工事掘



第２図　調査区位置図（S＝１/500）

削深度に沿った形で現地表下約1.5～2.0ｍを機械および人力を併用して掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、第１・２区では中世の遺物包含層、古墳時代以前の河川跡と思われる厚く堆積する粗砂層を検出した。第３区では中世の河川跡を検出した。遺物は調査区内より中世～近世の時期のものがごく少量出土した。

２）基本層序

今回の調査では第３図に図示した第１層～第８層を第１区～第３区の基本層序とした。以下、各層について記す。

第１層　盛土・撹乱。層厚40～100㎝。盛土および埋設工事（水道・排水管など）の撹乱層である。現表土面は標高（T.P.＋）8.4ｍ前後である。

第２層　褐灰色礫混じり砂質土（第１・２区）・暗灰茶色細砂混じり砂質土（第３区）。層厚約20～25㎝。近世～近代の土層である。

第３層　灰褐色礫混じり砂質土。層厚約10～20㎝。瓦器などを含む中世の包含層である。第３区はなく、河川跡と思われるＧ層が堆積する。

第４層　褐灰色シルト質土（第１区）。層厚約20～25㎝。中世期のベース面である。

第５層　茶灰色粘質シルト（第１区）・明茶灰色粘土（第２区）。層厚15～30㎝。

第６層　淡灰青色粘土（第１区）・灰褐色粘質シルト（第２区）。層厚15～20㎝。

第７層　青灰色粘土（第１区）。層厚25㎝前後。柔らかい粘性のある粘土である。

第８層　淡灰茶色粗砂（第１区）。層厚50㎝以上。古墳時代以前の河川跡と思われる。

Ａ層　青灰色シルト質土（第１区）。近代～現在の時期に掘られたゴミ穴である。西壁には瓦片などが多量に含まれている。

Ｂ層　淡茶灰色シルト。第１区の北壁でみられた層で、第４層と同層と思われるが、上部のゴミ穴により、変色している。

Ｃ層　灰色シルト（第１区）。第５層と思われるがＢ層と同様、変色している。

Ｄ層　灰茶色砂質土（第１区）。断面皿状形に堆積しており、近代の耕作の鋤溝などが考えられる層であるが、詳細は不明である。

Ｅ層　淡灰色シルト（第１区）。中世期の溝跡の可能性が考えられる層である。

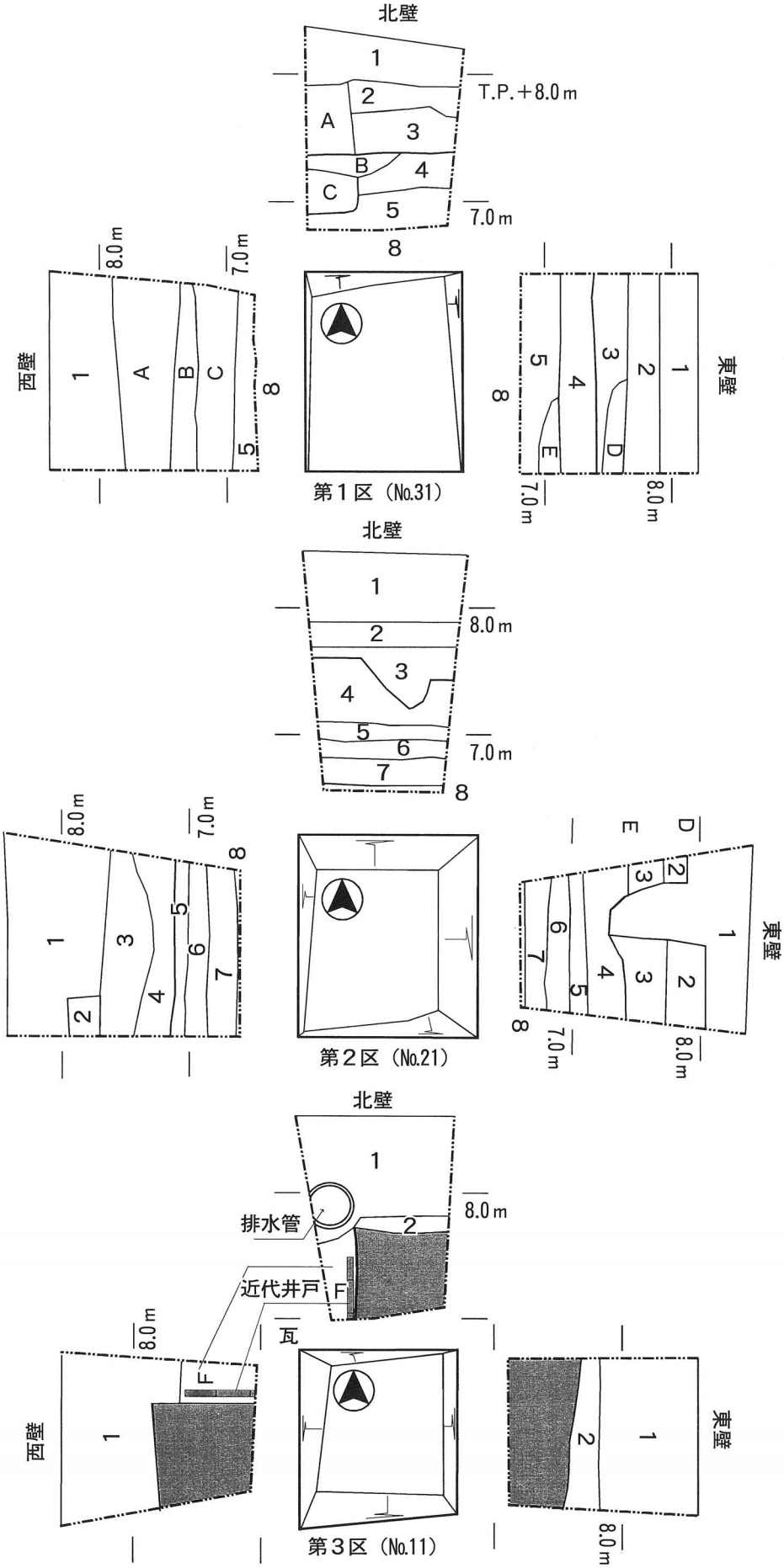
Ｆ層　暗灰色粗砂混じり砂質土（第３区）。近代以降に構築された井戸の掘り方で、比較的新しい埋土である。

Ｇ層　淡褐灰色粗砂（第３区）。層厚１ｍ以上。中世～近世の河川跡と思われる粗い砂が深く堆積している。深度を確認するため、一部を１ｍ程度掘り下げたが基底部に至らなかった。

３）検出遺構と出土遺物

・第１区

北側に位置する調査区である。現地表下1.7ｍ（T.P.＋6.7ｍ）まで掘削した。調査区西壁では近代～現在の瓦片が含まれるゴミ穴を検出した。現地表下0.7～1.0ｍ（T.P.＋7.4～7.7ｍ）で中世期の瓦器椀などの小片を含む層（第３層）を確認した。その下の第４層上面で精査したが遺構はなかった。最終掘削面（現地表下1.7ｍ）付近で粗砂の堆積する層（第８層）を検出した。層



第3図　調査区平断面図（S＝1/50）

厚を確認するため一部を掘り下げたが、0.5ｍの層厚までしか確認できなかった。

・第２区

中央に位置する調査区である。調査区北東部では現地表下0.6～1.0ｍの深さまで埋設工事による削平を受けていた。現地表下0.7～1.0ｍ（T.P.＋7.4～7.7ｍ）で中世期の瓦器椀などを含む層（第３層）を確認。第４層上面を精査し、遺構の有無を確認したが、第１区同様、遺構はなかった。最終掘削面（現地表下1.7ｍ）付近で粗砂の堆積する層（第８層）を検出した。層厚を確認するため一部を掘り下げた結果、第１区同様、0.5ｍまでしか確認できなかった。

・第３区

最も南側に位置する調査区である。現地表下約1.0ｍ前後まで埋設工事により撹乱されている。調査区西部では配水管（径350㎜のヒューム管）が残存していた。その北西部下から削平された形で井戸を検出した。井戸は瓦を枠としているもので、調査区内で３段分を確認した。規模は北西が調査区外に至るため不明である。深さについても工事掘削より深いため、確認することができなかった。現地表下1.2ｍから以下は粗砂層が堆積しており、河川跡と思われる。深さについては工事掘削深度（２ｍ）よりさらに深いものと考えられる。時期は第１・２区で検出されている古墳時代以前の粗砂層より新しい時期のものと考えられる。この粗砂層は東部の楠根川や共同住宅建設工事に伴う調査で検出されている河川跡と関連するものと思われる。当調査研究会が実施した第７次・第９次・第12次・第15次・第21次などの調査で確認されている。

３．まとめ

今回の調査地は小阪合遺跡範囲の北部に位置する調査区で、小規模な公共下水道工事の人孔部分の調査であった。調査の結果、既往調査（第21次調査）で検出している鎌倉期の包含層および遺構面と思われる地層を検出した。調査区では遺構はなかった。

第３区では中世～近世の河川跡を確認した。北部の調査区で確認されなかったことから北西方向へ伸びるものと思われる。この河川跡は当調査区から約100ｍ南側の第14次調査で検出している河川跡の下流にあたるものと考えられる。

また現地表下約1.8ｍ前後で粗砂層が厚く堆積しているのが第１区・第２区で検出している。この粗砂層の堆積状況は南へ約150ｍの所で行っている第５次調査でも確認されていることから、今回はその下流部分にあたるものと考えられる。

註

註1　高萩千秋　1987『小阪合遺跡』－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和57年度　第1次調査〉㈶八尾市文化財調査研究会報告10　㈶八尾市文化財調査研究会

註2　高萩千秋　1987『小阪合遺跡』－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和58年度　第2次調査・第3次調査〉㈶八尾市文化財調査研究会報告11　㈶八尾市文化財調査研究会

註3　西村公助　1986『小阪合発掘調査概要』－流域下水道等整備に伴う発掘調査－㈶八尾市文化財調査研究会報告8　㈶八尾市文化財調査研究会

註4　高萩千秋　1990『小阪合遺跡』－第8・13・16次調査発掘調査報告－㈶八尾市文化財調査研究会報告26　㈶八尾市文化財調査研究会

註5　高萩千秋　1988「3．小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告16　㈶八尾市文化財調査研究会

註6　高萩千秋　1988「4．小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告16　㈶八尾市文化財調査研究会

註7　高萩千秋　1989「7　小阪合遺跡（第15次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告25　㈶八尾市文化財調査研究会

註8　成海佳子　1992「4．小阪合遺跡第21次調査（KS91－21）」『平成3年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』　㈶八尾市文化財調査研究会

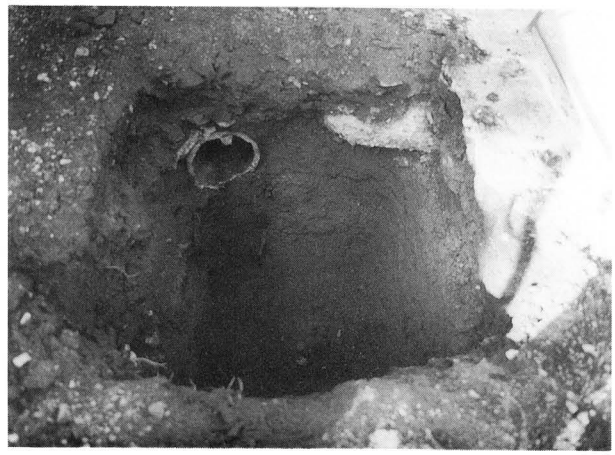
註9　高萩千秋　1993「Ⅳ　小阪合遺跡（KS92－22）第22次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告39　㈶八尾市文化財調査研究会

註10　澍　斎　1993.3「6．小阪合遺跡（92－067）の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27　平成4年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

註11　亀島重則　1989.3『小阪合遺跡発掘調査概要・Ⅱ』－八尾市南小阪合町所在－大阪府教育委員会

第1区（南から）

第2区（南から）



第3区（南から）

第3区近代井戸（南東から）

Ⅵ　心合寺山古墳第２次調査（ＳＯ97－２）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市大竹５丁目地内（「新池」）で行った、堤体改修工事に伴う発掘調査の報告である。
1．本書で報告する心合寺山古墳第２次調査（ＳＯ97－２）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理103号　平成９年10月20日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成９年11月４日から11月13日（実働８日）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1．調査面積は約50㎡を測る。
1．現地調査・内業整理には市森千恵子、坂田典彦、宮崎寛子が参加した。

本　文　目　次

1　はじめに……67
2　調査の方法と経過……67
3　検出遺構と出土遺物……67
　1）層序……68
　2）検出遺構……68
　3）出土遺物……68
4　まとめ……69

Ⅵ　心合寺山古墳第２次調査（ＳＯ97－２）

１．はじめに

心合寺山古墳の位置する八尾市北東部の大竹・楽音寺地区一帯には、西の山古墳（古墳時代前期末）・花岡山古墳（同中期初頭）・心合寺山古墳（同中期前葉）・鏡塚古墳（同中期後葉）などが存在している。心合寺山古墳は、現在のところ、中河内で最大の規模をもつ前方後円墳で、周濠を含めた全長は250ｍ前後である。また、心合寺山古墳の南西側では古くから瓦が採集されており、南西側の周濠（観音池）内からも礎石や屋瓦が出土したことから、古墳の南西側に秦氏一族の氏寺と考えられる心合寺跡が推定されている。

八尾市教育委員会では、史跡整備のための発掘調査を平成４（1992）年度から行っており、数々の成果が得られている。平成９（1997）年度の調査では、墳丘西側くびれ部の平坦面で埴輪列が検出され、３段築成の古墳であることが確認されたことから、従来140ｍ前後とされてきた墳丘長は、160ｍ以上になることがわかった。また、平成10（1998）年度の調査では、前方部頂部の平坦面にも埴輪列のあったこと、またその内側には葺石により区画された方形壇状遺構のあったこと、後円部の墓壙の確認などが行われ、この地域一帯の首長墓にふさわしい内容が明らかにされた。

当調査研究会では、平成元（1989）年度に北西側周濠（新池）の北西隅で樋管取り替え工事に伴う発掘調査（心合寺山古墳第１次調査　ＳＯ89－１）を実施しており、今回の調査は第２次調査（ＳＯ97－２）にあたる。

２．調査の方法と経過

今回の調査は、平成９～11（1997～1999）年度の３年間にわたって行われる予定の「新池」堤体改修工事（第１期）に伴うものである。工事は「新池」の岸の法面をコンクリートブロックで整備するもので、工事によって現在の池の底より深く掘る部分についてが調査対象となっている。

今回の調査地は「新池」南岸の東半分で、上面の規模は幅２ｍ・長さ約25ｍである。調査地は池の岸に沿ったトレンチで、２ヵ所で折れ曲がる形となっていることから、便宜上、屈曲部を境に西から１区～３区と呼称した。各調査区の長さは、１区が12ｍ・２区が６ｍ・３区が８ｍである。

調査地周辺の現状は、池の周囲に草木が茂り、法面はえぐれており、水が抜かれた池の底にはごみが散乱していたことから、調査に先立って、草刈りや樹木の伐採・ごみの整理などをした。その後、厚さ0.1～0.3ｍ前後の表土を重機によって除去し、以下を人力掘削により、調査を進めた。平面的な調査終了後、工事深度までの範囲を人力掘削し、下層部分の確認を行った。最終的な掘削深度は、現地表から1.1ｍ前後である。

３．検出遺構と出土遺物の概要

調査の結果、１区の西北部から２区の東北部にかけては、「新池」構築当時の南岸が検出された。また、３区の北東部では、「新池」の南東隅の縁辺部に直交する形で組まれた石垣状の石組み遺構を検出した。また、出土遺物には、多数の瓦のほか、少量の埴輪・土器類があった。

1）層序

ベースとなる層は明褐色の砂礫層で、全体を通じて褐色～灰色系の砂礫層が主体である。基本となる土層は表土以下の４層である。

表土は灰褐色粗砂で、厚さ0.05～0.3ｍ、上面の標高はT.P.＋26.3～27.9ｍである。以下に第１層暗褐色シルト（灰色粘質シルト・砂礫混入）、第２層暗褐色シルト（明褐色シルト・灰色粗砂混入）、第３層褐色砂礫（灰色粘質シルト混入）が0.1ｍ前後の厚さで西下がりに堆積している。次いで第４層明褐色～淡褐色～灰色シルト混じり砂礫はベースとなる層で、１区では厚さ0.6ｍまでを確認した。第４層上面の標高はT.P.＋26.1～27.5ｍで、東が高く西が低い。

なお、１区では、第４層の上部に池内部の堆積土（Ａ層）があり、第４層直下には粘質シルト・砂質シルト・微砂・粗砂・礫などからなる複雑な土層が認められた（Ｂ層）。

また、３区では粗砂・礫混じりシルトからなる石垣の裏込め（Ｃ層）、石垣の北東（表面）側には粘質シルト～粗砂の互層（Ｄ層）が認められた。

2）検出遺構

１区では、調査区の北東部で構築当時の池の岸が検出された。現在の池の岸からは６ｍ程度内側の現地表下0.5～0.6ｍ前後（T.P.＋26.1～26.2ｍ）で、第４層が急角度で0.6ｍ程度落ち込むのを確認した。岸に沿った池の底には礫が多量に見られ、拳大の石が少量落ち込んでいた。池内部の堆積土層はＡ1層青灰色粘質シルト混じり粗砂（0.05～0.3ｍ）・Ａ2層灰色粗砂（0.5ｍ以上）で、部分的にベースの転落層とおもわれるＡ3層明褐色シルト混砂礫（0.2～0.3ｍ）・Ａ4層灰色粘質シルト混砂礫（０～0.3ｍ）が認められた。

２区では、北西部で池のコーナー部分が検出され、護岸のためのものか、石組み遺構が遺存していた。石組み遺構は径50㎝前後の比較的大きな石を主に置き、拳大から人頭大の石を隙間に充填しているようであるが、規則性は見られなかった。瓦・埴輪・土器の破片も少量見られるが、石組に混入するもの、池内部に落ち込んだものがある。池掘形の南側では、第３層が上部の灰色粘質シルトが多く含まれる3ａ層と、下部の青灰色粗砂を含む3ｂ層に分れる。

３区では、北東隅で、南東－北西に伸びる石垣状の石組み遺構を検出した。第１層上面を切り込んで構築されているもので、裏込めはＣ1層淡褐色砂礫混じり粗砂・Ｃ2層淡灰色礫混じりシルトで構成されている。石垣の北東側斜面には、Ｄ層灰色系の粘質シルト・微砂・粗砂が数枚互層となって堆積しており、最下にはＤ7層明褐色粘質シルトが堆積する。裏込めには鎌倉時代後半以降の瓦片が少量含まれている。また、第２層中に、奈良時代の土師器（**5**）・須恵器が少量まとまっていた。

3）出土遺物

遺物については、埴輪や瓦片などが地表面でも散見されており、ベースの第４層直上までの間や池内部・石組み内部・裏込めにも、埴輪・瓦・奈良時代以降の土器類が含まれている。出土量はコンテナ箱（40×60×20㎝）に５箱であるが、ほとんどが鎌倉時代後半以降の瓦である。

埴輪はタガ・端面・スカシなどが遺存するものが12片、体部片が６片出土した。縦ハケ調整で硬質な焼き上がりのものが１片認められるが、他は横ハケ・または調整不明である（**1**～**4**）。

奈良～平安時代の土器には、土師器２片、須恵器２片があるが、図示できたものは土師器甕（**5**）と鍋の把手（**6**）である。土師器甕（**5**）は須恵器甕体部片とともに、３区２層中から出

土した。

中世の土器には、土師器羽釜・皿などの小破片があり、２区表土からごく少量出土した。土師器羽釜（７）は口径15.5㎝の小型品である。

近世のものには磁器碗（８）のほか、瓦質土管などがある。

瓦は総数525片が出土した。うちわけは、平瓦433片・丸瓦87片・軒先瓦や道具瓦等のその他の瓦が５片である。

平瓦の調整には、凸面がナデ・縄目タタキ・文様タタキ、凹面が布目・ナデ・ケズリ、端面がナデ・ケズリがあるが、凸面ナデ・凹面布目・端面ケズリのものが圧倒的に多い（11）。縄目タタキには縦位のもの（12）と斜位（13）のものがある。文様タタキには、連続した矢羽根状のもの（15）、大小の×印を配したもの（16）、縄目タタキの後大小の×印を配したもの（17）、細かい網目状（18）の４種がある。いずれもタタキ原体の１単位は不明である。

丸瓦の調整は、凸面はすべて縄目タタキの後ナデ、凹面は布目・ケズリ、端面はナデ・ケズリがみられる。（19・20）。

軒丸瓦（９）は内区の１/８程度が遺存しているだけで詳細は不明であるが、心合寺のものである。（10）はおそらく鬼瓦の一部であろう。

４．まとめ

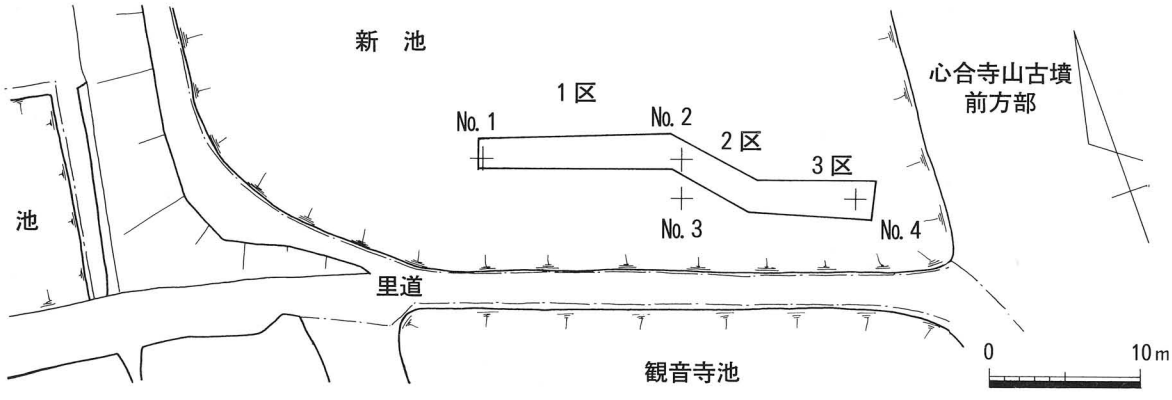
心合寺山古墳の西側周濠の現状は、里道を挟んで北側が「新池」、南側が「観音池」に分断されている。今回の調査では、この「新池」構築当時の南岸および２区・３区で石組み遺構が検出された。１区に見られなかったが、池底に礫敷きの痕跡があったことから、２区同様の石組みはあったものと思われる。３区の石組み遺構は北東側の土層堆積から、南東から北西への流路が想定でき、古墳西側くびれ部付近からの導水施設に伴うものであった可能性が高い。

第１次調査（ＳＯ89－１）では、江戸時代正徳６（1716）年の墨書のある礎板から、樋管の取り付け時期が明らかにされた。また、外堤の構築時期には３時期あり、第３期の外堤が正徳６（1716）年以降の樋管掘り形に切られていることから、正徳６（1716）年には、現在と同じ景観を呈していたことが明らかにされている。これらのことから、心合寺山古墳の北西周濠である「新池」は、鎌倉時代後半以降から正徳６（1716）年までの間に大規模な改修が数回にわたって行われていることが明らかになった。一方、１区下層部分の堆積土層は地山の可能性が高いものの、古墳本来の周濠内堆積土の可能性も捨て切れない。今後、新池・観音池間の里道の構築時期も含めて、精査すべき問題であろう。

参考文献

・原田昌則　1990　「19. 心合寺山古墳（ＳＯ89－１）」『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』（財）八尾市文化財調査研究会
・吉田野々　1993　『史跡　心合寺山古墳基礎調査現地説明会資料』八尾市教育委員会
・吉田野々　1996　「史跡　心合寺山古墳基礎発掘調査報告書」『八尾市文化財調査報告35　史跡整備事業報告１』八尾市教育委員会
・吉田野々　1997　『史跡　心合寺山古墳第５次発掘調査現地説明会資料』八尾市教育委員会
・藤井淳弘　1998　『史跡　心合寺山古墳第６次発掘調査現地説明会資料』八尾市教育委員会

第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/5000）



第２図　調査区設定図（Ｓ＝１/500）

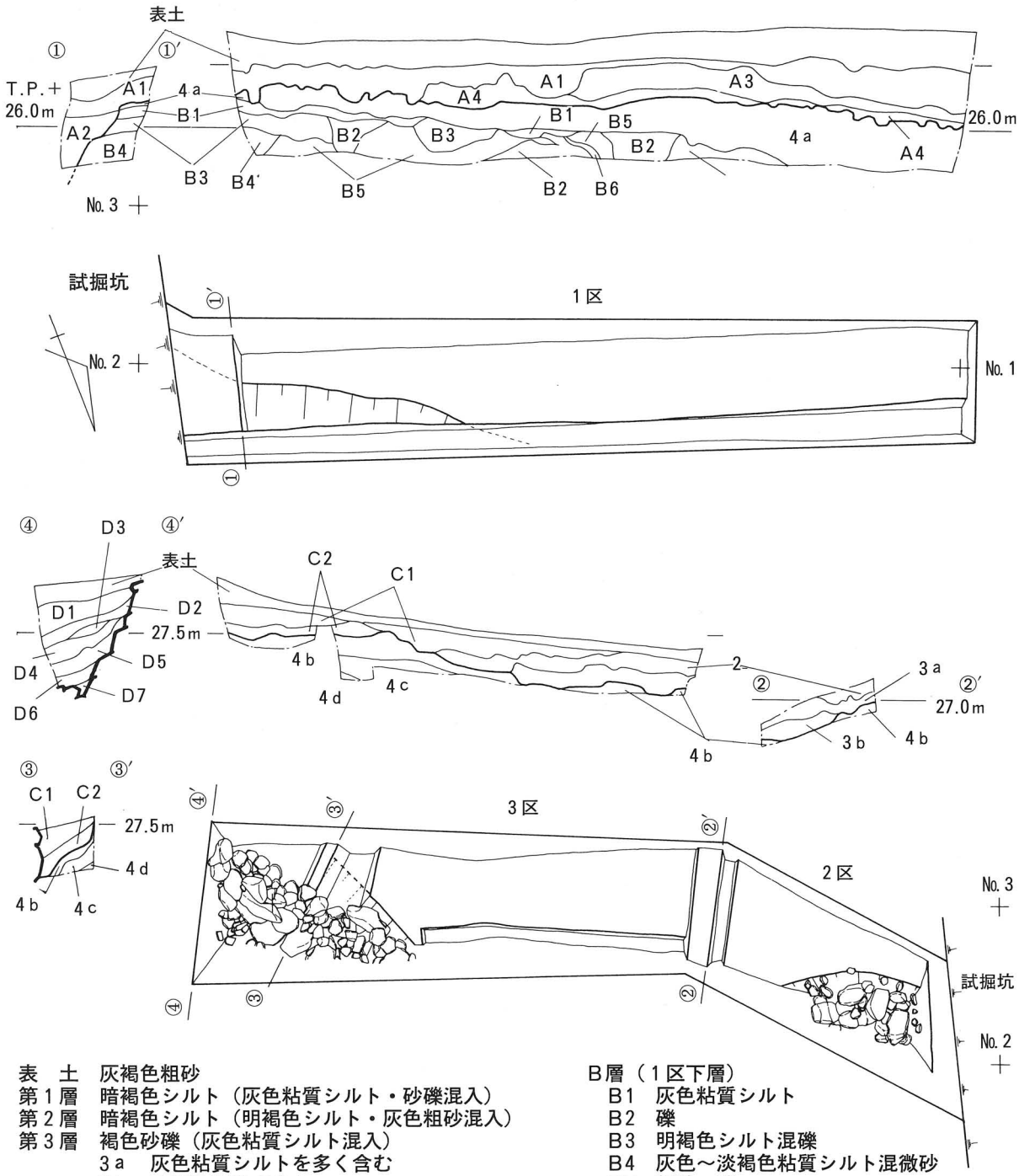


表　土　灰褐色粗砂
第１層　暗褐色シルト（灰色粘質シルト・砂礫混入）
第２層　暗褐色シルト（明褐色シルト・灰色粗砂混入）
第３層　褐色砂礫（灰色粘質シルト混入）
　3a　灰色粘質シルトを多く含む
　3b　青灰色粗砂を含む
第４層　明褐色～淡褐色～灰色シルト混じり砂礫
　4a　明灰色砂礫混微砂
　4b　明褐色砂礫
　4c　灰色礫混粗砂
　4d　明褐色シルト

Ａ層（池内）
　A1　青灰色粘質シルト混粗砂
　A2　灰色粗砂
　A3　明褐色シルト混砂礫
　A4　灰色粘質シルト混砂礫

Ｂ層（１区下層）
　B1　灰色粘質シルト
　B2　礫
　B3　明褐色シルト混礫
　B4　灰色～淡褐色粘質シルト混微砂
　B5　粗砂～礫
　B6　灰色微砂
Ｃ層（石垣裏込め）
　C1　淡褐色砂礫混粗砂
　C2　淡灰色礫混じりシルト
Ｄ層（石垣北東側）
　D1　灰色シルト混じり粗砂
　D2　灰色粗砂
　D3　暗灰色粘質シルト
　D4　青灰色粘質シルトと粗砂の互層
　D5　灰色粗砂
　D6　灰褐色微砂と明褐色粘質シルトの互層
　D7　明褐色粘質シルト

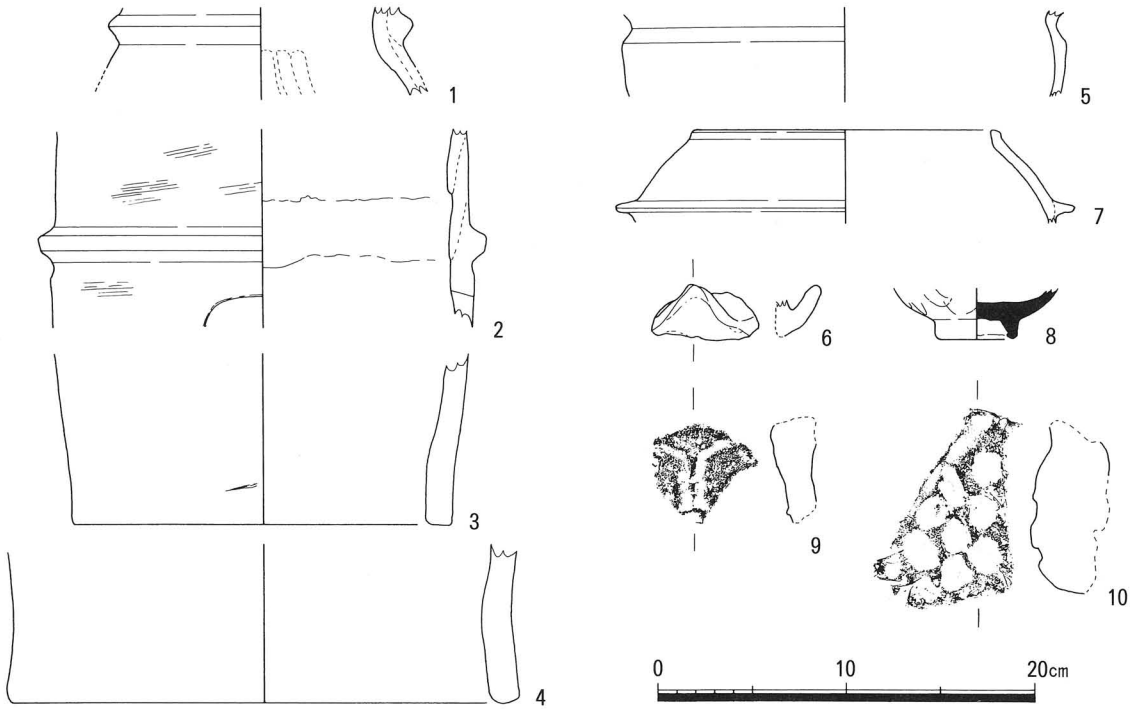
第３図　平面図・壁面図（Ｓ＝水平１/100・垂直１/50）

出土遺物うちわけ表

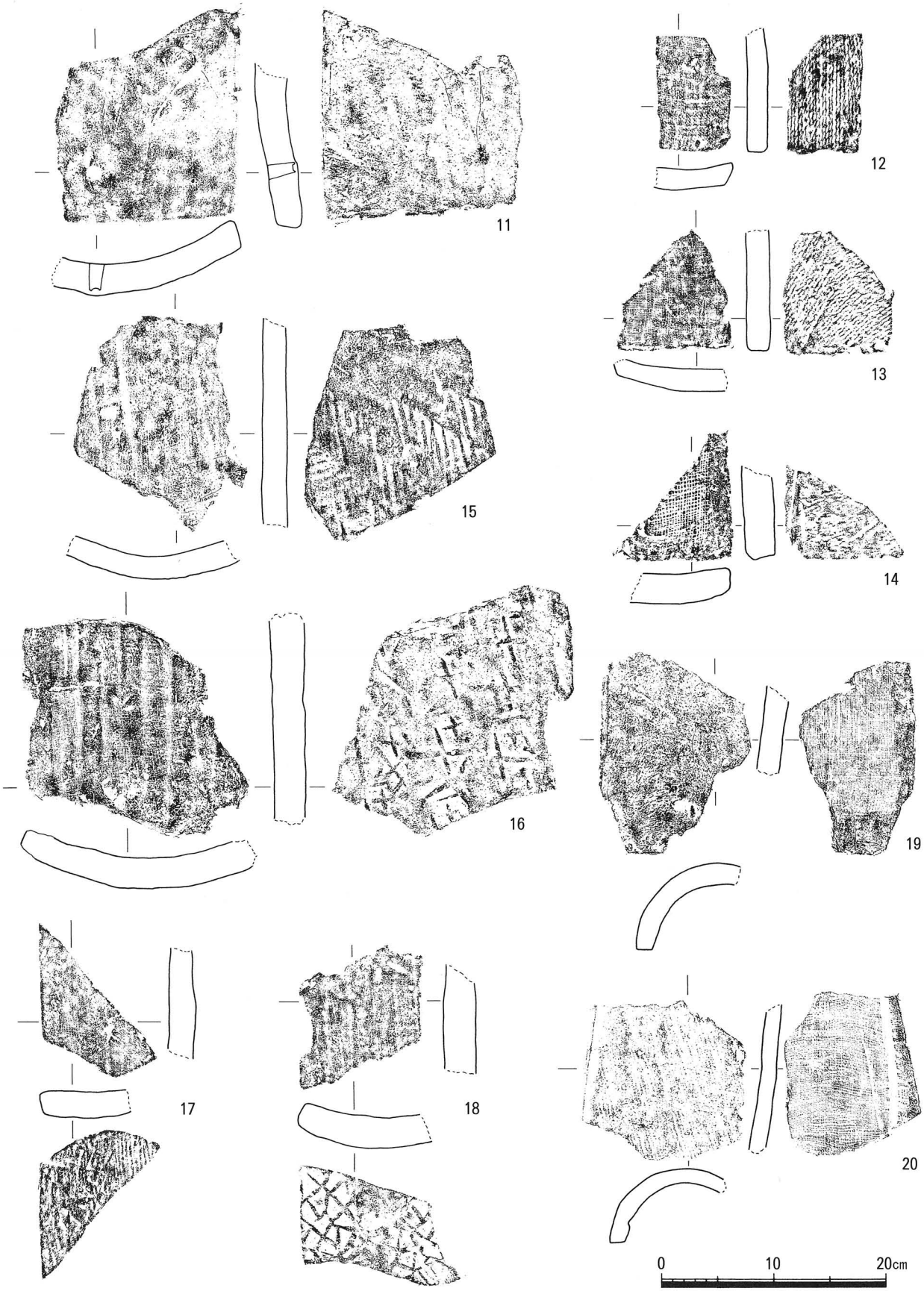
出土位置＼器種＼端面の有無	平瓦		丸瓦		他の瓦		埴輪		土師器（奈良）		須恵器（奈良）		土師器（中世）		瓦質土管		陶磁器		不明	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
表土	69	71	14	8		2	2	2					1	3	4	1	1			13
第１層	9	14	7	3			1	1	1						1					
第２層		2								1		1								
第３層	18	23	7	1			1													1
第４層	28	8	2	3		1														
Ａ１層	25	22	14	3		1	1					1								1
Ａ２層	48	52	13	4			6	3							2	6				4
２区石組内部	4	7	1	1																
３区石組裏込	21	3	1	1		1														
３区石組内部	5	4	4				1													
合　　計	227	206	63	24		5	12	6	1	1		2	1	3	7	7	1			19

瓦うちわけ表

凹面調整＼端面調整＼凹面調整		布目(A)			布目(B)			ナデ			ケズリ			不明			合計
		ナデ	ケズリ	不明	ナデ	ケズリ	不明	ナデ	ケズリ	不明	ナデ	ケズリ	不明	ナデ	ケズリ	不明	
平瓦	ナデ	5	30	9				12	5	1	1	6		3	5	8	85
	縄目タタキＡ	2	9	5				1	1					1		7	26
	縄目タタキＢ	10	2		1											1	14
	文様タタキＡ		3	1												1	5
	文様タタキＢ１	1	9	1								2		2	1	1	17
	文様タタキＢ２		1														1
	文様タタキＣ	1	8												1		10
	不明	1	10	5		1			1		1		1	9	17	23	69
	合計	20	72	21	1	1	0	13	7	1	2	8	1	15	24	41	227
丸瓦	縄目タタキ＋ナデ	5	16	16	8	2	0	0	0	0	0	2	0	2	0	12	63

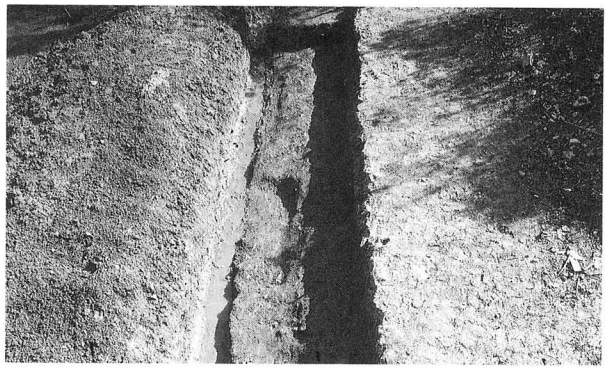


第４図　出土遺物実測図－１（Ｓ＝１/４）



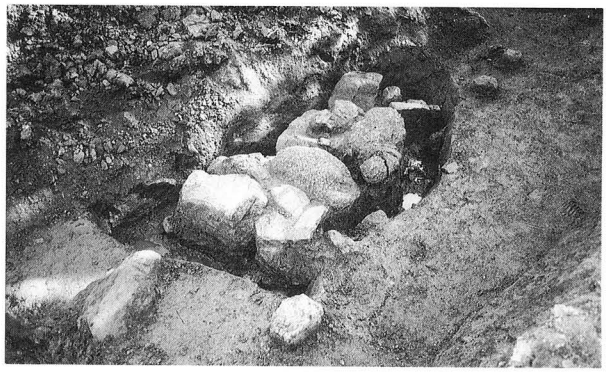
第５図　出土遺物実測図－２（Ｓ＝１／５）

図版一



1区全景（西から）

2区・3区全景（西から）



2区石組み検出状況（南西から）

3区石組み検出状況（東から）

Ⅶ　志紀遺跡第４次調査（ＳＩＫ97－４）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市志紀町西２丁目で実施した公共下水道工事（９－35工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する志紀遺跡第４次調査（ＳＩＫ97－４）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋333－２号　平成９年８月21日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成10年２月13日から３月10日（実働６日）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は32.51㎡を測る。調査においては八田雅美・山内千恵子が参加した。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

本　文　目　次

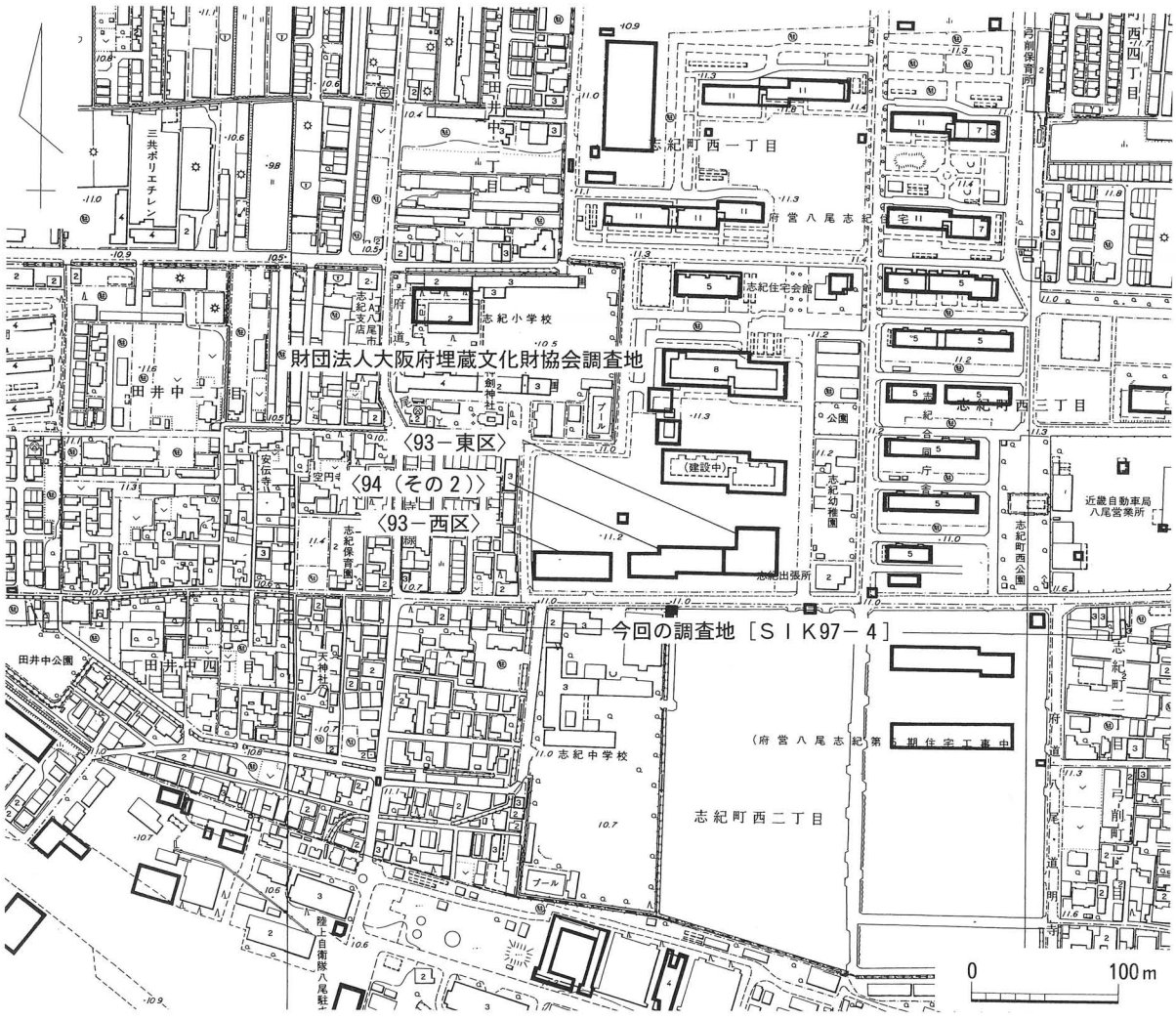
1．はじめに……75
2．調査概要……76
　1）調査方法……76
　2）調査成果……76
3．まとめ……78

Ⅶ　志紀遺跡第４次調査（ＳＩＫ97－４）

１．はじめに

志紀遺跡は、八尾市の南部に位置し、現在の行政区画では志紀町西１～４丁目がその範囲になっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に立地し、同地形上において北西側で老原遺跡、南西側で田井中遺跡に接している。

当遺跡内ではこれまでに、大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会（現、財団法人大阪府文化財調査研究センター）・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの調査が行われており、当調査研究会では一部で田井中遺跡としても調査している。これらの調査成果を概観すると、当遺跡では弥生時代前期から近世にわたって連綿と水田が営まれており、主として生産域としての性格が確認されている。なお今回の調査地は南西側の田井中遺跡との境界に位置している。この付近では、財団法人大阪府埋蔵文化財協会による府営住宅建て替えに伴う調査（以下、北側調査地）が実施され、〈93－西区〉及び、〈94（その２）〉の西部では弥生時代中期の環濠と考えられる大溝群が検出された。そしてこの環濠によって、『集落域としての田井中遺跡』と『生産域としての志紀遺跡』が画されると想定されている。[註1]



第１図　調査地位置図（Ｓ＝１/5000）

2．調査概要

1）調査方法

今回の調査は公共下水道工事に伴う調査で、当調査研究会が志紀遺跡内で実施した第４次調査にあたる。発掘調査対象地は道路上に位置する立孔部分で、平面形はＬ字形を呈し、調査面積は32.51㎡である。

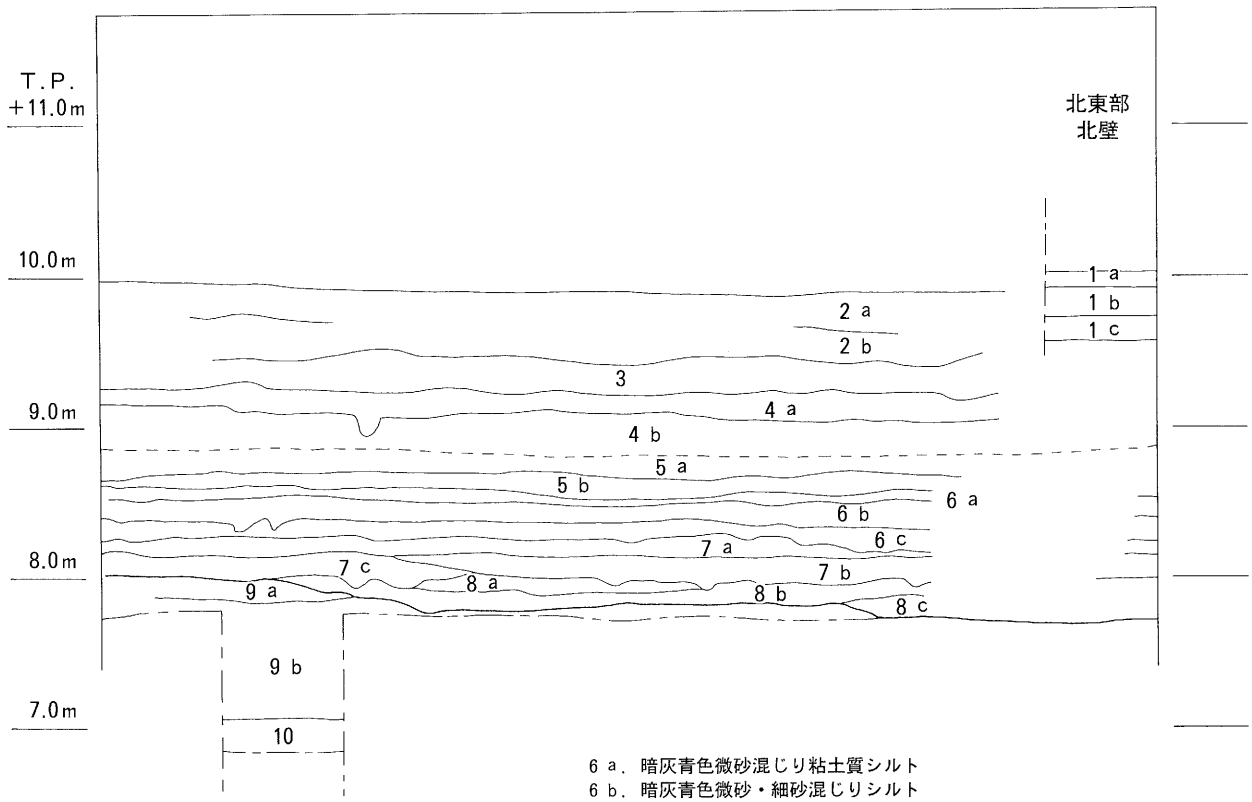
調査開始時には現地表下約1.8ｍまでの掘削が終了していた。その後現地表下約3.0ｍまでを機械掘削し、ここまでは調査区西壁及び北東部において断面の観察を実施した。そして以下の約1.0ｍは、西壁を残しながら人力掘削により層理に従って調査を実施した。さらに、工事深度である現地表下約4.9ｍまでについては、機械掘削により調査地南部で土層確認調査を実施した。

2）調査成果

ここでは基本層序と出土遺物について述べる。

第１層は調査区北東部の一部で確認した。西壁での第２層とは様相が異なり、東部に落ち込み状の堆積があったのかもしれない。

第３層の砂を基調とする層は、南部は微砂、北部ほど細砂が優勢となる。桃の種が出土している。レベル的にみて北側調査地で確認されている奈良時代の洪水砂層と考えられる。



1ａ．灰色微砂多混じり粘質シルト
1ｂ．灰色微砂混じり粘質シルト
1ｃ．灰色シルト
2ａ．褐灰色微砂混じりシルト質粘土
2ｂ．褐灰色シルト質粘土（炭酸カルシウム含む）
3．灰褐色シルト混じり微砂～細砂
4ａ．褐灰色シルト混じり粘土
4ｂ．灰褐色粘土
5ａ．暗灰青色シルト質粘土
5ｂ．灰色微砂混じりシルト質粘土
6ａ．暗灰青色微砂混じり粘土質シルト
6ｂ．暗灰青色微砂・細砂混じりシルト
6ｃ．暗灰緑色微砂混じり粘土質シルト
7ａ．暗褐色粘土質シルト（青灰色シルトをブロック状に含む）
7ｂ．黒褐色微砂混じり粘土
7ｃ．黒褐色微砂・細砂混じり粘土
8ａ．灰青色微砂混じり粘質シルト
8ｂ．灰青色微砂混じりシルト
8ｃ．青灰色シルト～細砂
9ａ．灰色～暗灰色シルト混じり微砂・細砂
9ｂ．黄褐色～明灰色細砂
10．明褐色粘土質シルト（植物遺体多く含む）

第２図　調査区西壁（Ｓ＝１/50）

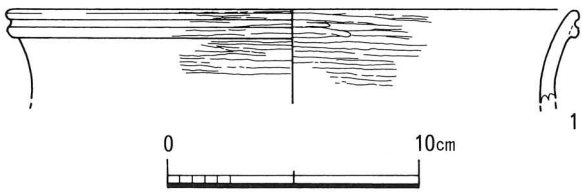
第４層は水平な堆積の粘土層であり、第4b層の上面では第4a層を埋土とする窪みが断面で確認できる。古墳時代頃の水田耕土の可能性がある。

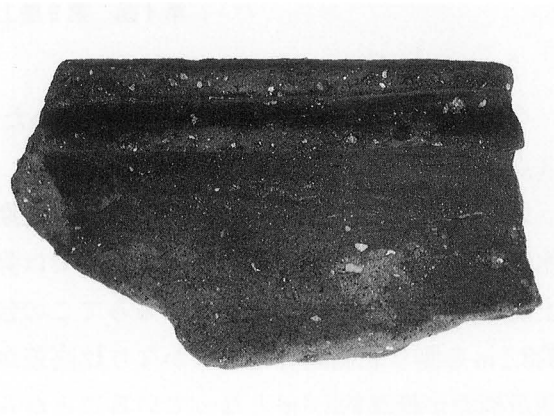
標高約8.8ｍの第５層上面までは機械により掘削しており、面的な調査は実施していない。ここまでの出土遺物は、第２層から時期不明の土師器片１点、また層位不明であるが平安時代後期頃に比定される瓦器椀片１点がある。

第５層・第６層は、ほぼ水平な堆積を呈する灰色～暗灰青色のシルト～粘土質シルトであり、非常に粘性が強く水成層と思われる。水田遺構の可能性もあるが、第5b層・6a層・6b層上面での精査では、畦畔や足跡は検出されなかった。北側調査地〈93－東区〉で確認されている沼状遺構に準ずる堆積かもしれない。

第７層は暗褐色～黒褐色の粘土層で、第7a層は青灰色シルトをブロック状に含み撹拌されたような状況である。層相からみて北側調査地で弥生時代前期水田面を形成している層と考えられるが、第7a・7b層上面では畦畔・足跡等は認められなかった。

第7b層北西部からは縄文土器が１点出土している（１）。形式的には滋賀里Ⅳ期頃に比定される深鉢で、口縁部外面やや下位に１条の無文突帯を巡らせるものである。調整は内外面ヘラミガキで、口縁端部から突帯にも及んでおり、共に面を成している。口縁端部と突帯の間にもヘラミガキが施され、そのため口縁端部が外方に肥厚したように見える。胎土は褐色を呈し、雲母・角閃石を多く含んでいる。時期的には晩期中葉～後葉に位置付けられる。破片１点のみの出土であり、第７ｂ層が包含層と捉えられるかどうかは明確にしえない。



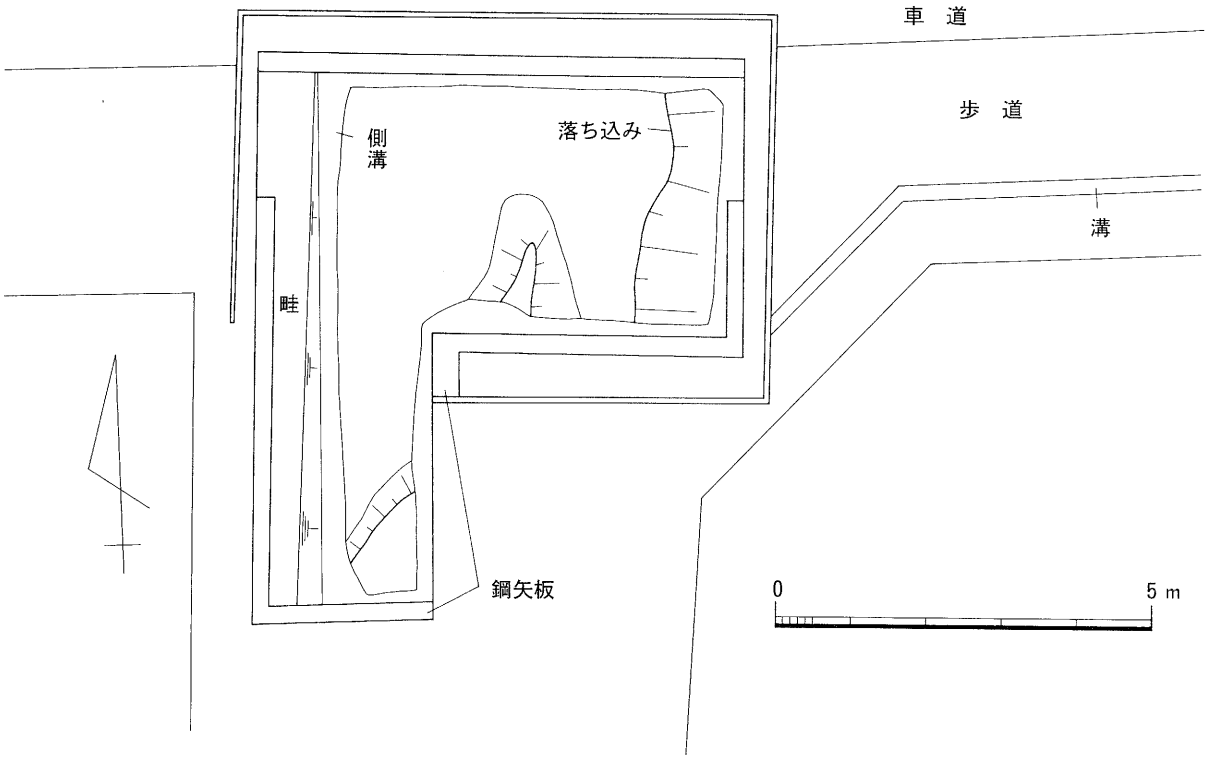


第３図　第７ｂ層出土遺物（Ｓ＝１/３　※写真は約１/１）

第８層以下は水成層の状況である。第９層の砂層上面は南から北に向かってなだらかに下がる状況がみられ、調査区内で約30㎝の比高差がある。さらに調査区東端では、南北方向の蛇行する肩を成して東に深さ約20㎝落ち込んでおり、調査区外に続いている。この部分の埋土は第８ｂ層と同様である。自然の堆積状況と考えられるが、あるいは落ち込み・溝等の遺構である可能性もある。

第９層は砂層で、第9b層はほぼ均質な細砂からなり、明瞭なラミナもみられず洪水砂層と捉えられる。南部では層厚約1.0ｍを測る。第9b層上部は鉄分の浸透により黄褐色を呈する。

第10層は調査区南部での下層調査で確認した。植物遺体を多量に含む有機物層である。



第4図　第9層上面平面図（S＝1/100）

3．まとめ

今回の調査では、縄文時代から中世にわたる土層の堆積状況を確認した。また出土遺物は土器3点であった。

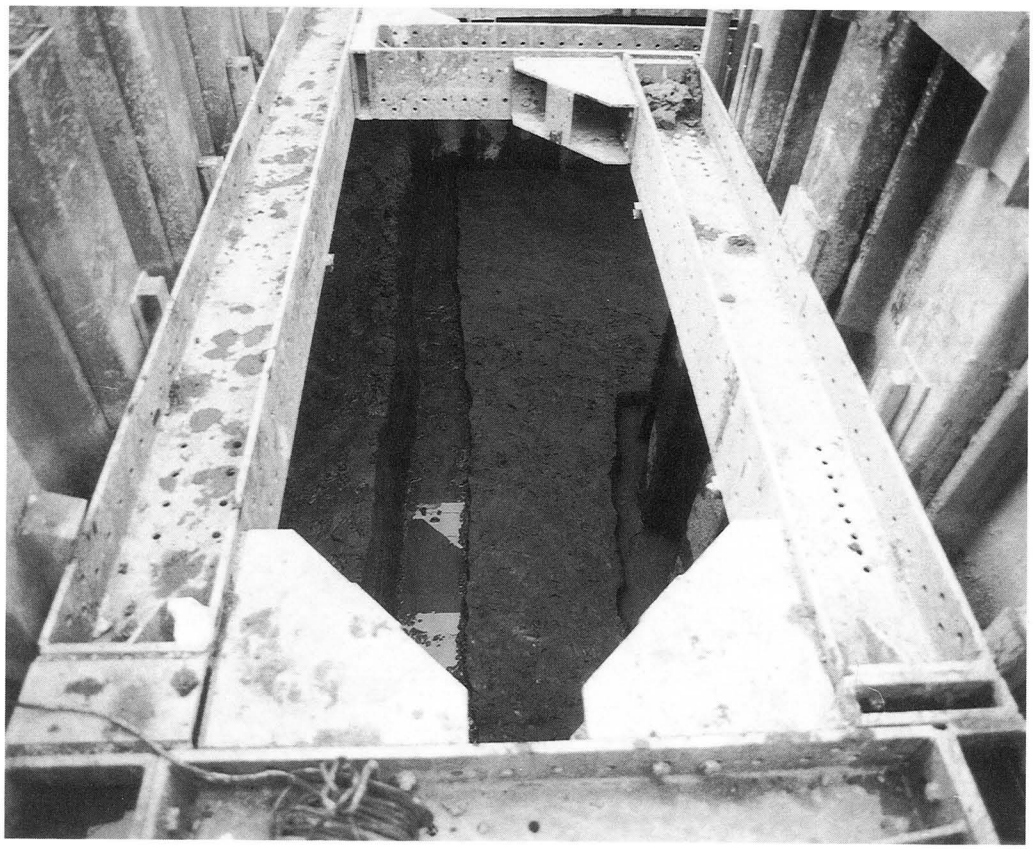
北側調査地では標高約7.5mで縄文時代晩期の包含層がみられ、その上面には弥生時代前期の水田が営まれており、また標高約8.3mでは弥生時代中期の環濠群が検出されている。今回縄文土器が出土した第7b層は層相からみてこの包含層に対応するものと考えられる。第7b層は標高約8.1mを測り北側調査地とはかなり比高差があるが、南約250mの田井中遺跡域での弥生時代前期遺構面が標高約8.6mとなっていることからみても、縄文時代～弥生時代の遺構面は南にゆくほど高くなるようである。

北側調査地では、弥生時代前期以降の水田遺構や、弥生時代中期の環濠群が検出されており、今回の調査でもこれらの遺構の拡がりが予想された。しかし弥生時代前期水田に相当する層位は認められたものの、明確に水田遺構と捉えられる状況はみられず、畦畔や足跡も検出されなかった。また環濠群は当地には及んでいないものと思われ、当調査地は最も外側の環濠より東に位置しているのであろう。

註

註1　西川寿勝　1995「志紀遺跡」『㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第91輯』財団法人大阪府埋蔵文化財協会

第7層上面（北西から）



第9層上面（南から）

図版二

第9層上面落ち込み（西から）

西壁第5層～第9層

Ⅷ　田井中遺跡第16次調査（ＴＮ97－16）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市田井中４丁目地内に所在する公共下水道工事（８－８工区）に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する田井中遺跡第16次調査（ＴＮ97－16）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋第247－３号　平成８年７月17日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成８年４月24日～５月１日（実働５日）にかけて、古川晴久を担当者として実施した。調査面積は、約７㎡である。現地調査においては、朝田　要・坂田典彦・西村和子が参加した。

1．内業整理は上記以外に中前和代・村井俊子・村田知子が参加し、平成10年10月に終了した。

1．本書の執筆・編集は、古川が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……81

2．調査概要……82

　1）調査の方法と経過……82

　2）層序……82

　3）検出遺構と出土遺物……84

3．まとめ……85

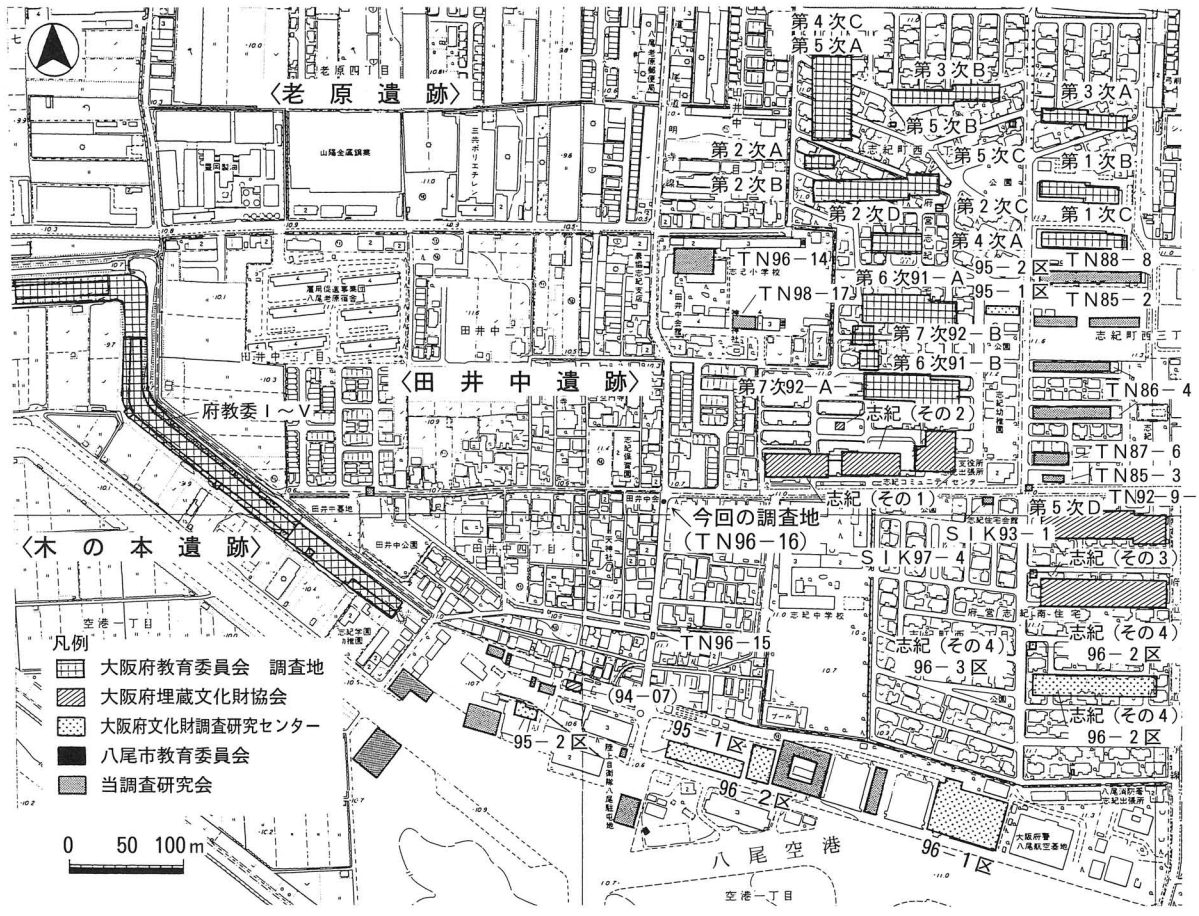
Ⅷ　田井中遺跡第16次調査（ＴＮ97－16）

１．はじめに

田井中遺跡は、八尾市の南東部に位置し、現在の行政区画では田井中１～４丁目・空港１丁目の一部にかけて所在する。田井中遺跡は、地理的に旧大和川の主流であった長瀬川の左岸に位置し、羽曳野丘陵先端の低位段丘上にある。同地形上で、北に老原遺跡、東に志紀遺跡・弓削遺跡、南西に木の本遺跡が位置する。また、長瀬川の北側には、東弓削遺跡・中田遺跡がある（第１図）。

田井中遺跡は、陸上自衛隊八尾駐屯地内での下水道工事の際、弥生土器が出土したことにより知られるようになった。昭和57年（1982）年度から大阪府教育委員会、㈶大阪府埋蔵文化財協会、㈶大阪府文化財調査研究センター、八尾市教育委員会、当調査研究会による十数次の発掘調査が実施されており、縄文時代晩期から近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地から南東300ｍにある八尾空港北濠と陸上自衛隊の西端周辺の調査において、弥生時代前期の遺構・遺物が多数検出されている。また、今回の調査地から東200ｍ地点の府営住宅の建て替えに伴う調査【志紀（その２）】において、弥生時代中期に比定される集落をめぐっていたとみられる大溝群が確認されている。



第１図　調査地周辺図

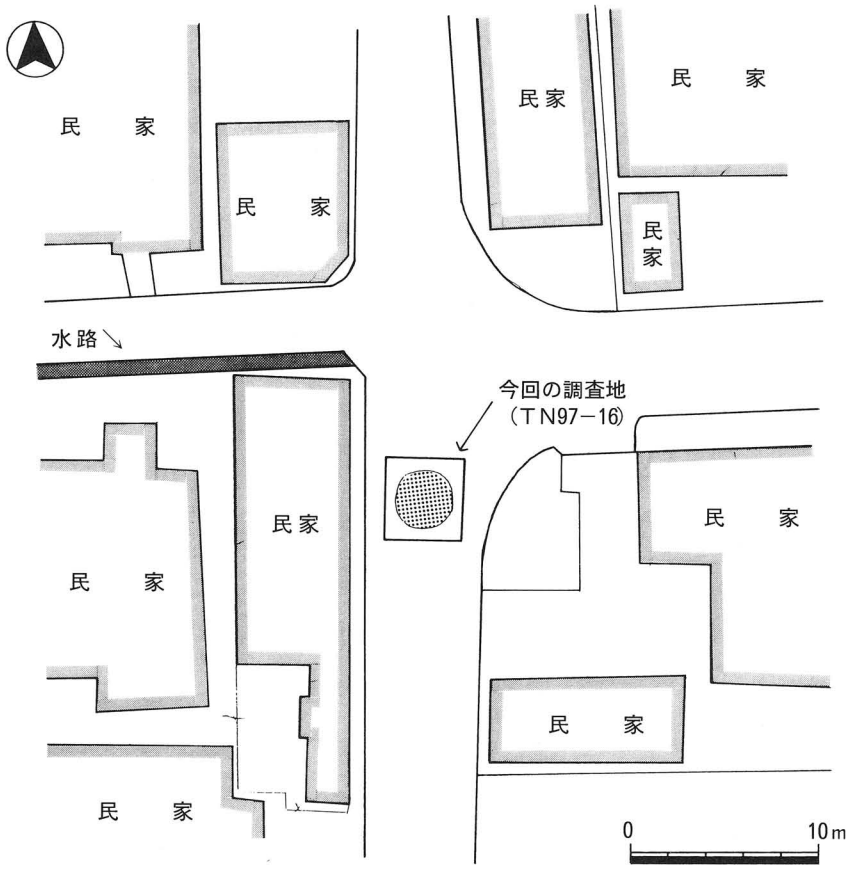
2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事の発進立坑設置（ライナー）に伴うもので、当調査研究会が田井中遺跡内で実施した第16次の調査にあたる。調査地は１箇所で、平面形が円形（直径3.0ｍ）を呈するライナープレート内の約７㎡を調査対象とした（第２図）。

掘削方法は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表（Ｔ.Ｐ.＋11.45ｍ）から約2.5ｍ前後を機械掘削、それ以下約3.5ｍについて人力掘削を主に行い、状況に応じて機械掘削を併用した。土層断面観察のため北壁を残しながら掘削を行い調査を進めた。

調査期間は、平成９年４月24日～５月１日までの実働５日間である。



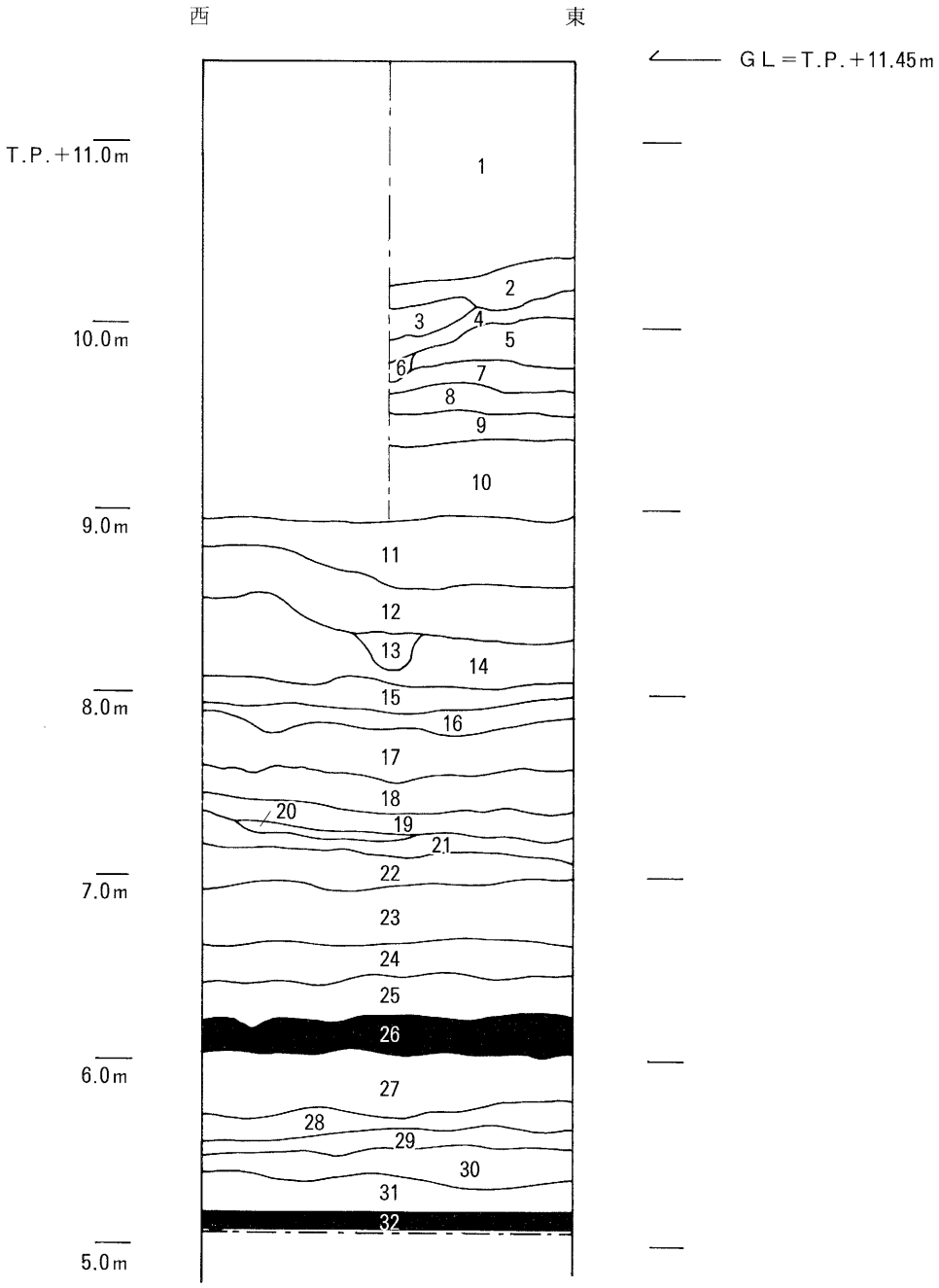
第２図　調査地位置図（Ｓ＝１/400）

2）層序（第３図）

調査の結果、現地表（Ｔ.Ｐ.＋11.45ｍ）下から約1.1ｍで旧の耕作土層（第２層）とみられる堆積を確認した。それ以下、第７層までは砂礫混じりの攪拌された砂質シルトを中心とする堆積で、遺物も少量含まれている。洪水層とみられる第８層の下部で、周辺の調査で確認されている平安時代末～鎌倉時代にかけての水田面に対応するとみられる粘性の強い灰色シルト質粘土（第９層）がみられる。第10層～第15層は、粘性の非常に強い粘土が厚く堆積している。第16層～第23層は、シルト層を主体としている。第26層は、灰黒色粘土（黒色粘土帯）で攪拌の及ばない純粋な堆積をしている。第27層～第31層は、無遺物層で沖積地に特有な緑灰色～暗灰色を基調とす

る粘性・しまりが共に強い粘土の堆積が認められた。最終掘削面の第32層において、第26層と堆積が似ている灰黒色粘土を確認した。層中に植物遺体を少量含んでいる。形成時期を示す遺物は出土していないが、中河内地域一帯で確認されている黒色粘土層に対応するとみられる。

以下、土層断面図と各層名の一覧を挙げる。



第３図　土層断面図（北壁）（Ｓ＝１/40）

第１層　現代盛土。層厚1.25ｍ。バラス・コンクリート塊・南北にはしるヒュームを含む。
第２層　灰色砂質シルト。層厚0.12～0.2ｍ。ややしまりあり。（旧耕土?）。
第３層　灰色シルト。層厚0.17ｍ。
第４層　青灰色砂質シルト。層厚0.15ｍ。
第５層　緑灰色シルト。層厚0.1～0.27ｍ。しまり弱い。
第６層　灰色砂質シルト。層厚0.1ｍ前後。
第７層　灰色粗粒砂混じり砂質シルト。層厚0.15ｍ前後。ややしまりあり。
第８層　灰色シルト。層厚約0.1ｍ。しまり弱い。（洪水層）
第９層　灰色シルト質粘土。層厚0.15～0.2ｍ。粘性強い。（平安時代～鎌倉時代にかけての水田面？）
第10層　灰色粘土。層厚0.4ｍ。粘性が強く、炭酸カルシウムを均一に含む。
第11層　暗褐色細粒砂混じり砂質シルト。層厚0.15～0.35ｍ。
第12層　暗緑灰色細粒砂混じりシルト質粘土。層厚0.3ｍ。しまり強い。
第13層　暗褐色シルト質粘土。層厚最大0.2ｍ。粘性が強く、灰白色の粘土ブロックを均一に含む。
第14層　灰色砂質シルト。層厚0.25～0.45ｍ。ややしまりが強い。
第15層　青灰色粘土。層厚0.15ｍ。粘性が非常に強い。
第16層　灰黒色～緑灰色シルト。層厚0.1～0.15ｍ。しまり弱い。
第17層　緑灰色シルト。層厚0.15～0.3ｍ。しまり強い。
第18層　青灰色シルト。層厚0.15～0.2ｍ。ややしまりがあり、細礫が少量混じる。
第19層　青灰色極細粒砂混じり砂質シルト。層厚0.1～0.15ｍ。
第20層　灰白色シルト。層厚0.05ｍ。しまり弱い。
第21層　緑灰色シルト。層厚0.05～0.2ｍ。しまり弱い。極細粒砂が少量混じる。
第22層　緑灰色シルト質粘土。層厚0.1～0.25ｍ。粘性があり、層中に植物遺体を少量含む。
第23層　緑灰色シルト。層厚約0.5ｍ。しまり強い。
第24層　茶褐色粘土。層厚0.15～0.2ｍ。粘性が非常に強い。植物遺体を少量含む。
第25層　青灰色粘土。層厚約0.2ｍ。粘性が強い。植物遺体を均一に含む。
第26層　灰黒色粘土。層厚0.15～0.2ｍ。粘性が非常に強い。（黒色粘土帯）
第27層　緑灰色シルト質粘土。層厚0.25～0.35ｍ。しまり強い。
第28層　明緑灰色砂質シルト。層厚0.05～0.15ｍ。しまり強い。
第29層　暗緑灰色シルトと灰白色細粒砂の互層。層厚0.05～0.1ｍ。
第30層　暗茶褐色シルト質粘土。層厚0.15～0.25ｍ。しまりがあり、極細粒砂が少量混じる。
第31層　暗灰色粘土。層厚0.15ｍ。粘性が非常に強く、炭化物を少量含む。
第32層　灰黒色粘土。層厚0.1ｍ以上。粘性が非常に強い。（黒色粘土帯・最終掘削面）

３）検出遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構は検出されなかった。出土遺物は、第２層・第３層内から近世に比定される肥前系磁器碗の口縁部片１点・底部片２点が出土した。第７層・第８層内からは、時期不明の土師器片１点と平瓦片２点、第14層の下部から時期不明の土師器片１点が出土した。いずれの

遺物も小片のため図示できない。

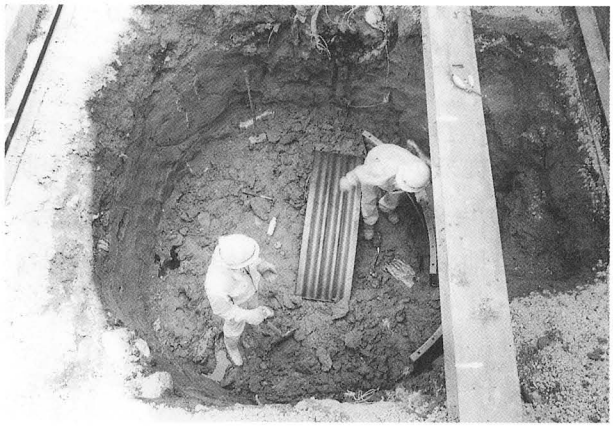
3．まとめ

今回の調査地は、田井中遺跡内の中央東よりに位置し、従来から想定されている弥生時代中期の集落範囲内に含まれているが、遺構・遺物は確認できなかった。しかし、小面積の調査にもかかわらず深層部分まで土層断面観察が実施でき、周辺調査地の成果も含めて景観復原の一助になることを期待する。

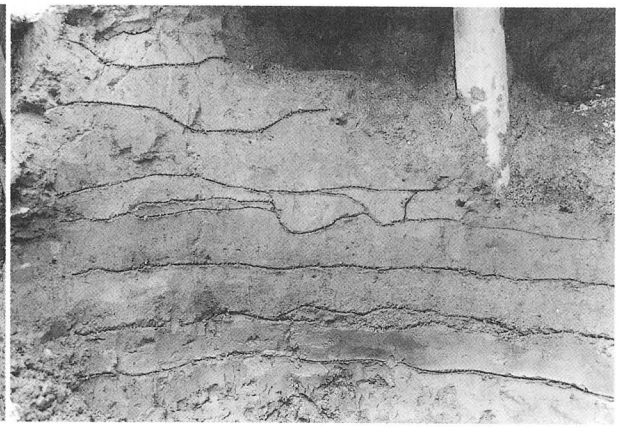
参考文献

・亀島重則　1991『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会
・西川寿勝　1995『志紀遺跡』㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第91輯　㈶大阪府埋蔵文化財協会
・岩崎二郎　1998『志紀遺跡（その４）』㈶大阪府文化財調査研究センター

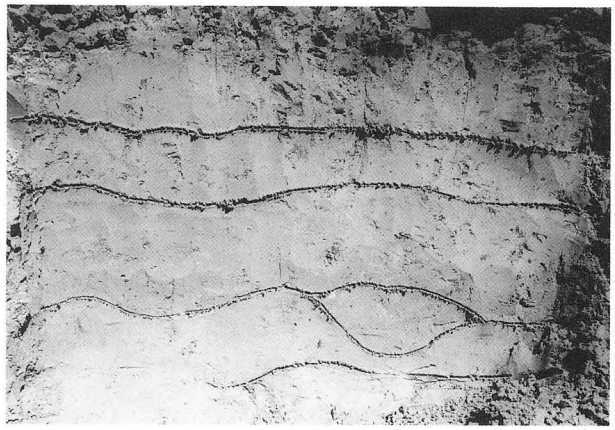
図版



掘削状況（T.P.＋10.4～9.2m）東から



西壁土層断面（T.P.＋10.4～9.2m）東から



北壁土層断面（T.P.＋9.2～8.1m）南から

北壁土層断面（T.P.＋8.1～6.7m）南から

調査状況・東から

北壁土層断面（T.P.＋6.7～5.3m）南から

Ⅸ　竹渕遺跡第８次調査（ＴＫ97－８）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市竹渕東３・４丁目地内で行った、公共下水道工事（９－27工区）に伴う発掘調査の報告である。
1．本書で報告する竹渕遺跡第８次調査（ＴＫ97－８）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋423－２号　平成９年10月２日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成９年12月12日から平成10年３月31日（実働５日）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1．調査面積は約23㎡を測る。
1．現地調査には中西明美・宮崎寛子が参加した。

本　文　目　次

1　はじめに……87
2　調査概要……89
　1）調査の方法と経過……89
　2）１区の概要……89
　3）２区の概要……89
　4）３区の概要……90
　5）４区の概要……90
　6）５区の概要……91
3　まとめ……91

Ⅸ　竹渕遺跡第８次調査（ＴＫ97－８）

１．はじめに

竹渕遺跡は、八尾市の中央部西端、亀井地区のさらに西側に飛び地状に位置する竹渕地区のうちの中央部から東部がその範囲で、行政区画では竹渕１～５丁目、竹渕東１～４丁目にあたる。当遺跡の北には加美遺跡・加美北遺跡（大阪市）、北東には久宝寺遺跡、南東には城山遺跡（大阪市）、東には亀井遺跡などがあり、付近一帯は遺跡の密度の高い地域である。

当地では、昭和57（1982）年６月、竹渕小学校校舎・体育館建替えに先立つ試掘調査で、校舎予定地から古墳時代後期の遺物包含層が確認されたため、遺跡として周知された。この結果、昭和57（1982）年10月～11月、当調査研究会が校舎予定地内で第１次調査（第１図－①）を行なうこととなった。第１次調査では、T.P.＋6.8ｍで、古墳時代後期の竪穴住居１棟・土坑２基・溝７条などからなる集落跡が検出された。その後は開発自体も少なく、大規模な発掘調査は行われていなかった。

次いで平成２（1990）年１月～３月、遺跡東部の竹渕東２丁目地内で行われた第２次調査（②）では、T.P.＋5.8～6.3ｍの間で、弥生時代中期の土器棺や溝などの遺構と、弥生時代前期の土器類が検出された。この調査は公共下水道に伴うもので、点在する４ヵ所の立坑を対象に行なっており、遺跡東部では、亀井遺跡とつながるであろう弥生時代の遺構面のあることが明らかになった。

平成４（1992）年9月には、第１次調査地から東約170ｍの竹渕東３丁目80－３で、第３次調査（③）が行なわれた。この調査では、弥生時代前期（T.P.＋6.4ｍ）・古墳時代後期（T.P.＋7.0ｍ）・平安時代前期（T.P.＋7.8ｍ）の各遺構面が検出された。なかでも古墳時代後期の方墳が検出されたことによって、第１次調査地の集落に対応する墓域の存在が明らかになったことと、下層部分に弥生時代前期の遺構面が広がっていることが明らかになった。

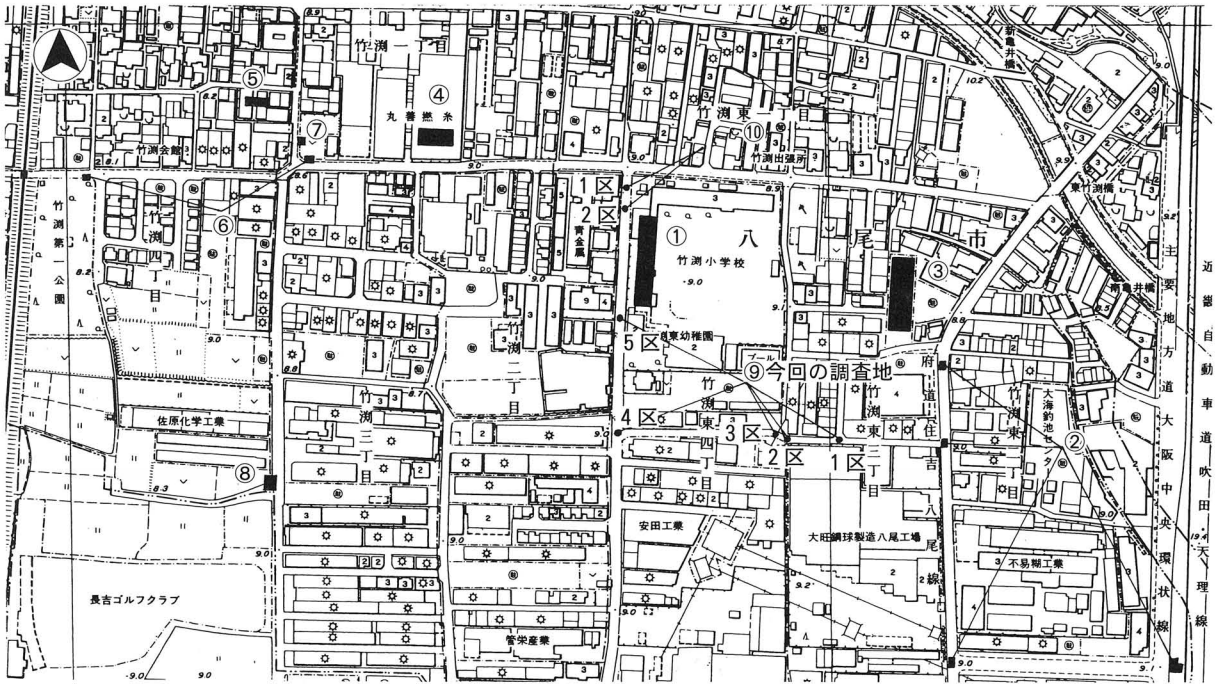
平成７（1995）年度以降は遺跡西部でも、市教育委員会・当調査研究会による５件の調査が行われ、新たな時代の生活面も検出されている。

まず、平成７年６月に第１次調査地から北西約150ｍの竹渕１丁目223－1他で行なわれた第４次調査（④）では、当遺跡ではじめて古墳時代前期の遺構面が検出された。続いて同年９月～10月、そこから西100ｍ地点の竹渕４丁目33－１で行なわれた第５次調査（⑤）では、T.P.＋5.8ｍで古墳時代中期末～後期初頭とT.P.＋7.7ｍで平安中期以降の遺構・遺物が検出された。さらにそこから南側約50ｍの竹渕１・４丁目地内で、同年10月に行なわれた第６次調査（⑥）では、T.P.＋5.4ｍで古墳時代前期初頭の遺構のほか、平安時代中期～後期の遺物包含層が確認されている。

次いで平成８年３月に市教育委員会が第６次調査地－１区の北側で行なった調査（⑦）では、T.P.＋5.5ｍで、布留式土器の集積が検出された。平成８（1996）年６月には、これらの調査地から約200ｍ南に位置する竹渕３・４丁目地内で第７次調査（⑧）が行なわれ、古墳時代から平安時代頃に対応する氾濫原状の土層堆積が確認された。この調査地は竹渕遺跡内の南西端にあたる。

平成10年２月、本調査と前後して竹渕東１・４丁目地内で実施した本書★第９次調査（⑩）では、第１次調査地の溝に続く可能性のある土層堆積を確認している。この調査地は、第１次調査地の北西10ｍほどの位置にある。

これらの調査結果から、当遺跡東部では、東隣の亀井遺跡との関連から、下層部分に弥生時代の遺構面のあること、遺跡西部では古墳時代前期の遺構面のあること、さらに古墳時代中期・後期と平安時代中期以降の各遺構面が重複して存在していることが明らかになっている。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/5000）

周辺の調査一覧表

番号	略　号	調査所在地	面積（㎡）	調　査　期　間（実働）	調査原因	検　出　遺　構
①	TK82－１	竹渕15他	832.3	82.10／25～11／20（28日）	小学校校舎建替え	古墳後期－竪穴住居１・土坑２・溝７
②	TK89－２	竹渕東２丁目地内	127	90.１／12～３／31（10日）	公共下水道	弥生中期－土器棺・溝２・河川１ 弥生中末－溝３
③	TK92－３	竹渕東３丁目80－３	360	92.９／７～９／26（15日）	工場建替え	弥生前期－土坑１、古墳後期－方墳１ 平安前期－土坑１、近世末期－井戸２
④	TK95－４	竹渕１丁目223－１他	64	95.６／19～６／30（９日）	共同住宅建設	古墳前期－溝１
⑤	TK95－５	竹渕４丁目33－１	135	95.９／25～10／４（８日）	共同住宅建設	古墳中期末～後期初頭－土坑６・小穴５ 平安中期以降－焼土坑１
⑥	TK95－６	竹渕１・４丁目地内	69	95.10／12～10／28（６日）	公共下水道	１区：古墳前期初頭－落込１ ２区：古墳前期・平安中～後期－包含層
⑦	94－478	竹渕１丁目地内	40.96	96.３／23	公共下水道	古墳前期－布留式土器集積
⑧	TK96－７	竹渕３・４丁目地内	37	96.６／28～７／13（４日）	公共下水道	なし
⑨	TK97－８	竹渕東３・４丁目地内	23	97.12／12～98.３／31（５日）	公共下水道	今回報告
⑩	TK97－９	竹渕東１・４丁目地内	8	98.１／12～２／６（３日）	公共下水道	今回報告（X）

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（９－27工区）に伴うものである。調査対象となったのは、人孔（マンホール）部分５か所である。５ヵ所の調査区は、南側を東から１区～３区、西側を南から４区・５区と呼び、工程にしたがって１区から順次調査を行うこととなった。

２）１区の概要

１区は第２次調査（②）－３区の西70ｍ地点に位置し、北西170ｍには第１次調査地点（①）、北北西100ｍには第３次調査地点（③）がある。１区は平成９年12月13日に調査を実施した。調査面積は約４㎡、掘削深度は現地表から約3.5ｍである。

地表面の標高はT.P.＋9.265ｍ、盛土は0.9ｍなされている。103層以下が近世以降の水路と一致しており、護岸の杭や板材などが遺存していた。水路内部の土層堆積は、上層から1.2～1.3ｍまではシルト主体（103～107層）、次に粗砂（108層）があり、下層には植物遺体を含む暗灰褐色礫混じり粘土（109層）、最下層には暗灰色粘土（110層）が堆積する。底までの深さは現地表から約3.5ｍ、レベル高はT.P.＋5.8ｍを測る。

101層：黒灰色砂質シルトは旧耕土で層厚約0.1ｍ、上面の標高はT.P.＋8.4ｍ前後を測る。
102層：灰色砂質シルトは旧耕土の床をなすもので、礫を少量含む。（層厚0.1ｍ前後）
103層：淡青灰色粘質シルト（0.3～0.4ｍ）
104層：淡青灰色粘質シルトと粗砂の互層、酸化鉄を含み、105層の窪みに堆積する。（0～0.3ｍ）
105層：灰青色粘質シルト、礫を少量含み、上面に凹凸がある。（0.2～0.3ｍ）
106層：淡青灰色砂質シルト～微砂　層厚（0.6～0.7ｍ）
107層：淡青灰色砂質シルトと灰褐色粘質シルトの互層（0.2ｍ前後）
108層：灰色粗砂（0.4ｍ）
109層：暗灰褐色粘土、植物遺体・礫を含む。（0.2ｍ）
110層：暗灰色粘土（0.35ｍ以上）

３）２区の概要

２区は１区から西35ｍ地点に位置し、12月15日に調査を実施した。調査面積は約４㎡、掘削深度は現地表から約3.3ｍである。

現地表の標高は、T.P.＋9.095ｍ、盛土の厚さは0.4ｍである。ここでも203層以下が近世の水路と一致しており、１区と同様の土層堆積が認められたが、最深部に植物遺体を含む粘土層は認められなかった。底の深さは現地表面から約3.2ｍ、レベル高はT.P.＋5.9ｍを測る。

201層：黒灰色砂質シルトは旧耕土で、層厚0.15ｍ、上面の標高はT.P.＋8.7ｍ前後を測る。
202層：青灰色砂質シルトは礫を少量含み、旧耕土の床をなすものである。（層厚0.1ｍ）
203層：灰青色砂質シルト（0.2ｍ）
204層：淡青灰色砂質シルトと粗砂の互層（0.3ｍ）
205層：灰色粘質シルトと灰色粗砂の互層（0.3ｍ）
206層：青灰色砂質シルトと灰色粗砂の互層（0.3ｍ）
207層：粗砂に青灰色砂質シルトの互層、近世の遺物が混入する。（0.3ｍ）

208層：青灰色微砂（0.25m）
209層：灰色粗砂に褐色粘土のブロック（0.2m）
210層：灰色粗砂（0.15m）
211層：暗灰色粘土（0.25m以上）

4） 3区の概要

3区は、2区から約10m北西に位置し、12月16日に調査を実施した。調査面積は約4㎡、掘削深度は現地表から約3.5mである。

現地表の標高はT.P.＋9.100m、盛土の厚さは1.1mである。旧耕土・床土は見られず、盛土の直下に、1区・2区で見られた水路の堆積土（301層～309層）がある。また、ここでは調査区の北部で、水路の肩の一部が認められた。

301層：青灰色砂質シルトと微砂の互層、上面の標高はT.P.＋8.0m前後である。（層厚0.4m）
302層：暗青灰色砂質シルト、粗砂を含む、近世の遺物混入。（0.2m）
303層：白灰色粗砂と灰色粘質シルトの互層（0.35m）
304層：暗灰色粘質シルト・青灰色砂質シルト・白灰色粗砂の互層（0.25～0.45m）
305層：黒灰色粘土、炭酸鉄を含む。（0.15～0.4m）
306層：青灰色砂質シルト（0～0.25m）
307層：青灰色砂質シルトに青灰色粘土・明褐色粘土のブロック混入（0.15～0.3m）
308層：黒灰色粘土、灰色微砂少量含む。（0～0.2m）
309層：暗灰色粘質シルトと灰色微砂の互層（0.05～0.2m）
310層：黄灰色粘質シルト（0～0.1m）
311層：明褐色粘土（0～0.25m）
312層：青黒色粘土（0.6m以上）

水路の肩を構成する土層（311層・312層）は、調査区の北隅の現地表下2.1m（T.P.＋7.0m）前後で表われたが、これらの層は古墳時代後期～平安時代の対応層であって、本来の構築面ではない。肩は2段に掘り込まれており、上段は45度程度の角度で深さ約0.8m、下段は直線的で深さ約0.45m、312層青黒色粘土まで掘り込まれている。底の深さは現地表面から約3.3m、レベル高はT.P.＋5.8mを測り、底は平坦である。水路内部の堆積土は青灰色系のシルトが主体で、1区・2区のような粗砂単独の層は見られず、中層には肩の一部をなす層（310層・311層）のブロックを含む層（307層）があり、最下には暗灰色粘質シルトと灰色微砂の互層（309層）が堆積する。

5） 4区の概要

4区は3区から西へ100mに位置し、平成10年3月4日に調査を実施した。調査面積は約4㎡、掘削深度は現地表から約2.6mである。

現地表の標高は、T.P.＋8.97m、盛土の厚さは0.7mで、部分的に既設の水道管などによる掘り込みが1.3m前後にまで達している。

401層：黒灰色砂質シルトは旧耕土で、上面は削平されており、厚さ0.1m前後が遺存している。上面の標高はT.P.＋8.1～8.2m前後を測る。
402層：青灰色砂質シルトは床土で、401層黒灰色砂質シルトを少量含む。（層厚0.2m）
403層：青灰色粘質シルト（0.4m）

404層：青灰色砂質シルトに黒灰色粘土のブロック、近世の遺物の小破片を含む。（0.2～0.4ｍ）
405層：青灰色粘質シルトと灰色微砂との互層（0.3ｍ）
406層：礫（0.05ｍ）
407層：青灰色粘質シルトと黒灰色粘土の互層（0.35ｍ）
408層：灰色粗砂～礫（0.05ｍ）
409層：青灰色微砂（0.4ｍ）
410層：灰色粗砂と青灰色粘質シルトの互層（0.6ｍ以上）

４区では、１区・２区と同様の堆積状況を示しており、409層から切り込む水路の堆積土（405層～408層）が確認できた。409層の上層に堆積する405層は、水路の埋め土の可能性が高く、ブロックを含む汚れた土で、近世の遺物の小破片がきわめて少量出土した。また、水路の肩に沿って杭が打ち込まれ、板材なども遺存していた。水路内部には青灰色粘質シルト主体の互層と礫が交互に堆積している（405層～408層）。水路の底は現地表下2.6ｍ（T.P.＋6.4ｍ）までを確認した。

６）５区の概要

５区は４区から北80ｍに位置し、北75ｍには第９次調査（⑩）－２区がある。平成10年３月31日に調査を実施した。調査面積は約４㎡、掘削深度は現地表から約2.1ｍである。

現地表の標高は、T.P.＋8.79ｍ、盛土の厚さは0.7ｍで、部分的に既設の水道管やガス管などによる掘り込みが1.5ｍ前後にまで達している。

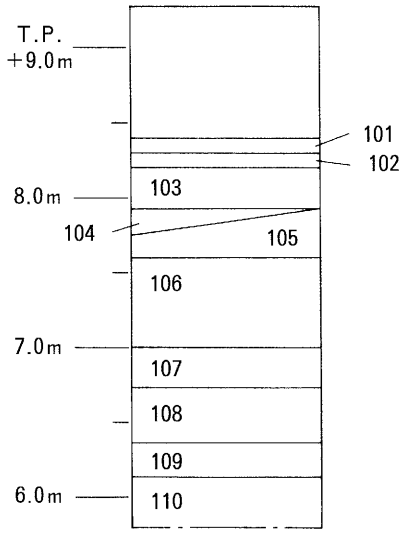
501層：青灰色粘質シルト（層厚0.4ｍ）、上面の標高はT.P.＋8.38ｍ前後を測る。
502層：青灰色礫混粘質シルト（0.1ｍ）
503層：黄褐色礫混粘質シルト（0.1ｍ）
504層：灰褐色粘土、マンガン斑紋がみられる。（0.4ｍ）
505層：暗灰褐色粘土（0.3ｍ）
506層：茶灰色微砂、わずかに水を含む。（0.1ｍ）
507層：灰色粘土（0.2ｍ以上）

５区では水路がなく、１区～４区までと全く異なった土層堆積を示す。503層・504層に遺物（土師質）の小破片が含まれていた。503層以下がこれまで検出されている古墳時代後期～平安時代の土層に対応するものと考えられる。

３．まとめ

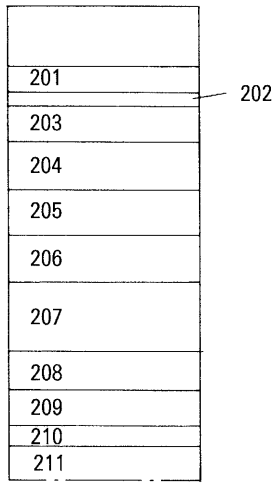
１区～４区は、近世の東西方向の水路と一致していたため、それ以前の遺構・遺物は検出されなかった。５区では、過去の調査で検出された古墳時代後期～平安時代の遺構面に対応する土層を確認した。

1区西側壁面



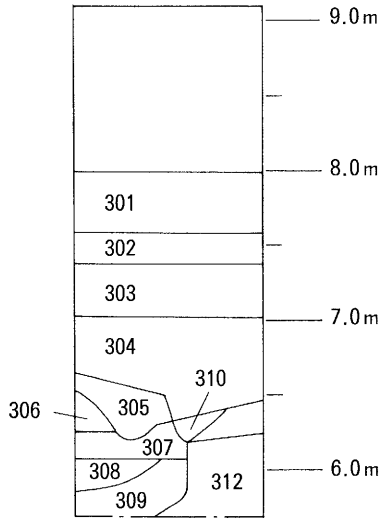
101 黒灰色砂質シルト（旧耕土）
102 灰色砂質シルト（床土）
103 淡青灰色粘質シルト
104 淡青灰色粘質シルト・粗砂の互層（酸化鉄含む）
105 灰青色粘質シルト
106 淡青灰色砂質シルト～微砂
107 淡青灰色砂質シルト・灰褐色粘質シルト互層
108 灰色粗砂
109 暗灰褐色粘土
110 暗灰色粘土

2区西側壁面



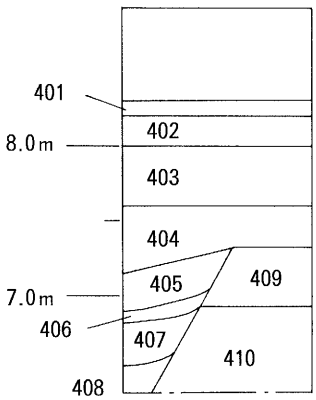
201 黒灰色砂質シルト（旧耕土）
202 青灰色砂質シルト（床土）
203 灰青色砂質シルト
204 淡青灰色砂質シルト・粗砂の互層
205 灰色粘質シルト・粗砂の互層
206 青灰色砂質シルト・粗砂の互層
207 粗砂・青灰色砂質シルトの互層
208 青灰色微砂
209 灰色粗砂に褐色粘土のブロック
210 灰色粗砂
211 暗灰色粘土

3区東側壁面



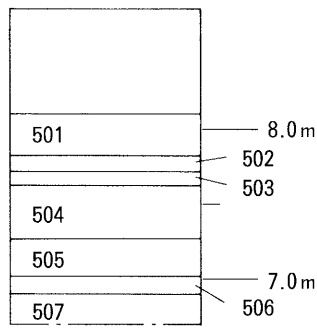
301 青灰色砂質シルトと微砂の互層
302 暗青灰色砂質シルト（粗砂・近世の遺物を含む）
303 白灰色粗砂と灰色粘質シルトの互層
304 暗灰色粘質シルト・青灰色砂質シルト・白灰色粗砂の互層
305 黒灰色粘土（炭酸鉄含む）
306 青灰色砂質シルト
307 青灰色砂質シルトに青灰色粘土・明褐色粘土のブロック混入
309 暗灰色粘質シルトと灰色微砂の互層
310 黄灰色粘質シルト
311 明褐色粘土
312 青黒色粘土

4区西側壁面



401 暗灰色砂質シルト
402 青灰色砂質シルト（黒灰色砂質シルトを含む）
403 青灰色粘質シルト
404 青灰色砂質シルトに黒灰色粘土のブロック
405 青灰色粘質シルト・灰色微砂の互層
406 礫
407 青灰色粘質シルト・黒灰色粘土の互層
408 灰色粗砂～礫
409 青灰色微砂
410 灰色粗砂・青灰色粘質シルトの互層

5区西側壁面



501 青灰色粘質シルト
502 青灰色礫混粘質シルト
503 黄褐色礫混粘質シルト
504 灰褐色粘土
505 暗灰褐色粘土
506 茶灰色微砂
507 灰色粘土

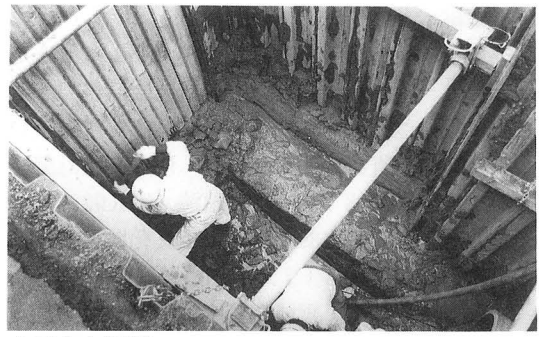
第2図　柱状模式図（S＝1/50）

参考文献

・高萩千秋　1988「Ⅱ　竹渕遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』－水越遺跡・竹渕遺跡・恩智遺跡－㈶八尾市文化財調査研究会報告23　㈶八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1992「Ⅲ　竹渕遺跡（第２次調査）」『平成４年度　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）』㈶八尾市文化財調査究会報告35　㈶八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1993「Ⅻ　竹渕遺跡（ＴＫ92－３）第３次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』㈶八尾市文化財調査研究会報告39　㈶八尾市文化財調査研究会
・吉田野々　1996.3「７．竹渕遺跡（95－38）の調査」『八尾市内遺跡平成７年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告33　平成７年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・米田俊幸　「８．竹渕遺跡（95－179）の調査」　同上
・原田昌則　1996「Ⅹ　竹渕遺跡（第６次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』㈶八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1996「Ⅱ　竹渕遺跡（第４次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』㈶八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　「Ⅲ　竹渕遺跡（第５次調査）」　同上
・米田俊幸　1997「11．竹渕遺跡（94－478）の調査）『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告37　平成８年度公共事業　八尾市教育委員会
・原田昌則・岡田清一　1997「20．竹渕遺跡第７次調査（ＴＫ96－７）」『平成８年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』㈶八尾市文化財調査研究会

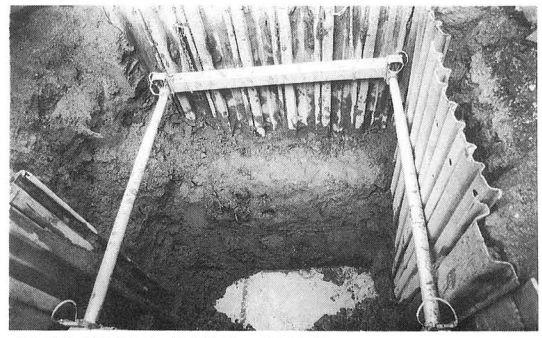
図版一

1区北側壁面（100層～104層）



1区人力掘削

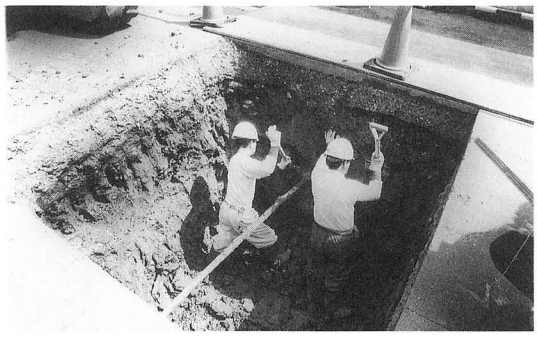
2区北側壁面（200層～205層）



2区北側壁面（206層～211層）

3区人力掘削

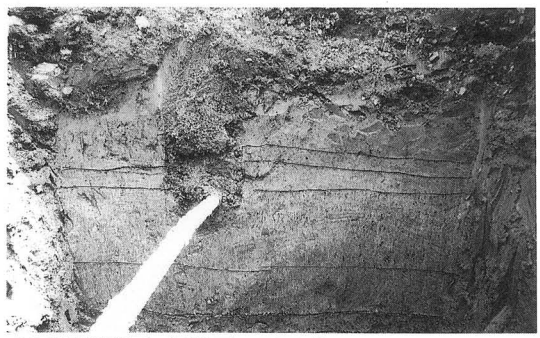
3区西側壁面（304層～312層）



4区人力掘削

4区西側壁面（404層～410層）

5区人力掘削



5区東側壁面（500層～507層）

X　竹渕遺跡第９次調査（ＴＫ97－９）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市竹渕東１・４丁目地内で行った、公共下水道工事（９－67工区）に伴う発掘調査の報告である。
1．本書で報告する竹渕遺跡第９次調査（ＴＫ97－９）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋520－２号　平成９年11月25日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成10年１月12日から２月６日（実働３日）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1．調査面積は約８㎡を測る。
1．現地調査には中西明美・宮崎寛子が参加した。

本　文　目　次

1．はじめに……95
2．調査概要……95
　1）調査の方法と経過……95
　2）１区の概要……95
　3）２区の概要……95
3．まとめ……96

X　竹渕遺跡第９次調査（ＴＫ97－９）

１．はじめに

今回の調査地は竹渕遺跡の東部に位置し、第１次調査地（ＴＫ82－１）市立竹渕小学校の西側道路敷下にあたる。第１次調査地点からは北西10ｍ地点、本書Ⅸ第８次調査地（ＴＫ98－８）の５区からは北80ｍ地点にあたる。調査地・遺跡の環境・周辺の調査概要・文献等は本書Ⅸを参考にされたい。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（９－67工区）に伴うもので、調査対象となったのは、人孔（マンホール）部分２か所である。２ヵ所の調査区は、北を１区・南を２区と呼び、ともに工事による掘削深度まで調査を行った。掘削方法は、工事の進捗状況に合わせ、機械掘削・人力掘削を併用して行った。

１区は平成10年１月12日・26日に調査を実施した。調査面積は約４㎡である。掘削深度は、現地表から3.45ｍまでである。

２区は１区から南14ｍに位置しており、平成10年２月６日に調査を実施した。調査面積は４㎡である。掘削深度は、現地表から2.9ｍまでである。

２）１区の概要

地表面の標高はT.P.＋8.0ｍ程度、盛土は0.7ｍなされている。

101層：旧耕土は厚さ0.3ｍ、上面はT.P.＋8.1ｍを測る。

102層：暗青灰色粘土（層厚0.3ｍ）

103層：褐灰色シルト混じり粘土（層厚0.2ｍ）

104層：黄褐色粘土　（層厚0.4ｍ）

105層：褐灰色シルト混じり粘土（層厚0.5ｍ）

106層：青灰色粘質シルト（層厚0.6ｍ）

107層：暗青灰色粘土、層厚0.45ｍまでを確認した。

３）２区の概要

地表面の標高はT.P.＋8.8ｍ程度、盛土は0.6ｍなされている。

201層：旧耕土の上面は削平され、0.1ｍが遺存している。上面の標高はT.P.＋8.2ｍを測る。

202層：青灰色微砂混じりシルト（層厚0.3ｍ）

203層：青灰色シルトに灰色粗砂・褐色粘土の互層（層厚0.1～0.3ｍ）

204層：青灰色シルトに褐色粘土のブロック層（層厚0.2～0.3ｍ）

205層：青灰色粘質シルト（層厚０～0.2ｍ）

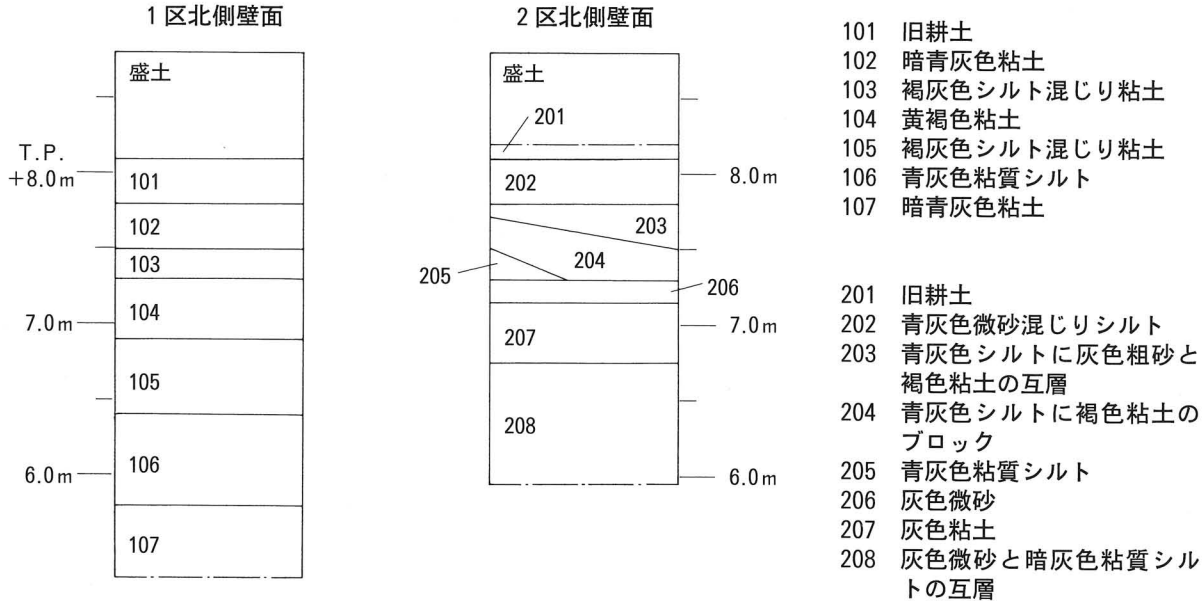
206層：灰色微砂（層厚0.1～0.2ｍ）

207層：灰色粘土（層厚0.4ｍ）

208層：灰色微砂と暗灰色粘質シルトの互層（層厚0.8ｍ以上）

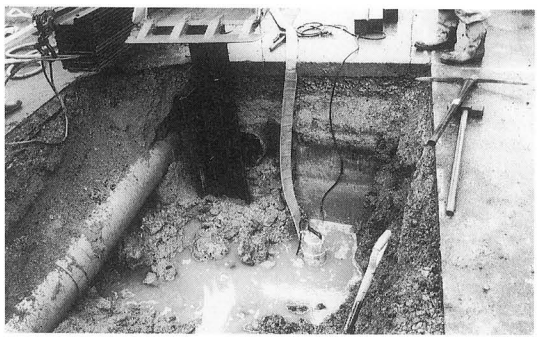
3．まとめ

1区・2区ともに遺構・遺物の検出はなかったが、1区－103～105層の褐色系の粘土が、第1次調査で検出された古墳時代後期～平安時代の遺構面を構成する土層と考えられる。また、2区－203・204層は、第1次調査で検出された溝（ＳＤ２・ＳＤ３）に一致している可能性が高い。



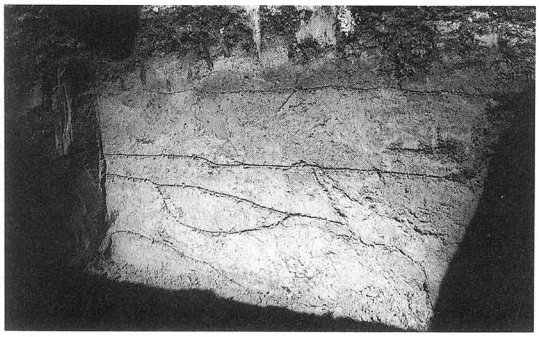
第1図　柱状模式図（Ｓ＝1/50）

図版一

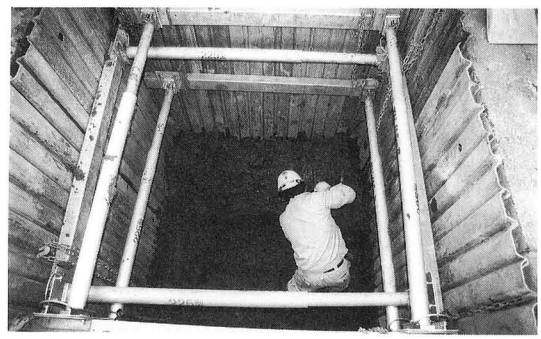


1区北側壁面（上層）

1区北側壁面（下層）



2区北側壁面（上層）



2区調査風景

XI　中田遺跡第39次調査（ＮＴ97－39）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市中田１丁目地内で行った公共下水道工事（９－63工区）に伴う中田遺跡第39次発掘調査（ＮＴ97－39）の報告書である。
1．本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書（八教社文第埋481－２号　平成９年11月５日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成９年11月18日から11月21日（実働４日）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は、約13.0㎡である。
1．内業整理は、調査終了後随時行い、平成10年10月に終了した。
1．現地調査および内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである（五十音順）。
　市森千恵子・八田雅美・山内千恵子
1．本書の執筆・編集は森本が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……97
2．調査概要……98
　1）調査の方法と経過……98
　2）基本層序……98
　3）検出遺構と出土遺物……100
3．まとめ……100

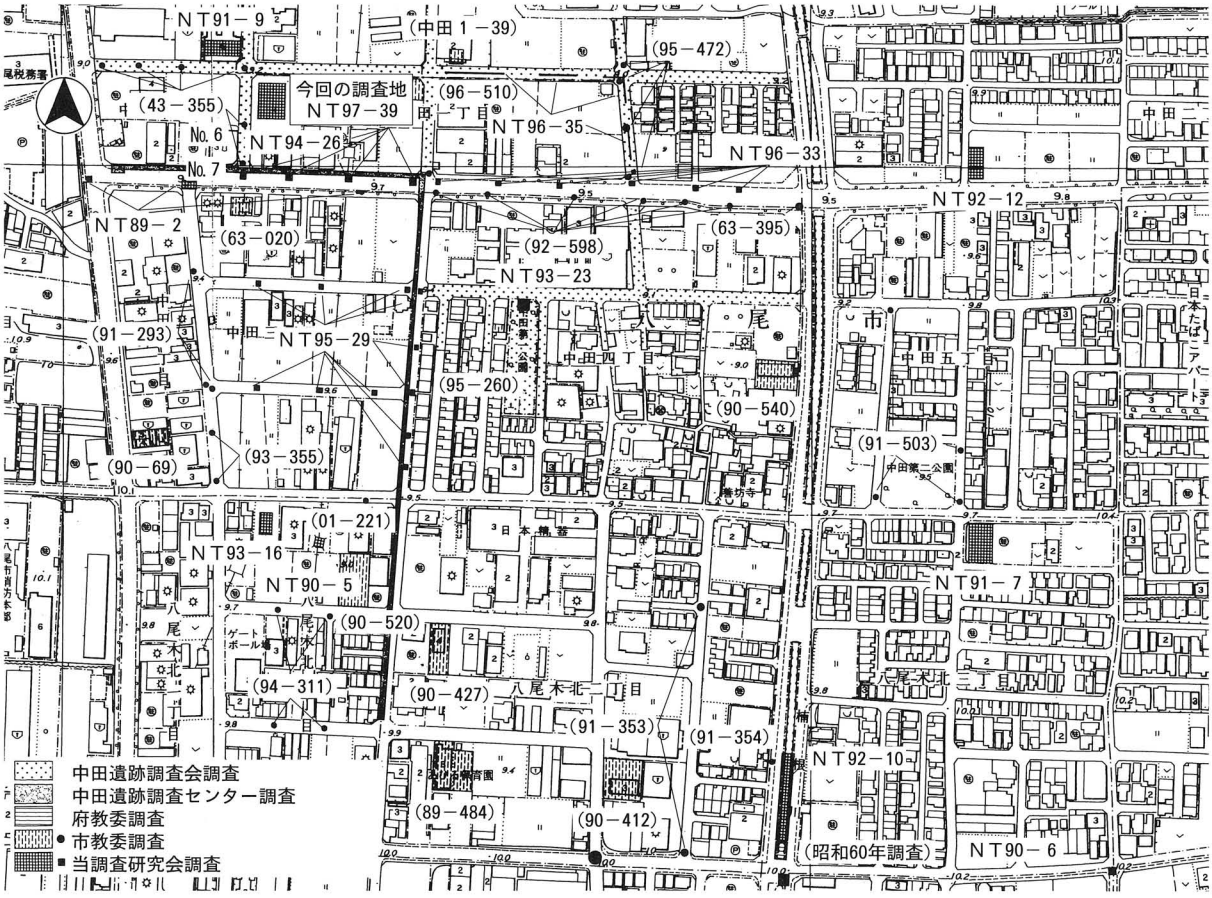
XI　中田遺跡第39次調査（ＮＴ97－39）

１．はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田１～５丁目・八尾木北１～６丁目・刑部１～４丁目の東西1.1㎞、南北0.8㎞がその範囲となっている。地理的には、河内平野のほぼ中央部を流れる旧大和川支流の長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上においては北に小阪合遺跡、西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡が隣接している。

中田遺跡は昭和45年に行なわれた区画整理事業でその存在が確認され、昭和46年以降大阪府教育委員会・中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって多次にわたる調査が実施されてきた。その結果、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。

今回の調査地である中田１丁目は中田遺跡内の北西端にあたる。周辺の調査では、北東約100ｍの市教委の調査（中田１丁目－39）で検出された土坑２基から古墳時代前期初頭の土器が多く出土し、そのなかに吉備系や山陰系などの他地域の土器が多く含まれていたことから当地周辺では他地域との交流が盛んであったことが判明した。また、当調査地のすぐ北にあたる中田遺跡調査センター調査地（昭和48～49年調査）では大量の炭と一緒に屋瓦類が出土しており、付近に平安時代～鎌倉時代にかけての寺院が存在した可能性が示唆されている。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/5000）

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（9－63工区）に伴う調査で当調査研究会が中田遺跡内で行った第39次調査にあたる。調査は東西に並んだ人孔4箇所を対象とし、西から順に1～4区とした。当初の予定では総調査面積約16㎡であったが、既設工事の都合などにより、約13㎡となった。調査は3区→2区→4区→1区の順で実施した。八尾市教育委員会の指示書に従い、現地表（T.P.＋10.0m前後）下1.2mまで機械掘削を行い、以下、現地表下2.0～2.3mまでを人力掘削と機械掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。

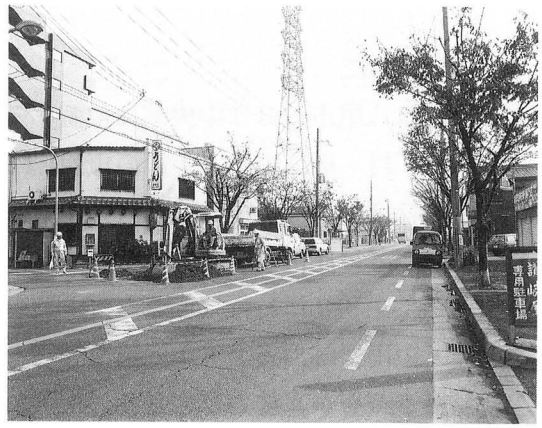


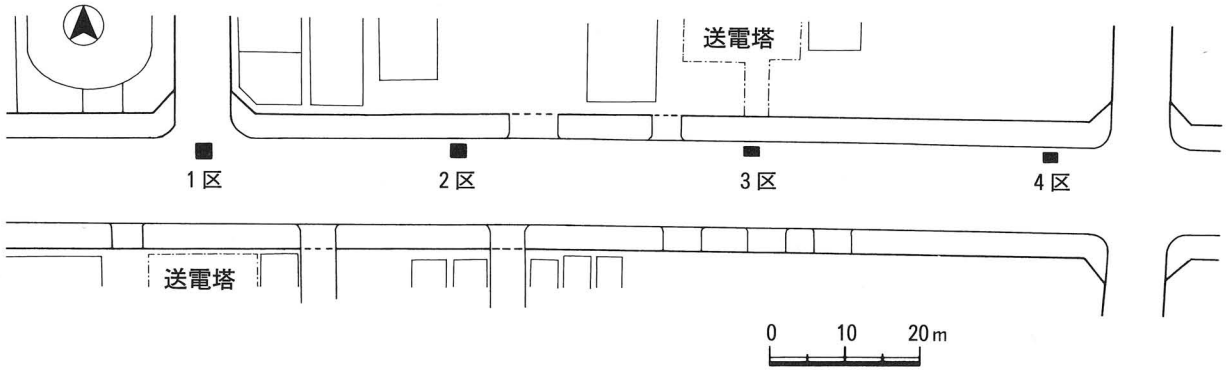
写真1　調査地周辺（南西から、手前が1区）

2）基本層序

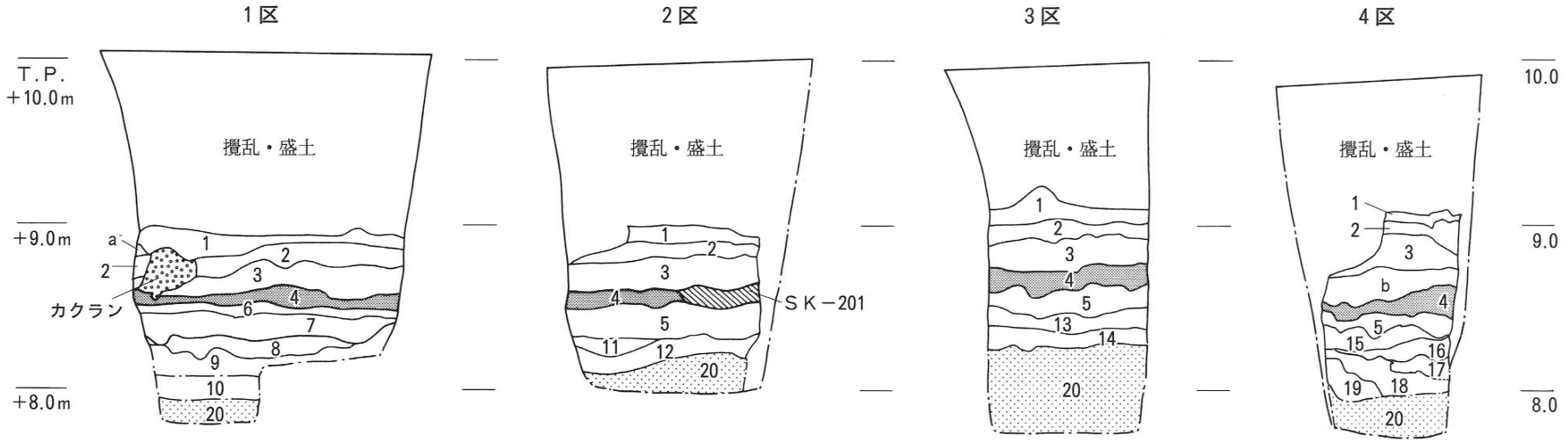
今回の調査では既設工事の撹乱が激しく、特に南側は1区～4区まで撹乱を受けていたので断面観察はできなかった。全調査区をとおして観察できたのは東壁のみであったため、以下、東壁断面を中心に基本層序について述べる。

基本層序は第3図のとおりである。全調査区に普遍的にみられたのは第1層から第4層である。なかでも第4層からは平安時代末～鎌倉時代初頭の土器の破片が出土し中世の包含層とみられる。第5層は1区でのみみられなかった。

また、現地表下1.7～2.1（T.P.＋8.3～7.9）m付近では自然河川とおもわれる厚い砂の堆積（第20層）を確認した。この砂層からは湧水が激しく、壁面の崩壊もみられたため危険と判断し、以下の調査は確認程度にとどめた。第20層の機械掘削状況をみると下部にいくほど砂が粗くなり、小石を含む極粗砂層になる。遺物は出土しなかった。



第2図　調査区設定図（S＝1/1000）



第１層　５ＢＧ3/1暗青灰色　小礫混砂質土
第ａ層　５Ｇ5/1緑灰色　小礫混粘質土
第２層　7.5Ｙ5/2灰オリーブ色　小礫混シルト
第３層　7.5Ｙ6/2灰オリーブ色　微～小礫混粘質シルト
第ｂ層　7.5Ｙ6/2灰オリーブ色　粘土（マンガンを多く含む）
第４層　５ＧＹ4/1暗オリーブ灰色　微～中粒砂混粘土（炭を極少量含む）
第５層　2.5ＧＹ4/1暗オリーブ灰色　微～中粒砂混粘土
第６層　10ＧＹ5/1褐灰色　粘土混細砂～中粒砂
第７層　10ＹＲ5/4にぶい黄褐色　細砂混粘土
第８層　10ＧＹ5/1褐灰色　シルト混粘土
第９層　10ＧＹ5/1暗青灰色　粘土
第11層　10Ｙ4/1灰色　微～細砂混粘質シルト
第12層　10Ｙ5/1灰色　シルト
第13層　10Ｙ3/1オリーブ黒色　細砂混粘土
第14層　10Ｙ3/1オリーブ黒色　粘質シルト
第15層　10Ｙ6/2オリーブ灰色　粘土
（10Ｙ3/1オリーブ黒色炭化物を含む粘土をブロック状に含む）
第16層　2.5ＧＹ5/1オリーブ灰色　小礫を極少量含むシルト質粘土
第17層　10Ｇ5/1緑灰色　粘質シルト
第18層　５ＢＧ5/1青灰色　中粒砂～粗砂を多く含むシルト
第19層　10ＢＧ5/1青灰色　シルト
第20層　10Ｙ5/1灰色　中粒砂～粗砂（下部は小石を含む極粗粒砂）

第３図　東壁断面図（Ｓ＝１/40）

3）検出遺構と出土遺物

調査の結果、検出した遺構は1区から小穴1個（ＳＰ－101）、2区から土坑1基（ＳＫ－201）のみである。以下、各調査区について概要を述べる。

〈1区〉

第8層上面でＳＰ－101を検出した。ＳＰ－101は南側が撹乱を受けており、全容は不明である。埋土は7.5GY4/1暗緑灰色・シルトブロックを含む粘土で遺物は出土しなかった。

その他、第1層から瓦器椀の底部と土師器、第3層から土師器、第4層から須恵器・土師器・瓦器、第6層から土師器・瓦器がそれぞれ出土した。しかし、いずれも破片であり、時代を明確にできるようなものはない。

1区は現地表下2.2（T.P.＋7.9）m付近から砂の堆積層を検出した。これは他区よりも0.1～0.3m低い結果となった。また、すぐ北側に位置する市教委調査（93－355）のNo.7ではこれに相当するとおもわれる砂層はT.P.＋7.6m付近でも検出されておらず、その北のNo.6のT.P.＋8.3m付近から検出されていることから、1区周辺はより深い位置に砂が堆積していることが判明した。

〈2区〉

第4層上面でＳＫ－201を検出した。ＳＫ－201も南側が撹乱を受けており、東側は調査区外となるため全容は不明である。埋土は5GY4/1暗オリーブ灰色の粘土で第4層より粘性が強く、遺物も少量であるが土師器の小破片が1点、瓦器片が2点、黒色土器片1点が出土した。

その他、第4層から土師器・瓦器・須恵器の破片が出土した。須恵器のなかには6世紀中頃の杯身が含まれているが、紛れ込みの可能性がある。また、第5層からも土師器の細片が出土した。

〈3区〉

遺構は検出できなかった。遺物は第2層と第3層から土師器片が出土した。第4層からは土師器片・瓦器片・東播系須恵器の片口鉢が出土した。いずれも小破片で図化できなかったが、時期は12世紀半ばとおもわれる。

〈4区〉

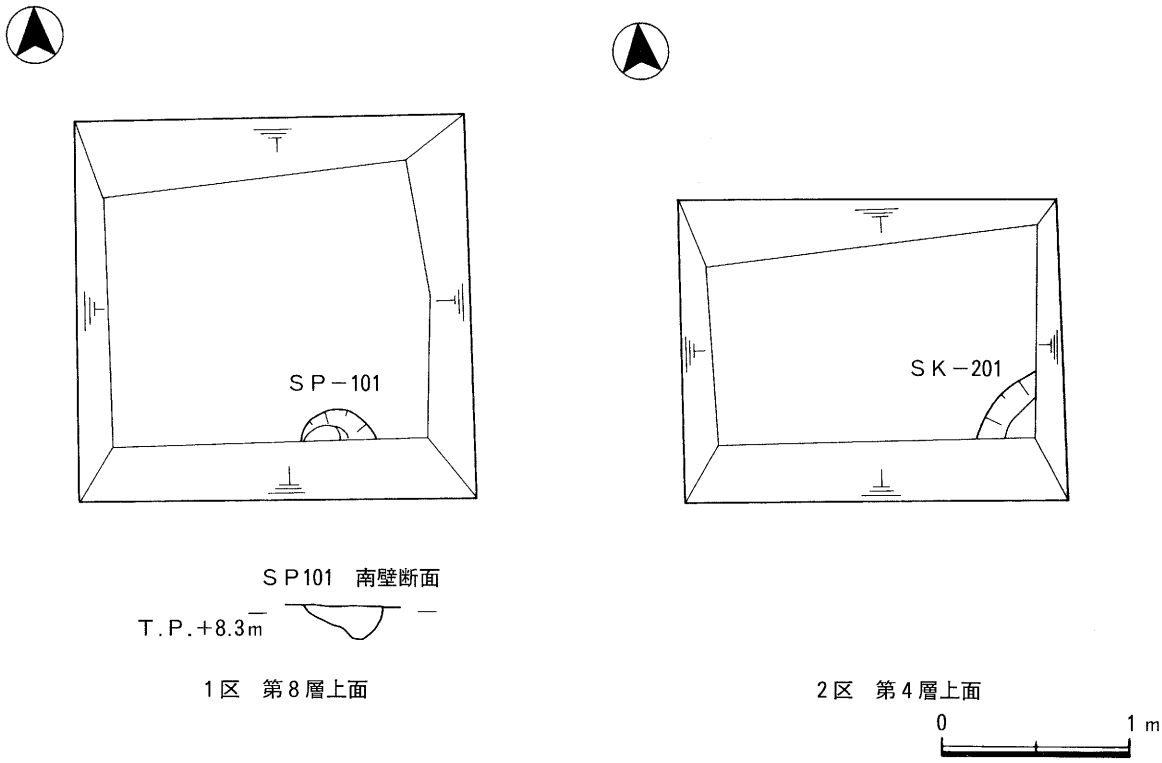
現地表面はT.P.＋9.7～9.8m前後である。最も撹乱が激しかった調査区で、断面観察も東壁部分しかできなかった。遺構は検出できなかったが第2層から土師器、第3層から土師器・瓦器、第4層から土師器の細片がそれぞれ出土している。

3．まとめ

今回の調査は中田遺跡調査センターが昭和48年～49年に調査を行い、多量の瓦や炭が出土した地点と隣接していたため、寺院関係の遺構・遺物の出土が期待できたが、検出されなかった。

しかし、中世の包含層（第4層）は周辺の調査でも確認されており、調査地一帯が中世の集落域にあたることが再確認できた。また、1区と2区で検出した遺構の時期は時代を決め得る遺物の出土がないため正確にはいえないが、周辺調査の成果から鎌倉時代～室町時代に相当するとおもわれる。

各区の最下層で確認した砂の堆積層は中田遺跡調査センター調査地や当調査研究会調査（第2次・第9次・第26次）、市教委調査＜(63－020)・(93－355)＞などでも検出されている。今回



第４図　調査区平面図（Ｓ＝１/40）

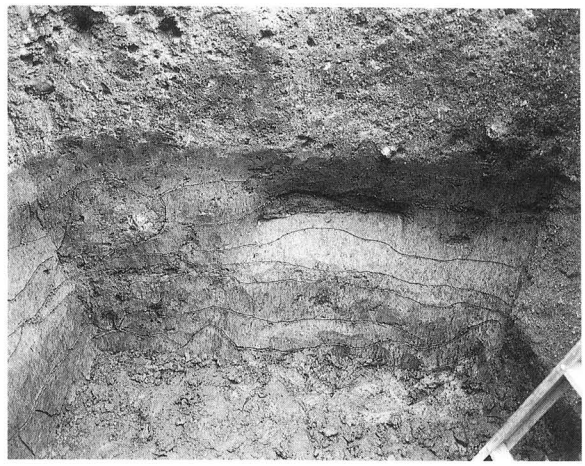
は遺物が出土しなかったが、第９次調査や中田遺跡調査センターの調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が出土している。砂層を検出したレベルもT.P.＋8.0ｍ前後であり、東に行くにつれやや高いレベルから検出されていることも一致していることから、当地にもこれらに対応する大規模な自然河川が存在していたことが確認できた。

参考文献

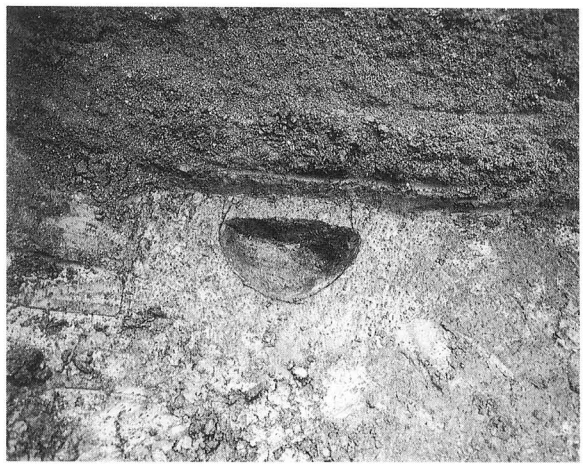
- 『中田遺跡』　1974　中田遺跡調査センター
- 近江俊秀　1989「１．中田遺跡（63－020）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告24　八尾市教育委員会
- 吉田野乃　1994「８．中田遺跡（93－355）の調査」『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告30　八尾市教育委員会
- 青木勘時　1990「15．中田遺跡（NT89－２）」『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』㈶八尾市文化財調査研究会報告28　㈶八尾市文化財調査研究会
- 原田昌則　1992「Ⅶ　中田遺跡第９次調査（NT91－９）」『八尾市文化財発掘調査報告34』㈶八尾市文化財調査研究会
- 西村公助　1998「ＸⅥ　中田遺跡第33次調査（NT996－33）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』㈶八尾市文化財調査研究会
- 岡田清一　1998「Ⅲ　中田遺跡第26次調査（NT94－26）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』㈶八尾市文化財調査研究会

図版一

1区　第8層上面（南から）

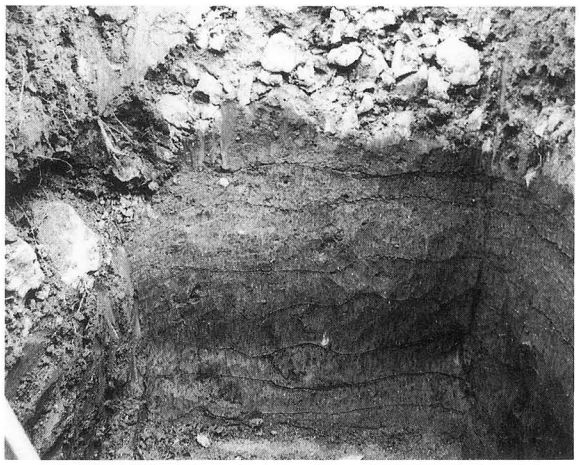


1区　東壁断面（T.P.+9.4～8.1m）



1区　SP－101（北から）

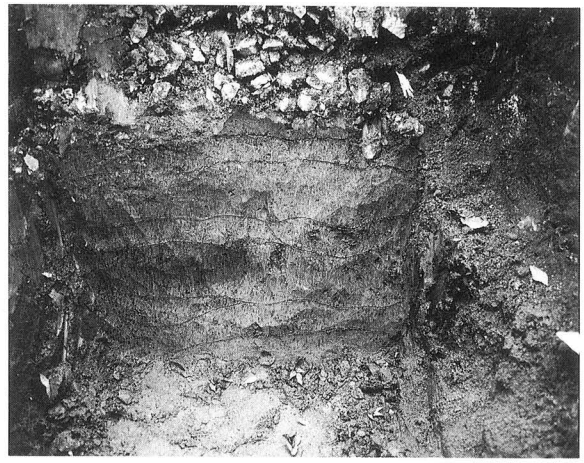
1区　完掘状況



3区　東壁断面

3区　完掘状況

2区　第4層上面（西から）



2区　東壁断面（T.P.+9.5～8.0m）

2区　SK－201（西から）

2区　完掘状況

4区　東壁断面（T.P.+9.5～8.0m）

4区　完掘状況

Ⅻ　中田遺跡第40次調査（ＮＴ97－40）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市刑部３丁目地内で実施した公共下水道工事（９－103工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第40次調査（ＮＴ97－40）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋493－２号　平成９年11月５日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成10年１月９日から１月14日（実働３日）にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約16㎡を測る。調査においては市森千恵子・西岡千恵子・八田雅美・山内千恵子が参加した。

1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子の参加を得た。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに ……105

2．調査概要 ……106

　1）調査方法 ……106

　2）調査成果 ……106

3．まとめ ……110

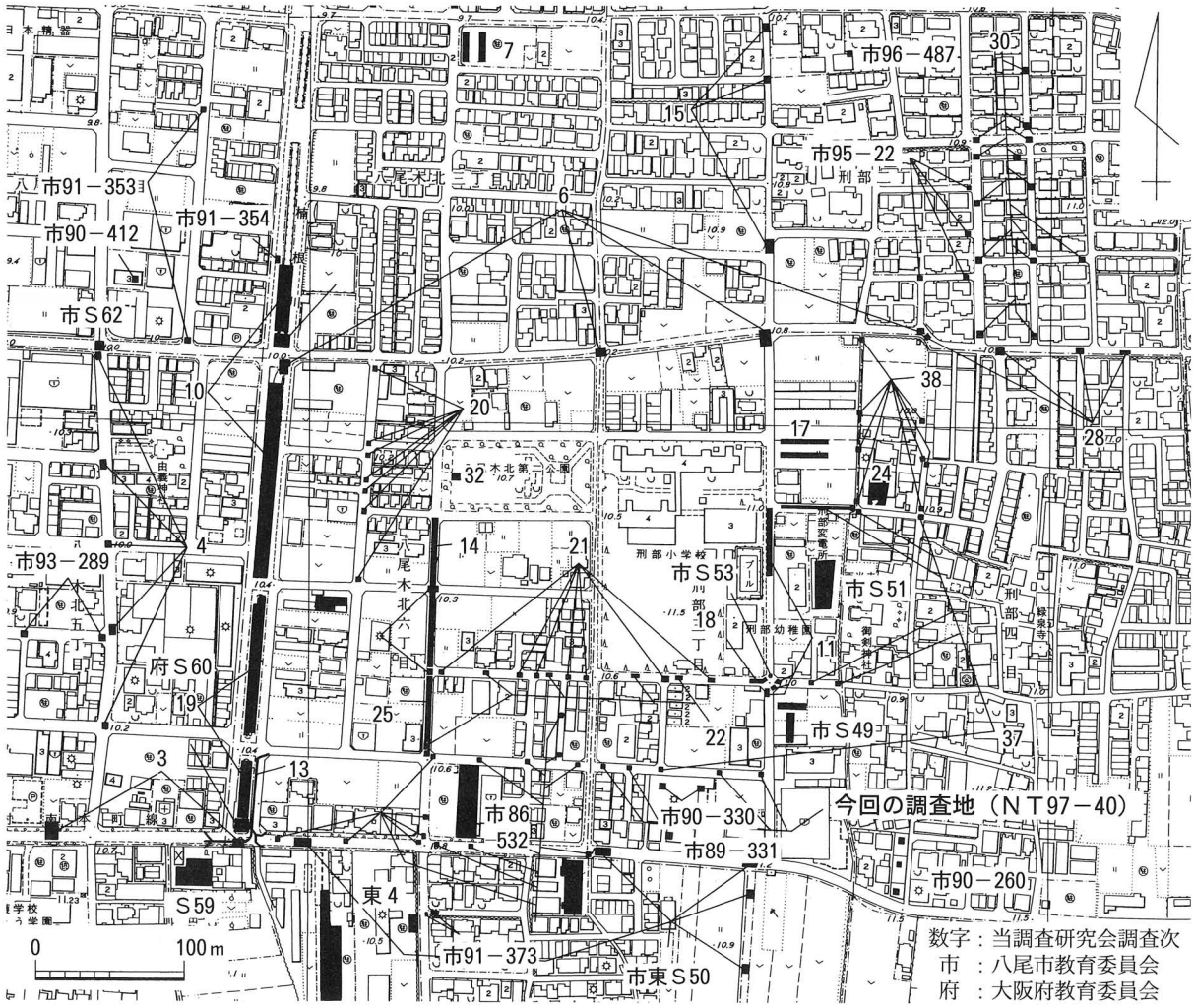
Ⅻ　中田遺跡第40次調査（ＮＴ97－40）

１．はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目の範囲に広がる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

当遺跡は昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡南端部にあたり、周辺では調査も多く実施されている。なかでも北東部で昭和53年度に八尾市教育委員会による調査（市Ｓ53）で検出された土坑は、多量の出土土器のうちの多くを吉備地方の土器が占めるという特異性が注目され、『刑部土坑』と称され庄内式期古相の標識資料となっている。



第１図　中田遺跡調査地位置図（Ｓ＝１/5000）※東：東弓削遺跡

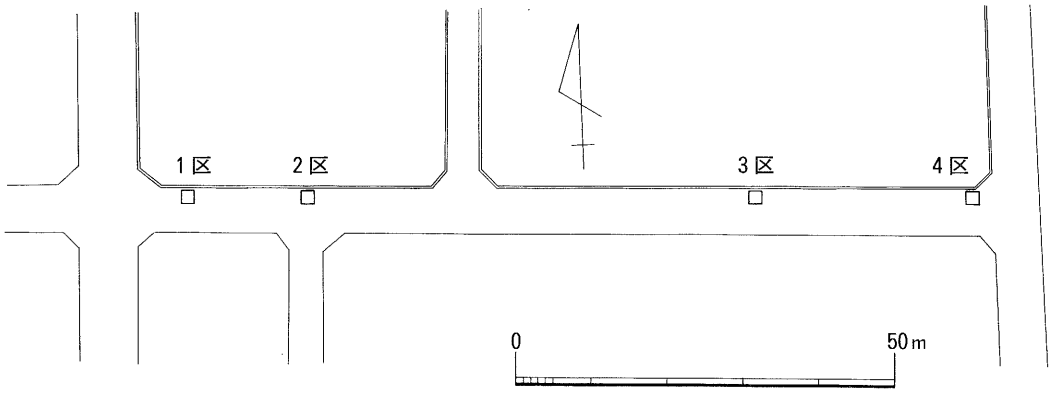
2．調査概要

1）調査方法

今回の調査は公共下水道工事に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で実施した第40次調査にあたる。発掘調査対象地は東西方向の道路上に並ぶ人孔部分（約２ｍ四方）４箇所で、調査面積は約16㎡である。いずれの調査区も、北側が道路側溝の擁壁、南側が地下水路により撹乱を受けており、実際の調査面積は減少している。

地区名は西から１区～４区とし、調査は東から順次進めた。

調査にあたっては現地表下約1.5ｍまでを機械掘削し、以下の約0.5ｍを人力掘削により調査を実施した。またその後、工事深度である現地表下約2.6ｍまでについては、機械掘削により土層の確認調査を実施した。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝１/1000）

2）調査成果

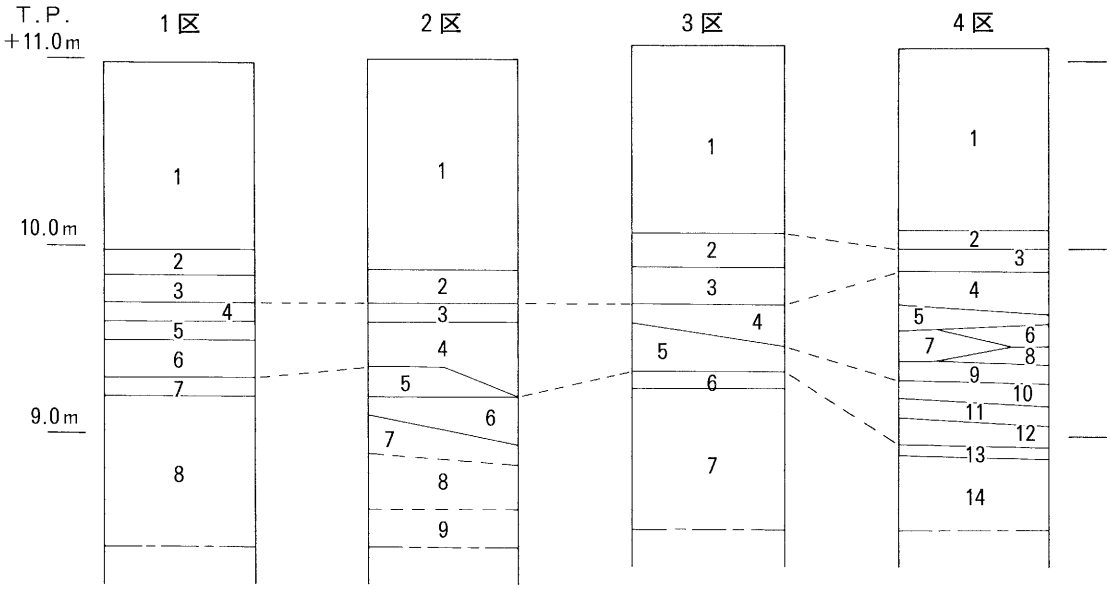
〈１区〉

ａ．基本層序と出土遺物

第２層・第３層の砂を基調とする水成層（以下『上部水成層』）は、標高9.7～10.0ｍで調査地全域にみられる。中世以降の洪水砂層の拡がりと捉えられ、２区では礫混じり粗砂層、他地区では微砂層～シルト層で、当区ではラミナがみられた。いずれの地区からも遺物は出土していない。当区でのみみられる第４層の砂礫混じり粘土層は固く締まる層で、中世頃の整地層と考えられる。この上面が第１次面で、土坑１基（ＳＫ 111）を検出した。

第５層・第６層は古墳時代後期の包含層で、土器を多く含んでおり、須恵器杯（３～５）、土師器壷（６）・竈（７・８）を図化した。須恵器杯はいずれも６世紀前半に比定されるものである。６は土師器であるが、調整・技法・装飾は明らかに須恵器のそれであり、焼成不良の須恵器である可能性もある。７は竈の把手、また８は庇部分である。

第７層以下は調査地全域にみられる河川堆積層（以下『下部水成層』）であり、第７層のシルト層は河川の最終堆積部分にあたると捉えられる。古墳時代前期頃の土器片が数点出土しているが、ローリングを受けたものもある。第７層上面が第２次面で、溝１条（ＳＤ 121）・ピット１個（ＳＰ 121）を検出した。



1区
1．盛土・撹乱
2．黄褐灰色微砂
3．淡黄褐色微砂～シルト
（ラミナ・鉄分含む）
4．褐灰色砂礫混じり粘土
5．明灰色細砂少混じり粘土
6．暗灰色細砂混じり粘土
7．暗灰色粘質シルト混じりシルト
8．明褐色～褐灰色礫混じり粗砂

2区
1．盛土・撹乱
2．黄褐色礫混じり粗砂
3．淡灰褐色粘土
4．暗灰青色粗砂・礫混じり粘土
5．暗灰青色粘土混じり粗砂・礫
6．暗灰褐色礫混じり細砂
7．黄灰褐色微砂
8．黄灰褐色シルト
9．褐色細砂

3区
1．盛土・撹乱
2．淡灰褐色シルト混じり微砂
3．黄褐色微砂（下部鉄分含む）
4．淡灰黄褐色微砂混じりシルト
5．灰青色微砂混じり粘質シルト
6．青灰色シルト混じり微砂
7．淡灰褐色微砂

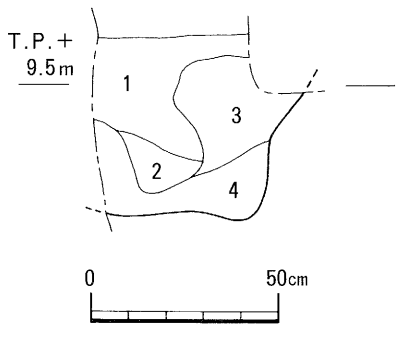
4区
1．盛土・撹乱
2．旧耕土：暗灰色シルト混じり微砂
3．暗灰黄色微砂混じりシルト
4．淡灰褐色粘土
5．灰褐色細砂混じり粘土
6．明灰褐色粘土
7．灰褐色細砂ブロック混じり粘土　マンガン含む
8．灰褐色粘土
9．明灰色微砂混じり粘土
10．明灰青色粘土
11．暗灰色～暗灰青色粘土
12．灰青色粘土
13．灰色シルト混じり粗砂
14．赤褐色～褐灰色礫（～５cm）混じり粗砂

第３図　基本層序（Ｓ＝１/40）

ｂ．検出遺構と出土遺物

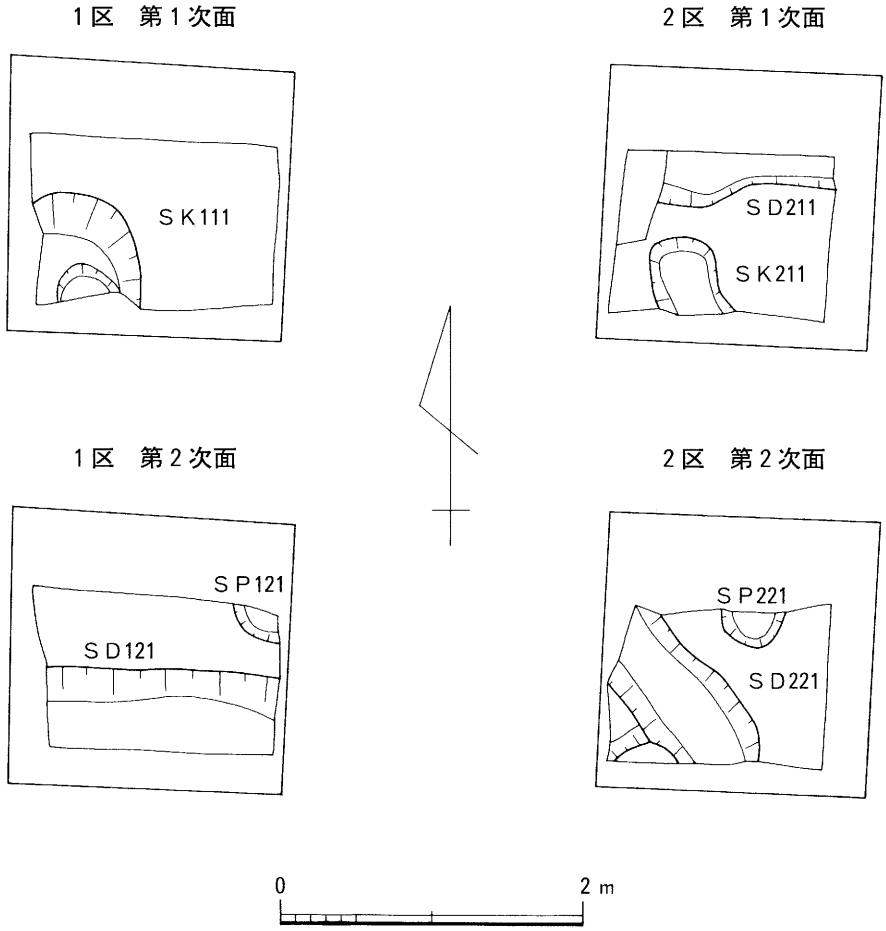
ＳＫ 111

調査区南西角で検出した土坑で、平面形は不明であるが、検出部分の形状からみてほぼ円形を呈するものと考えられる。規模は南北75cm以上・東西70cm以上・深さ約55cmを測る。断面逆台形を呈し、底は第８層の砂層に達している。埋土は上から黄灰褐色シルト混じり微砂・暗黄灰色微砂混じり粘質シルト・灰褐色微砂混じり粘質シルト・暗灰黄色微砂混じりシルト質粘土である。上部の２層は、基本層序の第３層が落ち込んだものである。掘方形状等からみて井戸の痕跡かもしれない。出土遺物には平瓦の他、古墳時代後期頃の土器があるが、図化しえたものは平瓦（１）、須恵器杯身（２）のみである。１は凹面布目・凸面縄目の平瓦で、時期は中世頃であろう。



1．黄灰褐色シルト混じり微砂
2．暗黄灰色微砂混じり粘質シルト
3．灰褐色微砂混じり粘質シルト
4．暗灰黄色微砂混じりシルト質粘土

第４図　ＳＫ111西壁（Ｓ＝１/20）



第5図　遺構平面図（S＝1/50）

SD 121

調査区南半を占める東西方向の直線的な溝で、北肩を検出した。規模は検出長約1.5m・幅55cm以上・深さ約30cmを測る。底部のレベルは東部が低い。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰色細砂混じり粘質シルトで、上部には第6層が落ち込んでいる。下部は第8層の砂層を掘り込んでおり、この部分の第8層上部は鉄分の浸透により明褐色を呈し固く締まっている。

遺物は古墳時代後期の須恵器・土師器が出土しており、須恵器杯身（9・10）を図化した。10は口径14.4cmを測り、底部内面には同心円タタキが多数認められ、底部外面にはヘラ記号を施している。出土須恵器は6世紀後半を中心とするものである。

SP 121

調査区北東角で検出した。規模は東西30cm以上・南北20cm以上・深さ約10cmを測る浅いピットである。断面皿状を呈し、埋土はSD 121と同様、暗灰色細砂混じり粘質シルトである。遺物は出土していない。

〈2区〉

a．基本層序と出土遺物

1区との距離は約15mであり、層序はほぼ同様の状況であるが、固く締まる整地層は認められなかった。第3層の粘土層は『上部水成層』の下層部と捉えられる。瓦器椀片が出土している。

標高約9.6ｍを測る第４層上面が第１次面で、土坑１基（ＳＫ 211）・溝１条（ＳＤ 211）を検出した。標高約9.4ｍの第５層上面が第２次面で、溝１条（ＳＤ 221）・ピット１個（ＳＰ 221）を検出した。また『下部水成層』は、当区ではシルト～細砂の互層状を呈し、上層の第６層が１区の第８層にあたる。

ｂ．検出遺構と出土遺物

ＳＫ 211

調査区南部に位置し、南は調査区外に続いている。検出部分の平面形は長方形に近く、規模は南北50㎝以上・東西約40㎝・深さ約22㎝を測る。断面逆台形を呈し、埋土は褐灰色礫～細砂混じり粘土である。時期不明の土師器・須恵器片が出土している。

ＳＤ 211

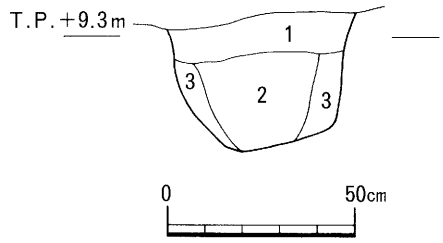
調査区北部に位置する東西方向の溝で、南肩を検出した。規模は検出長約1.4ｍ・幅36㎝以上・深さ約30㎝を測る。埋土はＳＫ 211と同様、褐灰色礫～細砂混じり粘土である。古墳時代後期頃の土器が出土している。

ＳＤ 221

北西－南東方向の溝で、規模は検出長約1.3ｍ・幅約60㎝・深さ約20㎝を測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰青色粗砂～礫混じり粘土で、これは第４層が落ち込んだものである。なお西部では幅が広がっており、当溝に接続する溝が存在する可能性がある。古墳時代後期の土師器・須恵器（11）が出土している。

ＳＰ 221

調査区北部に位置し、南部を検出した。規模は南北22㎝以上・東西42㎝・深さ約36㎝を測る。断面逆台形を呈し、埋土は上から暗褐灰色粗砂混じり粘質シルト・暗灰色礫～微砂混じり粘質シルト・褐灰色礫混じり粘質シルトである。堆積状況からみて柱穴と考えられる。遺物は古墳時代後期の土師器・須恵器（12）が出土している。



1．暗褐灰色粗砂混じり粘質シルト
2．暗灰色礫・微砂混じり粘質シルト
3．褐灰色礫混じり粘質シルト

第６図　ＳＰ221西壁（Ｓ＝１/20）

〈３区〉

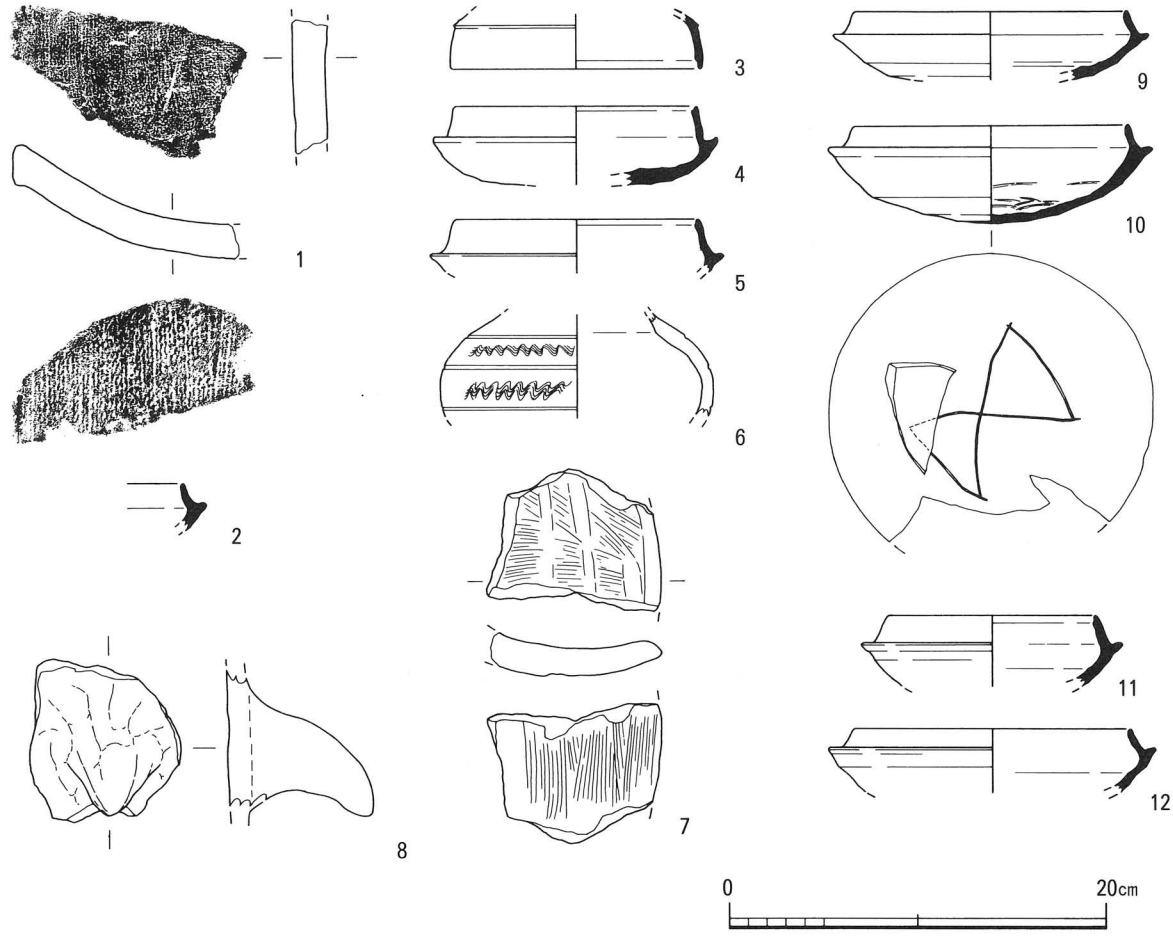
ａ．基本層序と出土遺物

第４層・第５層のシルト層は、『上部水成層』の下層部分と捉えられる。『下部水成層』は微砂層となっている。当区からは遺構・遺物は検出されなかった。

〈４区〉

ａ．基本層序と出土遺物

第４層～第９層にはマンガンが含まれており、当地は水田域の可能性があるが、平面的に畦畔等は検出されなかった。第10層～第12層の粘土層については、『上部水成層』の下層部と捉えられるが明確ではない。『下部水成層』は１区と同様に礫混じり粗砂層である。第６層・第10層・第13層の上面で精査を実施したが、遺構は検出されなかった。遺物は第５層から古墳時代後期頃の須恵器高杯脚部片が１点出土しているのみである。



第７図　出土遺物（Ｓ＝１/４）

３．まとめ

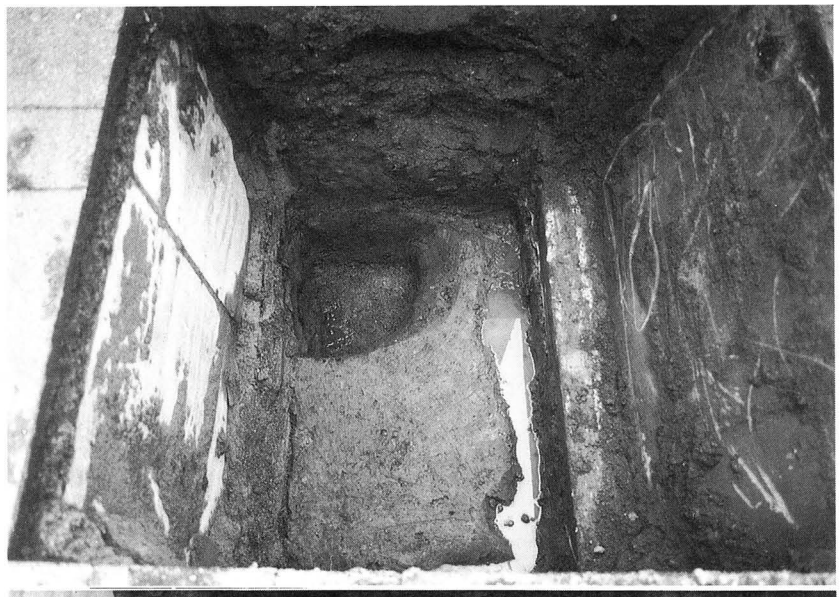
今回の調査では、周辺の調査成果と同様に、古墳時代後期及び中世の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ１箱を数える。

西部の１区・２区では古墳時代後期・中世頃の遺構面が良好に遺存しており、溝・土坑等の集落遺構が検出された。古墳時代後期では、２区東側の第37次調査地〈№16〉においても、溝と考えられる遺構から多量の土器が出土している。中世頃の遺構面は調査地全域にみられる『上部水成層』に覆われ、また東部の３区・４区ではこれが深く及んでいるため古墳時代後期の遺構面は削平されているものと捉えられる。周辺の調査成果からみて、この『上部水成層』深部の流路は北西－南東方向で、４区付近を中心に50ｍ程度の幅が想定される。

註

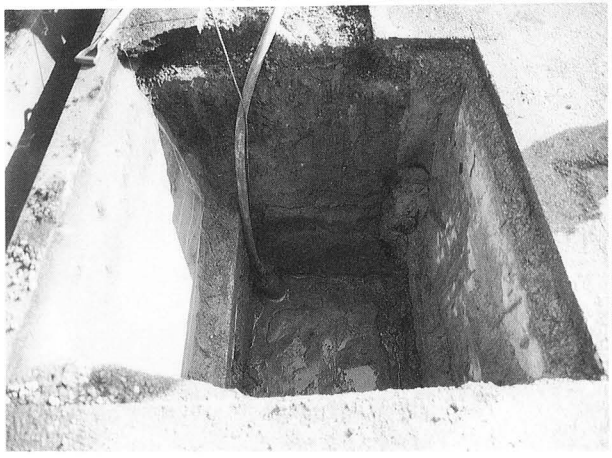
註１　高木真光　1981「７．中田遺跡〈刑部地区〉」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会

註２　古川晴久　1998「21．中田遺跡第37次調査（ＮＴ97－37）」『平成９年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

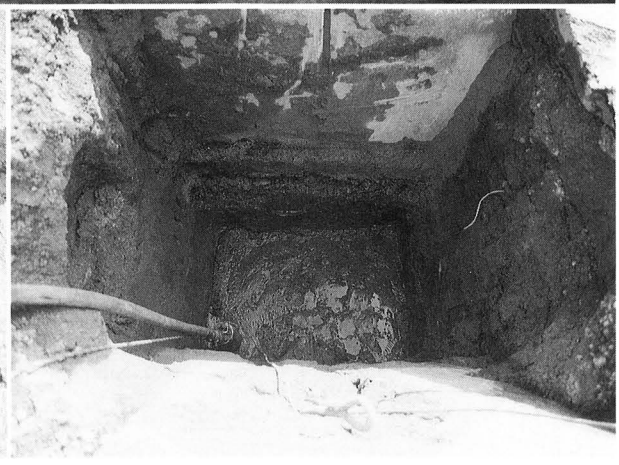


1区　第1次面（東から）

1区　第2次面（東から）

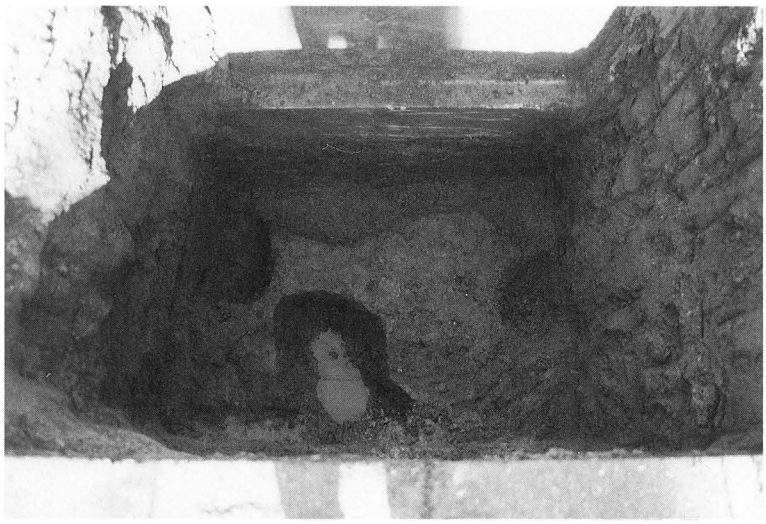


3区　第6層上面（西から）



4区　第13層上面（北から）

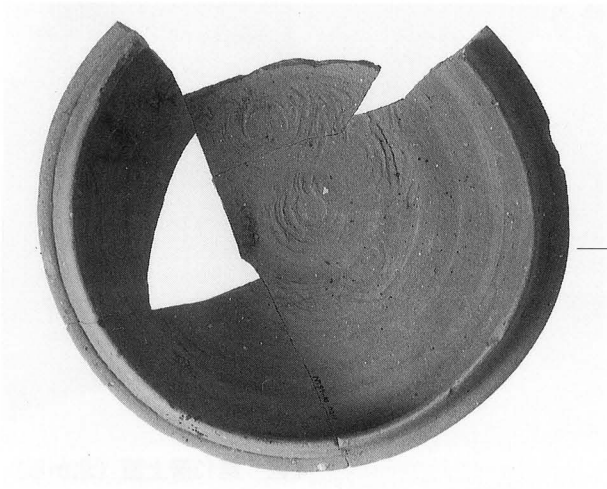
図版二

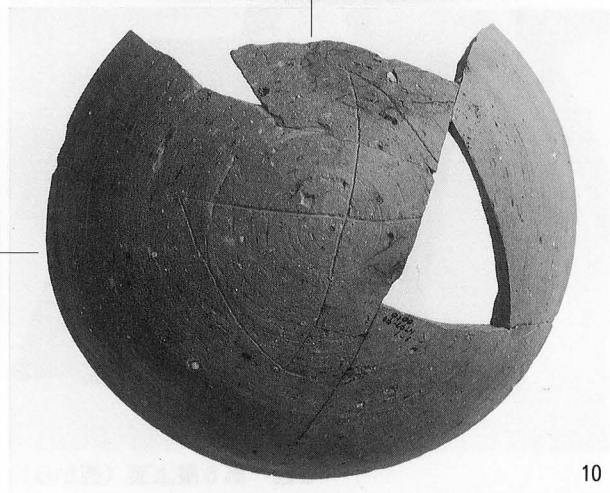


2区　第1次面（南から）

2区　第2次面（南から）

6





10

Ⅻ　中田遺跡第41次調査（ＮＴ97－41）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市中田２丁目地内で実施した公共下水道（９－121工区）工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第41次調査（ＮＴ97－41）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋482－２号　平成９年11月５日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成10年２月４日から２月26日（実働３日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約12㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレース－高萩が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに ……113

2．調査概要 ……114

　1）調査の方法と経過 ……114

　2）基本層序 ……114

　3）検出遺構と出土遺物 ……114

3．まとめ ……115

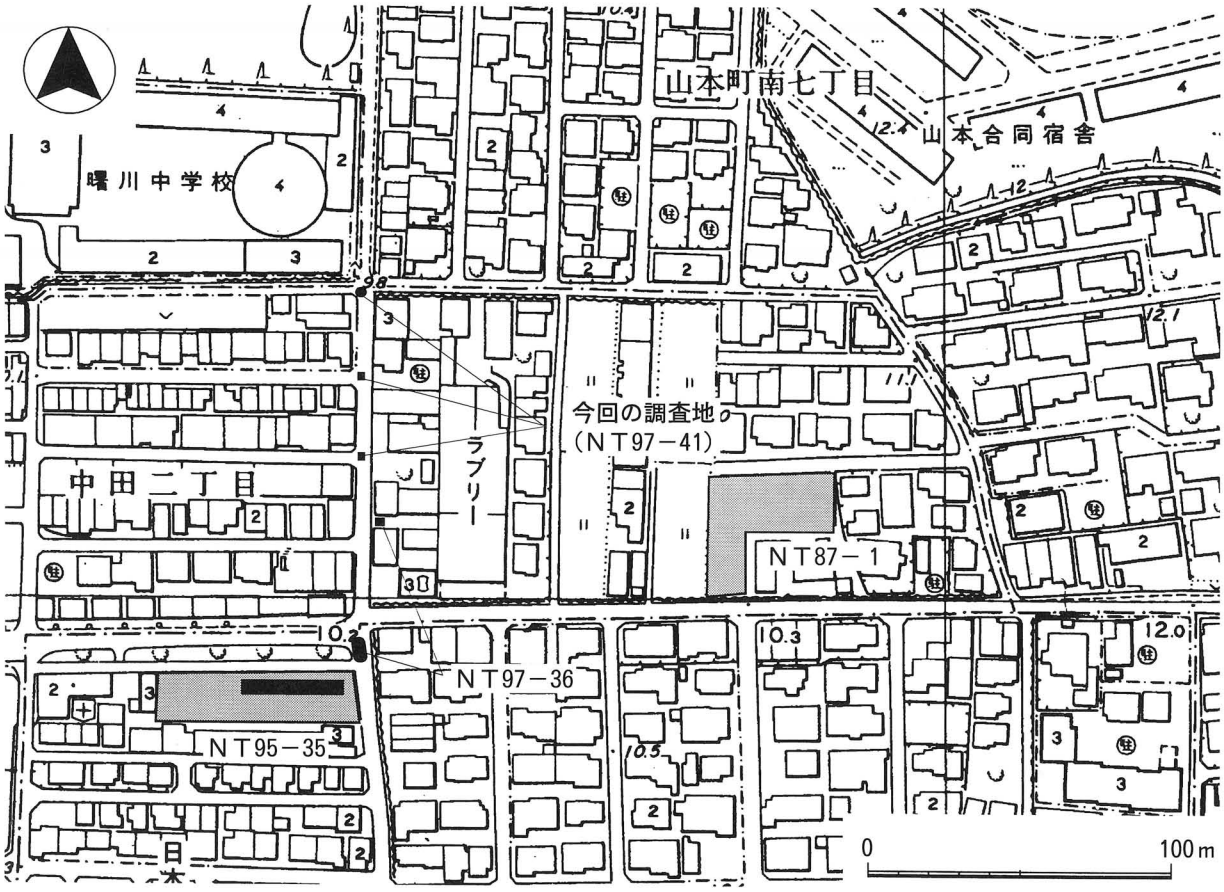
XIII　中田遺跡第41次調査（ＮＴ97－41）

１．はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目の範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地する。同一沖積地上では西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡、北に小阪合遺跡が接している。

当遺跡は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後、中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施され、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが確認されている。特にこれらの調査成果では古墳時代前期の時期を中心としたものが遺跡全般で検出される。

今回の調査地は中田遺跡範囲の北東部付近にあたる。周辺では当調査区南側の道路上で、当調査研究会による公共下水道工事に伴う発掘調査（ＮＴ97－36）[註1]を実施し、弥生時代後期の壷棺を検出している。さらにその周辺では第１図に示すように数次の発掘調査を実施しており、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が検出されている。



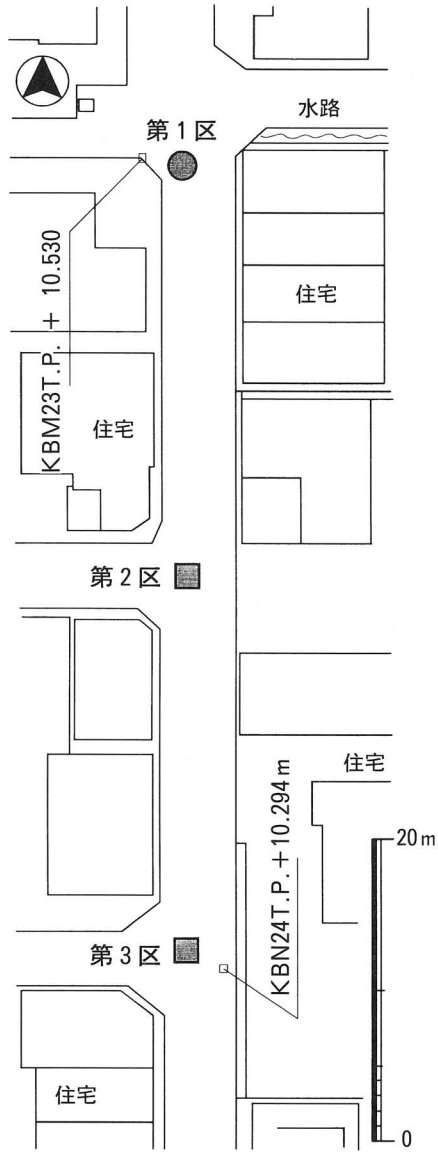
第１図　調査地位置図及び周辺図（Ｓ＝１/2500）

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で行った第41次調査にあたる。調査区は人孔（マンホール設置）掘削工事により破壊される部分３箇所を対象に調査を実施した。規模は1.8×1.4ｍの方形２箇所と径２ｍの円形１箇所である。区名は北から第１区（№８）・第２区（№７）・第３区（№６）と呼称した。

調査に際しては、現表土（T.P.＋10.6ｍ）下1.5ｍ前後までを機械掘削した後、以下1.0ｍ前後については簡易矢板を打ち付け、機械掘削による掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表下約1.5ｍ前後は既往埋設工事により削平されており、すべて埋め土であった。それより以下工事掘削深度までの土層の堆積状況を確認した。なお、北側の第１区については隣接の住宅との関連によりケコム工法（ＰＩＴ工法といわれる掘削工法で、筒状の鋼鉄枠を掘削地点に備え付け、その内側の土を重機で掘削しながら鋼鉄枠を落としていく工法）の掘削により、上げ土の確認だけにとどまった。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

基本層序は第２区・第３区の堆積土層である。

第１層　盛土。層厚1.5～1.6ｍ。既往埋設工事（ガス・水道など）の際に埋められた土層である。上面の標高はT.P.＋10.3ｍ前後である。

第２層　青灰色粘土Ⅰ。層厚0.5ｍ前後。第３区のみ堆積する土層である。

第３層　青灰色シルト。層厚0.2～0.4ｍ。第２区では厚く堆積する。

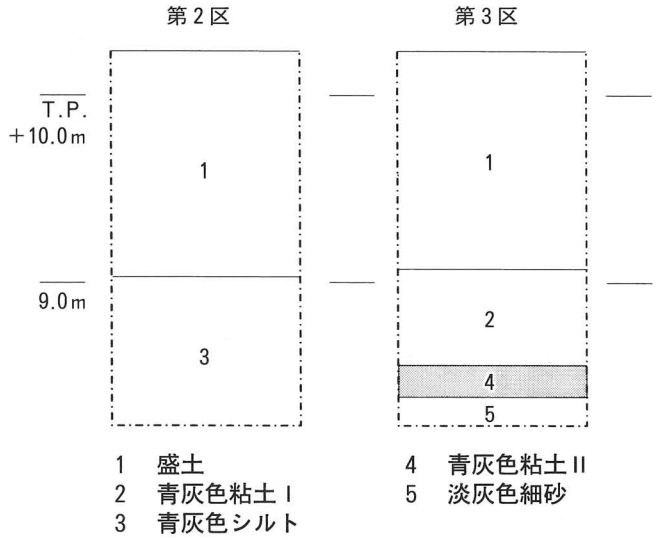
第４層　青灰色粘土Ⅱ。層厚0.4～0.5ｍ。第３区のみ堆積する土層である。

第５層　淡灰色細砂。層厚1.0ｍ以上。

3）検出遺構・出土遺物

第１区（№８）

北部に位置する調査区である。この調査はケコム工法の掘削方法により、上げ土を見る程度の確認しかできない調査であった。上げ土の確認を行ったが、遺物はなかった。



第３図　基本層序柱状図

第２区（No.７）

第１区より南へ約18ｍのところにあたる中央に位置する調査区である。現地表下約1.6ｍ前後までは埋設工事の際の埋め土である。以下の土層はシルト～細砂層となる層であるが、埋め土の直下より湧水が著しく正確な堆積状況は掴むことができなかった。

第３区（No.６）

第２調査区より約18ｍのところにあたる南側の調査区である。現地表下約1.5ｍ前後までは第２区で検出した埋設工事による埋め土である。以下の土層は青灰色粘土Ⅰが約50cm 前後、青灰色シルトが約20cm 前後、青灰色粘土層Ⅱが約20cm 前後である。工事掘削基底面では細砂層がみられた。その層より激しく湧水が吹き出した。

３．まとめ

今回の調査では、遺構・遺物の検出はなかった。調査区南部で検出している弥生時代後期～古墳時代前期の地層（ベース面）は既往埋設工事の際に削平されていた。当調査区から南へ約100ｍの下水道工事に伴う第36次調査（ＮＴ97－36）[註2]で弥生時代後期の大型の壷の底部片を出土している。詳細は不明であるが壷棺の可能性がある遺構と思われる。また、第36次調査の西側で実施した共同住宅建設に伴う第31次調査（ＮＴ95－31）[註3]でも同時期の遺構を検出している。さらに遺跡は異なるが北部へ約200ｍの小阪合遺跡第28次調査（ＫＳ94－28）[註4]で弥生時代後期の方形周溝墓・壷棺等を検出している。これらの調査で当調査地周辺が弥生時代後期の墓域内の範囲に入るものと思われる。

古墳時代前期以降については、当調査区から西へ約140ｍの第14次調査（ＮＴ92－14）[註5]で集落遺構が検出されている。

註

註１　西村公助　1998「20. 中田遺跡第36次調査」『平成９年度　八尾市文化財調査研究会事業報告』㈶八尾市文化財調査研究会報告

註２　同　註１掲載

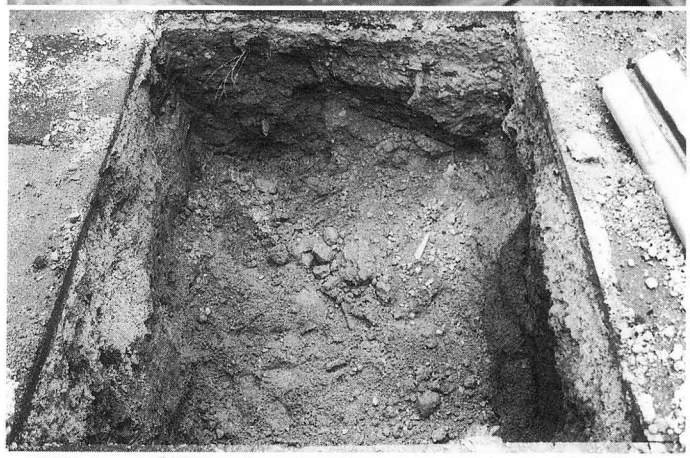
註３　原田昌則　1998「XVI. 中田遺跡」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告60』㈶八尾市文化財調査研究会報告

註４　成海佳子　1995「12. 小阪合遺跡第28次調査（ＫＳ94－28）」『平成６年度　㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』㈶八尾市文化財調査研究会

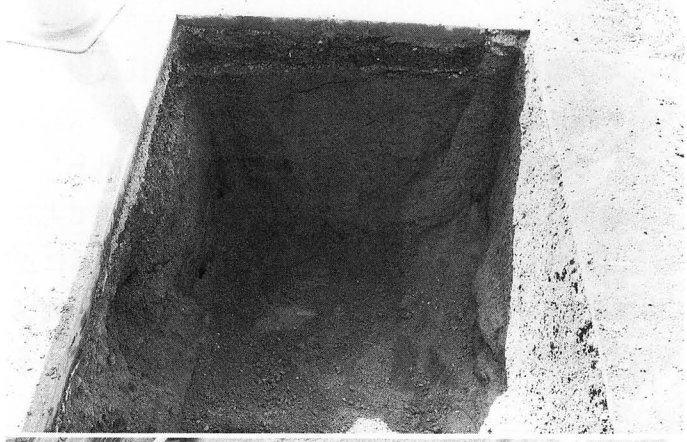
註５　岡田清一　1993「VIII　中田遺跡（ＮＴ92－12）第12次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告39　㈶八尾市文化財調査研究会

図版一

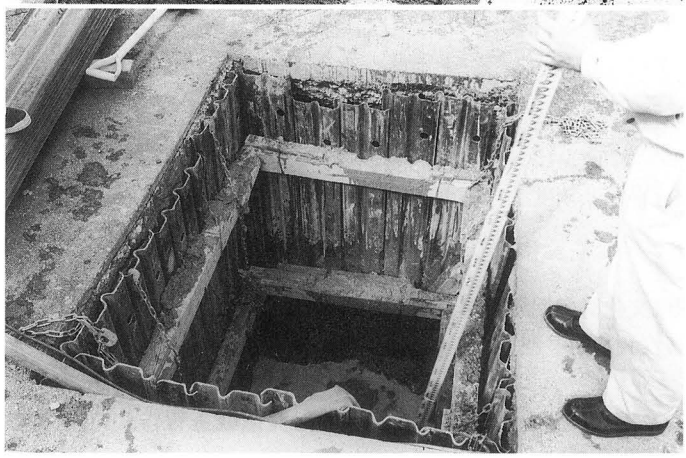
第1区（東から）



第2区（南から）



第3区（南から）



第3区　下層
（南から）

XIV　八尾寺内町遺跡第２次調査（ＹＣ97－２）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市本町２丁目149番地１で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する八尾寺内町遺跡第２次調査（ＹＣ97－２）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋99－４号　平成９年５月15日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が東洋生花株式会社から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成９年５月26日～６月３日（実働７日）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。 調査面積は104㎡を測る。なお、現地調査にあたっては、朝田 要・垣内洋平・岸田靖子・辻野優子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測および図面トレース－辻野、遺物写真撮影－岡田が行った。

1．本書の執筆・編集は岡田が行った。

1．本書で使用した土色の表示は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帖」によるものである。

本　文　目　次

1　はじめに ……117

2　調査概要 ……118

1）調査の方法と経過 ……118

2）基本層序 ……118

3）検出遺構と出土遺物 ……120

3　まとめ ……124

XW　八尾寺内町遺跡第２次調査（ＹＣ97－２）

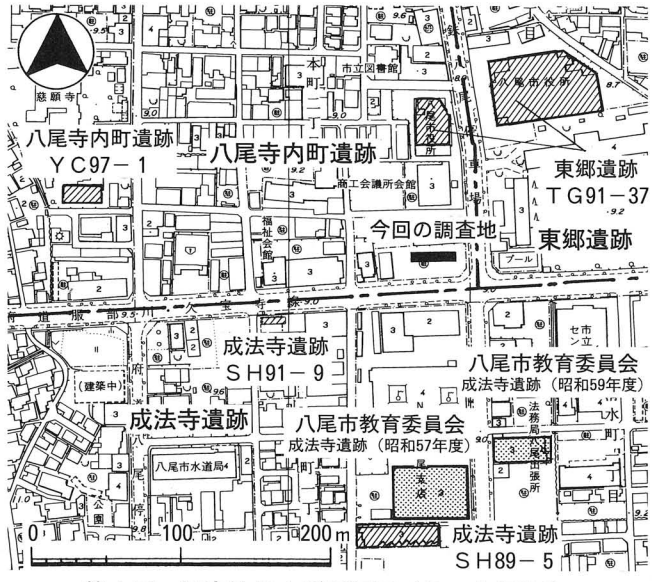
１．はじめに

八尾寺内町遺跡は、八尾市の北西部に位置する弥生時代中期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、本町２～５丁目一帯の南北0.5km・東西0.3kmがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川左岸に形成された沖積地に位置する。周辺の遺跡には、北に宮町遺跡、東に東郷遺跡、南に成法寺遺跡、西に久宝寺遺跡が隣接する。

遺跡名に由来する八尾寺内町は、久宝寺寺内町の住人であった森本七郎兵衛ら17人と慈願寺が久宝寺寺内町を出て、慶長十一年（1606年）に長瀬川沿いの荒野の地を開拓したことに始まるもので、その翌年、東本願寺の掛所として大信寺御坊が建立され、やがて大信寺を中核とする寺内町が形成された。森本七郎兵衛らが久宝寺寺内町を出る要因となったのは、同村の土豪であった安井氏の独裁的な特権行為にある。安井氏は天正九年（1581年）に織田信長から制礼を受け、久宝寺屋敷一邑の支配権を付与された後、独裁的かつ専制的な支配権を握った。これに反抗した森本七郎兵衛らは幕府に安井氏排斥を訴えたが、安井氏の勝訴となった為、彼らは新たな自主権を獲得するために久宝寺寺内町を出て現在地を求めたのである。したがって、八尾寺内町成立の経緯については、久宝寺寺内町のように久宝寺門徒集団によって寺家が一切の支配権をもって形成された寺内町とは性格を異にする。

八尾寺内町は、久宝寺寺内町とともにその成立以後現在に至るまで景観保存が計られており、大阪府下においても有数の優れた町並みを残すところである。したがって、遺跡として認識はされているものの、現在まで大規模な開発もなく、発掘調査を通じた寺内町形成以前の考古学的知見については未知なる部分が多いのが現状である。現在、遺跡内における発掘調査は八尾市教育委員会が実施している小規模な遺構確認調査を除くと、平成７年度に当研究会が実施した第１次調査（ＹＣ95－１）の１件だけである。しかしながら、この調査によって中世の生産域に伴う水路（溝）および水田面と弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての集落遺構といった生活面が重層的に検出され、寺内町形成以前の遺跡の実態の一部を垣間見ることができた。

ここで、周辺における既往の調査をみると、当地から南東へ約150ｍ地点で成法寺遺跡第９次（ＳＨ91－９）、東へ約400ｍ地点で東郷遺跡第37次（ＴＧ91－37）の２件の調査がいずれも平成３年度に当研究会によって実施されている。前者の成法寺遺跡では、弥生時代後期～古墳時代後期に至る土坑・小穴・溝といった集落遺構が検出されている。後者の東郷遺跡では、古墳時代前期の溝、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての水田および河川、平安時代後期の井戸、



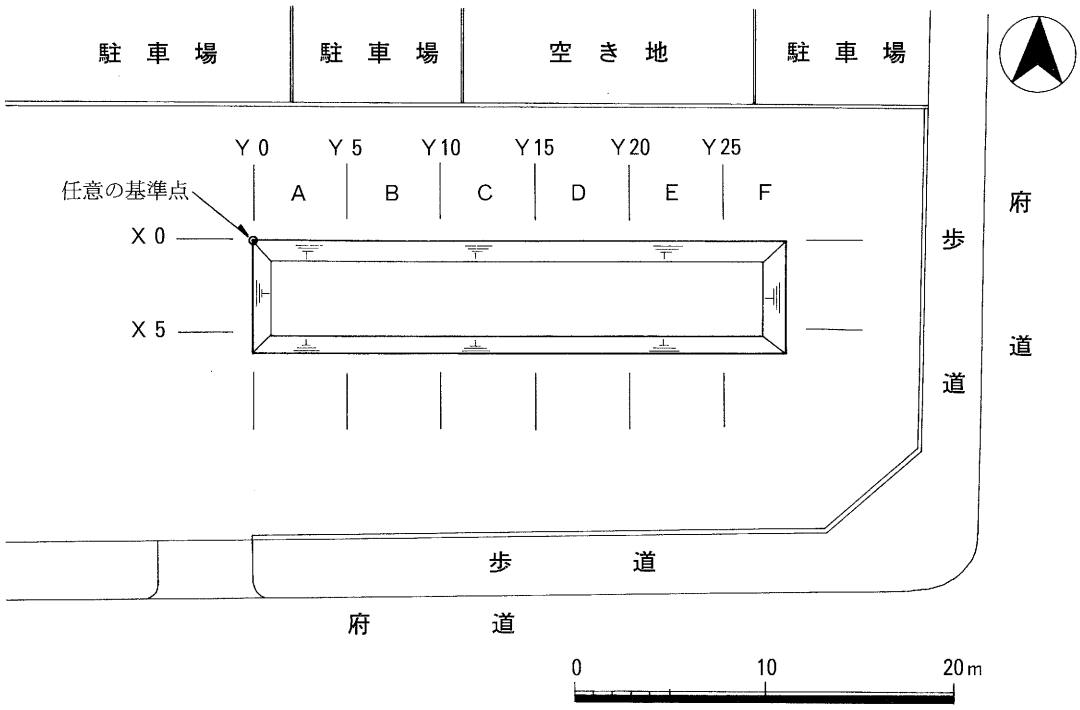
第１図　調査地および周辺図（Ｓ＝１/5000）

近世初頭の八尾寺内町内の町家の敷地を区画する溝（堀）が検出されている。※注

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設工事に伴うもので、当研究会が当遺跡内で実施する第2次調査となる。調査区の規模は、建物基礎工事によって破壊される南北長4ｍ×東西長26ｍの面積104㎡を測る。調査区の地区割りは、調査区北西部に任意の基準点を設置し、西から5ｍ区間で区切り、各地点表示を西からＡ区～Ｆ区と呼称した（第2図参照）。掘削方法は八尾市教育委員会の遺構確認調査資料を基に、現地表（T.P.＋9.2ｍ前後）から約1.3ｍ間に堆積する盛土（客土）・旧耕土を重機によって排除した後、調査期間の制約からそれより約1.4ｍ間の中・近世に相当する土層については、層理に従って遺構・遺物の確認を行いながら重機と人力を併用して掘削した。以上、現地表から約2.7ｍ間の土層を掘削した後は、今回の調査対象となる0.5ｍ前後の土層を人力によって掘削・精査し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査終了後は調査区中央部分において東西長19ｍ・南北長１ｍの規模でトレンチを設定し、最終調査面からさらに１ｍ前後の深さまで掘削して下層確認を実施した。



第2図　調査区地区割り図（S＝1/400）

2）基本層序

先述したように今回の調査では、期間の制約から現地表下約1.3～2.7ｍ（T.P.＋6.5～7.9ｍ）間に堆積する中・近世に相当する第2～8層については重機と人力を併用しながらの、言わば立会的な調査となった。結果的には八尾市教育委員会の遺構確認調査内容と同じく、該期の遺物は僅かながら採集できたものの、生活面は確認されなかった。第2～8層のうちで土器片が多く包含されるのは第2層であるが、図化不能な砕片が多くを占め、土質は礫を含んで硬く締まっており、その状況から本層は人為的に敷設された整地土である可能性が強い。第3層は河川による洪

水層、第４～８層については土器片が僅少みられるだけの水成による堆積層で、いずれも生活面は確認できず、沼沢地としての土地景観が想起される。

第９層は鎌倉時代中期頃に比定される洪水層で、調査区の東半部だけにみられる。その下層となる第10層上面で同時期に埋没したと見られる水田面を検出したが、本水田の構築層となる第10層も調査区の東半部にしか存在しない。これに対し調査区の西半部では、第10層と同レベルで古墳時代前期（布留式期古～中段階）の遺物を包含する第11層を確認した。その下層の第12層上面で同時期の溝２条（ＳＤ－１・ＳＤ－２）を検出した。これら第９～12層の層位（切り合い）関係から、古墳時代前期の生活面が後世の鎌倉時代中期頃に水田耕作に伴い、攪拌・削平されたことが窺われる。

以下、下層調査も含め確認できた第０～16層の計17層について列記する。

第０層：盛土（客土）・撹乱層。層厚1.0ｍ前後。

第１層：５Ｂ2/1青黒色シルト。層厚10～20㎝。旧耕作土にあたる。

第２層：7.5Ｙ3/1オリーブ黒色砂礫混じりシルト。層厚20～40㎝。近世～近代の染付をはじめとする陶磁器類や瓦片が含まれる。

第３層：５Ｙ7/2灰白色極細粒砂。層厚30～40㎝。周辺における既往の調査結果から、層位的に旧大和川付け替え以前の洪水層と思われる。斜行ラミナが顕著に見られ、水流の激しさが窺える。層内には、古墳時代後期末～中世にかけての遺物が含まれる。

第４層：10ＢＧ5/1青灰色砂礫混じりシルト。層厚10～40㎝。

第５層：10ＢＧ5/1青灰色シルト。層厚20㎝前後。水成作用による堆積層と見られ、比較的淘汰良好である。

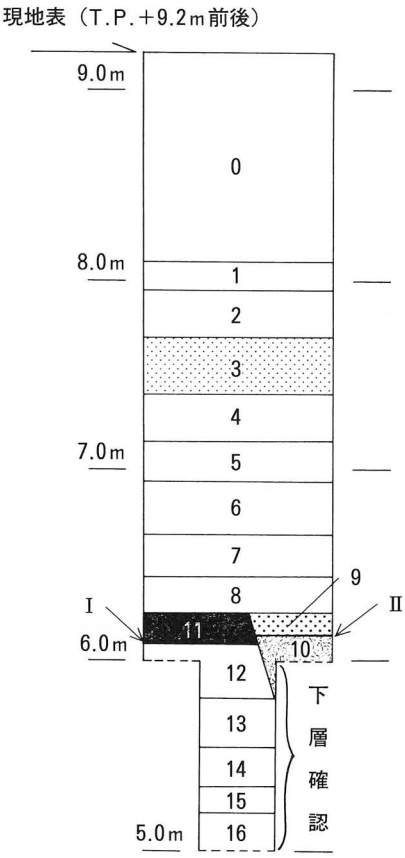
第６層：2.5ＧＹ6/1オリーブ灰色砂礫混じりシルト。層厚20～40㎝。

第７層：５Ｂ4/1暗青灰色粘土質シルト。層厚10～40㎝。

第８層：7.5ＧＹ6/1緑灰色シルト質粘土。層厚10～25㎝。調査区の東半部だけに認められる。

第９層：Ｎ8/灰白色極細粒砂。層厚10～40㎝。調査区東半部だけに見られる洪水層で、含まれる瓦器椀の形態から鎌倉時代中期頃に相当するものと考えられる。被圧水が豊富である。調査区中央付近で、西部から続く古墳時代前期（布留式期古相）に比定される第11層を切る。

第10層：Ｎ6/灰色砂礫混じり粘土。層厚20～50㎝。第９層の洪水砂によって埋没した水田耕土である。上面で、人および偶蹄目の足跡、さらに畦畔を検出した。上



第０層：盛土（客土）・撹乱層
第１層：５Ｂ２/１青黒色シルト
第２層：7.5Ｙ３/１オリーブ黒色砂礫混じりシルト
第３層：５Ｙ７/２灰白色極細粒砂
第４層：10ＢＧ５/１青灰色砂礫混じりシルト
第５層：10ＢＧ６/１青灰色シルト
第６層：2.5ＧＹ６/１オーブ灰色砂礫混じりシルト
第７層：５Ｂ４/１案青灰色粘土質シルト
第８層：7.5ＧＹ６/１オリーブ灰色砂礫混じりシルト
第９層：Ｎ８/灰白色極細粒砂
第10層：Ｎ６/灰色砂礫混じり粘土
第11層：Ｎ３/案灰色粘土質シルト
第12層：7.5ＧＹ４/１暗緑灰色粘土質シルト
第13層：7.5ＧＹ４/１暗緑灰色シルト
第14層：５ＧＹ２/１暗オリーブ灰色粘土
第15層：５ＧＹ２/１オリーブ黒色シルト質粘土
第16層：５ＧＹ４/１暗オリーブ灰色砂質シルト
※Ⅰ－古墳時代前期〈布留式期古相〉遺構検出面
　Ⅱ－鎌倉時代中期の水田遺構検出面

第３図　基本層序模式図（Ｓ：1/40）

面はT.P.＋6.2m前後を測る。第9層同様に調査区の東半部だけに認められ、古墳時代前期（布留式期古～中段階）の遺物包含層および生活面を切る。本層内部には、僅少ながらも鎌倉時代前期～中期に比定される瓦器椀の破片が含まれる。上半部は砂礫を含む割合が高くなるが、これは水田形成の際の攪拌作用によるものと思われる。

第11層：N3/暗灰色粘土質シルト。層厚10～20cm。古墳時代前期（布留式期古～中段階）の遺物包含層である。前述したように調査区西半部に認められ、東半部は鎌倉時代中期頃の洪水層および水田遺構によって削平を受ける。

第12層：7.5GY4/1暗緑灰色粘土質シルト。層厚20～30cm。本層上面で古墳時代前期（布留式期古～中段階）に比定される溝2条（SD－1・SD－2）を検出した。上面はT.P.＋6.1m前後を測る。調査区東半部は鎌倉時代中期頃に形成された水田遺構によって削平を受ける。

＜以下、下層確認＞

第13層：7.5GY4/1暗緑灰色シルト。層厚20～40cm。植物遺体が混在する。

第14層：5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。層厚20cm前後。植物遺体が混在する。

第15層：5GY2/1オリーブ黒色シルト質粘土。層厚5～10cm。植物腐蝕による暗色帯構成層である。

第16層：5GY4/1暗オリーブ灰色砂質シルト。層厚20cm以上。

3）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表から約3.1m前後（T.P.＋6.1m前後）で鎌倉時代中期頃に比定される水田面（畦畔・足跡）と古墳時代前期（布留式期古相）に比定される溝2条（SD－1・SD－2）を検出した。出土遺物量は包含層も含め、全体でコンテナバット2箱分である。以下、各遺構について記す。

＜鎌倉時代中期＞

水田面（畦畔・足跡）

D・E区間の東西長約6m間で、水田遺構を明示する人および偶蹄目の足跡群と畦畔1条を検出した。畦畔の北部および東部は調査区外に至っており、全容は不明であるが、検出状況から北西－南東方向に伸びるものと推察される。確認できる畦畔の規模は、東西長3.7m・南北幅0.5～1.1m・高さ0.07～0.1mを測る。水田は、覆われる洪水砂層（第9層）内に含まれる瓦器椀の破片から、鎌倉時代中期頃に埋没したものと考えられる。人の足跡については、方向性を見出せる規則的なものは確認できなかった。また、本調査区の東側で調査前に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査では、標高値および層位的に該期の水田耕土に対応する堆積土層と土器片が検出されており、水田遺構がさらに東域に拡がるものと推定される。

＜古墳時代前期（布留式期古相）＞

溝（SD）

SD－1

B～D区間で検出した。北東－南西方向に伸びる溝である。規模は幅1.2～1.5m・深さ0.2m前後を測る。溝内では途中で断面が逆凸形を呈する2段の掘形となり、埋土は上層が暗灰色シルト質粘土、2段目となる下層が暗緑灰色粘土質シルトの2層構造となる。溝内からは布留式期古～

中段階に比定される壷・甕の破片が出土した。

ＳＤ－２

Ｃ区内東部で検出した。南北方向に伸びる溝で、北部でＳＤ－１と合流する。規模は幅1.0ｍ前後・深さ0.01～0.2ｍを測る。埋土は暗灰色シルト質粘土の単一層である。断面の形状は逆台形を呈する。溝内からは布留式期古～中段階に比定される甕・高杯の破片が出土した。

＜遺構に伴わない出土遺物＞

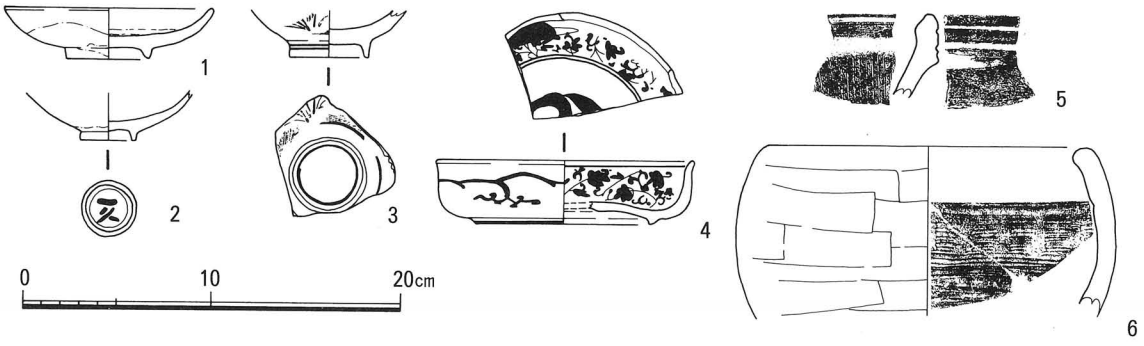
今回の調査で出土した遺物の中で図化できたものは、遺構内からのものはなく、第２層・第３層・第11層の遺物包含層からのものだけである。以下、層別に各遺物について記述する。

第２層出土遺物

本層内で図化できた遺物は、磁器皿（１）・京焼碗（２）・肥前磁器染付碗（３）・肥前磁器染付鉢（４）・備前焼擂鉢（５）・瓦質風炉（６）の陶磁器類６点である。

（１）の白磁皿は、見込み部分の蛇ノ目釉剥ぎと底部の無釉部分の状況から、重ね焼きの痕跡が明瞭に窺える。（２）の京焼碗は、乳白色の精良な胎土をもち、透明釉が掛けられる。高台は露胎させ、端部を面取りする。高台内に「久」の墨書がある。（３）の染付碗は、高台の外面に２条、内面に１条の圏線が巡る。文様の発色はにぶい。（４）の染付鉢の底部は、蛇ノ目凹形高台を呈するものと思われる。文様の発色はにぶい。（５）の擂鉢は、段をもって直立する口縁部で、端部内面が肥厚する。（６）は、内傾して丸味をもつ口縁端部を有する。

以上図化できた６点の遺物は、概ね16世紀後半～18世紀にかけての所産と考えられる。

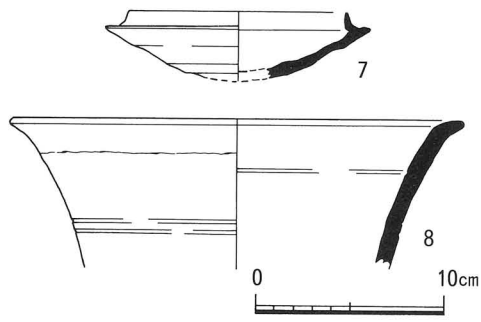


第５図　第２層出土遺物実測図（Ｓ＝１/４）

第３層出土遺物

本層内で図化できた遺物は、須恵器杯身（７）と須恵器壷（８）の２点である。

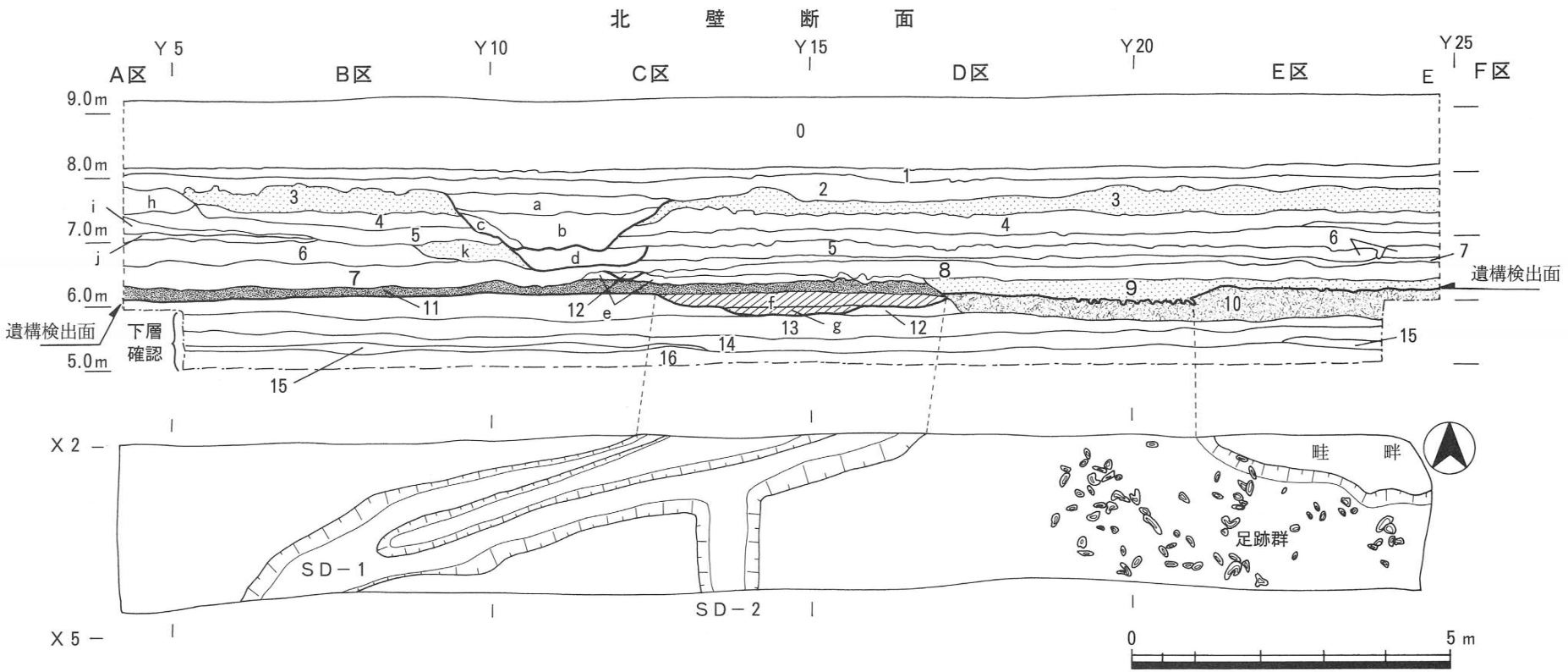
（７）は、立ち上がりが短く内傾し、偏平な底部を呈する。陶邑編年Ⅱ型式６段階頃に比定されよう。（８）については（７）と同時期頃の古墳時代後期末頃所産の広口壷の口縁部と推定されるが、詳細な時期は不明である。



第６図　第３層出土遺物実測図（Ｓ＝１/４）

第11層出土遺物

本層内で図化できた遺物は、小型丸底壷（９）・直口壷（10）・甕２点（11・12）・小型器台（13）・高杯５点（14～18）の10点である。



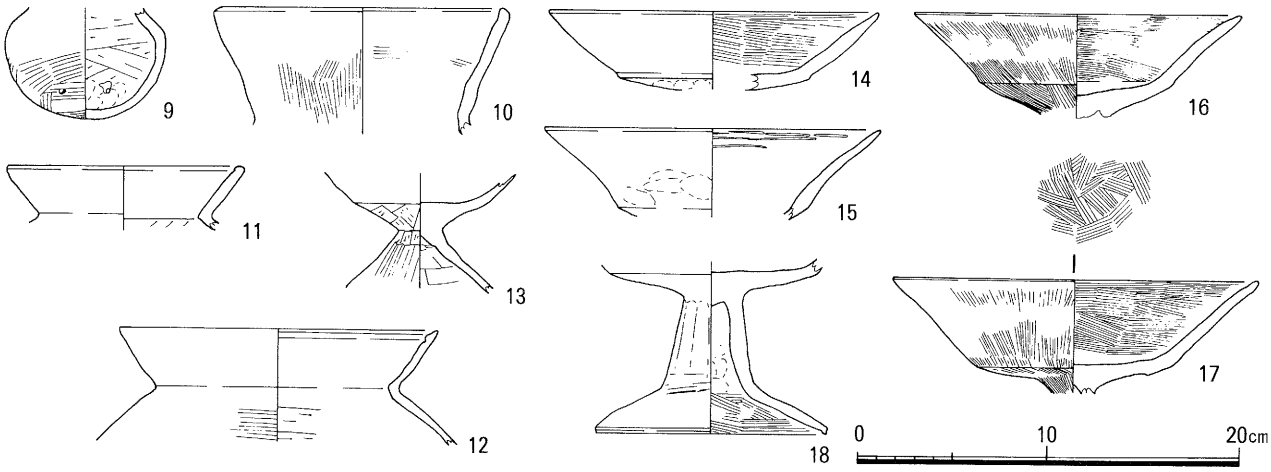
【層　序】
第０層：盛土（客土）・攪乱層
第１層：５Ｂ2/1青黒色シルト
第２層：7.5Ｙ3/1オリーブ黒色砂礫混じりシルト
第３層：５Ｙ7/2灰白色極細粒砂
第４層：10ＢＧ5/1青灰色砂礫混じりシルト
第５層：10ＢＧ5/1青灰色シルト
第６層：2.5ＧＹ6/1オリーブ灰色砂礫混じりシルト
第７層：５Ｂ4/1暗青灰色粘土質シルト
第８層：7.5ＧＹ6/1緑灰色シルト質粘土
第９層：N8/灰白色極細粒砂
第10層：N6/灰色砂礫混じり粘土
第11層：N3/暗灰色粘土質シルト
第12層：7.5ＧＹ4/1暗緑灰色粘ぢ質シルト
第13層：7.5ＧＹ4/1暗緑灰色シルト
第14層：５ＧＹ4/1暗オリーブ灰色粘土
第15層：５ＧＹ2/1オリーブ黒色シルト質粘土
第16層：５ＧＹ4/1暗オリーブ灰色砂質シルト

【その他の層序】
ａ：５ＧＹ6/1オリーブ灰色砂礫混じりシルト
ｂ：N5/灰色砂礫混じりシルト
ｃ：N5/灰色砂礫混じり粘土質シルト
ｄ：10ＧＹ6/1緑灰色粘土質シルト
ｅ：N3/暗灰色粘土質シルト
ｆ：N3/暗灰色シルト質粘土
ｇ：５Ｇ3/1暗灰色粘土質シルト
ｈ：2.5ＧＹ6/1オリーブ灰色砂礫混じりシルト
ｉ：N6/灰色砂質シルト
ｊ：５Ｂ4/1暗青灰色粘土質シルト
ｋ：N7/灰白色粗粒砂
ｉ：7.5ＧＹ8/1明緑灰色砂質シルト

第４図　遺構平面図および北壁断面図（Ｓ＝１/100）

（９）は球形を呈する体部のみ残存するもので、体部下半には３㎜前後の穿孔が１箇所見られる。10は大型壷に類するもので、内傾する口縁端部を有する。（11・12）の２点の甕については、口縁部が直線的に伸びるタイプ（11）に対し、（12）は内彎気味に伸びるタイプとなる。また、口縁端部については（11）が丸味をもち、（12）は内傾する面を有する。（13）は、口縁部および裾底部が欠損しているが、受部が浅い皿状を呈する器台と思われる。（14～17）の杯部のみ復原図化できた高杯４点は、いずれも杯部外面に段もしくは明瞭な稜をなすもので、（15）を除いてすべてハケメ調整される。なかでも（17）は、杯底部内面に周密にハケメが施される。これらの高杯の脚部に相当するのが（18）で、同類のものである。

以上の図化できた10点の古式土師器類は、古墳時代前期の範疇の布留式期古～中段階に比定されるものである。



第７図　第11層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

出土遺物観察表

※胎土－石→石英、長→長石、雲→雲母、角→角閃、チ→チャート、赤→赤色斑粒〈() 内は粒最大長（㎜）〉

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量 口 径 (cm) 器 高	調　整・手　法	色　調	胎　土	残存	備考
1 四	皿 （白磁） 第２層	11.0 2.7 高台径 4.4 高台高 0.6	見込み部分－蛇の目釉剥ぎ 体部下半部～底部－露胎（高台の一部に釉付着）	灰白色・灰色 断：灰白色	密	１／２	
2 四	碗 （陶器） 第２層	－ － 高台径 2.9 高台高 0.6	高台脇－露胎	内：淡黄色 外：乳白色 断：乳白色	密	底部のみ	京焼 高台内に「久」の墨書
3 四	碗 （磁器） 第２層	－ － 高台径 4.2 高台高 0.9	外面－青花染付	乳白色 断：灰白色	密	底部のみ	肥前系
4 四	鉢 （磁器） 第２層	13.4 3.4 高台径 9.2 高台高 0.4	内外面－青花染付 蛇の目凹形高台	内：にぶい灰白色 外：にぶい灰白色・橙色 断：灰色	密	１／５	肥前系
5 四	摺鉢 （陶器） 第２層	－ －	口縁部－ヨコナデ・外面に２条の凹線 体部－〈外〉ナデ、〈内〉摺目	暗紫灰色 断：灰色・紫灰色	長(2)少	口縁部破片	備前系
6 四	風炉 （瓦質） 第２層	17.0 －	内面－ヨコナデ・ハケメ（５本／cm） 外面－ヨコナデ・ヘラナデ	内：灰色 外：暗灰色	密	口縁部～体部１／４	
7	杯身 （須恵器） 第３層	11.4 －	内面－回転ナデ 外面－底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	灰色	長(2)少	１／６	
8	広口壷 （須恵器） 第３層	23.8 －	口縁部－〈内面〉回転ナデ・１条の沈線を有す（不明瞭）、〈外〉－回転ナデ・２条の沈線を有す（不明瞭）・１条の接合痕を有す	内：灰色 外：灰白色	長(2)少	口縁部破片	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量 口径 (cm) 器高	調　整・手　法	色　調	胎　土	残存	備考
9 四	小型丸底壷 (古式土師器) 第11層	－ － 体部最大径 8.5	体部－〈内面〉ヘラケズリ・ユビオサエ、〈外〉ナデ・ハケメ（4本／cm）・体部下位に径3㎜前後の穿孔あり	乳白色	石(0.6)長（0.5）少・チ(1)少・赤(1)少	体部のみ	
10 四	広口壷 (古式土師器) 第11層	14.6 －	口縁部内外面－ヨコナデ後ハケメ（4本／cm）	乳白色	石(1)僅・長(1)多・雲(2)・赤(1)少	口縁部 1／2	外面に黒斑
11	甕 (古式土師器) 第11層	12.3 －	口縁部－内外面ともヨコナデ 肩部－〈内〉ヘラケズリ、〈外〉不明	明褐灰色	石(1)僅・長(2)多・雲(1)少・角（0.5）僅・赤(1)少	口縁部 2／3	外面に煤
12 五	同　上	16.6 －	口縁部－内外面ともヨコナデ 肩部－〈内〉ヘラケズリ、〈外〉ハケメ（5本／cm）	にぶい黄橙色	長(1)多・雲(0.5)僅・赤(0.5)僅	口縁部 1／4	
13	小型器台 (古式土師器) 第11層	－ －	受部－〈内〉不明、〈外〉上半部は不明、下半部はヘラケズリ 脚部－〈内〉ユビオサエ・ヘラナデ、〈外〉ヘラケズリ・ヘラナデ	にぶい黄橙色	長(1)多・雲1少・角(0.6)少・チ(2)少・赤(0.6)僅	受底部～脚部上半部	
14 五	高杯 (古式土師器) 第11層	17.2 －	杯口縁部－〈内〉ハケメ（6本／cm）、〈外〉ヨコナデ 杯底部－〈内〉ナデ、〈外〉ユビオサエ・ナデ・杯口縁部と杯底部の境目に1条の接合痕を有す	にぶい黄橙色	石2僅・長4少・雲2僅・角(2僅・チ(2)少・赤(1)僅	杯部 1／2	外面に黒斑
15 五	同　上	17.6 －	杯口縁部－〈内〉ヘラミガキ・他は摩滅により調整不明、〈外〉ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	橙色	石（0.6）僅・長(0.6)僅・赤(0.6)僅	口縁部 1／5	
16 五	同　上	17.0 －	杯口縁部－〈内〉ハケメ（6～7本／cm）、〈外〉ハケメ（9本／cm） 杯底部－〈内〉ナデ、〈外〉ハケメ（9本／cm）	淡黄色	石2僅・長(5)多・角(1)僅・チ(3)多・赤(1)僅	杯部 1／4	外面に黒斑
17 五	同　上	19.0 －	杯口縁部－内外面ともハケメ（7～10本／cm） 杯底部－〈内〉ハケメ（5本／cm）、〈外〉ハケメ（7～10本／cm）	灰黄色	長(4)少・雲1僅・角(1)僅・チ(3)少・赤(0.5)僅	杯部 1／2	
18	同　上	－ － 裾径　12.0	杯底部－〈内〉ハケメ（4本／cm）、〈外〉ナデ 柱状部－〈内〉ユビオサエ・ナデ、〈外〉ヘラナデ 裾部－〈内〉ハケメ（4本／cm）、〈外〉ヘラミガキ・ナデ	にぶい橙色	石1僅・長2少・雲1僅・角1僅・チ(3)少	杯底部 1／5 ～脚部	杯底部外面に黒斑

3．まとめ

今回の調査では、ほぼ同一面において古墳時代前期と鎌倉時代中期に比定される遺構面を検出した。以下、2時期の遺構面について、近隣の調査結果と照合しながら概観する。

〔古墳時代前期〕

該期に対応する調査では、当地から東へ約50ｍ地点で昭和56年度に八尾市教育委員会が実施した小学校のプール建設に伴う調査（東郷遺跡内）があり、ここでは布留式期の土器が多量に検出されている。次に当地から北へ約80ｍ地点で平成3年度に当研究会によって実施された市庁舎建替えに伴う東郷遺跡第37次調査（西区）で、布留式期新相の溝3条が検出されている。この溝3条のうち1条からは壷・甕・高杯をはじめ小型器台・小型鉢・鼓形器台といった多器種に及ぶ土器類がコンテナパットにして約6箱分出土している。この2件の調査で検出された多量の土器類は、付近に集落の存在を示唆するものであり、本調査で検出した2条の溝が有機的に関連するものと思われる。

〔鎌倉時代中期〕

近隣の調査で今回の遺構と対応できるのは現在のところ、当地から西へ約200ｍ地点で平成7年度に当研究会によって実施された当遺跡第1次調査だけである。この調査では、T.P.＋6.8ｍのところで河川の氾濫に見舞われ埋没した今回と同時期の水田跡が見つかっている。ここで双方の水田を見舞った洪水層について見ると、当遺跡の東方の八尾小学校付近（東郷遺跡）や南東に位置する市立教育センター付近（成法寺遺跡）における数件の調査で層位的および出土した遺物からもほぼ同時期、さらに推し進めると同一河川によってもたらされた可能性もあり、かなり広範囲に及んで氾濫したことが想定される。いずれにせよ、本調査で見つかった水田とともに該期

の条里制を究明する上で興味深い資料であり、今後周辺における調査の累積に期待される。

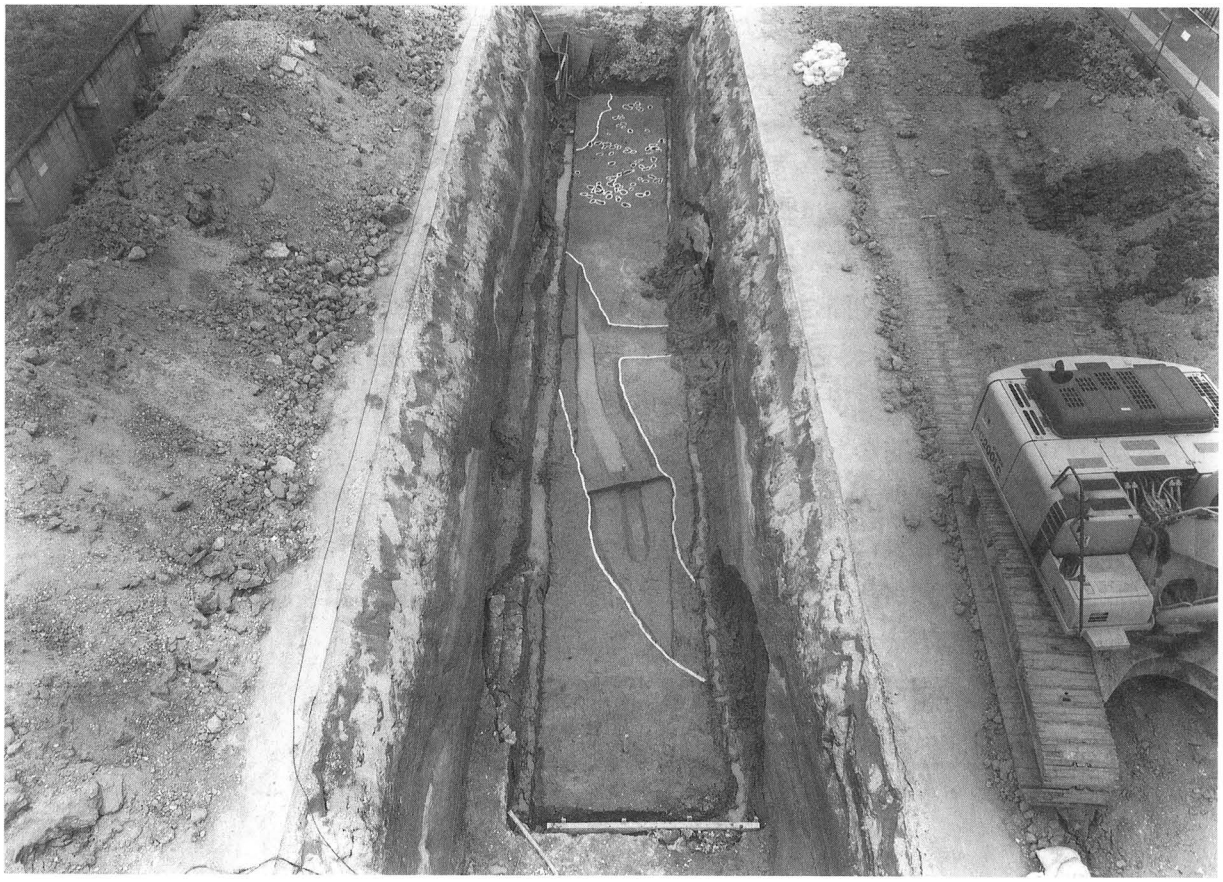
以上２時期の遺構について概観したが、双方の関係については結果的に古墳時代の遺構面が中世の水田形成の際に削平されたことが層位関係をはじめ、水田耕土内に含まれる古墳時代前期の土器片から看取できる。また、２時期間を埋めるべく古墳時代中期～平安時代の遺構面および遺物が確認されないことについては、該期に相当する土層が沼沢地や氾濫原を示唆する状況から、当地が生活を営むには不向きな土地条件であったことが推察される。くわえて、周辺における既往の調査についてもこの時期間の生活面は確認されていない。また、旧寺内町（近世）に関連する遺構および遺物については、該期に相当する遺物片が洪水層と思われる第３層内に流れ込みによって僅かに含まれていただけで、生活面を確認することができなかった。第３層の上下間の層相からはいわゆる氾濫原的な土地景観が想定され、中世に生産域としての役割を終えた後は、生活基盤を置くにふさわしい所ではなかったように感じられる。考古学的調査以外に旧八尾寺内町の町割りを知る方法としては、唯一当時の寺内村を描写した「河内国若江郡八尾郷絵図」（京都大学文学部地理学教室蔵）がある。この絵図によれば、寺内村の周囲に掘り巡らされた堀（環濠）のうち、村域の南端部を示す東西に伸びる堀（環濠）が、当地点から北へ約70ｍのところ（現在の市役所西別館南側の市道付近）となっている。こういった検証から、寺内町期における当地の環境としては、慶長十一年（1606年）に森本七朗衛等の開拓によって八尾寺内町が形成される以前から荒蕪の地のままであったことが推察される。

＜参考文献＞

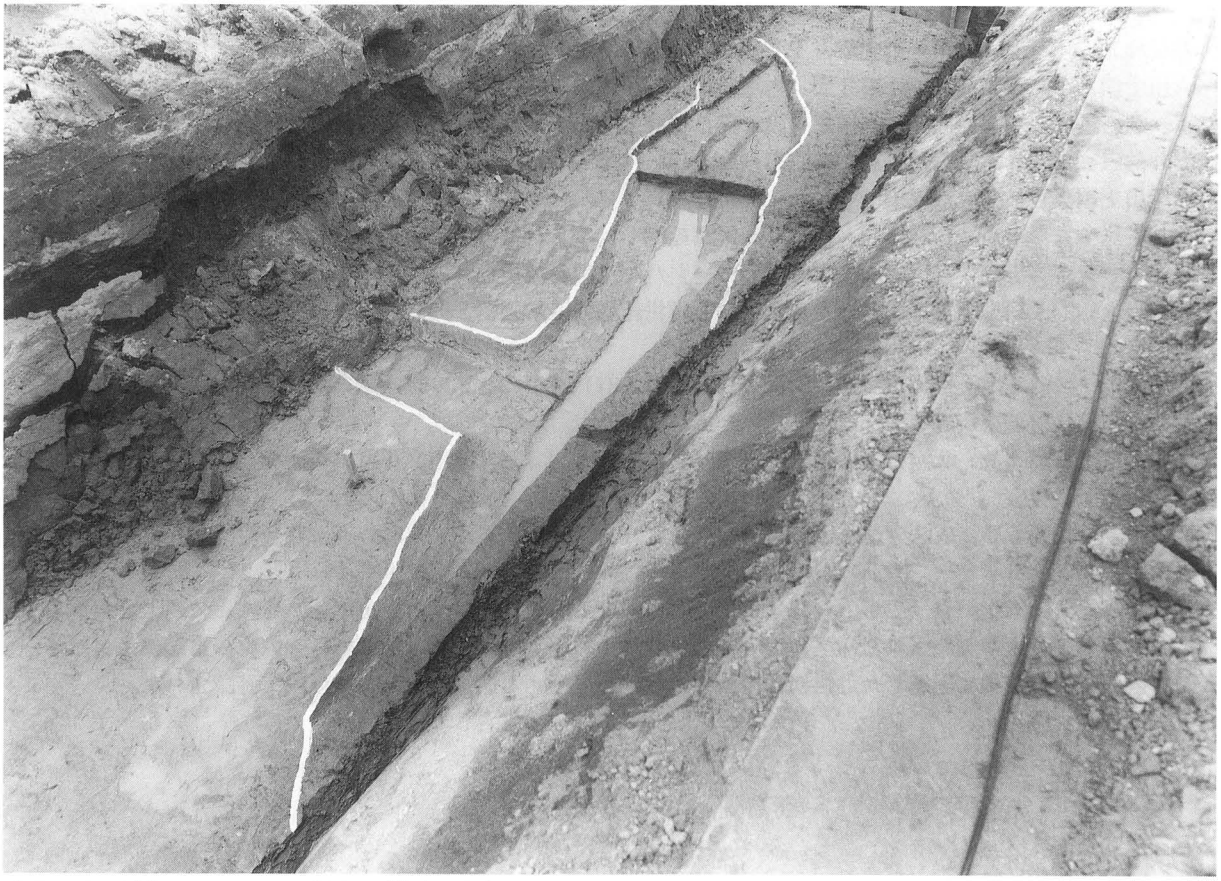
・中村　浩　1980「第６章　和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ　大阪府文化財調査報告書第30輯』㈶大阪文化財センター
・棚橋利光　1981『大阪市・市史双書１　八尾・柏原の歴史』松籟社
・寺川史朗・金光正裕　1987「第３節　古墳時代　１．古墳時代前期（１）出土土器の分類」『久宝寺北（その１～３）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』㈶大阪文化財センター
・沢井浩三　1988「＜歴史編＞第三章　第六節　二、八尾寺内町の形成と発展」『八尾市史（前近代）本文編』八尾市史編集委員会　八尾市役所
・櫻井敏雄・大草一憲　1988「四、(一)「八尾郷絵図」にみられる寺内町の構成」『寺内町の基本計画に関する研究　―久宝寺寺内と八尾寺内を中心として―』八尾市教育委員会
・森　毅　1992「第Ⅴ章第５節　16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究　第九』㈶大阪市文化財協会
・原田昌則　1992「９．東郷遺跡第37次調査（ＴＧ91－37）」『平成３年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』㈶八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1993「Ⅱ　久宝寺遺跡第１次調査（ＫＨ84－１）」『㈶八尾市文化財調査研究会報告37』　㈶八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1993「XIV　成法寺遺跡第９次調査（ＳＨ91－９）」『八尾市文化財調査研究会報告39』　㈶八尾市文化財調査研究会

※注　東郷遺跡第37次調査（ＴＧ91－37）は、南北に伸びる府道（近鉄八尾停車場線）を挟んで西区と東区の２箇所の調査区で実施され、西区については位置的に八尾寺内町遺跡の範囲で、寺内町の東端部にあたる。因みに、本文中に記述した近世初頭の屋敷の敷地を区画する溝（堀）は、西区内で確認された。

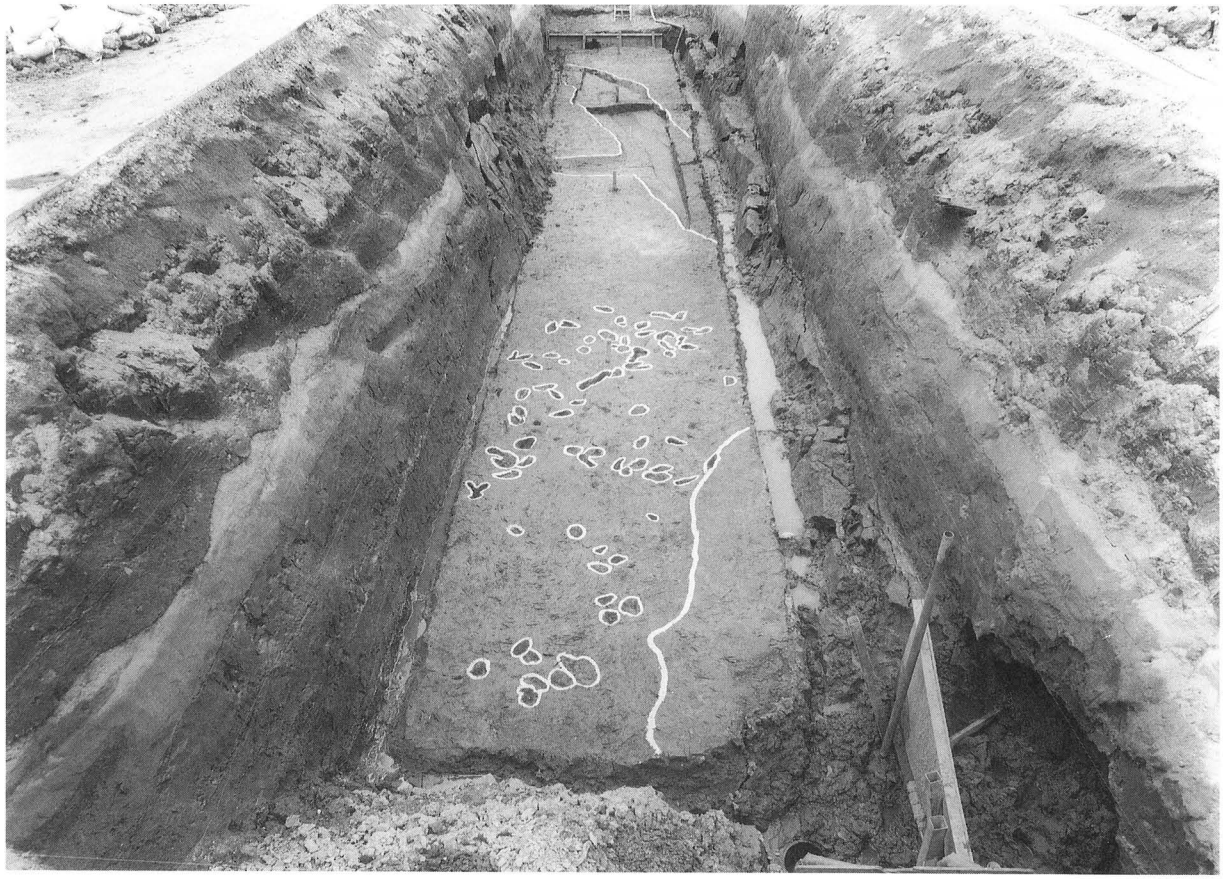
図版一



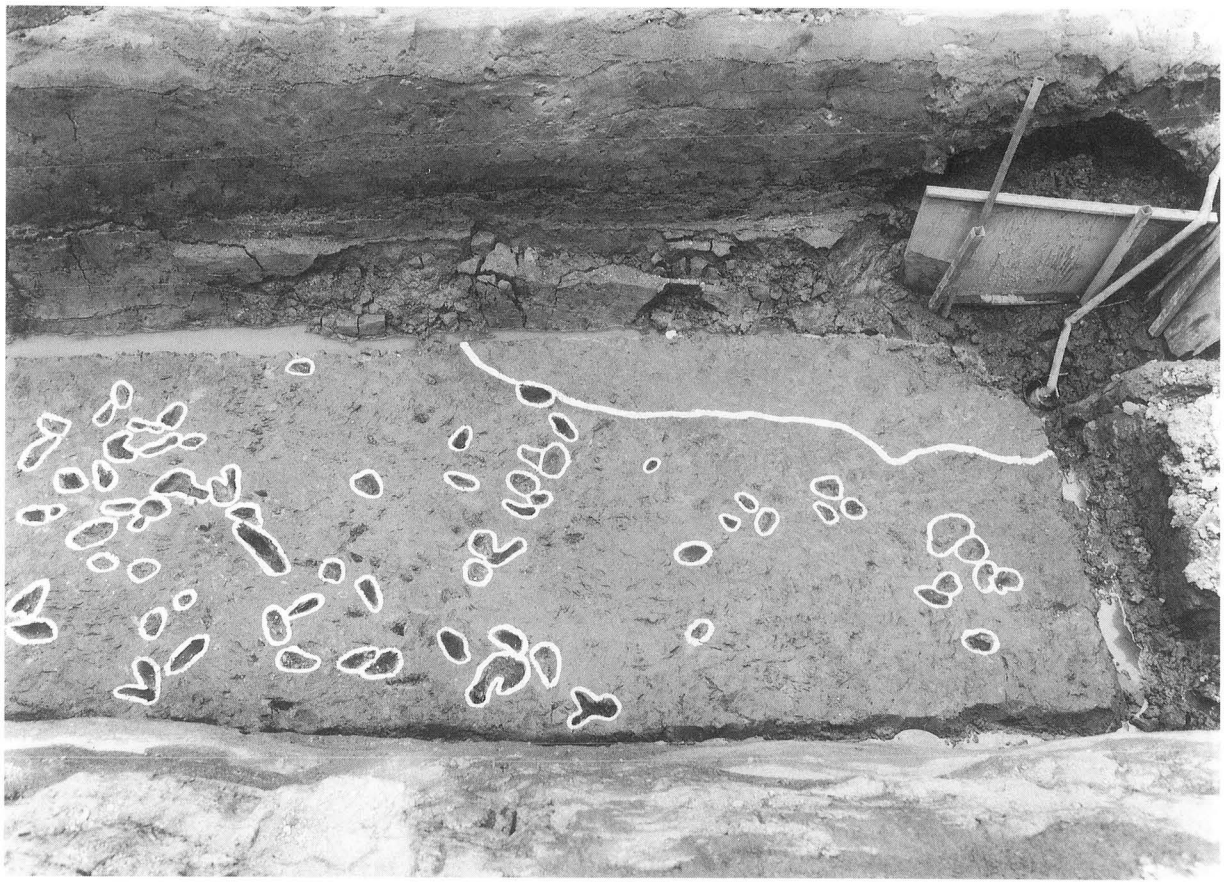
調査面全景（西から）



ＳＤ－１〈左〉・ＳＤ－２〈右〉（北東から）

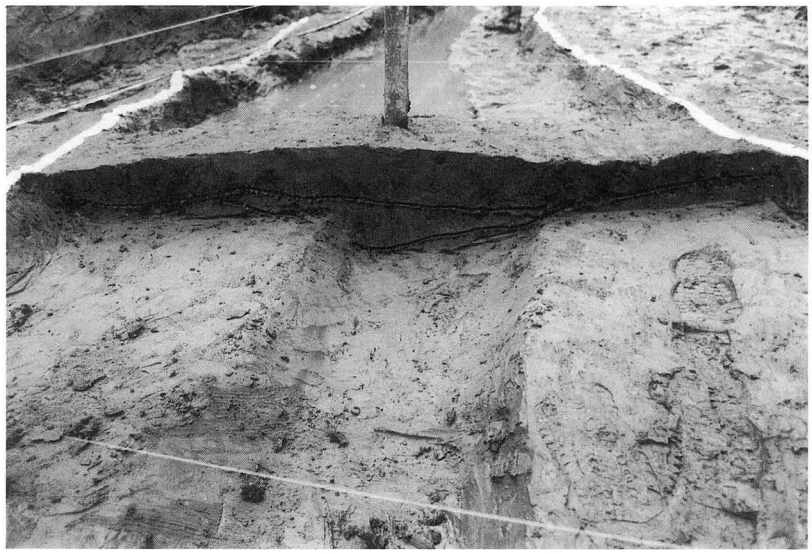


調査面全景（東から）

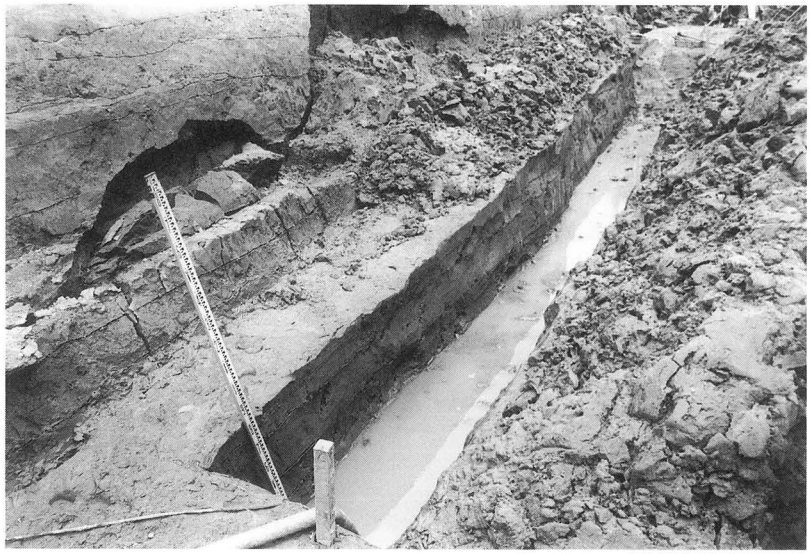


畦畔〈右上〉および足跡（南から）

図版三

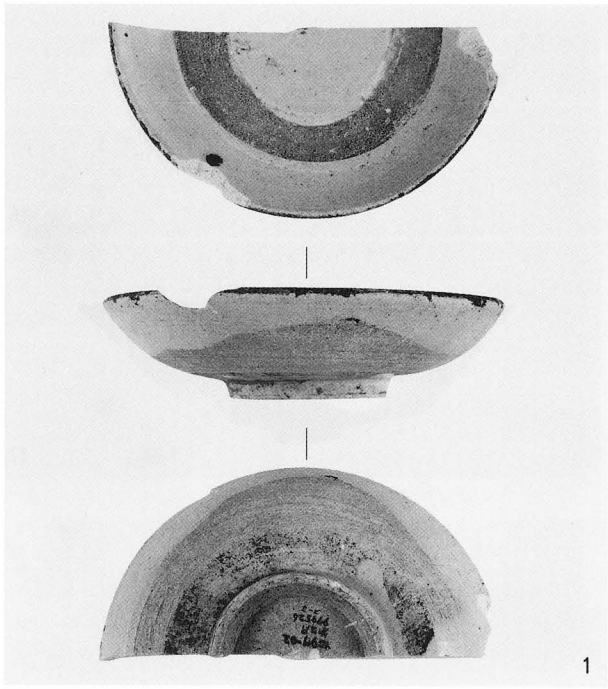


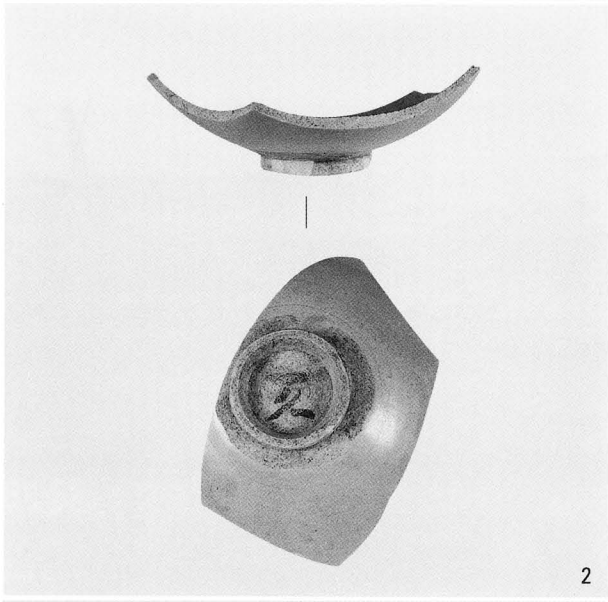
ＳＤ－１埋土観察用セクション
（西から）

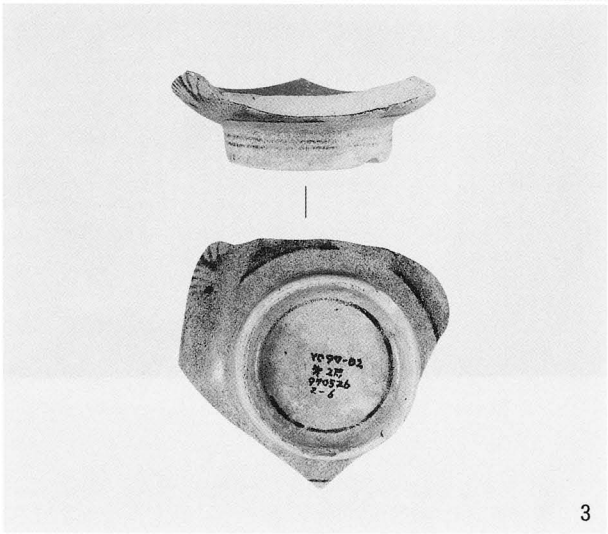


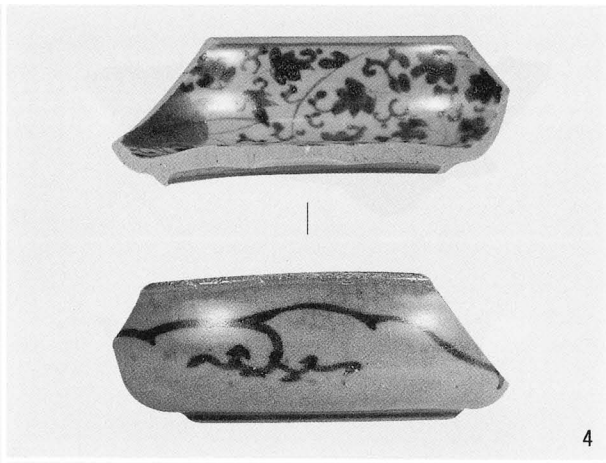
下層確認トレンチ（南西から）

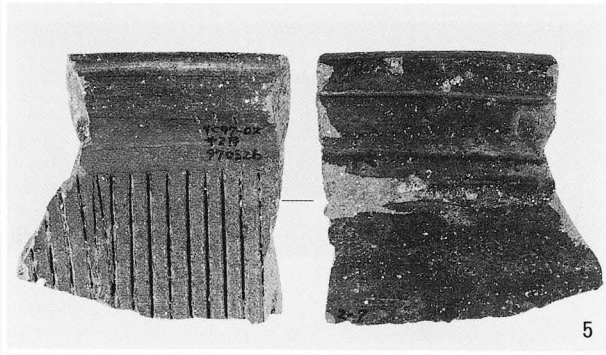
調査風景（東から）


1

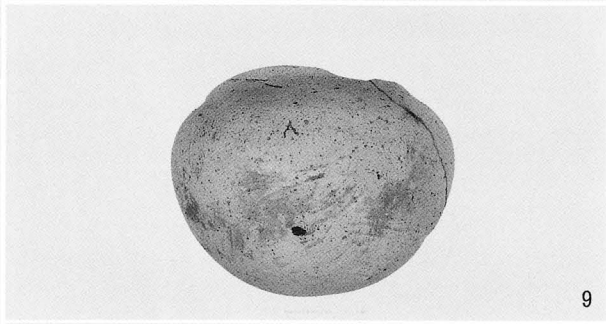

2

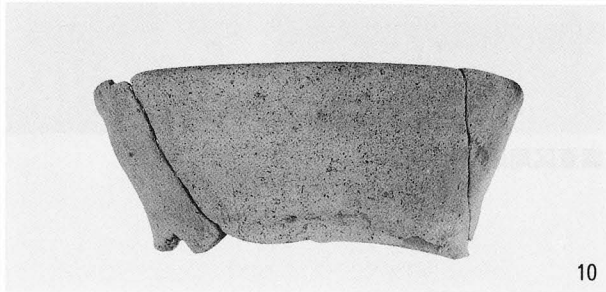

3


4


5

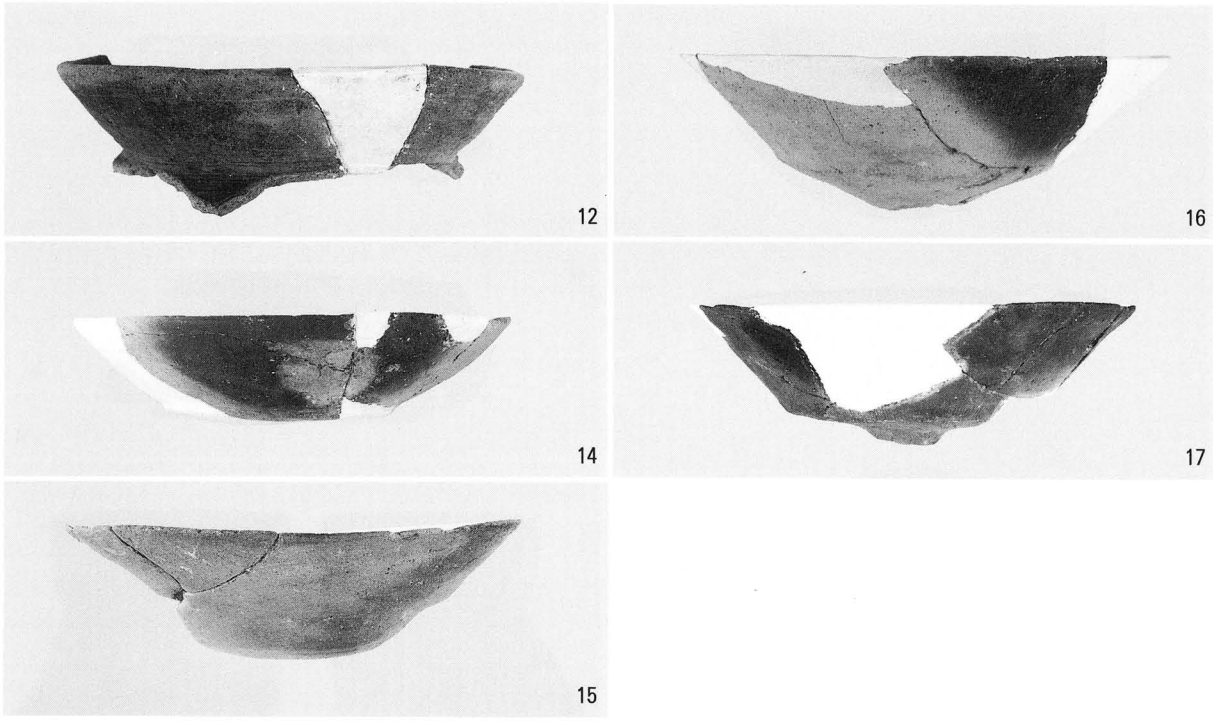
6


9


10

第２層（１～６）・第11層（９・10）出土遺物

図版五



第11層出土遺物

調査区周辺（西から）

XV　山賀遺跡第７次調査（ＹＭＧ97－７）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市新家町２丁目に所在する公共下水道（８－41工区）工事に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する山賀遺跡第７次調査（ＹＭＧ97－７）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋第60号　平成９年４月16日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成８年６月26日～10月21日（実働10日）にかけて、古川晴久を担当者として実施した。調査面積は、約40㎡である。現地調査においては、朝田　要・坂田典彦・中西明美・村井俊子が参加した。
1．内業整理は上記以外に中前和代が参加し、平成10年10月に終了した。
1．土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖（1996）』による。
1．本書の執筆・編集は、古川が行った。

本　文　目　次

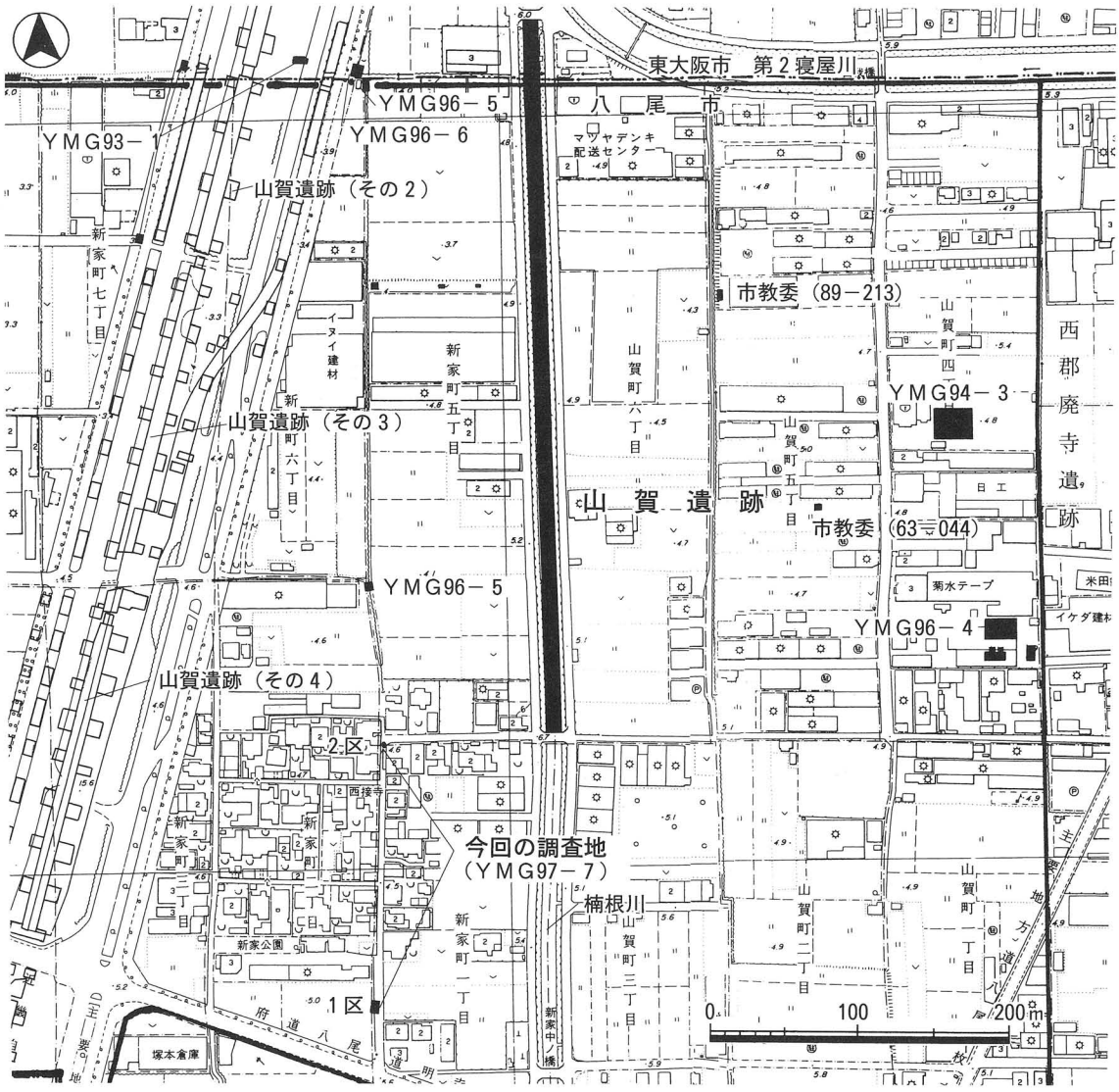
1．はじめに ……131
2．調査概要 ……132
　1）調査の方法と経過 ……132
　2）層序 ……133
　3）検出遺構と出土遺物 ……135
3．まとめ ……136

XV　山賀遺跡第７次調査（ＹＭＧ97－７）

１．はじめに

山賀遺跡は、八尾市の北西端に位置し、現在の行政区画では八尾市新家町１～８丁目・山賀町１～６丁目それに東大阪市若江西新町５丁目・若江南町４～５丁目にかけて所在する（第１図）。地理的には、河内平野のほぼ中央に位置し、旧大和川の本流であった長瀬川と玉串川の度重なる氾濫などに伴い形成された沖積平野に立地する。山賀遺跡の北に若江北遺跡（東大阪市）・北西に上小阪遺跡（東大阪市）・東に西郡廃寺遺跡（八尾市）・南に友井東遺跡（東大阪市～八尾市）が所在する。

山賀遺跡は、昭和46年（1971）に東大阪市域で実施された楠根川改修工事に際して、多量の弥生土器（前期が主体）・石器などが出土したことによって周知の遺跡となった。その後、楠根川



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/5000）

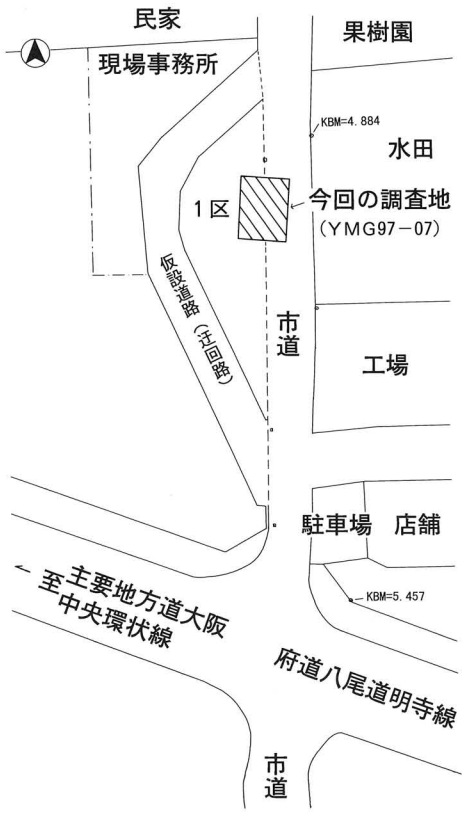
改修工事・下水道工事・校舎築造工事などに伴う発掘調査が瓜生堂遺跡調査会・東大阪市教育委員会・八尾市教育委員会によって実施されたが、山賀遺跡の実態は不明な点が多かった。しかし、近畿自動車道天理～吹田線築造に伴う大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター（現大阪府文化財調査研究センター）によって実施された大規模な調査の結果、縄文時代後期～近世にわたる複合遺跡として認識された。特に、弥生時代前期（中段階）において検出された自然堤防の緩斜面に構築された多重の環濠・水田は、河内平野中央部における稲作導入期の最古の集落遺跡として注目される。

2．調査概要

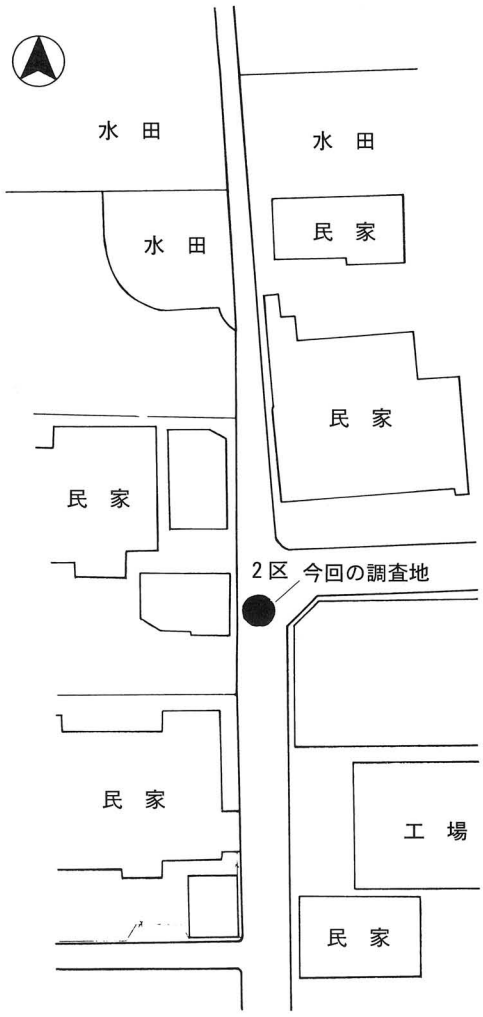
1）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（新家排水区８－41工区）の発進立坑・中間ライナープレート設置に伴うもので、当調査研究会が山賀遺跡内で実施した第７次調査にあたる。調査地は、２箇所（立坑・ライナー）である。立坑（１区）は、東西5.2ｍ×南北6.8ｍの平面形が長方形である。ライナー（２区）は、直径2.4ｍの平面形が円形である。（第２図）調査面積は、２箇所合わせて約40㎡である。（第２図）

掘削方法は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表（≪１区≫Ｔ.Ｐ.＋4.95ｍ・≪２区≫Ｔ.Ｐ.＋4.3ｍ）から1.6ｍ前後を機械掘削、それ以下1.5ｍ前後につい



第２図　１区調査地位置図（Ｓ＝１/800）



第３図　２区調査地位置図（Ｓ＝１/800）

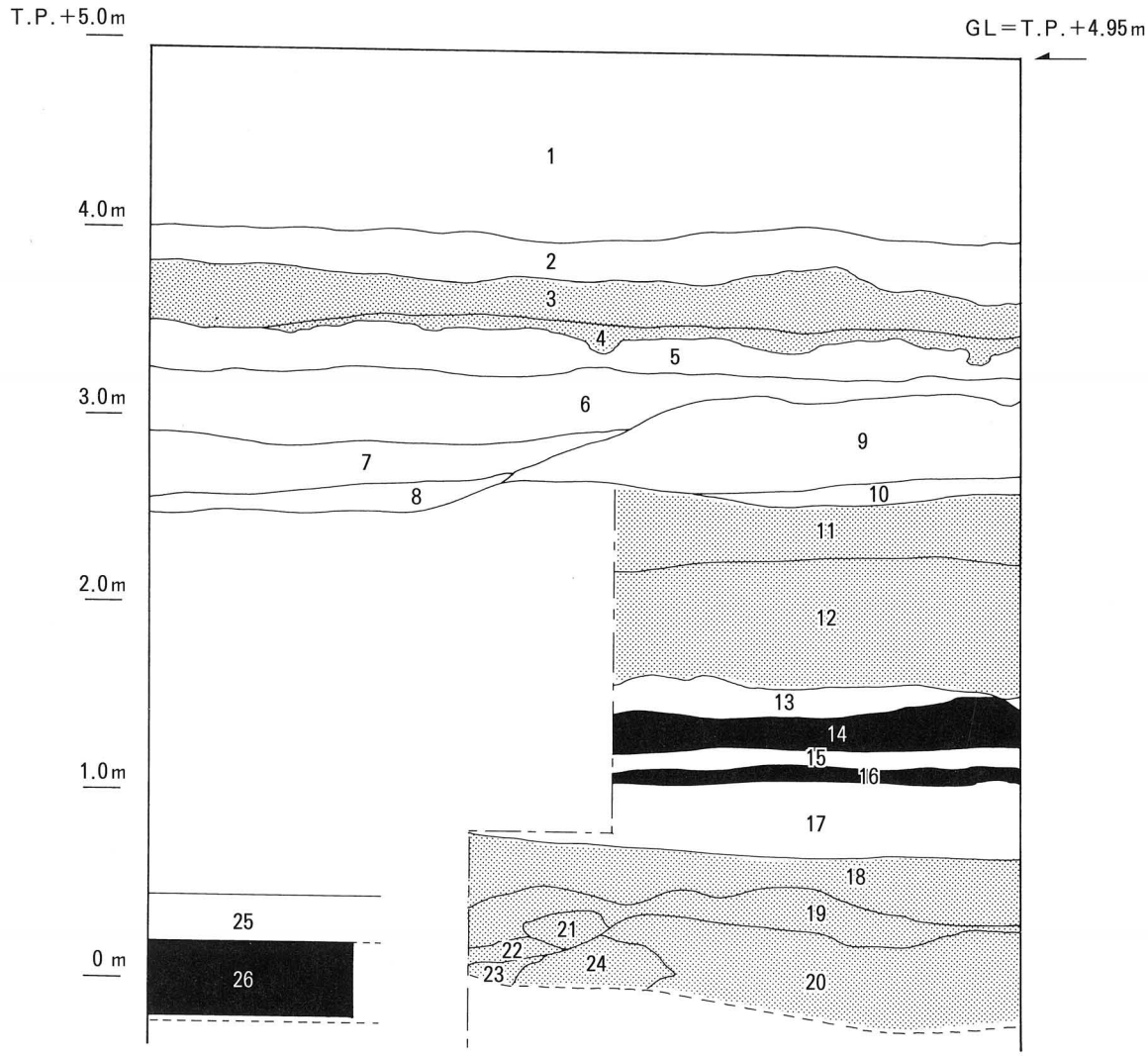
て人力掘削を主に行い、状況に応じて機械掘削を併用した。土層断面観察のため西壁（１区）・南壁（２区）を主に残しながら掘削を実施した。２箇所ともＴ.Ｐ.±０ｍ前後まで遺構・遺物の検出に努めた。調査期間は、平成９年６月26日～10月21日の実働10日間である。

調査の結果、１区の最終調査面において時期不明の自然河川を検出した。

２）層序

≪**１区**≫（第３図）

現地表（Ｔ.Ｐ.＋4.95ｍ）下から約1.0ｍで旧の耕作土層（第２層）を確認した。１区のすぐ東では現在でも水田が営まれている（現水田面Ｔ.Ｐ.＋4.8ｍ前後）。第３・４層は、洪水層とみられる砂層で最大0.45ｍほど堆積している。第５層上面は、断面観察において所々に足跡状の凹みが見られる。【友井東（その２）】の土層を参考にすれば、古墳時代後期の水田面の可能性がある。第11・12層は、主に粗砂が調査地全体にわたって１ｍ前後堆積しており、土層状況から比較的急激な流水環境にあったと思われるとみられる。第14層・第16層・第26層において、中河内地域一帯で確認されている黒色粘土（第１黒色粘土・第２黒色粘土・第３黒色粘土）層を確認した。



第４図　１区・土層断面図（西壁）（Ｓ＝１/40）

以下、１区における層名の一覧を挙げる。

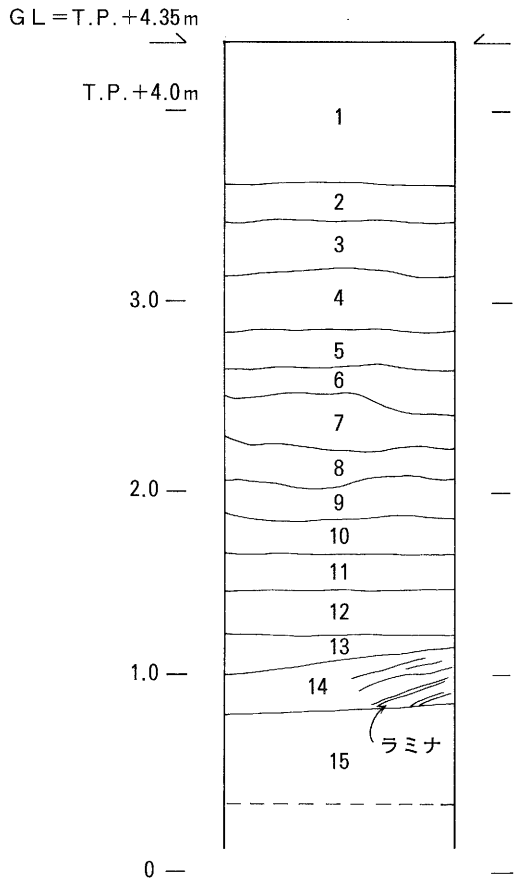
第１層　現代盛土。層厚0.1ｍ前後。
第２層　7.5YR5/1褐灰色砂質シルト。層厚0.2～0.35ｍ。（旧耕土）
第３層　2.5Y7/1灰白色砂。層厚0.15～0.3ｍ。（洪水層）
第４層　7.5YR5/8明褐色砂質シルト。層厚0.1ｍ前後。（洪水層）
第５層　５G5/1緑灰色粘土。層厚0.05～0.25ｍ。（水田面?）
第６層　2.5Y5/1黄灰色粘土。層厚最大0.3ｍ。
第７層　５Y5/1灰色粘土。層厚最大0.3ｍ。
第８層　10YR6/6明黄褐色粗粒砂。層厚0.1ｍ前後。
第９層　10G5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.5ｍ前後。
第10層　7.5Y7/1灰白色シルト。層厚0.1ｍ。
第11層　7.5Y6/1灰色粗粒砂～7.5Y7/1灰白色シルト。層厚0.3～0.45ｍ。（洪水層）
第12層　2.5GY5/1オリーブ灰色粗粒砂。層厚0.6～0.7ｍ。（洪水層）
第13層　５G6/1緑灰色粘土。層厚約0.2ｍ。
第14層　N4/0灰色粘土。層厚0.15～0.2ｍ。（第１黒色粘土）
第15層　10GY6/1緑灰色粘土。層厚0.1ｍ前後。
第16層　N3/0暗灰色粘土。層厚0.1ｍ前後。（第２黒色粘土）
第17層　7.5GY5/1シルト。層厚0.4ｍ。
第18層　7.5Y7/1～５Y7/1灰白色シルト。層厚0.15～0.4ｍ。
第19層　N6/0灰色シルト。層厚0.2ｍ前後。植物遺体を少量含む。
第20層　５Y7/1灰白色～N6/0灰色中粒砂～粗粒砂。層厚0.5ｍ以上。
第21層　7.5Y7/3浅黄色～2.5Y7/1灰白色シルト。層厚最大0.2ｍ。
第22層　N6/0灰色～7.5Y７/１灰白色シルト。層厚0.1ｍ前後。
第23層　10Y7/1灰白色シルト。層厚0.1ｍ前後。
第24層　2.5Y7/4浅黄色～2.5Y7/1灰白色シルト。層厚0.3ｍ以上。
第25層　7.5GY5/1緑灰色粘土。層厚0.25ｍ。
第26層　N4/0灰色粘土。層厚0.4ｍ以上。（第３黒色粘土）

≪２区≫（第４図）

現地表（T.P.＋4.3m前後）下から0.75ｍで旧の耕作土層（第２層）に至る。第３・４層は、しまりの弱い細粒砂層で約0.6ｍほど堆積している。第５層～第10層は、粘質シルトを主体としている。第11層は、黒色粘土層である。第13層から下部にかけては、シルト層が主体で植物遺体を多く含み、東西方向にはしるラミナが一部確認できた。

以下、２区における土層断面図と層名の一覧を挙げる。

第１層　現代盛土。層厚0.9ｍ。
第２層　５Ｂ5/1青灰色粘質シルト。層厚0.25ｍ前後。一部分グライ化している。（旧耕土）
第３層　2.5Ｙ6/4にぶい黄色砂質シルト。層厚0.3～0.4ｍ。
第４層　2.5Ｙ7/1灰白色細粒砂。層厚0.35ｍ前後。
第５層　10Ｇ6/1緑灰色粘土。層厚0.2ｍ前後。
第６層　10Ｇ5/1緑灰色粘質シルト。層厚0.18～0.3ｍ。
第７層　５ＰＢ5/1青灰色粘質シルト。層厚0.2～0.35ｍ。
第８層　５Ｂ6/1青灰色粘質シルト。層厚0.2～0.25ｍ。
第９層　５Ｂ5/1青灰色粘質シルト。層厚0.2～0.25ｍ。
第10層　10Ｇ6/1緑灰色シルト。層厚0.2ｍ前後。
第11層　Ｎ4/0灰色粘土。層厚0.2ｍ前後。（黒色粘土層）
第12層　Ｎ3/0暗灰色粘土。層厚0.25～0.3ｍ。（黒色粘土層?）
第13層　10Ｇ6/1緑灰色シルト。層厚0.05～0.25ｍ。
第14層　Ｎ7/0灰白色シルト。層厚0.25～0.4ｍ。
第15層　10Ｙ7/1灰白色シルト。層厚0.65ｍ以上。



第５図　２区土層断面図（北壁）（Ｓ＝１/40）

３）検出遺構と出土遺物

≪１区≫

現地表から約5.0ｍ（T.P.±０ｍ）前後において、第25層を切り込んで西から東に落ちていく時期不明の河川を１条確認した。最終調査面で平面的に精査を試みたが、湧水が多く部分的な検出になった（第５図）。河川内埋土（第18層～第24層）には、自然木（直径0.15ｍ）などを多く含んでいるが時期を特定できる遺物は出土していない。【山賀（その４）】・【友井東（その２）】の調査においても同じ高さ（T.P.±０ｍ前後）で縄文時代晩期頃埋没したとみられる河川が確認されている。

１区における出土遺物は、極少量である。機械掘削時に国産陶磁器１点、第12層下部より桃の種子１点が出土した。

≪２区≫

遺構は、検出されなかった。遺物は、機械掘削時に国産陶磁器２点が出土したのみである。

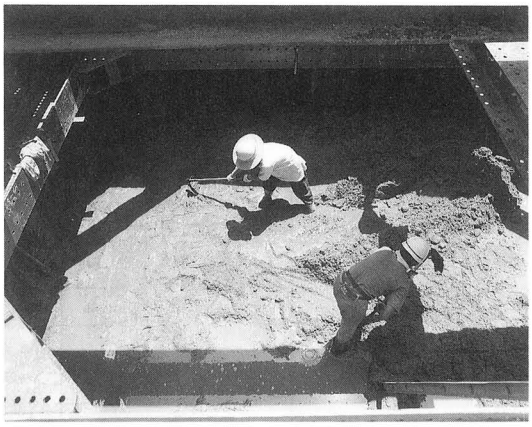
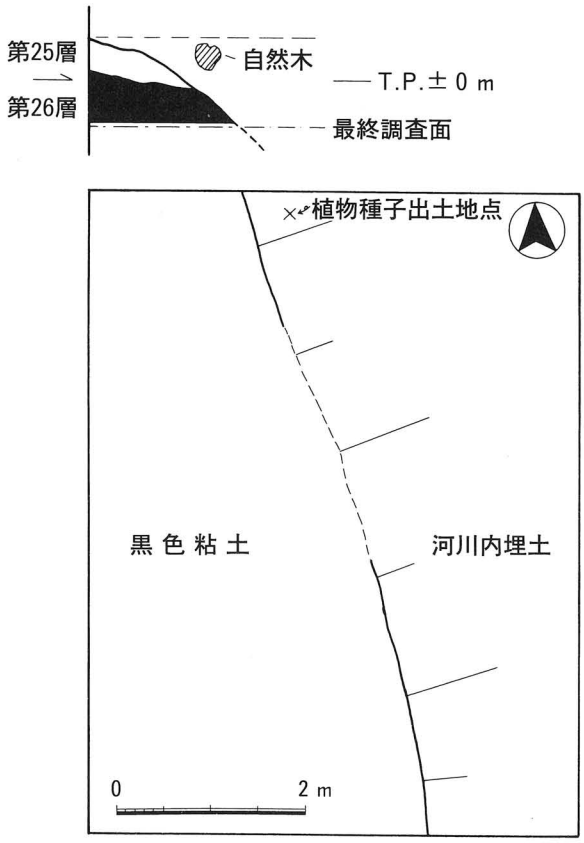


写真１　調査風景（南から）



第６図　１区最終調査面・平断面図（Ｓ＝１/80）

３．まとめ

今回の調査地は、山賀遺跡範囲の南端付近に位置し、弥生時代前期を中心とする集落の拡がりは確認できなかった。しかし、１区において自然河川を検出するなど当地における活発な沖積の状況が確認できた。

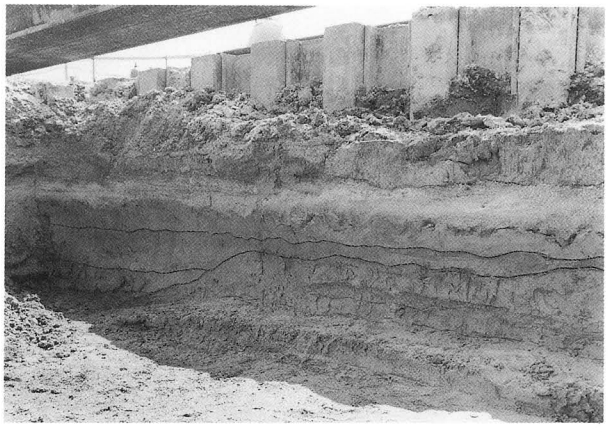
参考文献

・生田維道他　1983『山賀（その４）』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター

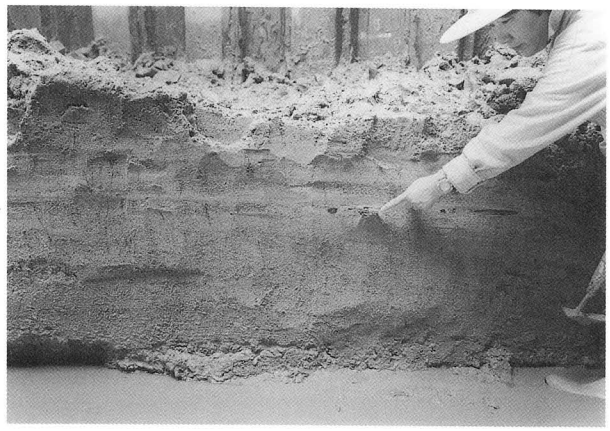
・赤木克視・村上年生編　1987　『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター

1区調査地周辺（GL－1.0m）西から

1区西壁土層（北半）（東から）

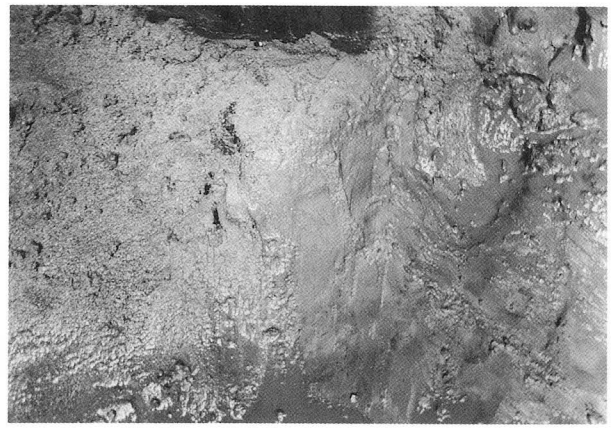


1区西壁土層（T.P.＋4.0～2.5m）東から



1区西壁土層（T.P.＋1.6～0.7m）東から

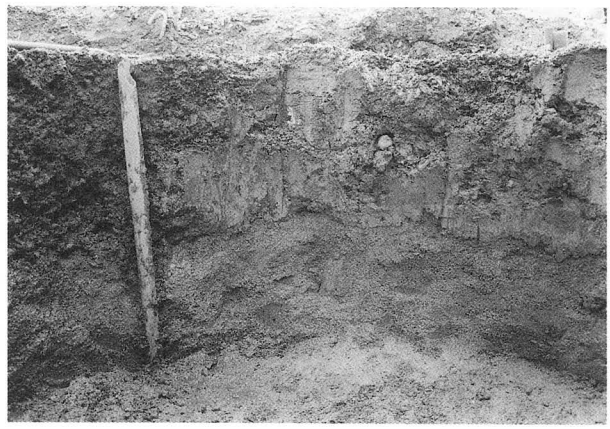
1区西壁土層（T.P.＋0.7～－0.25m）東から



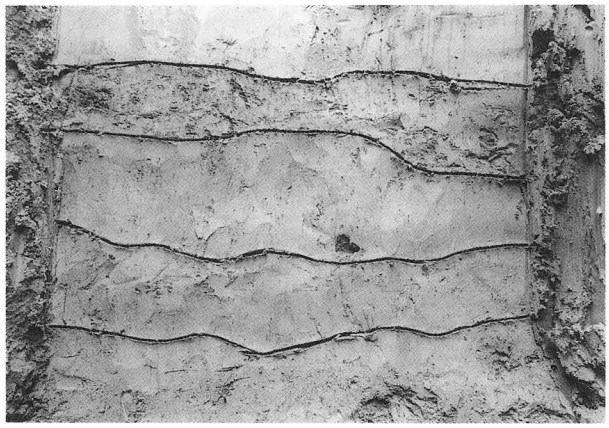
1区河川検出状況（部分・T.P.－0.25m）北から

図版二

2区調査風景・南から



2区南壁土層（T.P.＋3.6～2.8m）北から



2区南壁土層（T.P.＋3.0～2.2m）北から

2区調査風景・北から

2区東壁土層（T.P.＋1.5～0.8m）西から

2区楠根川・南より

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	財団法人　　八尾市文化財調査研究会報告62
副書名	Ⅰ跡部遺跡（第25次調査）Ⅱ跡部遺跡（第26次調査）Ⅲ跡部遺跡（第27次調査）Ⅳ亀井遺跡（第6次調査） Ⅴ小阪合遺跡（第36次調査）Ⅵ心合寺山古墳（第2次調査）Ⅶ志紀遺跡（第4次調査）Ⅷ田井中遺跡（第16次調査） Ⅸ竹渕遺跡（第8次調査）Ⅹ竹渕遺跡（第9次調査）Ⅺ中田遺跡（第39次調査）Ⅻ中田遺跡（第40次調査） ⅩⅢ中田遺跡（第41次調査）ⅩⅣ八尾寺内町遺跡（第2次調査）ⅩⅤ山賀遺跡（第7次調査）
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	62
編著者名	Ⅰ・Ⅲ・Ⅶ・Ⅻ・坪田真一、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・ⅩⅢ・高萩千秋、Ⅷ・ⅩⅤ・古川晴久、Ⅵ・Ⅸ・Ⅹ・成海佳子 Ⅺ・森本めぐみ、ⅩⅣ・岡田清一
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町４丁目58－２　　TEL・FAX　０７２９－９４－４７００
発行年月日	１９９９年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
あとべいせき 跡部遺跡 （第25次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 かすがちょう 春日町２・３丁目地内	27212		34度 36分 50秒	135度 35分 40秒	19970408 ～ 19971110	116.0	公共下水道
あとべいせき 跡部遺跡 （第26次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 たいしどう 太子堂１・２丁目地内	27212		34度 36分 51秒	135度 35分 15秒	19970421 ～ 19970801	16.0	公共下水道
あとべいせき 跡部遺跡 （第27次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 かすがちょう 春日町３・４丁目地内	27212		34度 36分 50秒	135度 35分 42秒	19970528 ～ 19971110	20.2	公共下水道
かめいいせき 亀井遺跡 （第６次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 みなみかめいちょう 南亀井町4丁目44－1・ 44－4・45－1	27212		34度 36分 32分	135度 34分 52度	19971022 ～ 19971030	174.0	配送センター
こさかあいいせき 小阪合遺跡 （第36次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 わかくさちょう 若草町地内	27212		34度 37分 22秒	135度 36分 51秒	19980209	12.0	公共下水道
しごんじやまこふん 心合寺山古墳 （第２次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 おおたけ 大竹５丁目地内	27212		34度 38分 09秒	135度 38分 35秒	19971104 ～ 19971113	50.0	堤体改修
しきいせき 志紀遺跡 （第４次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 しきちょうにし 志紀町西２丁目地内	27212		34度 35分 52秒	135度 36分 36秒	19980213 ～ 19980310	32.51	公共下水道
たいなかいせき 田井中遺跡 （第16次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 たいなか 田井中４丁目地内	27212		34度 35分 51秒	135度 36分 29秒	19970424 ～ 19970501	7.0	公共下水道
たけふちいせき 竹渕遺跡 （第８次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 たけふちひがし 竹渕東３・４丁目地内	27212		34度 36分 47秒	135度 34分 25秒	19971212 ～ 19980331	23.0	公共下水道
たけふちいせき 竹渕遺跡 （第９次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 たけふちひがし 竹渕東１・４丁目地内	27212		34度 36分 52秒	135度 34分 24秒	19980112 ～ 19980206	8.0	公共下水道
なかたいせき 中田遺跡 （第39次調査）	おおさかふ　やおし 大阪府　八尾市 なかた 中田1丁目地内	27212		34度 36分 56秒	135度 36分 51秒	19971118 ～ 19971121	13.0	公共下水道

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
中田遺跡（かなたいせき）（第40次調査）	大阪府（おおさかふ）八尾市（やおし）刑部（おさかべ）3丁目地内	27212		34度36分32秒	135度37分15秒	19980109～19980114	16.0	公共下水道
中田遺跡（なかたいせき）（第41次調査）	大阪府（おおさかふ）八尾市（やおし）中田（なかた）2丁目地内	27212		34度36分58秒	135度37分18秒	19980204～19980226	12.0	公共下水道
八尾寺内町遺跡（第2次調査）	大阪府（おおさかふ）八尾市（やおし）本町（ほんまち）2丁目149番地の1	27212		34度37分21秒	135度36分10秒	19970526～19970603	104.0	共同住宅
山賀遺跡（やまがいせき）（第7次調査）	大阪府（おおさかふ）八尾市（やおし）新家町（しんけちょう）2丁目地内	27212		34度38分31秒	135度36分03秒	19970626～19971021	40.0	公共下水道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
跡部遺跡（第25次調査）	集落	弥生時代 古墳時代中期～後期　奈良時代～平安時代	溝5・土坑5 河川4	弥生土器 土師器・須恵器 韓式系土器 瓦器・瓦	
跡部遺跡（第26次調査）	集落	奈良時代以前 平安時代後期	河川	土師器・須恵器	
跡部遺跡（第27次調査）	集落	弥生時代前期～中期 古墳時代前期	土坑1 溝1	弥生土器・石器 土師器・須恵器	
亀井遺跡（第6次調査）	生産域	奈良時代～平安時代	溝1・落込み4	土師器・須恵器 瓦器	
小阪合遺跡（第36次調査）	集落	古墳時代以前 鎌倉時代 近～現代	河川 井戸	瓦器・瓦	
心合寺山古墳（第2次調査）	古墳	古墳時代中期 奈良時代～平安時代 近世	石組み遺構	埴輪 土師器・須恵器 陶磁器・土管・瓦	
志紀遺跡（第4次調査）	生産域	縄文時代晩期 平安時代後期		縄文土器 土師器・瓦器	滋賀里Ⅳ期の深鉢の破片が出土
田井中遺跡（第16次調査）	集落	近世		土師器・瓦器 肥前系磁器椀	
竹渕遺跡（第8次調査）	集落	近世	水路	土師器・陶磁器 杭	
竹渕遺跡（第9次調査）	集落	古墳時代後期～平安時代			
中田遺跡（第39次調査）	集落	弥生時代後期～古墳時代前期 鎌倉時代～室町時代	小穴1・土坑1 河川	土師器・須恵器 瓦器・瓦	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中田遺跡 (第40次調査)	集落	古墳時代後期 鎌倉時代～室町時代	溝3・土坑3 小穴2	土師器・須恵器 瓦	
中田遺跡 (第41次調査)	墓域	弥生時代後期			周辺調査の成果から墓域の範疇に含まれる可能性が高い
八尾寺内町遺跡 (第2次調査)	集落	古墳時代前期 鎌倉時代～近世	水田遺構 溝2	土師器・須恵器・ 陶磁器	八尾寺内町に伴う遺構は検出されなかった
山賀遺跡 (第7次調査)	集落	縄文時代晩期～近世		陶磁器・桃の種	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告62

Ⅰ　跡部遺跡（第25次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第26次調査）
Ⅲ　跡部遺跡（第27次調査）
Ⅳ　亀井遺跡（第６次調査）
Ⅴ　小阪合遺跡（第36次調査）
Ⅵ　心合寺山古墳（第２次調査）
Ⅶ　志紀遺跡（第４次調査）
Ⅷ　田井中遺跡（第16次調査）
Ⅸ　竹渕遺跡（第８次調査）
Ⅹ　竹渕遺跡（第９次調査）
Ⅺ　中田遺跡（第39次調査）
Ⅻ　中田遺跡（第40次調査）
ⅩⅢ　中田遺跡（第41次調査）
ⅩⅣ　八尾寺内町遺跡（第２次調査）
ⅩⅤ　山賀遺跡（第７次調査）

発　行　平成11年３月
編　集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
〒581－0821　TEL　0729－94－4700
印　刷　明新印刷株式会社